

令和3年度

四天王寺大学

四天王寺大学短期大学部

FD・SD報告書



編集・発行 ファカルティ・ディベロップメント(FD)委員会

スタッフ・ディベロップメント(SD)委員会

発行日 令和4年3月31日

目 次

第 1 章

令和 3 年度 FD 活動の取り組みと今後の課題……………1

第 2 章

令和 3 年度高等教育推進センターの取り組み……………8

第 3 章

令和 3 年度授業評価アンケートの実施結果 ……………14

第 4 章

各学科・専攻・コースによる FD 活動について ……………23

第 5 章

本学における仏教教育について ……………153

第 6 章

学生支援センターが取り組む学修支援について ……………167

第 7 章

SD 活動の取り組みと今後の課題 ……………172

規程

- ・ ファカルティ・ディベロップメント委員会規程 ……………174
- ・ スタッフ・ディベロップメント委員会規程 ……………175

第1章 令和3年度FD活動の取り組みと今後の課題

1. 高等教育推進センターの設立

令和2年からの遠隔授業導入に伴い必要性が増すICT教育の充実化や、基礎教育の改善等を実施するため、令和3年4月1日付で高等教育推進センターを発足し、センター専任教員・兼務教員と高等教育推進課事務職員が協働して教育改革を推進している。

FD活動については、令和2年度までは教務部が担当していたが、令和3年度より高等教育推進センターが担当し本学のFD活動を推進していくこととなった。

2. 令和3年度の取り組み

(1) 学修成果の可視化

いわゆる「三つのポリシー」の作成・改善や学士課程プログラムの改訂には、学修成果の評価をもとに進めていく必要がある。そのためには、学修成果の可視化が不可欠である。

① 学生調査

冬学期の11月に全学生に対してwebで実施した。回答率は大学(85.3%)、短大(90.9%)で、大学は2.6%・短大は0.2%回答率がアップした。

学生生活や学内施設・学生支援に対する満足度などを含めた総合的な調査だが、学修成果に関しては各学科等の教育目標達成度を測定・点検している。これらのデータについては全てのデータを対象としているわけではないが、大学HPに公開している。

令和3(2021)年度は、他のアンケートと重複している調査項目を見直し、学生サポートや施設設備への満足度等を問う設問を新たに設け、調査名称を「学生動態調査」から内容に則した「学生調査」へと変更した。

調査結果は、教育改革推進本部会議等でも報告され、カリキュラム改善や教育改善に活用されている。

今後も多くの学生の回答を得るため調査時期・期間、学生への周知方法、設問の設定等を必要に応じて改善する。また、結果の分析方法についても随時見直しを図り、より教育内容・方法、学修指導の改善に資する分析結果を学内に共有するよう改善を検討する。

② PROGテスト

大学では1年次と3年次に、短大では1年次と2年次にPROGテスト(アセスメントテスト)を実施し、社会で求められる一般的な能力であるジェネリックスキル(基本的な情報活用能力にあたるリテラシーと、仕事に取り組む行動特性にあたるコンピテンシー)を測っている。併せて、学科が独自に設定した質問でDP等の達成度も評価している。例えば大学では、3年次に再度実施するのは大学での2年の学修を経て1年次からどのように成長したのかを確認するとともに、進路を定める際の自己省察のためである。

令和3年度の受験率は、大学1年次生が97%、大学3年次生が92.2%、短大1年次生が97%、短大2年次生が96%で、ほぼ例年並みであった。

コロナ禍のPROGテストの実施はWebによる受験を行っており、全学的に統一された実施日時を設けていない。このことから不真面目受験、最後まで受験が完了していない者も多少発生していると思われる。今後は、全学生が真面目に漏れなく受験が完了することを目指し、受験体制の改善に努める。

③ 新入生アンケート

入学直後4月のオリエンテーション期間中に新入生に対して実施している。設問は全学部・学科共通設問、学部・学科等の独自設問で構成されている。入学時点での学習習慣、大学への期待・不安や、受験・入学に至るまでの行動等に関する調査・分析を行っており、アンケート結果は教育改革推進本部会議等でも報告される。

当年度の新入生の傾向を知り、どのような教育や支援を行えばいいのか参考にするだけでなく、入学者の傾向を把握し、今後の学生募集の改善や教育の質向上のための重要なデータとして活用している。そのため、毎年必要に応じた設問の改訂を行っている。

回答率は大学（98.9%）、短大（97.9%）で、ほぼ例年並みであった。

（2）学生による授業評価アンケート

学生への授業評価に関するアンケートの結果は、第3章で詳しく分析されている。平成30年度までの学生アンケート結果は、各教員の授業改善の意識を高めるために、夏学期と冬学期の2回、担当する科目の中から1科目だけ選択し実施してきた。なお専任教員については、各学期で第1期と第2期の2回に分けて実施、非常勤講師については第2期の1回のみ実施してきた。また、教員個人が授業改革に取り組んだ結果として、リフレクション・ペーパーの提出を求めてきた。

令和元年度からは、名称を「学生アンケート」から「授業評価アンケート」に改め、学生が所持するスマートフォンを活用し、IBU.netを通じて全科目（一部科目を除く）について授業評価アンケートを実施している。

令和3年度冬学期については、設問の改訂を行った。カリキュラム・ポリシーに係わる設問で「主体的・対話的で深い学び」の実現状況を問うもの、具体的な授業改善につながる設問、学生が設問の意味を明確に読み取れる表現を基本方針として改訂を行った。

令和3年度夏学期の回答率は大学65.57%（昨年度51.17%）、短大73.41%（56.97%）で、冬学期の回答率は大学58.09%（昨年度42.69%）、短大72.30%（49.05%）であった。夏学期・冬学期とも回答率は大幅にアップ。コロナ禍でオンライン授業やハイブリッド授業等が中心であったにもかかわらず、多くの学生が熱心に回答してくれたようである。

（3）相互授業参観

冬学期の11月～12月に教職員による「相互授業参観」を実施している。原則として全教員は参観対象の授業一つを届け出て、参観対象授業の一覧が全教職員に公表される。専任教員だけでなく非常勤講師、事務職員も希望すれば授業を参観できる。参観者は授業担当者にコメ

ントを提出し、授業担当者はそのコメントを使って報告書を作成する。また、授業によっては合評会が行われ、授業担当教員は授業参観で教職員らの意見を聴取し、授業改善に活かすことができる。今後は、先駆的・効果的な授業方法を実践している授業を積極的に参観することを、推奨していく試みも行っていきたい。

なお、令和3年度は大学で102授業科目、短大で22授業科目が相互授業参観として公開された。

(4) FD研修会

①ファシリテーション研修

令和4年3月7日に、「主体的・対話的で深い学びをもたらす『ファシリテート技術』～深い学びをもたらす授業を実現するために～」と題し、日本ファシリテーション協会会長の竹本記子先生を講師にお迎えし開催した。

研修は講義とグループワークを交えて実施、出席者は24名であった。

②ICT活用関連の講習会

令和3年度(2021)年度はICT関連の講習会を5回実施し、参加者は延べ242名であった。実施方法は講習会の内容によりオンライン形式とハイブリッド形式で実施した。

夏学期には「教員向け情報処理演習での反転授業、データサイエンスについて」として情報処理演習での反転授業やデータサイエンスについて行った。

冬学期には9月以降月1回実施し、内容は遠隔授業でも対面授業でも活用できるICT講習会として実施した。9月のZoomの講習会では、基本操作や応用編としてブレイクアウトルームについて、10月にはフリーソフトShotcutを使用した動画編集講習会を高等教育推進課スタッフが講師として実施した。11月にはGoogle Formsについて、12月にはクラウドを活用した講習会を実施し、高等教育推進センター兼務教員が講師として実施をした。

講習会の出席者で、2回以上出席している教員はほとんど同じ教員であった。今後は今まで

あまり出席していない教員にも参加いただけるよう幅広い分野の講習会を実施していく。

③看護学部ファカルティ・デベロップメント研修会（シミュレーション教育）

看護学部では、他大学看護学部の先生を講師としてお迎えし、次の通り令和4年3月にシミュレーション教育に関する研修会を2回実施した。

<3月15日（火）10:00～12:00>

- ・目的 シミュレーション教育の実践における教員の指導スキル向上
- ・内容 シミュレーション教育におけるファシリテーションのコツ
- ・参加者数 21名

<3月28日（月）14:00～16:00>

- ・目的 シミュレーション教育における学習目標の評価設定、評価方法の習得
- ・内容 シミュレーション教育における学習目標の評価に関する講義
- ・参加者数 19名

(5) オンライン授業コンサルテーション

高等教育推進センターでは、今年度冬学期よりオンライン授業で困っている先生方に対して、オンライン授業コンサルテーションを始めました。「オンライン授業が上手くいかない、パソコンの操作がうまくいかない」など、とくにオンライン授業の運営について悩んでおられる先生方が高等教育推進センターへコンサルテーションのお申し込みをしていただき、センター教員・スタッフと一緒に課題解決をしていく制度です。

今年度は年度途中からの実施により、告知不足もあり利用教員は1名であった。

(6) 教職員合同研修会

①令和3年度冬学期合同研修会

令和3年9月2日(木)12時45分から15時20分までの時間枠で、全教職員参加の合同研修会を実施した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大リスクを回避するため、例年より1時間弱程度短縮した内容で実施した。前半は「宮崎常務理事・岩尾学長の挨拶」「高等教育推進センターからの発表」、後半は「事務局からの発表・連絡」で構成されている。

○プログラム

<前半>

1. 宮崎光映 常務理事「コロナ禍における本学の取り組み(講話)」
2. 岩尾洋 学長 「with コロナ, after コロナの教育が本学の今後を決める(講話)」
3. 松岡隆 高等教育推進センター長 「センターのミッション等について」
4. 間辺広樹 高等教育推進副センター長 「センターの基本方針について」
5. 麻生迪子 高等教育推進センター基礎部門長 「入学前・入学後教育について」
6. 長澤洋信 教務副部長兼高等教育推進センター情報教育部門長 (ICT活用)
「授業におけるICT活用」
7. 本多佑希 高等教育推進センター教員
「数理・データサイエンス・AI教育および情報教育の事例報告」

<後半>

1. 入試・広報部：東隆史 部長 「2022年度 総合型選抜の状況について」
2. 教務部：浅田昇平 部長 「冬学期の授業実施方法について」「授戒会の実施について」
3. キャリアセンター：笠原幸子 センター長
「主体的学びの転換期～コロナ禍のキャリア教育について」

②令和4年度夏学期合同研修会

令和4年3月29日(火)前半(10:45~11:45)・後半(13:00~14:45)の時間枠で、令和4年の新着任教職員を含む全教職員参加の合同研修会を実施した。新型コロナウイルス感染症の感染リスクを回避するため、千数百名収容の大講堂で前後左右十分な間隔を空けた形での座席を設定し実施した。前半は先ず「新任教員・事務職員の紹介」があり、次に新たに4月より就任される「南谷理事長と坂本常務理事の挨拶」、「須原学長の挨拶・学長方

針」であった。後半は高等教育推進センターから「本学での数理・データサイエンス・A I 教育推進の意義と今後の展開」、事務局の各部局からの「2022 年度入試の結果と今後の取り組み」、「令和 4 年度授業運営」、「学生支援センターからの報告～次年度に向けて～」、「令和 3 年度の振り返りと令和 4 年度の方針（キャリアセンターより）」について発表が行われた。

以下にプログラムを摘記する。

1. 南谷恵敬 理事長 挨拶
2. 坂本峰徳 常務理事 挨拶
3. 須原祥二 学長 挨拶・学長方針
4. 高等教育推進センター：松岡 センター長，間辺 副センター長
本学での「数理・データサイエンス・A I 教育」推進の意義と今後の展開
5. 入試・広報部：東 部長「2022 年度入試の結果と今後の取り組みについて」
6. 教務部：浅田 部長「令和 4 年度 授業運営について」
7. 学生支援センター：伊達 センター長「学生支援センターからの報告～次年度に向けて～」
8. キャリアセンター：隅田 副センター長「令和 3 年度の振り返りと令和 4 年度の方針について」

第2章 令和3年度 高等教育推進センターの取り組みについて

1. 高等教育推進センターの概要

高等教育推進センターは、教育活動の継続的な改善を図り、教育の質を向上させ本学教育を発展させることを目的として令和3年度に設置された本学の教育改善を担う新たな組織であり、今年度が活動の初年度にあたる。センターの目的の詳細は、センター規程において次の通り定められている。

「センターは、本学の学生の特性を踏まえ、学修意欲を引き出し自律的な活動を促すための教育内容・教育方法を開発し実践を支援するとともに、その継続的な改善を図ることにより、教育の質を向上させ本学教育の充実と発展に資することを目的とする。」

また、規程では、センターの目的達成のため、具体的に次の業務を行うことと定められている。

- (1) 基礎学力（リメディアル教育含む）向上のための教育内容・教育方法の開発・実践支援を行い、その成果を広く学内に周知・普及させること
- (2) 情報教育（数理・データサイエンス・AI）の教育内容・教育方法の開発・実践支援を行い、その成果を広く学内に周知・普及させること
- (3) ICTを活用した教育方法の開発・実践支援し、広く学内に周知・普及させること
- (4) 上記の教育内容・教育方法の評価に関すること
- (5) 情報環境基盤の維持・管理ならびに将来的な計画・整備に関すること
- (6) 学内の情報セキュリティに関すること
- (7) その他センターの目的を達成するために必要な業務に関すること

これら業務のうち、特に（1）を中心に扱う部門として基礎教育部門、（2）（3）を中心に扱う部門として情報教育部門が置かれている。これら2つの部門の組織は、兼務教員（令和3年度は基礎教育部門3名、情報教育部門7名）を中心に、センター専任教員および関連職員を加えて構成されている。

以下では、センターの多岐にわたる業務のうち、主要組織である両部門の令和3年度の取り組みを中心に報告する。

2. 基礎教育部門の取り組み

基礎教育部門は学生の基礎学力向上を図るための組織として設置された。本部門では、大学での学びに必要な基礎学力の定着と、これからの社会が求める学力、思考力、表現力等の社会人基礎力の養成を目的とし、本学学生に適した教育内容や教育方法を開発し実践することによって、学生の自立的で主体的な学修活動の支援を行う。

本年度の主な取り組みについて入学前と入学後に分けて説明する。

（1）入学前教育について

入学前教育は、入学予定者を入学後の学びにうまく繋げるため、基礎学力や学習習慣の定着、大学教育の魅力を伝え学習意欲を向上させること、入学までのモチベーション維持など

を目的とする。そのための取り組みとして、これまで IBU ドリルおよびプレエントランス・ガイダンスを実施してきた。IBU ドリルは、国語・数学・英語・社会・理科の 5 教科等についての基礎を学び直す e-ラーニング学習ドリルである。プレエントランス・ガイダンスは、12 月と 2 月に入学手続き者に対し実施するガイダンスで、大学全体の説明、学科別のガイダンス、保護者説明会からなる。今年度は、それらに加え、入学予定者へのメッセージを有した動画（入学前動画）の発信、および「新入生応援サイト」の立ち上げを行った。

入学前動画は、全学の協力を得て入学予定者向けに作成した入学前教育および情報発信のための動画であり、大学からのメッセージと学生支援等の情報を伝えるものである。これら動画の主なテーマは、大学で学ぶことの意義・魅力、入学前学習、学科からのメッセージ、パソコン操作、入学準備、クラブ・サークル、学生支援、海外留学・研修、キャリア支援等である。

「新入生応援サイト」は、本学 Web ページ上に学生支援センターや教務部等と協力して今年度初めて開設したサイトであり、入学前動画および関連情報をまとめたものである。なお、動画の一部は、プレエントランス・ガイダンスでも利用している。

（2）入学後教育について

現行のリメディアル教育に該当する科目と、リテラシー関連のキャリア科目は次のとおりである。

国語系：文章表現基礎、基礎文書作成、国語演習、キャリアアップ国語

数学系：数学演習Ⅰ、数学演習Ⅱ、キャリアアップ数学

これらの現状を検証した結果、次の問題点が明らかとなった。

- ① リメディアル教育とキャリア支援の間の区別があまり意識されておらず、両者の間で重複が大きいことや、内容が混在していることなど、効率面や内容の整理面で問題がある。
- ② カリキュラムにおいて、「基礎文書作成」のみ共通教育科目中の初年次教育科目群「学びの基礎」に置かれ、それ以外はすべて科目群「キャリア教育」に置かれており、リメディアル教育の側面が弱い。
- ③ 文章表現基礎、基礎文書作成、数学演習Ⅰ以外のすべての科目は、既に閉講扱いとなっているため、改廃の議論が必要となる。
- ④ 基礎学力に対する教員の意識を把握するため、2つの調査「担当授業学生の基礎学力についてのアンケート」「キャリア意識・就職意識の醸成および基礎学力を補填する授業の調査」を実施した結果、読解力、文章作成力、数理能力の低下が示唆されたため、科目群の検証と再編成が必要と考えられる。

そこで、リメディアル教育とキャリア支援に必要な内容を改めて検討し直し、それらを一つのリメディアル科目群として捉えて再構築を行った。新科目群は、国語系と数理系に分かれ、令和 5 年度より実施の予定である。いずれも 1・2 セメスターでは、リメディアル教育として大学での学びに必要な基礎的能力を身に付けることを目的とし、3・4 セメスターでは、キャリア支援として社会で求められる能力を身に付けることを目的としている。

① 国語系リメディアル科目

大学での学びに必要な基礎的な日本語力や、社会で求められる日本語知識を身に付けることを目的とする。次の2科目からなる。これらはともに2単位の選択科目である。

「日本語リテラシー(基礎)」 大学での学びに必要な基礎的な日本語力の向上を図る。
(1・2セメスター開講)

「日本語リテラシー(応用)」 社会で求められる日本語知識の向上を図る。(3・4セメスター開講)

前者の「日本語リテラシー(基礎)」は、現行科目「文章表現基礎」「基礎文書作成」をリメディアル教育の観点から整理したものであり、「日本語リテラシー(応用)」は、現行科目「国語演習」「キャリアアップ国語」を、社会人基礎力育成を中心に構成し直したものである。

② 数理系リメディアル科目

大学で学ぶ分野にかかわらず普遍的に必要な基礎的な数理科学的能力等を身に付けることを目的とする。次の3科目からなる。これらはすべて2単位の選択科目である。末尾の数字は開講セメスターを表す。

「数理入門Ⅰ」 数学と情報の分かりやすいトピックを用いて論理的思考力を育成する。
(1)

「数理入門Ⅱ」 数理・データサイエンス・AIを各学部等の専門分野に活用するための基礎を学ぶ。(2)

「社会人基礎力(数理)」社会人として必要な数学の基礎的知識・技能を育成する。(3・4)

現行科目「数学演習Ⅰ・Ⅱ」は、数学自体を学ぶものであるため多くの文系学生の興味を引くことが難しく履修者は少数であった。そこで、「数学」を「数理」と改め、「数理入門Ⅰ・Ⅱ」において数学をデータサイエンスに結び付けた形で学ぶこととした。これにより、より広い範囲の学生の興味を引く可能性があると期待される。また、データサイエンスに結び付けることにより、数学が実際に社会で活用されていることを認識させる効果も狙っている。

以上の国語系・数理系リメディアル科目の授業方法としては、例えば、遊びを通して数学やコンピュータサイエンスを学ぶなど、文章を書く楽しさ、数学の楽しさを導入に用いたり、アクティブ・ラーニング等のこれまでとは異なる授業方法を開発していく予定である。

(3) アクティブ・ラーニングの推進

課題解決力や主体性を育成するための授業方法の普及を図るため、9月実施の合同研修会で動画を用いた反転授業の事例紹介を行った。また、アクティブ・ラーニングに有効なファシリテーション技術の活用を推進するため、大学授業に活かすファシリテーション基礎研修「主体的・対話的で深い学びをもたらすファシリテート技術—深い学びをもたらす授業を実現するために—」を、ファシリテーション・スキルの専門家を講師に招いて3月に実施した。

3. 情報教育部門の取り組み

(1) 情報教育の見直し

情報教育では、従来のオフィスツールの利用技術習得を中心とした内容から、これからの社会で必要となる数理・データサイエンス・AI に関する知識・技術を修得する教育に転換していく必要がある。そこで、本学の情報教育を抜本的に見直し、数理・データサイエンス・AI を日常の生活、仕事の場で使いこなすことができる基礎的素養を情報処理演習等で育成するとともに、その基礎的素養を生かして各学部・学科の専門教育の場で実践する能力を身に付けることを目的とするものに再構築することとした。

数理・データサイエンス・AI の基礎的素養の部分に関しては、文理を問わず全国すべての高等教育機関の学生が数理・データサイエンス・AI を習得できるような教育体制の構築・普及を図る組織である「数理・データサイエンス教育強化拠点コンソーシアム」が取りまとめた「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム (リテラシーレベル) モデルカリキュラム」に沿って、内容の再編成を行った。

情報教育の新しい科目群は次のとおりである。すべて2単位で、「情報処理演習Ⅰ」は必修、それ以外はすべて選択科目である。末尾の数字は開講セメスターを表す。これらは令和5年度からの実施を予定している。

「情報処理演習Ⅰ」 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム (リテラシーレベル) のモデルカリキュラムに即した内容 (1)

「情報処理演習Ⅱ」 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム (リテラシーレベル) のモデルカリキュラムに即した内容 (2)

「データ収集分析」 センサ値、オープンデータ、アンケートの収集・分析 (3)

「情報システム」 実践的なプログラミングを通して、情報システムを学習する。(3)

「プログラミング演習」 プログラミングによって実用的なアプリケーションを開発し、プログラミングの知識を習得する (4)

AI に関する科目 (科目名称、内容未定) (4)

最後のAIに関する科目以外は、現在も開講されている科目であるが、「情報処理演習Ⅰ・Ⅱ」については、本年度から数理・データサイエンス・AI の内容を一部取り入れて実施している。なお、「情報処理演習Ⅰ・Ⅱ」は現在選択必修となっている。また、「プログラミング演習」の現在の名称は「プログラミング」であるが、内容をより明確に表すために変更することとした。

情報教育の新しいカリキュラムに関わることとして、数理・データサイエンス・AI に関する初級レベルの学内プログラムである「IBU 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」を設置し、「情報処理演習Ⅰ・Ⅱ」の2科目で構成することとした。このプログラムによって、文部科学省「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度 (リテラシーレベル MDASH)」への申請を令和5年度に行う予定である。

学部・学科の専門教育の場で「数理・データサイエンス・AI」の知識活用を促進していくことについては、教務委員会において、情報処理演習を履修した学生が数理・データサイエンス・AI の知識を専門教育に活かすことができるよう、各学部・学科に検討を依頼すると

ともに、各学科との個別の協議を開始した。

なお、「情報処理演習Ⅰ・Ⅱ」については、従来、業務委託講師に担当をゆだねることが多かったが、今年度より「数理・データサイエンス・AI教育（リテラシーレベル）」のモデルカリキュラムに即した内容に一部変更したため、全クラスを少数の情報関連専任教員のみで担当することになった。そのため、令和4年度からは、授業補助として各クラスに学生の補助員（スチューデント・アシスタント）を配置することとした。

（2）教育における ICT 活用

情報教育部門の2つ目の目的は、近年急速に普及・発展している ICT 技術を教育に活用し、授業内容の質と学生の満足度を高めるための教育方法の開発と実践、および情報環境の整備を行うことである。本年度は、まず、オンライン授業や ICT 活用等に関する教員向けアンケート調査を実施し、その結果を受けて、次のような教員を対象とした ICT 講習会を開き、延べ242名の参加があった。

- ① 情報処理演習での反転授業、データサイエンスについて
- ② Zoom 講習会
- ③ 動画編集講習会（職員も含む）
- ④ Google Forms 等講習会
- ⑤ クラウドを活用した授業実践講習会

また、9月開催の合同研修会において、動画を用いた反転授業の効果、有効な授業実践例、「情報処理演習Ⅰ」での実践事例の紹介などを行った。

4. 今後の課題

（1）基礎教育

入学前教育については、新入生応援サイトで配信している動画・情報について視聴・閲覧人数および感想等を調査し、その効果を検証・分析して改善を行っていく必要がある。また、IBUドリルについては、その結果とGPAを分析し学修指導等へ積極的に活用していくための方策を検討したい。

入学後教育については、令和5年度からの国語系・数理系科目の大枠としての内容は策定したが、詳細な授業内容・計画は検討中である。特に本学学生の特性に合ったアクティブ・ラーニングの要素をどのように効果的に授業へ盛り込んでいくかを検討する必要がある。

教員のファシリテーション技術の向上については、ファシリテーション専門家による講習会に加えて、実際に授業で効果的に活用している教員の講演や授業参観の機会を設けることなどにより、教員への普及を強めていきたい。

（2）情報教育（カリキュラム）

学部・学科の専門教育において、数理・データサイエンス・AIに関する知識を実際に活用している授業は、現時点で一部の科目に留まっている。今後は導入の余地のある科目で広く活用を進めていくため、研修や授業参観等を企画していく予定である。

パソコン操作を苦手とする学生への対応については、講習会やヘルプデスク学生の活用

等の正課外の実施で対応していく。

(3) 情報教育 (ICT 活用)

ICT 活用に関する講習会については、複数回以上参加した教員はほぼ同一の教員であり、参加者の拡がりがあったことが改善点である。講習会の内容については、今年度は視聴のみの講習であったが、今後は実際のパソコン操作を取り入れた内容とする。また、センター関係者以外の ICT に精通した教員にも講師を依頼し、より幅広い内容の講習会を実施していきたい。

第3章 令和3年度授業評価アンケートの実施結果について

1. 授業評価アンケートの実施方針

中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申）（2008（平成20）年12月24日）において「学生による授業評価の結果は、業績評価の指標としての信頼性に課題もあるが、教員の自己評価や職能開発の活動に生かすことは重要であると考える」（p.40）と指摘され、授業評価の教育面への活用が求められている。

本学においても2006（平成18）年度に学生アンケート委員会を設置し、学生アンケートの計画・実施を行った。その後2008（平成20）年度に学生アンケート委員会からFD委員会に発展的改組を行い、以降についても試行錯誤しながら学生アンケートを実施してきた。

このような試みの中、全学的な授業改善に向けた教育評価を実施する上での枠組みとして、2010（平成22）年度には、授業を実施する前の診断的評価、途中の形成的評価、最後の総括的評価という評価の活用方法について検討してきた。すなわち、診断的評価として、プレースメント・テストや第1期学生アンケート（2回目の授業時）の実施、シラバスの内容の充実、そのシラバスの内容を受講生に理解させるための試み等を実施した。

また、形成的評価として7、8回目の授業時における第2期学生アンケートの実施、学習成果に関する中間テストの結果や学習者による自己評価の結果の活用、教員相互の授業参観による同僚評価等を行ってきた。

最後に、総括的評価として、授業に関する情報収集や授業に対する学生の評価や意識の測定のための第3期学生アンケート（14、15回目の授業時）の実施、定期試験やレポート等による学習面の成果の把握を行ってきた。2010（平成22）年度だけではあるが、3回の学生アンケートを実施することにより、教員に対する授業概要（シラバス）の重要性と学生への理解促進に向けた取り組みの意識付けを行った。

以上のような考えに基づき、本学では授業改善に向けた様々な対応を取ってきた。特に、診断的評価においては、その後は、1年生入学時のプレースメント・テストの実施、シラバス内容の充実化、各授業のオリエンテーション時に授業担当者が授業概要（シラバス）の内容を受講生に周知徹底することを進めてきた。特に、平成29年度は、学生の学修成果の可視化の一環として、PROGテストをすべての1年生に実施した。そして、これまでと同様に、形成的評価と総括的評価については、本章で述べる学生アンケートを学期中に2度実施してきた。

2回の学生アンケートの利用方法として、本学では、これまでにPDCAサイクルによる改善を目ざしてきた。すなわち、授業を計画[P(Plan)]し、実施[D(Do)]し、確認[C(Check)]し、改善[A(Act)]するというPDCAサイクルによる授業改善を進めてきたのである。大学の授業の場合、シラバスが授業の計画(P)になり、授業を実施(D)し、途中で教員と学生の間で教員は学生から見て授業が適切にわかりやすく実施されているか、学生は授業に積極的に参加しているかを相互に確認(C)し、あうことになる。ここで確認した結果をもとに教員と学生の双方で改善(A)し、

学生の学習内容の理解がさらに進み、単位の修得へとつながることを目指してきた。

また、中央教育審議会 2012（平成 24）年 8 月 28 日「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」では、学生の学修時間の実質的な増加・確保が、教育課程の体系化、組織的な教育の実施、授業計画（シラバス）の充実、全学的な教学マネジメントの確立の諸方策と連なって進められる必要があることが指摘されている。学生アンケートは、教育職員が学生からの意見を聴取し、学生の学習時間の実質的な増加に向けて、資料を収集する手段になりうるものである。そこで、特に 2012（平成 24）年度からは、授業時間以外の学習時間を測定する項目を新たに加え、本年度も次節に示した学生アンケートの実施目的を遂行すべく改善に努めた。

令和元年度からは、授業評価アンケートと名称を改め、平成 30 年度までの学生アンケートの質問項目について、学生が所有するスマートフォンを活用し、IBU.net を通じて原則として全科目の授業アンケートを実施した。翌令和 2 年度については、前年度の方法を採用しつつ、遠隔授業に対応して設問を一部修正した上で実施した。

令和 3 年度より、授業の改善点を従来以上に抽出できる設問にするための議論を始めた。その結果、授業の改善点が絞りやすい設問にするという点と、一定程度のデータの散らばりが生かせるという点を満たすことを目指すこととした。例えば、「あなたはこの授業を意欲的に受けたと思いますか」という従来の設問には主観に左右される「意欲的」という語が用いられている。そこで「授業で学んだ内容をもとに、自分で調べたり考えたりしましたか」と行動の変容を問う設問に切り替えることで、客観性を向上できると考えた。

令和 3 年度の実施について、夏学期については、新しいアンケートについての異なる議論を継続したため、従来とほぼ同じ設問項目で実施した。冬学期については、議論を重ねて大幅に変更した設問項目にてアンケートを実施した。以下、全学的な授業改善に向けた取り組みによって明らかになった傾向と課題について報告する。

2. 授業評価アンケート実施目的

本学では、授業評価アンケートの実施により、以下の二点の達成を目指している。

第一に、授業評価アンケートの活用により、授業の改善が進み、シラバスに明示された到達目標が意識され、授業外学習時間も増加することで、学生の単位修得が促進されることを目指している。その結果、セメスターごとに決められている履修上限（キャップ制）の制度が機能し、セメスターごとの学生の達成感や知識・技能を身につけることができたという有能感も高まることが期待される。

第二に、全体的に学生の単位修得が進むことで大学全体の GPA は上昇し、大学全体の教育力を示す指標としての GPA 制度が機能することを目指している。本学で導入されているセメスター制、キャップ制、GPA 制度は、それぞれ別個の制度ではなく、教員による教育の改善と学生の学習の成果の向上とに関連してそれぞれの制度が関係しながら、機能していくものと考えられる。

以上のことを踏まえ、授業評価アンケートによる授業改善の目標として、「学生

の意見に耳を傾けることにより、学生にとって理解しやすい授業の実施に向けた工夫を進める」「学生の授業に対する態度や学生自身の学びに対する自己認識を深める」の二点を設定し、アンケートを実施した。

3. 授業評価アンケートの実施方法

令和3年度は、専任教員・非常勤講師を問わず、学期の第14回または15回の講義時に、IBU.netを通じて授業評価アンケートを実施した。各教員は、授業評価アンケートの趣旨等の説明文を共有し、講義内でそれを資料または口頭で説明して、学生にアンケートの回答を求めた。またアンケート回答の総計は、IBU.netで集計され、その結果について各科目単位で教員が改善コメントを入力した。授業評価アンケートの選択設問項目は、夏学期が表1、冬学期が表2の通りである。

表1 授業評価アンケートの設問項目（夏学期）

設問内容	(評価値) 回答内容
1. 先生は、授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれましたか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない
2. 先生の授業の方法は、工夫されていましたか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない
3. 先生は、学生に対して丁寧に対応してくれていましたか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない
4. 毎回の授業（対面授業、課題提示型・オンデマンド型・リアルタイム型の遠隔授業）について、授業時間・予習復習・課題作成を合わせて、どれくらい学習しましたか。	(5):4.5時間より多い (4):4.5時間以内 (3):3時間以内 (2):1.5時間以内 (1):30分以内
5. あなたは、この授業を意欲的に受けてきたと思いますか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない
6. あなたは、この授業の授業概要（シラバス）をよく読んだ上で受講しましたか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない
7. あなたは、履修要覧の授業科目編成表にある「身につけるべき能力」をよく読んだ上で、この授業を受講しましたか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない
8. あなたは、シラバスの到達目標達成のために努力してきたと思いますか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない
9. あなたは、総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思いますか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない

表2 授業評価アンケートの設問項目（冬学期）

設問内容	(評価値) 回答内容
1. 授業での先生の説明は、分かりやすかったですか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない
2. 授業の資料やスライドは分かりやすかったですか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない
3. 授業の学習効果を高めるためにパソコン、スマホやインターネット等のICTが活用されていましたか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない
4. 先生は、授業中の問いかけや小テスト・課題などによって、学生の理解度を確かめながら授業を進めていましたか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない
5. 学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない
6. 授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない
7. 授業で学んだ内容をもとに、自分で調べたり考えたりしましたか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない
8. 毎回の授業について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか。	(5):4.5時間より多い (4):4.5時間以内 (3):3時間以内 (2):1.5時間以内 (1):30分以内
9. あなたは、履修要覧の授業科目編成表にあるディプロマ・ポリシーの「身につけるべき能力」をよく読んだ上で、この授業を受講しましたか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない
10. あなたは総合的に判断してこの授業を受講して良かったと思いますか。	(5):そう思う (4):少しそう思う (3):どちらともいえない (2):あまりそう思わない (1):そう思わない

変更した設問項目のねらいは次の通りである。

アンケート全体を、授業の分かりやすさ、ICT活用の有無、アクティブラーニング要素の有無、学生意欲の変化、学習時間を問う、履修に際しての学生の姿勢、授業全体の統括、という内容で構成している。

授業の分かりやすさに対して、設問1「授業での先生の説明は、分かりやすかったですか。」、設問2「授業の資料やスライドは分かりやすかったですか。」と2つの設問に分け、改善点を絞るようにした。設問3「授業の学習効果を高めるためにパ

ソコン、スマホ、インターネット等の ICT が活用されていましたか。」では、授業改善に ICT 活用の有無という視点を取り入れた。設問 4 「先生は、授業中の問いかけや小テスト・課題などによって、学生の理解度を確かめながら進めていましたか。」と設問 5 「学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。」では、「主体的・対話的で深い学び」を導くアクティブラーニング要素の有無を問うた。設問 6 「授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか」と設問 7 「授業で学んだ内容を元に、自分で調べたり考えたりしましたか。」では、授業を受けたことによる学生意欲の変化を問うことで学習効果を検証する材料とした。設問 8 「毎回の授業について、予習復習や課題作成にかけた時間を全て合わせて、平均してどれくらい学習しましたか。」については、従来の学習時間を問う設問と同じ内容であるが、一部表現を変えて設問の文字数を減らした。設問 9 「あなたは履修要覧の授業科目編成表にあるディプロマ・ポリシーの「身につけるべき能力」をよく読んだ上で、この授業を受講しましたか。」については、従来の「シラバスの理解」を引き継ぐ形で、履修に際しての学生の姿勢という視点として取り入れた。設問 10 「あなたは総合的に判断してこの授業を受講して良かったと思いますか。」は、従来と同様に授業全体の統括をする設問として、アンケートの最後に残した。

集計は、「1 : (そう思う)」が 5 点、「2 : (少しそう思う)」が 4 点、「3 : (どちらともいえない)」が 3 点、「4 : (あまりそう思わない)」が 2 点、「1 : (思わない)」が 1 点で採点している。これらの選択設問に加え、最後の設問として「この授業の改善につながるとされる意見や感想を具体的に書いてください。」とした質問を設定し、自由記述を求めた。

(1) 夏学期授業評価アンケート

夏学期は、第 14 回または 15 回の講義時にあたる令和 3 年 7 月 8 日 (木) ~ 7 月 27 日 (火) を授業評価アンケート期間として設定し、受講している学生に IBU.net を通じて回答を求めた。その後、授業評価アンケートの集計が完了した令和 3 年 8 月 16 日 (月) ~ 8 月 30 日 (月) を、改善コメントの入力期間として設定し、各科目を担当する教員に IBU.net を通じて回答を求めた。

(2) 冬学期授業評価アンケート

冬学期は、第 14 回または 15 回の講義時にあたる令和 3 年 12 月 24 日 (金) ~ 令和 4 年 1 月 22 日 (土) を授業評価アンケート期間として設定し、受講している学生に IBU.net を通じて回答を求めた。その後、授業評価アンケートの集計が完了した令和 4 年 1 月 23 日 (日曜) ~ 2 月 7 日 (月曜) を、改善コメントの入力期間として設定し、各科目を担当する教員に IBU.net を通じて回答を求めた。

4. 集計結果と授業評価アンケートの結果に対する対応

(1) 夏学期授業評価アンケートの授業数・回答数・回答率等について

夏学期授業評価アンケートの授業数・回答者数・回答率は表2の通りである。回答率については、大学合計 64.84%（前年度 51.17%）、短大合計 73.41%（同 56.97%）、総計 65.71%（同 51.93%）となった。新型コロナウイルス感染拡大により、アンケート回答時期に全学で全面遠隔授業となった前年度に比べると、回答率が大幅に上昇した。

表 3 夏学期授業評価アンケートの実施授業数・回答者数・回答率

授業担当教員の所属	授業数	受講者数	回答者数	回答率 (%)
和の精神Ⅰ／仏教Ⅰ（瞑想）	1	1,029	880	85.52%
和の精神ⅠⅠ／仏教ⅠⅠ（写経）	1	990	680	68.69%
日本学科	72	1,830	1,178	64.37%
国際キャリア学科	73	1,915	1,175	61.36%
社会学科	84	3,904	2,380	60.96%
人間福祉学科健康福祉専攻	63	1,563	870	55.66%
教育学科小学校教育コース	132	4,129	2,633	63.77%
教育学科中高英語教育コース	41	1,007	579	57.50%
教育学科保健教育コース	32	1,034	763	73.79%
教育学科幼児教育保育コース	72	1,986	1,373	69.13%
経営学科 公共経営専攻	36	1,351	852	63.06%
経営学科 企業経営専攻	61	2,720	1,867	68.64%
看護学科	24	1,844	1,118	60.63%
大学非常勤	475	19,056	12,412	65.13%
大学合計	1,167	44,358	28,760	64.84%
和の精神Ⅰ／仏教Ⅰ（瞑想）	1	192	172	89.58%
和の精神ⅠⅠ／仏教ⅠⅠ（写経）	1	221	160	72.40%
保育科	54	2,034	1,314	64.60%
生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻	30	975	853	87.49%
生活ナビゲーション学科ライフケア専攻	21	257	149	57.98%
短大非常勤	41	1,375	1,062	77.24%
短大合計	148	5,054	3,710	73.41%
総合計	1,315	49,412	32,470	65.71%

集計された授業評価アンケートの結果は、IBU.net を通じて科目担当者に公開された。その後、全科目担当者に対して IBU.net を通じて授業に関する改善コメントの記入を求めた。授業評価アンケートの集計結果及び科目担当者の改善コメント内容は、学生が閲覧できるように、印刷した一覧を図書館で公開した。

（2）夏学期授業評価アンケート集計結果について

夏学期授業評価アンケートの各設問に対する回答結果の平均値は、表4の通りである。

表 4 夏学期授業評価アンケートの解答結果（平均値）

授業担当教員の所属	1	2	3	4	5	6	7	8	9
和の精神Ⅰ／仏教Ⅰ（願想）	4.45	4.28	4.23	2.13	4.02	3.81	3.81	3.92	4.19
和の精神ⅠⅠ／仏教ⅠⅠ（写経）	4.41	4.23	4.16	2.14	4.20	4.01	4.03	4.14	4.20
日本学科	4.54	4.36	4.43	2.82	4.48	4.33	4.24	4.31	4.46
国際キャリア学科	4.37	4.22	4.31	2.36	4.28	4.20	4.14	4.21	4.30
社会学科	4.55	4.47	4.52	2.61	4.39	4.23	4.15	4.20	4.45
人間福祉学科健康福祉専攻	4.43	4.28	4.40	2.17	4.27	3.97	3.92	4.03	4.34
教育学科小学校教育コース	4.61	4.53	4.60	2.63	4.49	4.04	4.01	4.16	4.54
教育学科中高英語教育コース	4.45	4.35	4.38	2.38	4.39	3.95	3.91	4.07	4.37
教育学科保健教育コース	4.48	4.28	4.47	2.44	4.43	4.09	4.04	4.19	4.52
教育学科幼児教育保育コース	4.39	4.18	4.31	2.55	4.40	3.89	3.88	4.10	4.35
経営学科 公共経営専攻	4.46	4.36	4.39	2.37	4.32	4.18	4.15	4.15	4.38
経営学科 企業経営専攻	4.47	4.37	4.41	2.38	4.32	4.24	4.16	4.19	4.41
看護学科	4.54	4.32	4.38	2.72	4.45	4.14	4.11	4.30	4.45
大学非常勤	4.41	4.32	4.40	2.43	4.31	4.06	4.01	4.10	4.35
大学平均	4.46	4.34	4.41	2.46	4.34	4.09	4.04	4.14	4.39
和の精神Ⅰ／仏教Ⅰ（願想）	4.40	4.34	4.24	1.95	3.99	3.81	3.84	3.85	4.08
和の精神ⅠⅠ／仏教ⅠⅠ（写経）	4.47	4.39	4.38	2.31	4.32	4.21	4.22	4.28	4.34
保育科	4.57	4.61	4.56	2.19	4.38	3.99	4.03	3.99	4.50
生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻	4.65	4.55	4.58	2.27	4.40	4.12	4.08	4.13	4.51
生活ナビゲーション学科ライフケア専攻	4.77	4.73	4.75	2.48	4.72	4.21	4.21	4.36	4.76
短大非常勤	4.40	4.24	4.36	2.24	4.38	4.12	4.09	4.16	4.35
短大平均	4.58	4.49	4.54	2.35	4.46	4.11	4.11	4.19	4.49
総平均	4.47	4.36	4.42	2.45	4.36	4.09	4.05	4.14	4.40

学習時間を問うた設問 4（「毎日の授業時間に、課題作成の時間や予復習の時間も加えて、どれくらい学習しましたか」）以外は、評価平均点が概ね 4.00 ポイントを超えている。このことから、学生は意欲的に学習に取り組み、教員の授業へ工夫等も正当に評価されていることが窺える。特に、設問 9（「あなたは総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思いますか。」）については、大学も短期大学もそれぞれに高いポイントとなっていて、全体的に学生にとっても満足度の高い授業が実施されている、と考えられる。

一方、設問 4（「毎日の授業時間に、課題作成の時間や予復習の時間も加えて、どれくらい学習しましたか」）については、全ての学部・学科で 3.00 ポイントを下回っている。このことは、多くの学生が一つの授業に対し、その授業時間を含めても 3 時間以内または 1.5 時間以内しか勉強していないということを示している。つまり、授業時間以外に行なっている学習時間は極めて短いものであるため、授業時間以外に学習をさせるための手立てを講じる必要があるようである。

上述した通り、授業評価アンケートの集計後には、IBU.net を通じて各教員に対して改善コメントの記入を求めた。また、「この授業の改善につながると思われる意見や感想を具体的に書いてください。」とした自由記述の回答結果については、担当者・担当科目を匿名化した上で、学科ごとに整理し、各 FD 委員によって傾向と課題が各学科に報告されている。

（3）冬学期授業評価アンケートの授業数・回答数・回答率等について

冬学期授業評価アンケートの授業数・回答者数・回答率は表 5 の通りである。回答率については、大学合計 58.09%（夏学期 42.69%）、短大合計 72.30%（同 50.08%）、総計 59.56%（同 43.50%）となった。夏学期と同様に冬学期の回答率も大幅に上昇した。

なお、集計された授業評価アンケートの結果を受けて、全科目担当者に対して IBU.net を通じて授業に関する改善コメントの記入を求めた。また、授業評価アンケートの集計結果及び科目担当者の改善コメントの内容は、学生が閲覧できるよ

うに、印刷した一覧を図書館で公開した。

表 5 冬学期授業評価アンケートの実施授業数・回答者数・回答率

授業担当教員の所属	授業数	受講者数	回答者数	回答率 (%)
和の精神 I I / 仏教 I I (写経)	1	1,041	661	63.50%
日本学科	63	1,532	844	55.09%
国際キャリア学科	56	1,471	915	62.20%
社会学科	90	3,853	2,003	51.99%
人間福祉学科健康福祉専攻	67	1,310	639	48.78%
教育学科小学校教育コース	118	3,907	2,451	62.73%
教育学科中高英語教育コース	37	882	473	53.63%
教育学科保健教育コース	34	1,233	773	62.69%
教育学科幼児教育保育コース	56	1,672	1,021	61.06%
経営学科 公共経営専攻	36	1,132	690	60.95%
経営学科 企業経営専攻	62	2,706	1,846	68.22%
看護学科	32	752	388	51.60%
高等教育推進センター	16	472	268	56.78%
大学非常勤	440	15,585	8,841	56.73%
大学合計	1,109	37,548	21,813	58.09%
和の精神 I I / 仏教 I I (写経)	1	188	146	77.66%
保育科	38	1,371	846	61.71%
生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻	38	1,076	857	79.65%
生活ナビゲーション学科ライフケア専攻	23	315	209	66.35%
短大非常勤	41	1,375	1,069	77.75%
短大合計	142	4,325	3,127	72.30%
総合計	1,251	41,873	24,940	59.56%

(4) 冬学期授業評価アンケート結果について

冬学期授業評価アンケートの各設問に対する回答結果の平均値は、表6の通りである。

全体的に設問を変えたことによって、データにばらつきが生まれ、改善のポイントが絞られてきたことがわかる。

表 6 冬学期授業評価アンケートの解答結果（平均値）

授業担当教員の所属	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
和の精神 I I / 仏教 I I (写経)	4.16	4.24	4.24	3.56	2.80	3.84	3.54	1.90	3.77	4.01
日本学科	4.32	4.24	4.20	4.25	4.24	4.33	4.37	2.73	4.20	4.39
国際キャリア学科	4.26	4.23	4.18	4.18	4.10	4.15	4.08	2.35	3.97	4.28
社会学科	4.34	4.30	4.30	4.12	3.84	4.22	4.18	2.57	4.06	4.35
人間福祉学科健康福祉専攻	4.37	4.26	4.17	4.31	4.19	4.34	4.13	2.10	3.96	4.45
教育学科小学校教育コース	4.41	4.40	4.38	4.29	4.36	4.35	4.18	2.22	3.94	4.49
教育学科中高英語教育コース	4.30	4.32	4.47	4.18	4.37	4.31	4.28	2.25	3.99	4.36
教育学科保健教育コース	4.45	4.50	4.43	4.28	3.82	4.40	4.26	2.16	3.93	4.54
教育学科幼児教育保育コース	4.24	4.20	4.20	4.11	4.25	4.34	4.14	2.10	3.86	4.41
経営学科 公共経営専攻	4.39	4.35	4.30	4.26	3.97	4.26	4.18	2.25	4.16	4.38
経営学科 企業経営専攻	4.34	4.32	4.26	4.33	4.14	4.20	4.12	2.15	4.06	4.36
看護学科	4.47	4.49	4.24	4.31	4.24	4.40	4.40	2.67	4.09	4.43
高等教育推進センター	4.08	4.12	4.54	4.15	3.86	3.90	4.15	2.53	3.95	3.99
大学非常勤	4.24	4.15	4.05	4.08	3.88	4.11	4.02	2.11	3.93	4.26
大学平均	4.30	4.25	4.20	4.15	3.98	4.21	4.11	2.23	3.98	4.34
和の精神 I I / 仏教 I I (写経)	4.06	4.14	4.29	3.62	3.18	3.77	3.64	1.94	3.82	3.99
保育科	4.33	4.37	4.06	4.15	4.12	4.27	4.13	1.77	3.85	4.43
生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻	4.66	4.64	4.51	4.47	4.20	4.49	4.32	1.98	4.29	4.63
生活ナビゲーション学科ライフケア専攻	4.66	4.48	4.27	4.43	4.51	4.56	4.25	2.09	4.10	4.66
短大非常勤	4.39	4.33	4.23	4.17	3.88	4.32	4.07	1.97	4.01	4.39
短大平均	4.48	4.43	4.30	4.28	4.11	4.35	4.13	1.97	4.06	4.47
総平均	4.33	4.27	4.21	4.17	4.00	4.23	4.11	2.19	3.99	4.35

まず、設問 1・設問 2 の授業のわかりやすさと設問 4・設問 5 のアクティブラーニング要素については、対面授業と動画によるオンデマンド授業が混在していた中で、やはり対面授業の方が高いポイントを得ていることから、可能な限り対面授業を実施した方がよいことが示唆された。また、設問 5（「学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。」）に対してのデータのばらつきは全体的に大きく、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた貴重な資料になり得ると考えられる。設問 3 の ICT 活用の有無については、どの学部のポイントも高く、授業改善に向けて ICT が積極的に活用されてきたことが示された。

設問 6・設問 7 の学習意欲の変化と、設問 9 の授業全体の統括については、どの学科もそれぞれに高いポイントを指していて、これまでと同様に満足度の高い授業が実践されていた様子が窺えた。ただし、設問 8 の学習時間については、夏学期よりも更にポイントが減少している。このことは、学生にとって満足度が高いことと、学生への課題の負荷が少ないことの関係性が否定できないことを意味している。このことから、それぞれのポイントが高かったことにただ満足をするのではなく、学習活動の質や量が適切であったのかについての議論を改めて行う必要がある。

以上、令和 3 年度の授業アンケートの結果を概観した。今後は学部学科を越えて、情報を共有する取り組みが課題となろう。近年のデジタル社会に向けた教育改革の動向を踏まえて、新しい教育方法の開発と共有も重要課題であるため、これらのアンケート結果を活かした、組織的な取り組みがより重要になると考えている。

5. 今後の課題

平成 21 年度以降、今後の課題として、第一に、授業概要（シラバス）の記述内容を見直していくこと、第二に、学生アンケートの結果とリフレクション・ペーパーの活用の 2 点を掲げて取り組みを行ってきた。

今年度もほとんどの科目について授業評価アンケートを実施し、全学的な課題等は把握できたものの、具体的な授業改善については、各科目担当に委ねられている状況である。また、学生の授業に対する態度や学生自身の学びに対する自己認識については、数値上は一定の成果がみられるが、学修成果に結びついているかについては、検証が必要である。上述したように、各科目単位での授業改善だけでなく、学科単位での授業改善や学生と協働した授業改善等、組織的な授業改善の取り組みが重要であり、今後、FD委員会を中心とした組織的な検討がより重要になろう。

なお、デジタル社会に応じた授業のあり方が問われる現在においては、FD活動の充実がより重要になる。従来から取り組んできた授業概要（シラバス）のあり方やリフレクション・ペーパーの活用等による学生とのコミュニケーションの改善についても、授業形態に応じた工夫が必要であろう。本年度の取り組みを踏まえ、次年度以降もシラバスや授業方法に関するFDの研修会を通して、授業改善に向けた課題意識の共有を図っていききたい。

[引用文献]

文部科学省 2008年 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申）
（http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf）

文部科学省 2012年 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」（答申）
（http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf）

第4章 各学科・専攻・コースによるFD活動について

人文社会学部 日本学科

1. はじめに

日本学科の今年度の新たな取り組みとしては、一つに **2. 基礎的必修科目について（1）「日本学表現演習Ⅰ」（1年次必修）** で報告しているように、日本漢字検定・日本語能力試験についての取り組みがある。授業内で問題の解説や模擬試験を行い、学生の意欲を引き出す工夫をした。その成果として、日本語能力試験の受験者は増加した。しかし、合格に結びつかなかったことが反省点である。新たな取り組みのもう一つは、**4. 学科独自の取り組みについて（4）「地域・文化発信演習」** である。全学科教員がゲスト講師となつての講義や実地研修をまじえて、日本学科らしい地域との連携を考える授業を行った。しかし、開講初年度であり、5～6 配当ということもあり、受講者は4名と極めて少なかった。まずは受講者増に向けて、魅力的な授業作りをしなければならない。

継続中の取り組みのうち、とくに成果を挙げたのは、**4. 学科独自の取り組みについて（2）「日本学インターンシップ演習」** である。教職支援・キャリア支援について、あらかじめ十分に学び、研修し、振り返りを行うという授業であり、2年生3年生計22名が中学校・図書館・一般企業で職場体験をさせていただいた。3月には成果発表会を行い、体験を共有し、それぞれの将来像を見据えることができた。また、**4. 学科独自の取り組みについて（3）教員採用試験対策** で報告しているように、中学高校国語教員の養成対策も成果を上げた。コロナ流行の波に翻弄され対面での指導が困難な状況にも拘らず、きめこまかい指導を実施し、今年度も7名もの教員採用試験現役合格者（中学国語6名・高校国語1名）を出すことができた。

その他の取り組みも、授業終了時に実施したアンケートによると、おおむね学生の反応は良好である。毎年工夫を重ねてきた成果である。しかし、改善すべき点や状況に応じて新たに取り組むべき点も見つかっている。それぞれ次年度に向けて対策を立てなければならない。

（文責：田島智子）

2. 基礎的必修科目について

（1）「日本学表現演習Ⅰ」（1年次必修）

Plan（計画）

R3年度は、従来の内容に加え、新たに次の2点を組み込む大幅な変更を施した。

- ①新入学生のノートPC必携、遠隔受講必須に伴い、入学時の情報ガイダンスでカバーしきれないPC・遠隔受講・IBU.net 関連の知識および技能の補完を、学期始めに行う。
- ②中長期計画を見据えた学科の学修内容見直しを反映し、学生の日本語力向上を目的に、漢字検定2級・日本語検定2級レベルを想定した取り組みを行う。

Do（実施）

上記①については、オリエンテーション期間の前倒し回～第4回授業に時間を取り、前倒し回は全クラス合同で応援学生のサポート付きで、それ以外は2クラス合同で、必

要な知識技能の教授と実践練習を行った。②については、漢検・日検の過去問（短縮版）を模擬試験に使い、学期始めに自分の実力把握、学期終わりに学修の成果を測ることに利用した。また各回 45 分程度を費やし、漢検・日検テキストを使い、それぞれ 3 分野ずつについて[練習問題→答え合わせ、解説]を行い、終盤にはクラスメート苦手問題集に取り組んだ（問題選定：学生、集約：教員、解説：学生（教員も補完））。その他、従来からの取組みを踏襲し、スピーチ聴聞（在学生の話、キャリア関連の話、卒業生の話）、グループディスカッション、「私の薦める一冊」原稿作成およびプレゼンテーションも行った。

Check (評価)

〈受講者の評価〉学期末の学科独自アンケート（5 段階評価。105 名回答）から抽出する。新内容については、・PC 関連指導…「大変有意義だった(5)」「それなりに有意義だった(4)」の合計：約 71% ・日本語力向上の取組み…「大変／それなりに有意義」合計：約 88%。その他、「卒業生の話」を始めとするスピーチ聴聞、「私の薦める一冊」の取組みは例年通り評価が高く、ディスカッションも「大変／それなりに有意義」合計が約 85%であった。科目全体としては「大変／それなりに有意義」合計：約 95%であった。自由記述の感想もほぼ肯定的であり、扱う内容面では高く評価できると思われる。

〈その他の評価材料〉R3 年度入学生の漢字検定・日本語検定（いずれも 2 級）受験結果では、漢検は 1 名受験し合格、日検は 7 名受験し全員不合格であった。学科の勸奨もあり日検の受験者が大幅に増えたことは良かったが、この科目の目標の一つとしていた「日本語力の向上に注力し、その結果が明確な形で示される」の後半部分には至らなかった。

Act (改善)

上記のように扱う項目・内容的には良かったと思われるが、具体的な細部については検討と改良の余地があると考えられる。

- ・PC 指導…今年度の経験を踏まえて教える内容を精選し、順序も再検討し、教員が適切に指導できるようにする。
- ・日本語力向上…基本的な枠組みは踏襲するが、全体の底上げとして、各回の分野ごとの問題実践と解答・解説の仕方を工夫する。また、結果につなげるべく模擬試験成績優秀者に受験を勧奨する。
- ・ディスカッション…有意義との評価が高かった一方で、グループによっては円滑に運ばなかったとの声もあった。これは遠隔受講での実施であったことが大きいと思われる。新年度に対面で実施できれば、議論に適切な環境となりそれらの点は改善されると思われるが、遠隔の場合も想定し、遠隔でもグループワークが十全に機能するような工夫を考えておく必要がある。

その他、学生にとり有益な内容（「私の薦める一冊」の取組み、各種のスピーチ聴聞）は維持する。

（文責：高橋美奈子）

(2)「日本学表現演習Ⅱ」(1年次必修)

Plan (計画)

本科目は日本学科初年次ゼミ科目として開講4年目、カリキュラム改変前の「大学基礎演習Ⅱ」から数えて10年目となる。プログラムの柱としている授業前半の「ブックトーク」個人発表と「四天王寺ツアー」グループ発表は、以前より、読解力やプレゼン能力の向上にある程度の効果が認められていることから、昨年度の新型コロナウイルス感染状況への対応を踏襲しつつ、その基本的な授業形態を維持することとした。それに、「日本学表現演習Ⅰ」から継続する漢字検定と日本語検定の模試をおこなって、成績評価に加えることとした。

Do (実施)

授業の実施形態は、刻一刻と変化する新型コロナウイルス感染拡大の影響により、臨機応変な対応を求められることになったが、おおむね計画通りに実施できた。ただし、漢字検定と日本語検定の模試については、対面実施が必須であるため、実施日の決定と代替方法について、議論の余地が残された。

Check (評価)

昨年度に引き続き、この科目の独自アンケートを Google Form にて実施し、受講者数約110名のうち75名から回答を得た。ブックトークは70名、四天王寺ツアーは60名から「有意義であった」という回答を得た一方、そのうち「大変有意義である」という回答はブックトークで31名を占めたのに対し、四天王寺ツアーは29名で、後者の満足度がやや低かった。

また、独自アンケートには「漢字検定と日本語検定の模試」についての設問がなかったため、これについては未評価となってしまった。

Act (改善)

今年度は、当初よりリモート授業やハイフレックス授業への対応を折り込んだ授業計画を立てていたため、新型コロナウイルス感染拡大の影響は比較的少なく済んだと考えられる。また、受講学生からも一定の評価を得ていることから、プログラムを大きく変える必要はないと思われる。

とはいえ、漢字検定と日本語検定の模試など、対面実施が必須となる取り組みをどのように運用するのか、あるいは独自アンケートの細部について、検討していく必要があるように思われる。

(文責：今田健太郎)

(3)「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」(1年次必修)

Plan (計画)

本科目の主たる目標は、日本学科のディプロマ・ポリシーに合致したものであり、これを具体的に実践することにより、学生が日本語(表現)についての幅広い知識を体系的に修得し、基本的な事項を理解するにとどまらず、そうした知識・事項にもとづいた精確かつ適切な日本語表現力を身に付けて、これを的確に運用できるようになることを目指している。なお、授業担当は、1年生全員を学籍番号順に4分割し、夏学期の「Ⅰ」は、①麻生、②野中、③田島、④坂田が、冬学期の「Ⅱ」は、①田島、②坂田、③中村、④野中

が担当した。

Do (実施)

それぞれの授業内容は、Iは、①授業の説明、「言葉とは何か」を考える、②「言葉とは何か」の作文を書く、③叙述・構成の方法を学ぶ、④小論文・メールの書き方を学ぶ、⑤小論文「言葉と私」を書く、⑥小論文の発表と相互評価、⑦敬語の学習、⑧「心に残る表現」の原稿作成と発表準備、⑨発表と相互評価、⑩「言葉と私」の小論文（最終レポート）の10項目である。IIは、①表現の工夫について、②スピーチ（和の精神と私、原稿作成と発表）、③スピーチの相互評価とフィードバック、④敬語の学習⑤正式な手紙の書き方の説明と実践、⑥履歴書の書き方の説明と実践、⑦スピーチ（自己アピール、原稿作成と発表）、⑧スピーチの相互評価とフィードバック、⑨文章の要約のしかたの説明と実践の9項目である。

Check (評価)

I・IIともに、学期末に学生に対する独自アンケートを実施した。質問項目は、それぞれ上記授業内容に加えて、Iでは⑪授業全体の感想を、IIでも⑩授業全体の感想を尋ね、「評価1＝とても勉強になった 2＝勉強になった 3＝どちらとも言えない 4＝勉強にならなかった 5＝まったく勉強にならなかった」の5段階で学生に評価させた。集計結果は次のとおりである。（自由記述欄は割愛）

		合計／人							合計人数						
I		1	2	3	4	5	数	II		1	2	3	4	5	合計人数
①	61	47	9	1	0	118	①	40	44	8	4	3	99		
②	60	45	11	1	1	118	②	51	34	8	4	2	99		
③	75	36	6	0	1	118	③	53	31	9	4	2	99		
④	93	21	3	0	1	118	④	58	31	6	3	1	99		
⑤	75	30	11	1	1	118	⑤	73	17	4	4	1	99		
⑥	70	32	13	2	1	118	⑥	71	18	6	2	2	99		
⑦	76	38	3	1	0	118	⑦	63	28	3	2	3	99		
⑧	72	36	9	1	0	118	⑧	58	26	9	4	2	99		
⑨	75	29	13	0	1	118	⑨	57	31	7	3	1	99		
⑩	66	37	14	0	1	118	⑩	62	28	3	5	1	99		
⑪	80	30	5	2	1	118									

Act (改善)

上に掲出したアンケート結果は、一部公開シラバスの内容や順序を変更したり、オンライン授業を導入したりしたことを考えれば、概ね良好な学生からの評価と考えてよいだろう。しかし、評価4・5の否定的評価が、IよりもIIの方がそれほど多くはないが増加しているのは大きな問題である。これは、授業が進むにつれて、授業についてこられなくなる学生が増えることを示していよう。我々担当教員は、より丁寧な授業を心掛けるとともに、より積極的なピアタの活用を図ったりしなければならない。もちろん、新型コロナ

ウィルスの影響はあるにしても、教員と学生、および、学生同士の人間関係・コミュニケーションをより密なものにすることがきわめて重要であろう。早速次年度から具体的に取り組んでいきたい。

(文責：坂田達紀)

(4)「日本学基礎演習Ⅰ」(2年次必修)

令和3年度は、学生もZoomの取り扱いに慣れてきたため、授業担当者の工夫のもとできるだけ従前の授業パターンに戻して実施した。

Plan (計画)

- ・1年次のオンライン授業実施により、学生に不足している大学生としての学修能力を確実に修得させ、ゼミでの学修につなげる。
- ・学生の相互評価ルーブリックは、プレゼン回数に応じて「プレゼンテーションにおいて達成すべきこと」→「達成すべきことが達成できているか」という段階的ルーブリックを使用。
- ・授業独自アンケートを実施し、今後の授業改善に役立てる。

Do (実施)

- ・グループワークやプレゼンは、可能な限り計画通りに実施した。
- ・メディアリテラシー教育・敬語についての学びについては計画通りに実施した。
- ・学科独自アンケートについては、グーグルフォームを使用してこれを実施した。

Check (評価) ⇒ Act (改善)

- ・学科独自アンケートの結果を踏まえて評価および改善すべき点について述べる。
 - ★大学生に求められるレベルのレポートを作成できるようになるための学びについて
大変参考になった＝74.4% ある程度参考になった＝22.6%＝合計 97%
 - ★結果として、あなたのレポート作成能力は向上したと思うか
非常に向上したと思う＝34.9% ある程度向上したと思う＝56.6%＝合計 91.5%
 - ★グループおよび個人でのプレゼンテーションについての感想
非常にやりがいを感じた＝37.3%
ある程度やりがいを感じた＝53.4%＝合計 90.7%
 - ★授業での学びにより発表・プレゼンテーション資料作成能力は向上したか
非常に向上したと思う＝47.1% ある程度向上したと思う＝39.7%＝合計 86.8%
- ・上記のアンケート結果が示すように、多くの学生が、この科目を受講することでレポート作成およびプレゼン能力が向上したと感じており、科目としての目標は達成されていると考えられる。したがって、シラバスの改変なども必要ないと判断する。ただし、授業担当者によって課題の内容に相違があることへの不満が示されたので、課題についての担当者間での調整作業が必要だと考える。

(文責：南谷美保)

3. 相互授業参観について

Plan (計画)

10月14日(木)のFD委員会にて示された指針に沿って相互授業参観を行った。本学科においては教員養成に関する科目、また近年授業に求められている課題に関する科目を

公開し、授業内容や方法について教員相互の知識技術の研鑽を目指した。

Do (実施)

参観は11月19日(金)～12月16日(木)にかけて実施した。

No.	担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	参観者
1	矢羽野 隆男	11月19日	月	1	教科教育法Ⅱ(国語)	4-409	野中
2	田島 智子	12月7日	火	5	日本語文法Ⅱ	4-260	高橋
3	坂田 達紀	12月8日	水	5	大学基礎演習Ⅱ(旧・日本語表現演習Ⅱ)	4-406	
4	戸田 文明	11月29日	月	3	日本史Ⅳ・日本史研究Ⅱ	4-312	
5	松山 雅子	11月22日	月	3	教科教育法Ⅳ(国語)	6-301	矢羽野
6	南谷 美保	12月1、8日	水	1	「日本文化史Ⅱ」	4-261	
7	高橋 美奈子	11月30日	火	1	日本語学Ⅱ	6-353	南谷
		12月8日	水	4	講読Ⅰ(日本語学)	4-212	
8	麻生 迪子	11月29日、12月13日	月	2	日本語教育学概論Ⅱ	5-301	今田、松山、森嶋
9	今田 健太郎	12月8日	水	4	音楽文化論	4-263	
10	野中 拓夫	11月24日	水	4	大学基礎演習Ⅱ	4-206	坂田、田島
11	森嶋 俊行	11/19、22、29日、12月6、13日	月	4	人文地理学	4-312	麻生、戸田

Check (評価)

参観後、参観者は「参観シート」を記入し、速やかに授業担当者に提出し、授業担当者は「参観シート」をもとに「評価できる点」「改善すべき点」「検討を要する点」「今後への展望」などの観点から自己評価した、

Act (改善)

1月12日(木)に、オンラインによる学科会議に合わせて合評会を実施し、授業担当者が「参観シート」をもとにした自己評価を述べ、その後、適宜質疑応答を行った。その上で指摘された問題点について、他の科目にも共通する事例を上げながら改善案を出し合った。例えば、対面・ハイブリッド授業において2通りの方法で受講している学生の両方にどのように目をかけるかといった問題が議題となった。

(文責：森嶋俊行)

4. 学科独自の取り組みについて

(1)「パフォーマンス実践演習」

Plan (計画)

この科目は、学生の対面コミュニケーションの力を伸ばすために、「ヴォイストレーニング、口頭表現、身体表現などの諸要素を実習し、それらを踏まえながら、「他者への理

解」あるいは「コミュニケーション」について取り扱ったパフォーマンスを、グループごとに創作し、発表する演習」(シラバスより)である。例年、夏休みの4日間の集中講義、いわば「合宿」のようなかたちで実施され、受講した学生からの満足度も高い。当初の計画は、ここ数年のプログラムを踏襲しつつ、洗練させたものであった。

Do (実施)

この科目にて教育効果を引き出すためには、上記の授業内容のとおり、対面授業が必要不可欠である。昨年度には、感染防止対策をおこなったうえでの対面実施としたが、今年度の8月に感染力の増したデルタ株が流行したため、2日目以降の授業をリアルタイムのリモート授業に、急遽変更せざるをえなくなった。これにより、リモートにて可能な取り組みにしばらざるをえず、またまとめの創作パフォーマンスもZoomミーティングを用いたものにするなど、プログラムに大幅な変更を強いられることになった。

Check (評価)

科目の独自アンケートの結果、受講した学生の全体的な満足度は、おおむね高い状態ではあるものの、やはり対面での実施を希望・期待するものであった。

Act (改善)

今年度は、デルタ株の動向が不透明であったのでやむなくリモート化せざるをえなかったが、今後は感染対策をおこなったうえでの対面授業を実施した方がよいと思われる。つけ加えるならば、今年度はリモート化によって大きな問題にはならなかったが、昨年度にはマスク装着によるコミュニケーションの阻害が存在した。もし令和4年度に対面授業をおこなうなら、なにかしら試みていく必要があるだろう。

(文責：今田健太郎)

(2)「日本学インターンシップ演習」

Plan (計画)

昨年度(2020年度)に始まった4 Semester生を主対象とする日本学インターンシップも2年目に入った。日本学科の特性(日本語や日本文化を学ぶ)を活かしたインターンシップ体験を通して、①学生が、自らの進路について考え、今後のキャリア形成に主体的に取り組む、②「職場」を経験することにより社会人としての心構えや必要な技能・知識を習得する、③将来を展望した主体的な学びの契機とする、などを目的としている。

Do (実施)

受入先と学生の配属

受入先は、公立中学校(2校、6名)、日本語学校(1校2名)、公立学校図書館(2名)、市立図書館(2名)、市役所観光関係部署(2箇所2名)、企画運営会社(2箇所2名)、印刷出版社(1社1名)、人材教育・育成(1社5名)にお願いした。学生の配属は、8月上旬の希望アンケートをもとに、9月初旬に決定を通知した。

実際の授業

事前学習：9月9日1～3講時、10日1～3講時(オンライン)。

内容：インターンシップの心構え、基本的ビジネスマナー、会社・企業研究など。
インターンシップ実践：9月～12月の間、8時間×5日間の就業体験。

評価：受入機関の担当者からルーブリックによる評価をいただいた。

事後指導：実践終了後、個別に礼状作成、ビジネス文書の書き方などを指導。

成果発表会：2月1日1・2講時 自己評価シートによる振り返りと発表用資料作成
2月2日1・2講時 体験発表会（オンライン）、授業アンケート

Check (評価) → Act (改善)

受講者アンケート（成果発表会終了後）の結果

アンケートでは、「受講して良かった」「将来を考える上で参考にしていきたい」「モチベーションが高まった」など肯定的な評価がほとんどを占めた。また、「授業での発表やプレゼンテーションの経験を生かすことが出来た」、「授業で学んだ規律性や自己解決能力などを活かすことが出来た」など、授業の経験がインターンで活用されたことが看取される。今後の学修に対しても今回の経験や反省をもとに積極的に取り組むという姿勢が見られた。インターンシップが学生にとって良い刺激になったといえよう。

今後の課題・改善点

- ①受入先は、経営学部のインターンと重複する機関もあり、綿密な調整が必要である。
- ②受入機関からの要望にも応えるような内容にしていくことも考えなければならない。
- ③発表会は、受入機関やI回生の参加を考慮し、今後もハイブリッド形態が望ましい。
- ④発表会準備と発表会を二日に分けて実施、資料の準備時間も確保できたと思われる。
- ⑤配属先決定時に、不適切と判断した学生を除いたが、一定の基準を設ける必要がある。

（文責：麻生迪子・戸田文明・野中拓夫）

(3) 教員採用試験対策

R3年度は教職支援委員に新任の野中が就任し、松山とともに、教職教育推進センターの協力を得て取り組みを進めた。コロナの状況により登学形態が様々に変化中、オンラインも取り入れ、その時々により効果を生みやすい方法を模索し続けながらの一年であった。

Plan (計画)

夏学期は、主に4回生への教員採用試験対策の助言と確認、また専門試験対策講座の実施を計画した。冬学期には、今年度もキョーサイ合格ころえプロジェクトの実施、3回生向け専門試験対策講座の実施、公立中学校授業見学会の実施を予定した。

Do (実施)

- ・面接および場面指導対策は、教職教育推進センターの協力を得てオンラインで実施された。支援委員はGAとしてコーディネートを請け負った。
- ・専門試験対策講座は、一次試験が終わった後、7月から行った。現代文（担当：松山）は7/16、12、28、8/4、古文（担当：野中）は7/12、19、26、8/4、10、漢文（担当：矢羽野）は7/9、16、21、30、8/6、13、20に実施した。参加者は5名であった。時期により、オンラインと対面を使い分けながらの実施であった。
- ・12月から「キョーサイ合格ころえプロジェクト」開始。主として教採合格者がSA

となり、後輩の教職志望学生の指導に当たる日本学科独自の取り組みである。実施日程は、12/3、10、17、24、1/7、14、21、2/7、10、14、17、24、28、3/3、10、17、21、24の18回であり、12月と1月は90分、2月3月は120分で行った。プロジェクトの内容は、教授受験体験談、効果的な勉強方法、学習計画の立て方、受験自治体別アドバイス、エントリーシート作成、模擬授業の立案、SAによる面接・場面指導・模擬授業見本などの他、面接・場面指導・模擬授業の実地指導が繰り返し行われた。参加者は、SAの4回生が7名、教職志望の3回生が6名であった。実施形態は蔓延防止措置の発令されている期間はオンライン、期間外は対面で行い、全て野中が立ち会った。

- ・2月中旬以降、専門試験対策講座を設定した。実施日程は以下の通り。現代文（担当：松山）2/21、3/3、17、31、古文（担当：野中）2/17、24、3/20、24、漢文（担当：矢野）2/14、28、3/7、28 参加者は9名であった。
- ・公立中学校への授業見学会は、蔓延防止措置発令のため中止した。

Check（評価）

- ・昨年に引き続き、コロナ禍であらゆるものが不安定で、十分な対策が打てない状況もあったが、7名の4回生が合格することができた。今までの蓄積が生きたと思われる。
- ・キョーサイ合格どころえプロジェクトにおける4回生の心意気は大変尊く、教員採用試験突破の夢を先輩から後輩へと引き継ぐものとして、プロジェクトがしっかりと機能していることが看取される。さらに終了後アンケートを実施し、次年度に活かしたい。

Act（改善）

1・2回生の学生の情報収集を図り、また、教採に向けてのアナウンスを工夫する必要がある。全国的傾向として、教職への関心が薄れてきており、本学も例外ではないと思われる。今年度は2回生冬学期の国語教育論Bの授業で、3回生で行うべき教採に向けた準備について資料をもとに概説したが、意識付けも含め、さらに方法を工夫していきたい。

（文責：野中拓夫・松山雅子）

（4）「地域・文化発信演習」

Plan（計画）

日本学科においては、カリキュラム・ポリシーに則り、地域活動と連携した授業科目として今年度より当該科目を新規開講した。大学の所在する羽曳野市を授業の対象とし、シラバス策定にあたっては学科会議において各学科教員の協力を仰ぐとともに、ゲスト講義をしてもらうこととした。

Do（実施）

【内容及び形態】

今年度受講者は学科5 Semester生5名であった。授業は計画の通り、前半において学科教員が地域の歴史や文化、観光について各々の専門的知見を紹介し、受講者がそれに沿って地域文化発信のテーマや手法を学んだ。こうした授業前半の成果を踏まえた上で12月5日（日）午後、学外活動を実施し、古市駅近辺の地域文化を象徴する竹内街道、日本武尊白鳥陵、翠鳥園遺跡といった遺跡を巡った後、誉田八幡宮にて宮司へのインタビュー調査と宝物館の見学を実施した。その後授業後半で、学科ブログ記事という形式

で、写真を中心に地域の文化に関する記事を受講者が作成し、それを受講者同士や教徒の間で見せあって記事を洗練させた。

【成績評価】

授業前半の各教員からの課題評価 50%、その他学科ブログ記事やインタビュー調査への貢献等 50%の比率で成績評価を行った。

Check (評価)

学科ブログ記事は今年度末前後に実際にオンライン上に掲載できる見込みである。

Act (改善)

本授業は「計画」でも述べたとおり、日本学科の地域連携活動における目玉事業として位置づけられる。今年度は学科ブログ記事作成という成果を得ることができたが、来年度以降は地域の役所や図書館、諸施設とも連携し、どのような対象にどのような文化を発信していけるか、考え続けていく必要がある。

(文責：森嶋俊行)

以上

人文社会学部 国際キャリア学科

1. はじめに

国際キャリア学科では、教育課程編成・実施の基本的な考え方として、グローバル化した社会、より複雑になりつつある国際問題に対処できる能力・知識・スキルを体系的、実践的に学ぶことを目的として教育課程を編成している。1、2年次では語学力の向上に重点を置き、さらに3年次からは各自の進路・適性に応じて、①英語・英語教育コース、②国際理解・協力コース、③国際ビジネスコースの3領域からそれぞれ指定の科目を選択履修します。3、4年次では「専門演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ(ゼミ)」を受講し、希望者は「卒業研究」に取り組む。

1) 1年次においては、「英文法Ⅰ・Ⅱ」「Extensive Reading 初級Ⅰ・Ⅱ」「ベーシックコミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」「キャリア英語入門Ⅰ・Ⅱ」を必修とする。加えて、マクロ経済学、英語圏文化概説の授業が選択し、世界の文化や経済についての基礎的知識を学んでいる。

2) 2年次においては、中級レベル以上の英語力や国際的な感覚を身に付けるために、「Extensive Reading 中級Ⅰ・Ⅱ」「ベーシックコミュニケーションⅤ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ」を必修として受講する。また、それら学科共通領域に加え、3年次からのコース制のコアであるゼミ(専門演習)での教育に向けて、①英語・英語教育コースでは、「Reading(Culture)」「Reading(Society)」「Reading(Literature)」「英語学概説」「英語学」、②国際理解・協力コースでは、「国際理解教育」「異文化共生論」、③国際ビジネスコースでは、「国際ビジネス論」「国際経済学」「グローバル・ファイナンス」、の3つの領域を土台として科目を選択し、次年度への知識固めに取り組む。

3) 3年次からは、各自の所属する専門演習(ゼミ)を中心に、学生は各自、コース領域や進路・適性に応じて科目を選択し、履修していく。①英語・英語教育コースでは、「Reading(Language)」「Extensive Reading 上級Ⅰ・Ⅱ」「アドバンストコミュニケーションⅠ～Ⅷ」等、②国際理解・協力コースでは、「国際政治学」「国際問題論」「英国史」「社会情報論」等、③国際ビジネスコースでは、「貿易実務Ⅰ・Ⅱ」「金融システム論」「貿易理論」等の授業が選択できる。また、学科共通領域として、「英米文化論」、「異文化理解」、「国際コミュニケーション論」等も履修することができ、ゆるやかなコース制として学生の卒業要件を満たすようにしている。

近年、社会において、英語の能力がより一層問われるようになってきている。本学科としては、学生の英語の能力向上のため、TOEICや英検などの資格取得を学生に促していくとともに、異文化に対応できる柔軟な考えを持った学生を育成したいと考えている。したがって後述するが、このような授業を通じた指導に加えて学生の自主的学習をサポートするe-learningを希望者に無償で提供し、さらに自主勉強会を応援することで学生の学びの質的保証を確保するように取り組んでいる。加えて、観光領域の拡充に取り組むことで、使うための英語を実践的に学ぶ取り組みに参入している。また、地域連携の取り組みについても学生の希望をもとに導入していく方向である。

今後の課題として、コロナ明けに再始動する留学、語学研修、インターンシップ等のプ

プログラムの準備および検討、コース毎の特性を生かしたプログラムの構築が挙げられる。

2. 大学基礎演習について

(1) 大学基礎演習 I

全学共通の初年次教育の一環として、建学の精神を基に、大学における専門能力の滋養と大学生活を有意義に送るために必要な情報や技能を提供する。大学生として求められる基礎的な知識・技能・態度を修得し、大学および学部・学科・専攻コースへの所属意識を持ち、4年間の大学生活を見通して、学科の特色が身に着くような講義を展開する。

大学基礎演習 I を通じて、国際キャリア学科に所属している学生は、自ら学ぶ意義と課題を把握することになる。まず、本学の建学の精神について理解させ、卒業後の進路について話し合い、キャリア形成のための大学生活について教員が学生に説明し、毎回の講義ではビジネスに必要な英語の単語を暗記する演習を行っている。大学基礎演習 I で学ぶビジネス英単語は 300 語あり、これらを 1 年生から暗記することで、TOEIC の点数向上とビジネスやキャリア教育についての基本的な知識を習得させることが目的である。

(2) 大学基礎演習 II

大学基礎演習 I で学んだ学習の意義を踏まえながら、より主体的に大学の学修に取り組むことができるよう、アカデミックスキルを向上させることを目標とした。初年次の学びをより確実にし、2 年次以降の高度な学びへスムーズに移行できるように講義を展開した。大学基礎演習 I でも行われたプレゼンテーションをより発展させ、充実した内容となるよう、プレゼンテーション大会の指導が行われたほか、アカデミックスキルなどの授業については 3 人の本科目担当者が分担して授業を行った。

授業の内容は、図書館の活用方法や文章の読み方、発表の聞き方・質問の仕方、調査・分析結果のまとめ方、プレゼンテーションの構成・引用の規則・参考文献の提示方法などであった。また、大学在学中と卒業後に必要とされるリテラシー能力として、情報収集力や情報分析力、課題発見や問題解決のための考察力、プレゼンテーション準備における協働力や発信力について取り上げ、こうした能力の向上を目指すにはどのような方法があるのかについて理解できるように授業を展開した。

3. 相互授業参観について

整理番号	所属	担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	遠隔あり(O)	合評会(実施時期)
1	国際	奥羽 充規	12月7日	火	5	教科教育法Ⅳ	4-262		授業後
2	国際	神野 雅代	12月14日	火	5	キャリア英語(アドバンス)	4-216		講義終了時
3	国際	中井 誠	12月8日	水	5	ビジネス英語Ⅱ	4-316		講義終了後
4	国際	深見 環	12月2日	木	3	グローバルビジネス研究	4-206		授業終了後
5	国際	宮脇 敏哉	11月16日	火	4	国際理解教育	4-216		授業終了後
6	国際	山崎 英一	12月8日	水	1	Extensive Reading初級Ⅱ	4-259		授業後教室にて
7	国際	李 美子	11月24日	水	2	中国語会話Ⅱ	4-306		授業後
8	国際	柴田 かよ子	11月29日	月	5	キャリア英語入門Ⅱ	4-207		授業後
9	国際	ロバート ケリガン	11月26日	金	1	ベーシックコミュニケーションⅢ	4-306		授業終了後
10	国際	上野 舞斗	12月15日	水	4	教科教育法Ⅱ(英語)	4-263		授業終了後(講師室)

中国語会話Ⅱ 李 美子 11月24日 4-306

参加者：山崎英一

(1) 授業に関して

外国語指導としては共通だが、中国語自体には不案内なため、印象に基づく記載になる。ペアワークでの活動・作業が主で個人活動はほとんどなく、得手・不得手の学生も混在していると思われる中、ほとんどの学生が肅々かつ真摯に作業にとりこんでいた。市販テキスト利用ではなく、学生の事前提出の課題群から共通の会話文を教員が作り、それを扱うのが前半で、後半はその発展と翌週へのつなぎを行っており、内容の連続性の高さがうかがわれた。結果として、(あくまで印象ではあるが)中国語が入学からの1.5年ほどの学習歴でしかない学生が全体としてかなりのレベルにまで来ていると思われた(担当教員の学生への励ましでは「もう少しがんばれば中国語検定3級にチャレンジできる」とのこと)。

(2) 学生の授業態度や施設・設備などに関して

一人、実力はあるが私語の多い学生がおり、その対応に担当教員は苦勞しておられた。授業後の検討会では主に対策について相談し、今後の改善を図った。また、本授業に限らず、語学系授業ではZoom参加者が一人しかいない場合作業が困難である等の問題があることを再認した。

グローバルビジネス研究 深見 11月25日 4-206

参加者：宮脇俊哉、神野雅代

(1) 授業に関して

10分前に教員がスタンバイした。パワーポイントやZoomなどの準備をおこなった。授業2分前より、プリント(5種類)配布をおこなった。パワーポイントをスタート

して、Zoom 学生に声掛けをおこなった。定時に瞑想をおこない授業をスタートした。パワーポイントは、経営組織のページからの説明であった。並行して板書もおこなった。時々学生に発言させるなど、理解度を確認されていた。パワーポイントも静止時間を長くして提示されることにより、学生はゆっくりと落ち着いて理解ができたと思われる。たいへん分かりやすい授業であり、学生の名前を言って、質問を多数おこなっていた。質問内容は、研究開発 R&D や全社戦略などであり、重ねてマイケルポーターやチャンドラー、サプライチェーンの解説をしていた。

授業方法としては、アクティブラーニングであり、活気溢れる授業であった。このアクティブラーニングは、私の授業でも参考にさせていただきます。

(2) 学生の授業態度や施設・設備などに関して

7名ほど遅刻者がいた。(4分遅れ2名、10分遅れ5名)

学生は静粛な環境で熱心に講義に参加していた。

講読 I (日本語学) 高橋 美奈子 12月8日 4-212

参加者：李 美子

(1) 授業に関して

最初に瞑想を行い、学生の発表グループごとに座席を整頓し、発表者二人の座席を教卓の横に置き、オンライン授業参加者が発表者のお顔、声が良く聞こえるようにカメラとマイクを調整しておきました。オンライン授業の配慮が丁寧に行われました。

発表者の発表レジュメ、教師の補足資料を学生に配布し、発表者はレジュメに沿って発表を行いました。発表内容を区切って発表し、学生に質問を投げかけていました。学生の質問に対して、答えがかみ合わない場合、教師があらかじめ準備した補足資料にそって説明したり紹介したりしながら発表を進めていきました。

特に、学生のレジュメもきちんと作られたような感じでした。教師の補足資料は資料の出所も明記され、丁寧で、また教師はパワーポイントの資料を共有しながら、学生に知識の幅を広げてあげて、学生の質問に対する理解を促すように感じました。授業中に学生に提供する知識の内容が豊富であって、授業課題の理解に大いに役に立ったと思われます。最後、発表者の感想を述べることで授業が終わりました。

ICTを駆使して、ズームを用いて授業を進めていました。10人の学生がZOOMで受講していましたが、質問者はいませんでした。また、教師のオンライン上の学生の配慮がついていなかったように見受けられました。

(2) 学生の授業態度や施設・設備などに関して

私の感想では、教師が丁寧且つ豊富な授業資料を提供し、学生が積極的に質問しながら授業に参加し、和やかでありながら学生みんなが参加しているような楽しい授業でした。私自身の今後の授業教授法の向上に、大いに参考にすべき良い授業であったと思われます。

参加者：柴田かよ子、中井 誠

（1）授業に関して

コミュニケーションの能力を育むために文法項目を提示して、履修者が文法規則の知識を身につけることが出来るように、学生達にペアワークをさせることで、プレゼンテーション能力や英語のスピーキング能力を高めるような指導を行っていた。

履修している学生は8名だが、それぞれがペアを組み、4つのペアでタスクの遂行を実施して、配布された絵を見ながら、絵の様子を英語で説明させ、また2つの同じ背景の絵を用いて、その2つの絵で異なる点を英語で指摘させたり、世界の国旗について、一人が情報を提供し、もう一人がその情報を基に、どこの国の国旗なのかを答えるという作業を行っていた。行っていたアクティビティはQAをしながら行う Communication Gap, Guess をする Fantastic Flags, 英語の説明を聞いて絵を描く Picture Reproduction, True & False 等である。

履修している学生は、それぞれ事前に準備してきた資料などを使って、ペアワークを行っており、楽しく授業に取り組んでいることが良く分かった。

（2）学生の授業態度や施設・設備などに関して

学生は真面目に授業に取り組んでおり、課題などもきちんと提出しているようである。また、学生たちはそれぞれ自分のパソコンやタブレットを持ち込み、そこに情報を保存して、プレゼンテーションの際に利用していた。

キャリア英語(アドバンスト)

神野雅代

12月14日

4-216

参加者・深見 環、上野舞斗

（1）授業に関して

実際の TOEIC 形式の演習を、洋画を観ながら解くというもので、英語の多面的な力が養成できるよう授業が構成されていた。映画の物語の中から様々な表現を学ぶことができ、時代的背景、文化的背景なども考察しながら、その時代の生活に溶け込んだ英語表現を学べる授業であると感じた。

教員は、パートが終わるごとに、学生に理解できたかの確認を行っており、丁寧な授業を行っていた。文法や解答の説明についても、リスニングをさせたいところ、詳しく説明したいところなどに応じ、板書をしたり、発声で確認させたりと変化をつけて解説を行っていた。また、教材の難易度が高いように思われる箇所は、担当者が、扱う順番を工夫して提示していることも印象的であった。

（2）学生の授業態度や施設・設備などに関して

1名の遅刻者がいたものの、学生の受講態度は良好であり、教員にあてられてからの即応性も高かったため、授業に集中している様子がうかがわれた。

施設、設備についても、問題はなかった。

非常勤講師の平田和義先生が参加され、講義の後、寸評会が行われた。

平田先生は非常勤なので、感想は提出されていない。

4. 学科独自の取り組みについて

(1) 『てんしば』プロジェクト

「てんしば」プロジェクトとは、天王寺の「てんしば」エリアにあるゲストハウスで国際キャリア学科の学生たちが研修も含むインターンシップ業務に参加するというプロジェクトである。学生は、国際キャリアインターンシップという科目を履修登録すれば、卒業の際の単位としても認められる。

国際キャリア学科の学生たちは、様々な国からの観光客の方々に、いかにおもてなしできるかを考え、日々行動している。毎年、ゲストハウスでの接遇やイベントプロデュースをより良いものに仕上げるためイベントチームごとの中間発表会が行われている。令和元年度までは学生たちがゲストハウスでお茶（茶道）の指導をしたり、習字を教えたりと海外からの旅行者がこれまでに経験したことがないイベントを企画したが、令和3年度は、昨年同様、ゲストハウスでの外国人観光客への接遇ができなかったため、てんしば公園を使った来園客向けサービスやSNSのフォロワー獲得のための新しい企画を実施して、できる範囲での活動を行った。

(2) Jump-Start English (JSE)

Jump-Start English (JSE) は、国際キャリア学科の学生たちが、AOあるいは、推薦入試に比較的早い時期に合格し、本学科に入学するまで時間のある高校生に向けて、土曜日の夕方に実施している入学前英語指導プログラムである。学生が中心となって、高校生に英文法、英文読解、コミュニケーションを基礎から教えるもので、毎年実施されている。授業実施に際する細かな指導技術については担当教員が指導しているが、実施に際して、国際キャリア学科の全教員が交代で毎回本プログラムに監督者として参加し、学生の指導にあっている。本プログラムを通して、入学前に英語力の基礎部分を築き直すことができることはもちろん、新入生同士の関係性、新入生と在學生との関係性を築くこともでき、毎年好評を得ている。令和3年度は、コロナ禍により、対面実施は断念せざるを得なかったが、同時双方向型会議システムを用いて、オンラインで実施した。

(3) TOEIC ゼミ

TOEIC ゼミとは、柴田講師が中心となってボランティアで毎週木曜日のお昼休みに、学習意欲のある数名の学生向けに実施している TOEIC や英検受験のための講座である。この講義を受講した学生の中には、TOEIC で 800 点以上を獲得した学生や英検準 1 級に合格した学生もいて、令和3年度においても、高得点(910点)を獲得した学生が、これから高得点の獲得を目指す学生に個別指導することで、学生同士の協力支援体制が確立されてきている。

(4) カナダ留学 100 万円奨学金プログラム

国際キャリア学科が実施している 100 万円奨学金プログラムとは、国際キャリア学科の学生が毎年ニュージーランドに 6 名～10 名（最大）の学生が留学し、オークランド大学の付属の英会話スクール（ELA）で 3 月から 6 月までの 4 か月間の語学研修に加えて、ニュージーランドにおいて、インターンシップ（1 か月）を経験させるというプログラムである。今年度は渡航先の受け入れ状況を鑑み、大学間提携を行っているカナダのビクトリア大学で実施した。

本プログラムは、参加を希望する学生の中から筆記試験と面接を行って学生を選抜し、選抜された学生達は自己負担 50 万円で本プログラムに参加できる。本プログラムは総額で 150 万円～170 万円程度（為替レートの変動による）の費用がかかるものの、大学がその差額（100 万円～120 万円）を奨学金として負担している。本プログラムを終えて帰国した後、TOEIC の勉強に励み、卒業するまでに 730 点突破を目指すことになっている。

令和 3 年度においては、昨年度（令和 2 年度）に実施できなかった 2 回生と今年度の 1 回生のプログラムを同時に実施する予定をたて、2 月 27 日にカナダに到着し、無事プログラムをスタートした

(5) 英語による観光ガイド研修会

全国通訳案内士を外部講師として 3, 4 回生の学生を対象として藤井寺を英語で観光ガイドしていただき、その活動に生で触れることを昨年に引き続き、体験した。コロナ禍もあり、回数としては 1 回実施。学生には、日本文化に触れること、ガイドすること、英語を使い楽しんでもらい、喜んでもらう活動に直に触れ、様々な学びと気づきを得られる機会を与えた。現状、多くの学生が観光業界に興味関心を持っており、その後、地域共創プログラムの授業を履修するための授業である。

(6) キャリアコミュニケーションセミナー実施

学生の大学生活でのやりがいを高める仕組みとして、より目標を明確にするために早期（1 年生時分）からコミュニケーションセミナーや、就職準備ガイダンスなどを外部講師を招いて実施し、学生の大学生活における動機付けや、目標設定への援助を行った。特にコミュニケーションセミナーでは「コミュニケーション」の取り方についてレクチャーと実践を織り交ぜることで、次年度以降の就職準備ガイダンスへの足場作りとした。

(7) TOEIC e-learning プログラムの導入

1 年生の冬学期、2 回生以上には夏学期より Really English の TOEIC 講座を、条件を満たした学生に無償でアカウントを提供し、自立的に学ぶ学生への動機づけを行なった。こうした取り組みの結果、TOEIC のスコアで 910 点を取得する学生も現れた。

(8) English Hospitality 研修の実施

国内旅程主任者資格を取ることができる研修を近畿ツーリストと提携して実施した。観光地でのツアーコンダクター実務を留学生を対象に実際に英語で体験しながら学ぶプログラムで、現役の添乗員にサポートを受けながら観光業界・観光地・日本文化・観光英語・添乗員業務等について学ぶことができるプログラムである。夏休み期間中の8月に実施して、15名程度の学生が参加した。

(9) 教員採用試験対策勉強会

国際キャリア学科には少数ながら毎年、中高の英語教員を志望する学生がおり、教職科目担当教員（奥羽准教授、上野助教）が指導にあたっている。授業外でも、春休みには、教育実習、教員採用試験を見据えた授業力を身につけるために「模擬授業練習会」と称した実践型の集中勉強会を開催している。また、4月初旬から8月末にかけては教員採用試験を受験する4回生を対象にした学科独自の勉強会を毎週開催している。令和3年度は、対面とオンラインとの併用となった。こうした取り組みも助けて、令和3年度は、5名の教員採用試験受験者のうち、4名が大阪府、大阪市、豊能地区、和歌山県の各自治体の教員採用試験（すべて中学校英語）に現役合格した。

(10) 就職対策セミナー実施

国際キャリア学科では、学科教員が中心となり2020年2月1日から3月29日までの間、毎週火曜日に、学科独自の就活支援イベントセミナーをオンラインで実施した。

大学のキャリアセンターが実施しているガイダンスや学内企業セミナーへの参加を学生に促すとともに、学科の就活生はこのセミナーをZoomで見ることで、春休み中の就職活動を効率的に進めることが出来るように、セミナーの内容を設定した。

学科の教員はこのセミナーについての案内及びゼミ生への呼びかけを行い、セミナーではそれぞれの体験やこの時期における就職活動についてアドバイスをした。

【セミナーの実施状況】2022年2月から3月まで

2月1日（火）11:00～12:00 オリエンテーション、就職活動の始め方

2月8日（火）11:00～12:00 金融リテラシー講座（外部講師）

2月15日（火）11:00～12:00 テーマパーク、ホテルでの仕事（外部講師）

2月22日（火）11:00～12:00 企業研究の方法と業界研究（総合商社と専門商社）

3月1日（火）11:00～12:00 国際キャリア学科の卒業生からのアドバイス①

面接対策で身につけておくべきこと（外部講師）

3月8日（火）11:00～12:00 情報システム産業への就職とキャリア形成

3月15日（火）11:00～12:00 金融機関の仕事と金融機関から内定を獲得する方法

3月22日（火）11:00～12:00 国際キャリア学科の卒業生からのアドバイス②

「私はどのようにしてダイキン工業から内定を獲得したのか」

3月29日（火）11:00～12:00 総括（オンデマンドで実施）

5. その他

国際キャリア学科は、実践的な外国語能力とコミュニケーション能力を習得し、変動する国際問題に関する基盤となる知識を身につけ、さらに、卒業後のキャリア形成に必要な知識とスキルを獲得し、グローバル化社会で活躍できる人材の養成を目的としている。

そのため、学生は、①外国語能力として、「読む・聞く・話す・書く」の各言語能力において実践的な教育を受け、②高い外国語能力に基づき、グローバル化した社会に即応したコミュニケーション能力を習得し、③環境・民族紛争・宗教・経済・金融等の国際的な問題を認識し、国際社会における日本の役割を実践的に把握する能力を身につける。④言語の背景にある歴史・文化・政治・経済等に関心を持ち、異文化理解への関心と意欲を身につける。⑤自ら課題を設定し他者と協同しながら問題解決にあたり、グローバル化社会で有為の人材となるために必要な知識とスキルを獲得することになる。

FSD活動を通じて、グローバル社会で活躍できる人材を育成するため、今後も様々なイベントや企画を学生に提供するとともに、授業の進め方を工夫し、学生が積極的に授業に参加できるような環境を提供できればと考えている。

以上

人文社会学部 社会学科

1. はじめに

令和3年度の授業は、新型コロナウイルス感染症対策に対応した大学の方針に従って大きく様変わりした昨年度の授業形態の延長線上で行われた。とはいえ、初めての遠隔授業の経験であった昨年度とは違い、今年度においては、ウィズコロナ・ポストコロナの時代を見据えた授業のあり方を模索し始めたことが重要である。

夏学期においては遠隔授業（主として ZOOM を使う）、冬学期においてはハイブリッド授業（遠隔授業と対面授業を並行して行う）という形態で、主に授業が行われた。ただし、3年生と4年生の演習（ゼミ）については、対面授業を基本とした。こうしたことから、学生も教員も IBU ネットを使用することになり、ほぼすべての科目において基本的に ICT が活用されることになった。そこで課題となるのは、たんに ICT を活用するというのではなく、さらに ICT をどのように活用するのかということである。これは、必ずしも高度な ICT 技術を駆使するということを意味するわけではない。効果的な授業を行う際に ICT をどのように使っていくのかという問題である。現段階では、それぞれの教員が講義形態や講義内容に即して試行錯誤している状態である。

それを踏まえて、本稿の「2. 大学基礎演習について」および「3. 授業相互参観について」において、個々の教員の取り組みの一端を紹介することによって、ウィズコロナ・ポストコロナの時代を見据えた授業のあり方を検討していくための一助としたい。また、「3. 相互授業参観について」の「(2) 合評会の開催」においては、学科独自の取り組みとして、対面授業を中心とした授業参観の実施と同時に、遠隔授業の参観についても実施したので、合評会における情報機器の使用とそれに伴うさまざまな課題についての意見交換について紹介することにしたい。今年度の新生からノートパソコンの必携が義務づけられたことも踏まえて、ICT 活用のメリットとデメリットを的確に把握し、ICT を活用した授業のあり方について検討することが、いま求められていると考えるからである。

2. 「大学基礎演習」について

「大学基礎演習Ⅰ」の概要は次のとおりである。「この科目は、全学共通の初年次教育として、建学の精神をもとに、大学における学修と生活の意義を自覚し、大学での学修に必要な技能を獲得することを目標としています。初年次における課題を自覚し、求められる基礎的知識・技能・態度を修得し、四天王寺大学社会学科の学生としての所属意識をもち、大学生活全般および卒業後の進路についての見通しを持てるようになりましょう。大学では、高校までとは違ったアクティヴ（能動的）な学びを身につける必要があります。レポートやディスカッションなどの方法で自分の考えを表現できるようになることを目指すとともに、将来の「生き方」を考えるための機会とします」。

また、「大学基礎演習Ⅱ」の概要は次のとおりである。「この科目は、大学における学修と

生活の課題を自覚し、必要な技能を獲得することを目標としています。具体的には、夏学期の演習をふまえて、レポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションのスキルなどをさらに向上させることを狙いとします。大学では、高校までとは異なったアクティブな学び方を身につける必要があります。この科目では、さまざまな社会問題を取りあげ、テーマについてのグループ学習をすすめるなかで、「生きた学び」を体験します。そこから得たものをもとにいろいろな角度からディスカッションし、自分なりに表現できるようになることを目指すとともに、将来の「生き方」を考えるための機会とします。

以上の授業概要から理解できるように、「大学基礎演習Ⅰ」では、大学での学びが高校とは異なる点を学生自身がアクティブに学ぶ必要があることに置き、この視点から社会学科の学生として求められる基礎的知識・技能・態度の修得を目指している。また、これを通して、社会学科の学生としての所属意識を形成し、将来の「生き方」を考えていく契機としている。これに続く「大学基礎演習Ⅱ」では、学生自身のアクティブな学びを具体的な社会問題に即して、レポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションのスキルなどをさらに向上させることを狙いとしている。

これらを踏まえた「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」の到達目標は、①四天王寺大学社会学科に所属して主体的に学ぶ意義と課題を把握する、②大学生としての学びに必要な基礎的知識・技能・態度を身につける、③大学卒業後の進路など、自分の将来を社会との関係で考える、④教員や友人との適切な人間関係をつくる、である。

これらの到達目標を実現するために、「大学基礎演習Ⅰ」は以下のような授業計画にしたがって展開する予定であった。令和3年度夏学期は、A方式とB方式のいずれかを担当教員が選択して実施することになったが、以下にはA方式の授業計画のみを示した（扱われる授業内容はB方式も同様である）。

■A方式の授業計画

- 第1回 履修指導・建学の精神・本学での学び（ICTの使い方）
- 第2回 履修指導・建学の精神・本学での学び（ICTの使い方）
- 第3回 個別面談と自己目標シート記入
- 第4回 個別面談と自己目標シート記入
- 第5回 大学生活（先輩の話）
- 第6回 大学生活（先輩の話）
- 第7回 図書館ツアーとガイダンス動画視聴
- 第8回 図書館ツアーとガイダンス動画視聴
- 第9回 レポートの書き方
- 第10回 レポートの書き方
- 第11回 社会問題を考える
- 第12回 社会問題を考える

- 第 13 回 ディスカッション
- 第 14 回 ディスカッション
- 第 15 回 まとめ

しかし、4月25日から6月20日まで大阪府に緊急事態宣言が発出されたため、多くの授業回を全面遠隔授業の形式で実施することになった。そのため、例えば、当初予定していた図書館ツアーを中止せざるを得ないなど授業計画の修正を余儀なくされた。授業計画をどのように修正するかは各担当者の裁量としたが、実際に行われた授業例を示すと以下の通りである。

■A方式の授業実施例

- 第 1 回 本学での学び (ICT の使い方)
- 第 2 回 履修指導、建学の精神、大学基礎演習 I の進め方
- 第 3 回 個別面談と自己目標シート記入 (1)
- 第 4 回 個別面談と自己目標シート記入 (2)
- 第 5 回 課題 (偏愛マップの作成) の発表と交流 (グループ内・クラス全体)
- 第 6 回 動画の視聴と要約 (ノートテイク)・意見文の作成
- 第 7 回 大学生活 (先輩の話) *オンラインによる学科合同授業
- 第 8 回 レポートの書き方 (1) レポートの書き方を学ぶ (講義)、レポートの下書き (演習)
- 第 9 回 レポートの書き方 (2) レポートの発表と交流 (グループ内・クラス全体)
- 第 10 回 社会問題を考える (1) SDGs に関する動画 (働き方) の視聴と意見文の作成
- 第 11 回 社会問題を考える (2) SDGs に関する動画 (食品ロス) の視聴と意見文の作成
- 第 12 回 最終レポート課題に関する調査、図書館ガイダンス動画の視聴
- 第 13 回 最終レポートの作成 (グループ内での中間発表を含む)
- 第 14 回 最終レポートの発表とディスカッション
- 第 15 回 まとめ

とはいえ、昨年度とは異なり、①令和 3 年度の入学生からノートパソコンが必携になった、②「大学基礎演習 I」の第 1 回 (ICT ツールのオリエンテーション) の後に緊急事態宣言が発出されたため、学生側もノートパソコンや IBU.net、Zoom などの操作方法を一定程度理解した上で遠隔授業に臨むことができたということもあり、当初計画していた内容を概ね取り扱うことができた。令和 3 年度の「大学基礎演習 I」の取り組みとして特筆すべきは以下の 3 点である。

第 1 に、昨年度は実施することのできなかつた「学科合同授業」をオンラインで実施したことである。昨年度は教員側も学生側も Zoom に不慣れだったこともあり、これまで社会学

科の「大学基礎演習Ⅰ」において重要な役割を果たしていた「学科合同授業」を実施することができなかった。しかし、令和3年度はゴールデンウィーク明けの5月13日にオンラインで実施することができた。当日は、社会学科の在学生4名に、学生生活全般、部活・サークル活動、認定心理士・教員免許などの資格取得、就職活動に関する話をしてもらい、1年生からもチャット機能を使って様々な質問が投げかけられ、多くの学生から肯定的な感想が寄せられた。この時期、学生生活へのモチベーションが下降気味の学生も散見されたが、この「学科合同授業」をきっかけに、再び意欲的に学修に取り組むようになった学生も少なくなかったことは特筆に値するだろう。

第2に、遠隔授業によって、従来以上にグループワークやディスカッションなど、能動的な学びの機会を多く設けることができたことである。「大学基礎演習Ⅰ」においては、「高校までとは違ったアクティブ（能動的）な学びを身につける」ことを謳ってはいるものの、社会学科に入学する学生のなかにはこうした学びに対する抵抗感を持つ者も少なくなく、担当者も苦慮していたところであった。しかし、Zoomを使用した遠隔授業の場合、ブレイクアウトルーム機能を使用することで、グループワークやディスカッションに際しての心理的なハードルが下がったこともあってか、あまり抵抗感を感じることなく活動に取り組める学生もみられるようになった。また、このような経験がベースになったのかもしれないが、対面授業再開後に学生同士でスムーズにコミュニケーションをとれるようになったことも特筆すべきであろう。

第3に、これまで以上に個々の学生に対して手厚く指導することができたことである。上述の通り、令和3年度も新学期早々に遠隔授業を余儀なくされたが、多くのクラスにおいてZoom等のツールを用いて個別面談を実施することで、個々の学生の状況把握や不安の解消に努めることができた。また、IBU.net等で課題提出を求める機会が増えたことに伴い、個々の学生に対してレポートの文章表現や構成等についてより丁寧にフィードバックを行うことが可能となった。「大学基礎演習Ⅰ」において手厚く指導やフィードバックを行ったことにより、「他の科目においてもレポート課題にしっかりと取り組めるようになった」「多くの字数を書くことに対して不安が無くなった」といった肯定的な学生の声が授業評価アンケート等で多く寄せられた。

次に「大学基礎演習Ⅱ」に関して、当初の授業計画が実際にどのような授業を行うことになったのかについて述べる。

■ある担当教員の授業計画

第1回：履修指導、夏学期の振り返りと冬学期の学修計画

第2回：社会問題について考えるために（1）（社会問題へのまなざし）

第3回：個別面談と学修ポートフォリオ記入

第4回：個別面談と学修ポートフォリオ記入

- 第5回：社会問題について考えるために（2）（関心のある社会問題について調べる）
- 第6回：社会問題について考えるために（3）（関心のある社会問題についてディスカッション）
- 第7回：社会問題について考える（1）（実態を学ぶ）
- 第8回：社会問題について考える（2）（意見発表とレポート作成）
- 第9回：社会問題について考える（3）（実態を学ぶ）
- 第10回：プレゼンテーションの基本と準備（1）（振り返りとディスカッション）
- 第11回：プレゼンテーションの基本と準備（2）（テーマ設定と個別・グループ作業）
- 第12回：プレゼンテーションの基本と準備（3）（資料整理と情報収集）
- 第13回：プレゼンテーションの実際と演習（1）（プレゼンテーションに向けた役割分担とリハーサル）
- 第14回：プレゼンテーションの実際と演習（2）（プレゼンテーションの実施と相互評価）
- 第15回：まとめ

実際に行った実施内容を以下に示す。なお、この担当教員の場合には、すべての回を遠隔（Zoomによるリアルタイム授業）で実施した。

■ある担当教員の授業実施例

- 第1回：履修指導、夏学期の振り返りと冬学期の学修計画
- 第2回（授戒会后）：学修ポートフォリオ記入
 - 課題：自分が「社会問題」だと考える事柄を書き出してみる
- 第3回：社会問題について考えるために（1）（社会問題へのまなざし）
 - 前回の提出物をもとに解説
 - 課題：あらためて「社会問題」を書き出してみる
- 第4回：社会問題について考えるために（2）（私が考える「社会問題」）
 - 前回の提出物をもとにグループワーク
 - 個別面談の予定連絡
- 第5回：個別面談とオンデマンド課題学習（1）
 - ひとり10分のZoom面談と、全員へのオンデマンド課題の提示（第5～8回）
 - 課題：関心のある社会問題について調べ、調査方法と調査結果を報告する
- 第6回：個別面談とオンデマンド課題学習（2）
 - 授業動画：図書館OPACについて解説
 - 課題：OPACで資料を検索し、図書リストを作成・提出する
 - 学生調査に回答する
- 第7回：個別面談とオンデマンド課題学習（3）
 - 授業動画：図書リストの共有と文献情報についての解説

課題：社会問題についての自分の問題意識を記述し提出する

第8回：個別面談とオンデマンド課題学習（4）

授業動画：前回の提出物の共有と解説

課題：発表に向けて資料・情報をまとめ、提出する

第9回：グループワーク

Zoomのブレイクアウトセッションで各自の問題意識を共有する

第10回：プレゼンテーションの基本と準備（1）（発表原稿を作成する）

発表原稿について解説

課題：発表原稿を作成し、提出する

第11回：プレゼンテーションの基本と準備（2）（発表原稿を共有する）

提出された発表原稿にコメント

課題：発表原稿完成版を作成し提出する

第12回：プレゼンテーションの基本と準備（3）（レジュメを作成する）

レジュメについて解説

課題：発表レジュメを作成し提出する

第13回：プレゼンテーションの実際と演習（1）（身近な人に聞いてもらう）

課題：①発表原稿を声を出して読み、②身近な人に聞いてもらい、報告する

第14回：プレゼンテーションの実際と演習（2）（発表体験とレジュメの共有）

発表体験を共有、提出されたレジュメにコメント

第15回：まとめ

本授業の位置づけを再確認し、3セメに向けた方向づけを行った

3. 相互授業参観について

（1）相互授業参観の実施

令和3年11月19日（金）～12月16日（木）にかけて、社会学科の専任教員が担当科目のいずれかを公開し、各自ひとつ以上の公開科目を参観する、という形式で実施した。今年度は「授業形態が対面の授業で実施する」との大学方針に基づいて公開科目の調整を行ったが、様々な条件によりすべての教員が授業公開を行うことは難しいことが判明した。たしかに対面での授業が再開された時期であり、対面授業の在り方について改めて検討することには意義があることは間違いない。その一方で、COVID-19の影響が長期化する中では今後も引き続きオンライン授業が必要となる可能性が高いこと、そしてCOVID-19後の大学授業の在り方を検討するうえでオンライン授業をさらに充実させその可能性を追求していく必要があると考え、社会学科では学科独自の取り組みとして、オンデマンド授業についても学科内授業公開を行うこととした。公開科目とその担当教員、参観した教員は以下のとおりである。

担当教員と公開授業科目、参観教員一覧（敬称略）

担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	参観者
田中	12月15日	水	3	演習Ⅱ	4B-154	
大関	11月29日	月	5	社会意識論	2-305	中村
須原	11月22日	月	2	日本史概説Ⅰ	4-412	津崎
曾野	11月19日	金	3	教職論	2-209	太田
田原	11月26日	金	1	文化人類学	6-352	
藤谷	11月18日	木	1	フィールドワーク入門	5-302	
上野		月	4	発達心理学(*)	オンデマンド	曾野、田中、藤谷
太田	12月9、10日	木、金	4	文化研究概論	6-354	五十川、上野、大関、 四方、三宅、茂木
平井		金	3、4	社会病理学(*)	オンデマンド	
三宅	12月8日	水	1	カウンセリング理論	6-353	
五十川	12月6日	月	1	まちづくり論	6-352	
四方	11月30日	火	2	史料講読	6-206	平井、田中
津崎	11月26日	金	1	国際経済論	4-316	
中村	12月13日	月	3	社会教科教育法Ⅱ	4-306	

* は学科内公開科目

(2) 合評会の開催

令和4年2月10日(木)の学科会議終了後、Zoom上にて合評会を行い、11名が参加した。すべての参観シートを合評会資料としてGoogle Driveにあげ、参加者が参照できるようにした。また、事前に授業担当者からのリプライが提出されていた授業については、それもあわせてGoogle Driveにあげた。合評会では授業担当者からのリプライを中心に、授業参観から各自が得た気づき等を話し合い、今後のFD、授業相互参観のあり方について議論した。

授業形態や授業内容についての意見交換等が行われ、授業形態についてはたとえば、伝統的な授業形態の中で双方向的な取り組みを行ってきた授業であっても学生からは情報機器を多用していないと指摘がされることがあり適切に活用していきたい、という考えが紹介された。また授業内容に関しては専門的な見地から意見が交わされた。

今回は対面授業を中心とした授業参観の実施だったが、パソコン必携化にともない対面授業でもノートパソコンの持参と活用が求められるようになってきており、合評会でも情

報機器の使用に伴うさまざまな課題について意見を出し合ったので、その一部を以下で紹介したい。

オンラインでのあらたな授業手法としては、zoomの共有画面上に開いたWordウィンドウを黒板代わりに用いて話す内容を“板書”するというやり方が紹介された。社会学科では、聴覚に障害のある学生や、聴覚情報だけでは理解が難しい学生に対する文字情報の補足手段として、話すと同時に紙に手書きしたものを書画カメラで映写するという手法が以前から共有されている（この手法では授業内容をさかのぼって学生に再提示することができるため、一度消すと失われてしまう黒板への板書に比べて効率的に授業を行うことができ、すべての学生にとってよりわかりやすい授業運営が可能となる）。オンライン上で行う今回の手法では、Wordウィンドウに記載された内容はスライドを切り替えた後もしばらくの間画面上に残るため、授業に追いつきやすいと学生からの評判も良いことが報告された。

オンライン授業の受講態度に関連して、1年生の必修科目についてはオンデマンドではなく時間を共有する形で行わないと学修態度が定着しないというこれまでの実感から、対面授業（ハイブリッド授業）を行っても録画はしないようにしているという報告があった。また、Google Classroomでリアクションペーパーを提出させるとコピー&ペーストが増えるという報告もあり、「調べて考える課題で何が求められているのか」について大学基礎演習で学生にしっかりと伝えていくのが重要であることを共有・確認した。

そのほか、IBU.netやZoomの標準機能だけでなく、Google Classroomやスグキクなど別のアプリをあえて使うことで学生の授業への参加意識を高めて集中力を維持させたり、双方向性が確保されて教育効果がみられるという考えや、なるべくIBU.netの基本機能を使用することで学生の混乱を避けるようにしているという考えなどが紹介され、授業のねらいに合わせたそれぞれのスタイルを確認しあった。

まだしばらくはリモートによる授業形態は続くと思われ、今後も引き続きリモート授業に関する研鑽を重ねていく必要があるだろう。

4. そのほか

全国の大学、とりわけ私立大学の志願者が減少しているなかにあつて、志願者を確保するためには、社会学科の魅力を高校生、保護者、高校の関係者に伝えていかななくてはならない。その社会学科の魅力は、とりわけ受験者自身のニーズに対応したものでなければならないであろう。その観点から、従来の社会学科の4コースを、平成31年度（令和元年度）から新たな4コースに再編成した。本年度、この新4コースである「人間・社会コース」「地域・メディアコース」「心理コース」「歴史コース」を踏まえたカリキュラムは、実施して3年目を迎えた。

今年度の新入生アンケートの結果をみると、入学を決めた理由の第1と第2を合計した数字は、「人間・社会コース」18%、「地域・メディアコース」8%、「心理コース」39%、「歴史コース」8%、「4コース学べる」52%、「教員志望」20%、「公務員」12%、「いろいろな

進路」34%であった。コミュニケーション能力が強調される昨今の風潮からして、その能力を補完してくれるように見える「心理コース」の数字が高いのは理解しやすいが、注目すべきは「4 コース学べる」が 52%と最高だった点である。コースにとらわれない自由度の高さが訴求力をもつことは、学科の将来をみすえるうえでも銘記すべきことである。

またここに示されているデータは、社会学科のアドミッション・ポリシーの「(1) 人間や社会、地域やメディア、心理、歴史に関するさまざまなテーマについて深い興味関心があること」にも合致しており、さらに「自分なりの意見や視点を持つことができる」の項目が「非常にあてはまる」と「ややあてはまる」を合わせて 93%、同様に「物事を様々な角度から考えられる」97%、「様々な考え方の人と交流することができる」94%という高い数字についても、アドミッション・ポリシーの「(2) あたり前のものの見方を疑い、さまざまな角度からものごとをとらえようとする」につながるものだと言えよう。つけ加えるならば、「いろいろな進路」34%、「教員志望」20%、「公務員」12%という結果も、固定的な進路に限定されないカリキュラムをもつ社会学科独自の魅力に対するニーズをあらわしていると解釈できよう。

令和 4 年度には、現行カリキュラムが完成年度を迎えるが、それとともに令和 5 年度から予定されている新カリキュラムの作成にとりかかることになる。引き続き、各種のアンケート結果を分析するとともに、入試・広報活動とも連動させて、受験生に対しても社会学科の魅力をアピールできるカリキュラムの作成に取り組んでいきたい。

人文社会学部 人間福祉学科 健康福祉専攻

1. はじめに

本報告書は、令和3年度に行った人間福祉学科健康福祉専攻のFD活動をまとめたものである。

本専攻のFD活動は、ディプロマポリシーとカリキュラムポリシーに則って、以下の2点（Ⅰ、Ⅱ）を目的としてA～Iの活動に取り組んでいる。

- I 講義・演習との緊密な協働を通して実習教育を充実させる。
 - A. 大学基礎演習
 - B. 授業相互参観
 - C. 社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会
 - D. 社会福祉相談援助実習・実習報告会
 - E. 社会福祉士実習懇談会
 - F. 精神保健福祉士実習懇談会
- II 受験対策講座を充実させることを通して国家試験（社会福祉士・精神保健福祉士）の合格率を向上させる。
 - G. 社会福祉士国家試験対策講座
 - H. 精神保健福祉士国家試験対策講座
 - I. 公務員社会福祉職受験対策講座

以上のA～Iについて、FD活動としての概略を説明する。

A. 大学基礎演習

従来この科目の目的は、1年生にこれからの学習、進路、関係づくりの基礎を提供しながら、「学びのスキル」を習得することである。教員の提示する課題設定に対し、学生が主体的に取り組み発表するものであり、「学生が主体的に学ぶ」ことを目指している。今年度は新型コロナの影響で一部オンライン授業になった。①学生が大学生活に円滑に適応できるようにサポートする、②課題レポートや登校日を利用して学生の状況を把握する、③レポートの書き方の指導に重きを置いた。また、これまで3人の教員で授業を担当していたが、7人で担当することとした。

B. 相互授業参観

近年は「社会福祉士」「精神保健福祉士」養成の指定科目を中心に参観科目として公開しており、また、参観者があった科目については事後に合評会を実施し、授業担当者に「合評会の報告書」の提出を求めるといった形式をとっていた。令和3年度においては主として「キャリアゼミ実践演習」の参観を中心に参観することとし、授業終了後に合評会を実施した。

C. 社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会

講義科目と並んで実習を支える基礎となる演習科目に関して、原則年度末に年1回、新旧の科目担当者が一堂に会して、授業方法の実際を相互に開示し、課題等について議論している。この打ち合わせは、第1に教員のファカルティの中核である教授力（とりわけ演習及び実習指導）を高める場、第2に実習生としての態度形成にかかわる個別指導上の課題を共有する機会、第3に社会福祉士養成カリキュラムの課題や改善点を見出す場として機能している。

D. 社会福祉相談援助実習・実習報告会

A～Cの活動の集大成として学生主体による実習報告会がある。新型コロナ以前は、大教室での全体発表会と、2教室に分かれて分科会を行っていたが、昨年度からオンライン開催となっていて、令和3年度も全面オンラインでの実施となった。今回はブレイクアウトルームの機能を活用することができ、更に進化したプログラムで開催することができた。実習報告会は学生主体での開催であり、準備から当日の進行においてもすべて学生が行うものであり、文字通り主体的な学びになっている。

E. 社会福祉士実習懇談会、F. 精神保健福祉士実習懇談会

実習指導者と教員とで、実習指導のあり方を振り返る実習懇談会は、例年2月に行われ、実習教育に関する特定のテーマについて議論する重要な機会である。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を理由に開催を見合わせた。しかし、実習時期の変更や実習生の体調不良時の対応など、実習指導者と緊密に連絡を取り合うことが求められた。また、「新型コロナウイルス感染症に対応した学外実習ガイドライン」を作成し、実習機会の確保に向けて実習指導者の理解を求めた。

G. 社会福祉士国家試験対策講座

講義を担当するのは東京アカデミーの講師であり、本専攻の教員は「国家試験受験支援委員会」のメンバーとして、授業の円滑な運営にかかわる業務を担当する役割を担った。2・3年生は、夏期と春期の休暇中に集中講義を実施しているが、今年度はすべてオンライン授業になった。4年生の夏学期はオンライン授業、冬学期は対面授業とオンライン授業が併用された。合格率は57.7%（15/26）であり、昨年度の61.8%（21/34）に比べると少し低い数字となった。一方、既卒者全体の合格率が10.0%（6/60）であり、昨年度より上がったものの、卒業生の合格率向上は毎年度大きな課題である。

H. 精神保健福祉士国家試験対策講座

昨年度までと同じく、本専攻の石田が引き続いて講座を担当している。合格率は100%（3名中3名合格）であった。なお既卒者の受験生はみられなかった。

I. 公務員社会福祉職受験対策講座

公務員社会福祉職に求められる資格（必須ではないが）として、社会福祉士や精神保健福祉士が位置付けられる。公務員社会福祉職受験対策として集中講義で開講しており、本講座修了者から、今年度は2名の公務員合格者を輩出することができた。公務員試験を視野に入れた就職活動をする学生増加に貢献し、進路選択を広げる重要な講座である。

2. 大学基礎演習について

(1) 大学基礎演習 I

	日程	方式	内容
1	4月6日(火)	全員対面	教員自己紹介 今後のスケジュール説明 履修相談
2	4月8日(木)	偶 B	コミュニケーションのスキル①(他者紹介)
3	4月15日(木)	奇 B	コミュニケーションのスキル①(他者紹介)
4	4月22日(木)	全員遠隔	コミュニケーションスキル①をもとに学生自己紹介
5	4月29日(木)	全員遠隔	学びのプランを組み立てる①「和の精神」ポートフォリオ入力、ディプロマポリシーと学科の目標の概要説明
6	5月6日(木)	全員遠隔	学びのスキルを高める①(ノートテキングスキル)
7	5月13日(木)	全員遠隔	学びのプランを組み立てる②卒業生講師 苅谷友樹氏(学科の目標の入力)
8	5月20日(木)	全員遠隔	コミュニケーションのスキル④ 答えのないグループワーク
9	5月27日(木)	全員遠隔	コミュニケーションのスキル⑤ 答えのあるグループワーク
10	6月3日(木)	全員遠隔	学びのプランを組み立てる③ 個人ワーク・ブレイクアウトルーム・発表
11	6月10日(木)	全員遠隔	学びのプランを組み立てる④ 個人ワーク・ブレイクアウトルーム・発表
12	6月17日(木)	遠隔全員	キャリアをデザインする
13	6月24日(木)	奇 A	学びのスキルを高める② (レポート・ライティング・スキル)
14	7月1日(木)	偶 B	各クラス個別面談: PROGの結果、和の精神・エピソード、レポート、クラブ、学生生活・学習面・奨学金などについて
15	7月8日(木)	奇 B	各クラス個別面談: PROGの結果、和の精神・エピソード、レポート、クラブ、学生生活・学習面・奨学金などについて

新型コロナの影響で全面オンライン授業になったので、目標を A. 学生が大学生活に円滑に適應できるようにサポートする、B. 課題レポート (④・⑤) や登校日 (希望者) を利用して学生の状況を把握する、C. 全面オンラインで重要度を増したレポートの書き方の指導に力を入れる (とくに課題レポートにはすべてクラス担当教員がコメントを付けるようにする)。目標は、概ね達成できた。

授業の最後にアンケートを実施し、以下のような意見・感想があった。

- ・グループワークが多く同じ学科の人と喋る機会ができてよかった。
- ・大学生活でわからないことがたくさんあったが、この授業で不安が少し軽減されたのでありがたかった。
- ・たくさんの先生の話が聞いて楽しかった。
- ・グループワークは楽しかったが、対面でやりたかった。
- ・最初の大学基礎演習の授業にあった 1 人ひとりが自己紹介するという内容はとても緊張した。しかしだんだんと大学基礎演習の授業で経験を積むうちに他の人との会話や話し合いなどもとてもスムーズに行うことができ、良い経験になった。
- ・コロナ禍で様々な不安があった中で、大学基礎演習の授業はその不安を和らげてくれた。慣れない遠隔授業の助けになった。
- ・オンライン授業が多かったので、グループで話す機会はあったが、あまり会話がなかった。
- ・今は週に何回かは大学の人と会っているが、何週間か前までは全く会っていなかったので週に一回あるグループワークはとてもありがたかった。本当に良い人が多く、みんなが気持ちよく取り組めるようにしてくれている人も多かったが、その中でもスマートフォンをず

っといじっていたり、カメラと音声をオフのままにして友達と騒いでいたりしている人もいてモヤモヤすることもあった。毎回違う講義や課題があつて飽きることなく、楽しかった。

・グループワークなどで人と協力する大切さが分かった気がする。この調子でコミュニケーション能力を高めたい。

・オンライン授業が多かったので、全員で対面授業を受けたい。

・大学基礎演習では、グループワークや先生の話を書くことが多く、自分の意見だけでなく他人の意見を聞くことの大切さを理解することができた。

・初めての大学生活で不安なことが多かったが、履修登録の指導やレポートの書き方など大学基礎演習で教わり、不安が少し解消された。

・オンラインでのグループワークは難しい。

・Zoom 等で先生同士の仲が良いとよく思っていた。ラフな感じの空気感だからこそ、Zoom でもそんなにつまらなくなかった。

・全部の説明を詳しくしてくれていたの、わかりやすかった。

・リモートでのブレイクアウトルームについて、対面で話すよりも話しづらいと感じた。

・対面ではない分、心が遠いと思った。

・レポートの書き方を解説した講義は非常に参考になり、他の講義でレポート課題に取り組むときも参考にしている。

・毎回グループワーク緊張していたが、慣れるにつれて自分の新たな一面に気づくことができた。

・大学基礎演習は、入学して不安な時、何をしたいかわからないときに、とりあえずの目標を与えてくれるので、とても助かった。

・オンライン授業も、グループワークが主で、顔や声を知ることが出来たので、少なくとも相手との関係が0の状態ではないので良かった。

・大学生活がどのようなもので、どうすればいいのかとか基礎的なことが知ることが出来て良かった。

・大学生活の過ごし方や目標を達成するためには、インターンシップなどに参加して、自分から行動することが大切だと分かった。

・グループワークを通して、コミュニケーション能力を高めることや自分ではわからなかったことが分かった。

・友達がいないうちでのグループワークは、いろいろな人と関わることができて楽しかった。

・授業のノートの取り方を勉強したり、グループワークをしたことで、入学当初よりも周りの人とコミュニケーションを取ることができた。

・人との関わりなどが学べた。

・答えのない問題では、その人の性格や考え方が出ていておもしろかった。

・オンライン授業で、グループワークが多く、初めは嫌だったけど、やっていくうちに楽しくなった。

・自分では学習しないことを授業では教えてもらえるのでとてもよかったと思った。

・大学生としてどのように学生生活を送っていけばいいか分かった。

- ・他の授業では学べないことを学べたので、レポートの際にとっても役立った。
- ・分からないことだらけだった大学生活ですが、この授業のおかげで色々分かってとてもありがたかった。
- ・授業ではよくオンラインでいろんな人と話すことができ、コミュニケーション能力の向上にはとても役に立った。
- ・グループミーティングを頻繁にできたことで、何度も行ったことによって、複数人で話をするときに発言しやすくなった。
- ・新型コロナ渦の中でほとんどほかの学生と関わる機会がなかったので、グループワークによって、関わることができ今後の大学生活がより楽しみになった。
- ・キャリアについての話を聞いて良かった。少し心に余裕が生まれた。私はまだ将来のビジョンがはっきりしておらず、いつも不安な感情を抱えていた。しかし、キャリアの話聞いたことで、まだ焦る必要はないと感じた。今後自分のキャリアのために何をしていけば良いのか、考えられた。
- ・ノートテキングやレポートについても大学で初めて知った。授業で丁寧に教えてもらい、とても勉強になった。面談で先生と話できたのも、問題や不安が解決できたので、とても有難かった。
- ・グループワークの回数が比較的多く、他者の意見や新たな価値観などに触れることも多くなるので、他者と話し合うことにより、自分の特徴も知ることができた。
- ・グループワーク等などで友達が増えたので、対面でなくても大学生活出来たと感じた。
- ・色々な先生の話がきけて良かった。早く大学が対面になってほしい。
- ・勉強だらけじゃない所が好きで、授業がきらいにならないからいいと思う。
- ・色々な人と意見交換をすることの大切さがわかった。グループディスカッションを大切にしていきたい。

(2) 大学基礎演習Ⅱ

回	月日	授業方式等	内 容 等
1	9月30日 (木)	全員オンライン	シラバスと授業計画等、アンケートの結果、学科目標の省察作成、和の精神のエピソード等記入、ディプロマポリシーの自己評価と各授業への取り組みの省察
2	10月5日(火)	全員対面	見学実習予定先の調査1
3	10月7日(木)	偶数対面	見学実習予定先の調査2
4	10月14日 (木)	奇数対面	見学実習予定先の調査3
5	10月21日 (木)	偶数対面	見学実習予定先の調査4 各施設説明・希望調査
6	10月28日 (木)	奇数対面	実習の心得(坂本先生)・実習ノートの書き方(平川先生)
7	11月11日 (木)	全員対面	見学実習先最終確認と実習ノート作成 実習先の発表
8	11月18日 (木)	全員対面	特別講師 須藤未来先生
9	11月25日 (木)	学 外	見学実習① 12月2日見学実習の学生は休講

9	12月2日(木)	学外	見学実習② 11月25日見学実習の学生は休講
10	12月9日(木)	全員対面	実習ノート作成・提出
11	12月16日(木)	全員対面	実習ノート返却、プレゼンテーション資料作成(中間発表)
12	12月23日(木)	全員対面	プレゼンテーション資料作成(中間発表)
13	1月6日(木)	全員対面	プレゼンテーション
14	1月13日(木)	全員対面	学びのプランを組み立てる⑤(学科目標の省察、3セメ学科目標作成等)実習ノート提出
15	1月20日(木)	オンデマンド	来年度以降の実習に関する授業について

最大の目標を、新型コロナ禍において最大限内容のある見学実習を安全裡に実施することにした。これまでより、事前学習の時間を多くとり、学生が参加しない他の分野についての学習も行った。

安全な実習に関しては、すべての実習参加学生と引率教員に「実習生健康管理表」(学科独自作成)を配布して、実習前2週間と実習後1週間、検温してそれに記入してもらうことにした。また、今回の見学実習には、大阪中央児童相談センターが加わった。なお、1名は再見学実習、4名は実習に参加しなかった。

見学実習一覧表

種別	実習先名	実習学生数	引率
高齢	四天王寺悲田院特別養護老人ホーム	7名	坂本
	四天王寺悲田院養護老人ホーム	6名	鳥海
	四天王寺悲田院在宅(デイセンター)	7名	坂本
障害	四天王寺悲田富田林苑	6名	笠原
	(株) PROmessa ぼんぽこはうす	10名	平川
	NPO 法人 こくり	1名	川下
児童	児童養護施設 羽曳野荘	10名	上續
	児童養護施設 清心寮	8名	石田
	大阪市こども相談センター	19名	川下
計		74名	—

授業の最後にアンケートを実施した。以下のような意見・感想があった。

□見学実習について

- ・見学実習で将来の夢について考えることが出来た。
- ・見学実習では実際に行動することが難しいと思った。
- ・実習体験はとてもよい体験になり勉強になった。
- ・見学実習が一番役に立った。
- ・実際に行ってみて、不登校の児童の印象が変わったのでいい勉強になった。
- ・見学実習では初めての経験ができ、施設ではそのような仕事をしているのだと知ることができ、自分の就きたい職を考えていこうと思えた。
- ・見学実習では沢山の興味・関心が湧き、更に福祉職に就きたいと思った。

・見学実習で、より働く事へのイメージが湧き、モチベーションがあがった。

□実習指導・学習について

・実習に関する指導がとてもわかりやすく役に立った。

・見学実習ノートの書き方を学んで、レポート作成にも役立った。

・卒業生が見学実習について教えてくれたり、過去に作ったプレゼン資料を見せてくれたりしたので、安心した。

・事前学習はできたと思っていたが不足していた。

・見学実習前の事前学習の大切さを学んだ。

・事前学習によって、自分が経験したことがない、知らなかった施設の概要やサービスを知ることができ、いろいろなことに興味をもつことができた。

・実習について事前事後を含む一連の流れが分かった。

・事後学修をもう少ししっかりやっても良かったと思う。

□プレゼンテーションについて

・プレゼンテーション資料の作るには人数が多すぎた。

・プレゼンテーション資料もわかりやすく作成するのは難しかった。

・プレゼンテーション資料はみんなと協力して作成できた。

・プレゼンテーションの準備の場面で、話したことのない人と連携をとるのはとても難しいと感じた。

・プレゼンテーションの結果を見て、しっかりと改善しようと思った。

・プレゼンテーションの資料作りの時間が少ないように感じた。

・発表することはとても緊張したが、いい経験になった。

・プレゼンテーションでは学ぶべき事が多く、今後やる時の参考にとってもなった。

□実習ノートについて

・実習ノートはもう少し丁寧に書こうと思った。

・実習ノートを書くことで沢山の事を学んでいると感じることが出来た。

・ノートの書き方も事前学習で参考になった。

□グループ学習について

・グループワークではグループ全体の役割を決めたり、意見をまとめることの難しさを学んだ。

□友達づくり等

・見学実習やプレゼン資料作りによって友達が出来た。

・この時間で同じ学科の人と話す機会ができて良かった。

・見学実習やプレゼンテーションを通して、仲間と何かをやり遂げるという体験をすることができて良かった。

□授業方法について

・余裕をもって授業を進めてほしい。

・授業内で実習ノートを書く時間があったが、その時間を全員でパワーポイントを作る時間として使いたいと思った。

・新型コロナに感染しないか不安だった。

- ・大人数で換気ができているのか、他の人との距離が近く心配だった。
- ・グループで話す機会がもっと欲しい。

3. 相互授業参観について

(1) 実施計画

本専攻の相互授業参観は、「社会福祉士」「精神保健福祉士」国家試験受験資格取得のための指定科目および「教科に関する科目」を中心に、所属教員全員が公開授業を計画し、その後予定された日程等をふまえて授業相互参観を実施した。

以前は12月に実施する「実習報告会」（科目名は「社会福祉相談援助演習Ⅴ」「社会福祉相談援助実習指導Ⅲ」）を公開授業としていたため、多数の教員の参観が集中した。それを避けるために、現在は「実習報告会」を公開授業科目とはせず、基本的には教員からの公開授業科目と公開日時の申告により、学科内教員全員が相互授業参観を実施できるように計画した。その詳細は以下の通りである。

(2) 相互授業参観の実施

相互授業参観・合評会の実施と参観者は下記の表の通りである。なお、参観を予定していたが実現しなかった参観者を括弧で示した。

担当教員	日 時	時限	公開授業科目名	教 室	合評会	参観者
石田 (晋)	12月2日	木1	精神保健福祉援助技術総論	6-303	授業終了後	なし
上續	12月6日	月4	ソーシャルワーク演習Ⅰ	6-302	授業終了後	なし
笠原 (幸)	11月30日	火4	キャリアゼミ実践演習	2-205	授業終了後	石田、上續、 川下、坂本、 鳥海、原
川下	11月24日	水4	精神保健福祉論Ⅲ	7-116	授業終了後	坂本
坂本 (光)	11月22日	月4	ソーシャルワーク演習Ⅰ	6-213	授業終了後	なし

鳥海	11月25日	木1	ソーシャルワークの基盤と 専門職Ⅱ	6-353	授業終了後	平川
原(順)	11月29日	月5	社会福祉相談援助演習Ⅲ	6-304	授業終了後	なし
平川	12月15日	水1	社会福祉相談援助実習指導 B	6-304	授業終了後	なし

(3) 合評会の内容

授業参観者がいた科目については予定通りに合評会が実施され、授業実施教員から合評会の内容について報告があった。合評会の内容は主に【①授業に関して】、【②学生の授業態度や施設・設備などに関して】であり、授業参観者からの意見も含め、その内容を以下に示す。なお授業実施者の報告に基づいて転記したため、書式は不統一である。

科目名：キャリアゼミ実践演習

【①授業について】

- ・授業内容は「学生時代に力をいれたこと」(学チカ)と「自己PR」についてであった。前回行った「志望動機」の内容との違いを比較しながら伝えるなど、授業の流れを意識した講義になっていた。声の大きさや授業の進行も適切であったと思う。授業で取り上げた項目の説明は、段階的、具体的で非常にわかりやすかった。特にアルバイトなどの身近な例は、学生に実感として伝わっていたのではないと思う。授業で使用したパワーポイントはよく整理されていてわかりやすいが、少し文字が多いのではないかと感じた。必要最小限の事項のみを取りあげているのは理解できるが、口頭のみでの説明や板書と組み合わせる方法もあるのではないかと考えた。今回の授業のスキルを身に付ければ、採用試験に非常に高い得点が取れるものと思ったが、その前提となる学生生活の充実、高いコミュニケーション能力、積極的姿勢や文章能力がスキルを支えるものとして必要であることがよく理解できた。
- ・パワーポイントや配付資料を用いて、エントリーシート・履歴書の作成に関する対策について、当日の授業進め方から始まり、自己PRや学生時代に力をいれたことなどに関する書類作成のポイントについての説明が具体的な例などを交えて行われていた。その後、それぞれが「自己PR作成シート」と「学生時代に力をいれたこと作成シート」の各質問項目に記入しながら、自分の考えを整理させて書かせるよう、プリントにも工夫がなされていた。グループワークで、記入内容を学生相互で共有させていたのも学生にとって学修内容の定着や今後の就職関連書類作成の上でも有益だと思った。今後に向けた学生同士の刺激にもなると思った。授業全体としては、わかりやすく、よくまとめられた内容だと思った。
- ・PPTスライドを使用した授業であったが、事前に同じものが資料配付されており、授業進行の全体像が把握しやすいように工夫されていた。
- ・授業は、自己PR、ガクチカ作成に関する具体的なアドバイスが中心で、授業後半にはワ

ークも実施され、まさに実践演習であると感じた。

- ・授業後の質問や乾燥の提出に **Google Foam** を活用されており、アクセス用のQRコードをスライドで提示されていた。この方法は私自身も活用させていただこうと思った。
- ・PR の概念説明が分かりやすかった。そこから、学生がよく書く具体性のない記述の例が良かった。何が不足しているのか、学生も理解し易かったのではと思う。
自己PR とガクチカについて求められること、内容の違いなどを説明していて良かった。
- ・自己PR と学生時代に力をいれたこと（ガクチカ）の作成のポイントを理解した上で、実際に作成する授業でした。パワーポイント資料の「期待されているエピソード」「能力や強みを示す用語例」は複数の事例が紹介され、学生にとって活用価値が高いと思われます。2種類のワークシートの展開に沿って記述すると、自己PR やガクチカが出来上がるというものであり、学生が定型文を習得するための学習効果が高いと思われます。
約半数の学生は相談援助実習の履修者であり、専門職や公務員希望者は実習をエピソードに取り上げることが見込まれますが、その点についても触れられるとよりよいと思います。なお、学生に対して過度に敬語が利用されていることが気になりました。残念ながら、笠原先生が登壇する場面はなく、授業準備・授業運営の役割分担・教授方法の改善などのように関与されているのが不明でした。FD の観点からは、調整を担われる科目ではなく、実際にご担当されている科目が授業参観科目に相応しいと思います。
- ・パワーポイントを効果的に活用されていて、学生にとって授業の進み具合が良くわかるので良いと思いました。CHECK POINT の文字をイラスト化したものを使用されていたり、スライドの色遣いがとても素敵でした。パワーポイントの作り方を参考にさせていただきます。
- ・お話しする時の声がとても耳障りが良く、聞きやすい音量ではっきりお話しされていました。ただ一方的にお話しされることが多かったので、学生が途中で眠くなっているようでした。居眠り対策として、双方向授業にして学生に問いかけ、学生が発言する機会があれば良いのではないかと思います。

【②学生の授業態度や施設・設備などに関して】

- ・講義中は、静かに聴いていた。遅刻して入室して来る学生、シート作成の時間になると話し始める学生もいたが、全体的に熱心に受講していたと思う。
- ・授業内容に関してもかもしれないが、一部の学生に、私語があったのが少し気になった。
- ・学生ははじめ私語が目立ったが、授業が始まるにつれ静かになり、メモを取っている学生も多かった。居眠りしているもほとんどいないように見え、受講意欲の高さがうかがえた。
- ・設備面では、教卓のアクリルボードの曲がり気になった。
- ・静かに真面目に受けていたと思う。記入時は周りとは相談して取り組んでいた。
- ・居眠り、スマホを触るなどの学生が散見されるものの、ほとんどの学生は私語もなく聴講していました。前半の説明を聴講せずに、配付されたワークシートを記入している学生も多くみられましたが、それはテーマに対する関心の高さであると考えられます。
- ・授業開始時は学生の私語がありましたが、その後は熱心に受講していました。途中から、居眠りをしている学生が散見されました。

科目名：ソーシャルワークの基盤と専門職Ⅱ

【①授業に関して】

- ・行政で働く専門職として社会福祉事務所の職員（現業員）について紹介する授業だった。
 - ①まずパワーポイントで概要を示し、それをノートに取らせたうえで、解説を加えるというやり方で、社会福祉事務所の職員（現業員）について説明がなされた。
 - ②次にDVD(10分程度)の視聴があった。学生はDVDを視聴しながら、ワークシートにポイントを書き込む作業を行った。DVD視聴の後、学生は「なるほど」と思ったことと、「疑問・質問」を求められた。最後に、ワークシートの補足が行われて、授業は終わった。
- ・全体として、よく工夫されていた。学生にとっては密度の濃い授業になっていると思われる。
- ・感心したのは、パワーポイントで示した概要をノートに取らせるというやり方である。ノートを取ったうえで、解説を聞くことによって理解が深まると思われた。
- ・DVD視聴もワークシートへの記入をしながらであるので、理解が深まると思われた。

【②学生の授業態度や施設・設備などに関して】

- ・ほぼ90分間、まったく私語もなくみんな授業に集中していた。ノートもきちんと取り、ワークシートにも書き込でいた。ICTの活用も適切であった。ただ自分のことは棚に上げて欲を言わせてもらえば、緊張と弛緩のメリハリがあれば、もっと学生の集中度は増すのではないかと思われた。

科目名：精神保健福祉論Ⅲ

【①授業に関して】

- ・精神保健福祉士を取得して活躍している卒業生との交流学习であったため、授業は和やかな雰囲気であった。学生も積極的に質問していた。
- ・卒業生を迎えての講義は、学生が主体的に参加できるので、私自身の授業の参考になった。教室の大きさは広めであったが、コロナ感染症対策にとっては適切であった。

【②学生の授業態度や施設・設備などに関して】

- ・静かに真面目に受けていたと思う。記入時は周りとは相談して取り組んでいた。

(4) 相互授業参観実施の今後に向けて

参観者がいた科目の各合評会に加えて、合同合評会を学科会議で実施していたことも以前はあったが、今年度は実施できなかった。最近の相互授業参観は公開した授業のうち、参観者が集中する科目もあれば参観者がいなかった科目もあることが多い。来年度の公開授業の参観者の調整をおこなう必要性を感じるが、実際はその調整は困難であり、今後の課題である。

4. 学科独自の取り組みについて

(1) ソーシャルワーク演習・社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会

毎年3月下旬～翌年度4月初旬に「ソーシャルワーク演習・社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会」を開催し、「ソーシャルワーク演習・社会福祉相談援助演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」

の担当者9名（非常勤講師2名を含む）の参加のもと、各担当者による今年度の授業の振り返りと次年度の演習指導にかかわる改善点及び留意点の確認が行われている。今年度は、2022年4月4日に担当教員による打ち合わせを実施した。
議事録は次のとおりである。

2022年4月6日

ソーシャルワーク演習・社会福祉相談援助演習 担当者打ち合わせ 議事録

日 時：2022年4月4日（月）13時00分～15時00分

会 場：四天王寺大学 事務局棟1階 第1会議室

出席者：重野，脇田，上續，大西，坂本，濱田，原，吉田，鳥海（敬称略）

1. ソーシャルワーク演習の全体像

- ・ソーシャルワーク演習教育ガイドライン（資料添付）
- ・新カリキュラム：厚生労働省シラバスと本学対応科目（資料添付）
- ・新カリキュラム シラバス（資料添付）

2. 本専攻のカリキュラム変更

- ・履修条件の設定（2019年度より）

<変更前>【演習Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ】希望者履修可→<変更後>実習と同様の履修条件設定

- ・演習全科目の選択化（2021年度より）

<変更前>【演習Ⅰ】卒業必修科目 →<変更後>選択科目

3. 2021年度をふりかえって（受講状況，遠隔受講願提出者への対応など）

【演習Ⅰ】

・遠隔受講願者（授業配慮申請者を含む）3名に対してZoomを利用したグループディスカッションを促したが、終始無言だったとのことであり、クラス内での発表に至らなかった。顔出しを促したら「ネットが落ちる」という理由もみられた。受講アンケートにおいて対面受講者から、遠隔受講者より発言がないことに対する言及がみられた。

・遠隔受講願者が2名みられた。そのうちの1名は9回出席だった。過年度生はオンラインで課題を指示したがほとんど未提出だった。ノートPCでZoomに参加してもらい、対面授業に出席している学生と話し合いができるように工夫した。

・遠隔受講願者が3名みられたが、1名は学期途中で退学、1名は途中から対面授業を希望した。最終的に1名のみで遠隔授業を実施したが、ワークシートを別途準備して授業中に取り組んでもらうことになった。

・「仕事により遠隔で受講したい」という申し入れが頻回にあったが、感染防止とは趣旨が異なるので認めずに出席を促した。

【演習Ⅱ】

・終盤3回を欠席して最終回の期末課題が未提出で単位未取得となった学生より、9月になっ

て欠席にかかわる配慮の申し入れがあった。教務課で成績変更申請の手続きをとり単位を認めることとなった。

【演習Ⅲ】

・コロナ禍により1月に予定したレクリエーションの実践ができなかった。

【演習Ⅳ】

・遠隔授業では理解度が異なる学生へのフォローが難しかった。

・レポートの提出期日に間に合わなかった学生が1名みられたが、期日後の提出をもって60点で単位を認定した。

【体験実習】

・体験実習（履修登録63名）の課題として、直前辞退2名、中止3名、中断→種別変更1名、誓約書違反による単位未取得2名がみられた。

・入学時当初から遠隔授業が続いた4セメ生の体験実習（11月）では、辞退、中断、中止が相次ぎ、実習施設に多大なご迷惑をおかけすることになったため、再発防止に向けて検討する必要がある。

・遠隔授業ではGPAが高くなってしまいうので、個々の学生の成績水準を把握することが難しい。例年であれば【実習指導A】で10名程度が出席回数不足等を理由にして単位未取得になるが、遠隔授業では単位未取得にならない。

4. 2022年度担当教員一覧（敬称略）

ソーシャルワーク演習Ⅰ	冬	月曜4限	上續, 坂本, 鳥海, 原
ソーシャルワーク演習Ⅱ	夏	月曜5限	坂本, 重野, 鳥海, 濱田, 原
ソーシャルワーク演習Ⅲ	冬	月曜5限	坂本, 重野, 鳥海, 濱田, 原
相談援助演習Ⅳ	夏	月曜4限	大西, 鳥海, 吉田, 脇田
相談援助演習Ⅴ	冬	水曜2限	大西, 川下, 坂本, 鳥海, 吉田

5. 2022年度に向けて

出欠席の取り扱い

【全学共通】（教務課文書抜粋）

・学生には、発熱（37.5℃以上をめやす）等の風邪症状がある場合は、対面授業の出席を控えるよう指示しています。この場合、先生方のご判断でZoomでの出席を認めて頂いても結構ですが、原則、「欠席扱い」として下さい。

・ただし、大阪府の要請による集中警戒期間（令和4年3月22日から4月24日）の期間中にかぎり「出席扱い」として下さいますようお願いいたします。

【クラス共通】

・欠席回数にかかわる記述を削除し、「遅刻・欠席は認められない（体調不良等、正当な理由を除く）」とする。

評価方法

- ・クラス間の均衡を保つために単位取得者の平均 80 点を目安とする（単位未取得者は除外）。
- ・「定期試験に替わるレポート 60%（指定された課題提出を含む）」という記述で統一する。
- ・実習ノートの作成技術を培うことを目的として「レポート課題ルーブリック評価表（実習指導）」（添付）を演習の授業で学生に周知いただくようお願いしたい。
- ・「ソーシャルワーク演習リフレクションシート」を参考までに配付させていただく。

遠隔受講願への対応

- ・【実習指導】【演習】は実習の事前指導に相当し、実習参加者のみが履修する科目である。現場実習では遠隔が認められないことに加えて、実習の評価項目に体調管理が含まれることを理由にして両科目の遠隔受講を認めないこととする。
- ・授業配慮申請による遠隔受講希望についても認めないこととする。
- ・学科としての方針を教務課に文書で事前に報告しておく。

補講の授業形態

- ・原則的に対面授業にて実施する。

課題や合同授業など

【演習Ⅱ】

- ・期末課題は各クラス共通で個別支援計画書（添付）を課すこととする。

【演習Ⅲ】

- ・ソーシャルワーク実習 A の実習期間は 11 月 14 日（月）～11 月 27 日（日）であり、2 コマの補講を要する。試験期間 1 コマ、学生と協議して 1 コマを設定する。
- ・1 月 2 週目以降の水曜 1 限【実習指導 B】は授業がないことから、【演習Ⅲ】の補講を配当することが可能。

【演習Ⅳ】

- ・相談援助実習の実習期間は 6 月 6 日（月）～7 月 8 日（金）であり、5 コマの補講を要する。特別講義 2 コマ、課題 2 コマ、試験期間 1 コマを設定する。
- ・実習期間の 5 コマ分の補講については、羽曳野市社協による特別講義（対面授業）2 コマ、特別講義に関連する課題 2 コマ、試験期間中の対面授業 1 コマとする。
- ・実習直前に 50 人超の合同授業を長時間実施することを避ける、かつ、昼食を挟んで合同授業を実施することを避けることによって、感染拡大防止を図るために特別講義に関連する課題を設定する。
- ・合同授業を 5 月 14 日（土）1・2 限に羽曳野市社会福祉協議会を講師に迎えて実施する。テーマは羽曳野社会福祉協議会の役割と機能，羽曳野市の困りごと解決プロジェクトとする。

6. クラス割および配慮を要する学生等にかかわる情報共有
（個人情報を含むため省略）

以上

演習科目において、対話や討議などの受講生間のコミュニケーションや、グループによる協働作業は授業の大きな構成要素である。ハイブリッド授業によって、少数の遠隔受講者間のコミュニケーションや協働作業を促すことが難しく、演習授業が成立し難い状況が確認された。また、遠隔授業では、実習に対する動機形成や、コミュニケーションにかかわる主体性の涵養に向けて、教員が継続的にかかわることを困難にし、実習生としてのレディネスを培う機会が制約された。そのことが、現場実習でかつてない中断や中止をもたらすことになったと考えられる。再発防止に向けて、学生の申請理由に依らずに、演習科目を原則的に対面授業で実施するという方向性を見出した。

なお、「打ち合わせ会」および「ソーシャルワーク演習・社会福祉相談援助演習」全体の主担当は鳥海、副担当は坂本である。

（２）社会福祉相談援助実習・実習報告会

「社会福祉相談援助実習」は、社会福祉士の指定実習として5週間にわたり現場施設等に通う実習である。例年6月上旬から7月上旬に大半の学生が実習に行き、若干名が8月の夏季期間中に実習を実施している。今年度も実習生のほとんどが6月7日（月）から実習開始する予定であった。しかしながら新型コロナ感染による緊急事態措置が、5月に引き続き、大阪府下で6月20日まで実施されたため、3割程度の施設は開始を延期して6月21日（月）から実習を実施した。また実習施設によっては9月に延期する施設もあった。スケジュールにずれは生じたものの、いずれの施設でも規定の実習時間を満たすことができたため、前年度のように学内実習を実施する必要はなかった。

令和3年12月18日（土）に「実習報告会」を実施した。約5週間の「社会福祉相談援助実習」を終えた3年生が発表学生となり、2年生の聴講学生に対してその経験とそこから得られた知見を毎年報告している（参照：社会福祉相談援助実習報告会プログラム）。

新型コロナ以前は、大教室に一同が集まる全体発表会と、2教室に分かれてそれぞれの教室内で複数のグループが同時に発表する分科会を行っていた。令和2年度は、新型コロナ禍の中、密にならないように会場数を増やすなどして、感染対策を講じて実施する計画であったが、直前の感染拡大により、急遽全面オンラインとなった。大きな問題は生じなかったが、直前の変更による混乱と負担は発生した。そのことを受け、令和3年度は当初から全面オンラインで実施することとした。

「実習報告会」は、当日の司会進行など、すべて学生主体で行われている。プログラムや役割分担の企画などについて従来は教員が主に担当していたが、平成28年度から学生の主体性を高めるべく学生による実行委員会を作り、プログラムの変更などを企画している。

オンライン開催を早くから決めていたため、Zoom の管理や司会進行など昨年の反省点を踏まえてリハーサルやプログラム変更など備えることが十分にできた。

特に同時に複数の発表を行うグループ発表会は、昨年の方法から変更してブレイクアウトルーム機能を活用した。このことにより学生は希望グループに間違えずに参加が出来、素早く移動できるようになった。操作に迷う学生も、オンライン上で素早く教員がサポートすることが出来、スムーズな進行につながった。

学生の発表は、全体発表会およびグループ発表会ともにすぐれたプレゼンテーションとなっていた。実習担当以外の教員も参加しており、教員と学生で意見交換する場も設けることで、より良いアクティブラーニングとなり、同時に教員の能力を高める機会にもなっている。また、発表後の質疑応答に関して、昨年の課題となった従来の対面形式ほど気軽に質問できないというオンライン化による問題には、「後輩へのアドバイス 座談会」の時間を新たに設けて対応した。1グループ3,4人として、少人数で話し合う時間を作った。学生の評価は概ね好評であったが、分野のマッチングを希望する声が少なくなかった。

実習の履修を希望する1年生にも前半の全体発表会を聴講することを新型コロナ以前は、義務づけていたが、ネットワークによるトラブルを避けるため、昨年同様に動画を記録して実習指導Aの事前課題の一つとした。

今後も学生の主体性を高める場、学年を越えた学びの交流の場となるように引き続き展開していきたい。

なお、「社会福祉相談援助実習・実習報告会」の担当は坂本（主）、鳥海（副）、川下、大西〔短期大学部〕、吉田〔教育学部〕であり、石田、上續、笠原、原、平川が参加した。

令和3年度 社会福祉相談援助実習報告会 プログラム
12月18日(土)9:10~14:45

1 全体発表会

ミーティングURL	ミーティングID	パスコード
https://us02web.zoom.us/j/89730209275?pwd=aXQ3T1U5YUk0NEUFBmdlVWk0EhITGtwQT09	897 3020 9275	211218

9:10 着席・瞑想・出席確認・連絡事項

9:20 開会挨拶

【口頭発表】発表15分+質疑応答10分

プログラム	テーマ	種別	グループ名
9:25 全体報告1	複雑な事情を抱える 利用者に寄り添う	児童相談所・児童養護施設・ 婦人保護施設	チームおにく
9:50 全体報告2	さまざまな特性を持つ子どもへ のアプローチ	放課後等デイサービス	りんご畑
10:15 全体報告3	様々な事情を抱える高齢者との 関わり	養護老人ホーム	サツマイモ

10:40 休憩

11:00 全体報告4	地域を支える専門職	社会福祉協議会・福祉事務所 地域包括支援センター	ぐらたん
11:25 全体報告5	MSWの必要性	病院	チームDog

11:50 連絡事項

12:00 休憩

2 グループ発表会

【グループ発表】発表15分+質疑交流10分

12:55 ミーティング入室開始

13:00	1回目 発表(15分)／質疑交流(10分) 発表A-Fグループ
13:25	移動(5分間)
13:30	2回目 発表(15分)／質疑交流(10分) 発表A-Fグループ
13:55	移動(5分間)
14:00	3回目 発表(15分)／質疑交流(10分) 発表A-Fグループ
14:25	移動(5分間)
14:30	後輩へのアドバイス 座談会(15分)

14:45 各自退出 実習報告会終了

3 グループ発表会 プログラム 資料目次

【発表】発表15分＋質疑交流10分

■発表時間・分野

【時間】	1回目	13:00～13:25	発表＋質疑交流
	2回目	13:30～13:55	発表＋質疑交流
	3回目	14:00～14:25	発表＋質疑交流
	4回目	14:30～14:45	座談会（指定ルーム）

	発表	種別	テーマ	グループ名	ルームNo.
1	全体報告1	児童相談所 児童養護施設 婦人保護施設	複雑な事情を抱える利用者に寄り添う	チームおにく	
2	全体報告2	放課後等デイサービス	さまざまな特性を持つ子ども へのアプローチ	りんご畑	
3	全体報告3	養護老人ホーム	様々な事情を抱える高齢者との関わり	サツマイモ	
4	全体報告4	社会福祉協議会 地域包括支援センター 福祉事務所	地域を支える専門職	ぐらたん	
5	全体報告5	病院	MSWの必要性	チームDog	
6	発表A	児童養護施設 児童心理治療施設	利用者の最善の利益	children	1
7	発表B	児童発達支援センター	障がいのある子どもとの関わり方	サーモンうなぎ	2
8	発表C	放課後等デイサービス	障がい児の「できる」を引き出す	チームきりん	3
9	発表D	養護老人ホーム 特別養護老人ホーム	認知症の方への支援方法	バナナ	4
10	発表E	社会福祉協議会	専門職による地域住民への働きかけ	いいtomo	5
11	発表F	相談支援事業 救護施設	障がいのある方に対する関わりについて	チーム たきこみごはん	6

(3) 社会福祉士国家試験対策講座

1. 全体の概観

4回生は、新型コロナの感染拡大のために夏学期は4月のプレ試験（第1回学内模試）とオリエンテーションを対面で実施した以外はすべてオンラインでの授業および試験になった。ただ冬学期は9月のプレ試験（第2回学内模試）およびオリエンテーションを中止し、東京アカデミー模試を延期したことを除いて、10月からはすべて対面での授業および模擬試験を行った（12月28日(火)の定期試験はIBUネットを使って行った）。

3回生向けの集中講座は、すべてオンラインでの授業になった。定期試験もIBUネットを使って実施した。

なお2回生向けの対策授業は今年度から取り止めることになった。

社会福祉士国家試験対策講座

学年	セメスタ	科目名	開講期間	責任者
3年	5	社会福祉探究Ⅳ	9/1,9/2,9/3,9/4(計15回+定期試験)	坂本
	6	社会福祉探究Ⅴ	2/3,4,5,6(計15回+定期試験)	石田
4年	7	社会福祉研究Ⅰ	夏学期・土曜2限	全員*
		社会福祉総合研究Ⅰ	夏学期・土曜3限	全員*
	8	社会福祉研究Ⅱ	冬学期・土曜2限	全員*
		社会福祉総合研究Ⅱ	冬学期・土曜3限	全員*

(注) *石田、上續、川下、坂本、鳥海、平川

2. 4回生

①夏学期

				2限	3限	4限	5限
回	月	日	曜	科目	科目	科目	科目
*	4	3	土	プレ試験（第1回学内模試）・オリエンテーション			
1		10	土	高齢者福祉①	高齢者福祉②	高齢者福祉③	
2		17	土	低所得者支援①	低所得者支援②	低所得者支援③	
3		24	土	心理学①	心理学②	心理学③	
4	5	8	土	権利擁護①	権利擁護①	権利擁護①	
5		15	土	現代社会と福祉①	現代社会と福祉②	現代社会と福祉③	
6		22	土	社会学①	社会学①	社会学①	
*		29	土	定期試験（社会福祉研究Ⅰ）			

7	8	3	火		社会調査の基礎 ①	社会調査の基礎 ②	福祉サービス ①
8		5	木		福祉サービス②	児童・家庭福祉 ①	児童・家庭福祉 ②
9		6	金		保健医療サービ ス①	保健医療サービ ス②	保健医療サー ビス③
10		17	火		社会保障①	社会保障②	社会保障③
*		28	土	定期試験（社会福祉総合研究Ⅰ）			

コロナ禍のために、4月3日（土）のプレ試験（第1回学内模試）とオリエンテーションを対面で行った以外、すべての授業はオンラインで行わざるをえなくなった。2回の定期試験もIBUネットを使って実施せざるをえなくなった。

オンライン授業の設定等は担当教員がローテーションを組んで行った。

②冬学期

				2限	3限	4限	5限	
回	月	日	曜	科目	科目	科目	科目	
1	10	2	土	児童・家庭福祉 ①	児童・家庭福祉 ②	保健医療①	保健医療②	
2		9	土	更生保護制度 ①	更生保護制度 ②	更生保護制度③		
3		16	土	人体の構造①	人体の構造②	高齢者福祉④	高齢者福祉⑤	
*		23	土	ソ教連模試（10：00～14：45）				
4		30	土	理論と方法①	理論と方法②	相談援助の基盤 ①	相談援助の基盤 ②	
5	11	13	土	社会保障④	社会保障⑤	就労支援①	就労支援②	
6		20	土	障害者福祉①	障害者福祉②	障害者福祉③		
*		23	祝	東京アカデミー模試（10：00～14：45）				
7		27	土	福祉行財政①	福祉行財政②	福祉行財政③		
8	12	11	土	模試解説①	模試解説②	模試解説会①	模試解説会②	
*		18	土	地域福祉①	地域福祉②	地域福祉③		
		28	火	総合試験				
*		1	8	土	学内最終模試(10：00～14：45)			
		11	火			総まとめ①	総まとめ②	

夏学期に続いて冬学期も、コロナ禍のために9月18日（土）に予定していたプレ試験（第2回学内模試）とオリエンテーションは中止せざるをえなかった。また9月25日（土）に予定していた東京アカデミー模試は11月23日（祝）に延期した。

ただ10月からの授業はすべて対面で行うことができた。
 コロナ禍ゆえにさまざまな困難があったが、昨年度同様、受講生の授業態度はきわめて熱心で適度の緊張感をもって授業に向き合っていた。欠席も少なかった。

ただ今年度の第34回社会福祉士国家試験の合格率は57.7% (26名受験で15名合格)で、昨年度の61.8% [34名受験で21名合格]には及ばなかった。その原因に関しては今後検討する必要があるが、さしあたって今年度の合格最低点が105点と、これまでで最も高かったこともある程度影響しているのではないかと思われる。

第30回・第31回・第32回・第33回の合格最低点は、それぞれ99点・89点・88点・93点であり、受講生には100点を目標に勉強するように指導してきた。このことが、今回の合格率が昨年度に及ばなかったこととある程度関係しているのではないかと思われるのである。

なお授業に係るさまざまなこと（講師との連携、小テストの準備、出欠等）は担当教員がローテーションを組んで行った。

3. 既卒者（卒業後3年以内）向け

既卒者の受講を促すことによって既卒者合格率の向上を図るために、今年度は東京アカデミー作成のオンデマンド教材を希望者に聴講してもらうようにした。なお、この教材は過去3ヶ年の国家試験問題から選ばれた重要問題を解説したものである。卒業後3年以内の人に聴講を募ったところ、5名の応募があった。現役生からは19名の応募があった。これらの応募者に、下記のオンデマンド教材を年末から年初にかけて4期に分けて配信した。

オンデマンド視聴を希望した5名に結果をメールで問い合わせたところ、3名から返事があったが3名とも不合格であった（後の2名は3月18日現在返事がない）。

なお今年度の社会福祉士国家試験における既卒者の合格率は10.0%（60名受験で6名合格）であった。昨年度の合格率が5.4%（93名受験で5名合格）であったので、若干よくなったとはいえまだ不十分であることに変わりはない。

今後の課題は、①既卒者の視聴応募者を増やすこと、②配信時期の検討、③オンデマンド教材の内容の検討などである。

オンデマンド教材一覧

No.	科目	コマ数	時間
1	人体の構造と機能及び疾病	1	1.5
2	心理学理論と心理的支援	1	1.5
3	社会理論と社会システム	1	1.5
4	現代社会と福祉	1	1.5
5	社会調査の基礎	1	1.5
6	地域福祉の理論と方法	1	1.5
7	福祉行財政と福祉計画	1	1.5
8	福祉サービスの組織と経営	1	1.5

9	社会保障	1	1.5
10	保健医療サービス	1	1.5
11	高齢者に対する支援と介護保険制度	1	1.5
12	低所得者に対する支援と生活保護制度	1	1.5
13	障害者に対する支援と障害者自立支援制度	1	1.5
14	就労支援サービス	1	1.5
15	児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度	1	1.5
16	更生保護制度/権利擁護と成年後見制度	1	1.5
	計	16	24

(4) 精神保健福祉士国家試験対策講座

毎週水曜日4限・5限に開講している。教員が環境を整え学生が主体的に学習する形態をとっているが、例年11月～12月には、特別講師を招き専門科目の集中講座を行っている。今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策関連により学生が集まることが出来る12月25日(土)の3限から5限までを利用し開講した。また、10月22日(金)、1月8日(土)には、実際の試験を想定した模擬試験を実施した。

第24回精神保健福祉士国家試験新卒合格率は100%(3名中3名合格)であった。なお既卒者の受験はなかった。精神保健福祉士国家試験対策講座は、受験勉強の促進に有効に機能しているといえる。

(5) 公務員社会福祉職受験対策講座(社会福祉特別講義Ⅰ・Ⅱ)

社会福祉特別講義は、公務員採用試験受験支援講座として、東京アカデミーと協働し平成29年度より、集中講義で開講している。

社会福祉特別講義Ⅰは、公務員試験の1次試験対策として位置づけられており、一般教養採用試験の国語・算数が授業内容となっている。

本講座は、短期大学部保育科との合同開講となっている。受講対象学生は保育科1年生(1セメスター)と人間福祉学科健康福祉専攻2年生(3セメスター)である。令和2年度の履修人数は、20名(短大保育科15名・人間福祉学科健康福祉専攻5名)で、今年度は、両学科とも少なかった。今年人間福祉健康福祉専攻の本講座修了者から、大阪府(社会福祉専門職)、1名の公務員合格者を輩出した。

社会福祉特別講義Ⅱは、社会福祉専門職採用試験に関わる社会福祉の専門知識を確実なものにするための講座である。授業内容は、社会福祉全般・社会学概論・心理学を中心に社会福祉の専門用語の理解、社会福祉に関するテーマの論文対策となっている。

また、本講座は社会福祉専門職公務員採用試験社会福祉協議会採用試験、独立行政法人病院機構(国立、公立)採用試験などにも有効で、社会福祉士国家試験、精神保健福祉士国家試験の学習にも役立てることが可能である。

いずれの社会福祉特別講座も公務員試験を視野に入れた就職活動をする学生増加に貢献

し、進路選択を広げる重要な科目である。本講座修了者1名、大阪府（社会福祉専門職）に採用者された。

（6）その他

（1）～（5）に示した学科独自の演習、実習指導、受験支援は、授業時間内だけでは成立しない科目である。常に学生一人ひとりと向き合い、その学びの質と成果を学生と共に確認していく取り組みが求められている。また、ハイブリッド型授業を含めた遠隔授業の実施に伴って、ICTを活用した教授方法の向上にも努めていくことが必要である。学科のすべての教員がこの視点を共有し、チームとして学生を育てていく体制を実施しており、今後はそれらをさらにブラッシュアップして取り組んでいくことが求められている。

なお、この報告書作成者は以下の通りである。

- | | |
|-------------------------|------|
| 1. はじめに： | 原 順子 |
| 2. 大学基礎演習について： | 石田晋司 |
| 3. 相互授業参観について： | 原 順子 |
| 4. 学科独自の取り組みについて | |
| （1）社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会： | 鳥海直美 |
| （2）社会福祉相談援助実習・実習報告会： | 坂本光徳 |
| （3）社会福祉士国家試験対策講座： | 平川 茂 |
| （4）精神保健福祉士国家試験対策講座： | 石田晋司 |
| （5）福祉系公務員受験対策講座： | 石田晋司 |
| （6）その他： | 原 順子 |

*本原稿は、FD委員（原）と学科長（石田）が回覧した上で承認を受けたものである。

教育学部 教育学科 小学校教育コース

1. はじめに

1.1 小学校教育コースの現状

本コースは2019年度から、新カリキュラムとして設定されたコースで、小学校教諭一種免許状の取得に加え、各プログラムの選択によって、学生は特別支援学校教諭一種免許状、幼稚園教諭一種免許状、中学校教諭一種免許状(英語)(数学)、高等学校一種免許状(英語)(数学)が取得可能となっている。本コースの入学定員は110名であるが今年度は120名の入学者を受け入れ、1年生120名、2年生110名、3年生116名という在籍者数である。また、今年度、本コースは教員26名体制でスタートした。

1年生では特に、新しいカリキュラムとして「学びなおし・学びほぐし」をめざす科目である「扉シリーズ」(「数理探究の扉」「英語探究の扉」)や、プログラム選択を判断するいわゆる「お試し科目」(「多様な子ども理解入門」「子育て支援論」「ベーシックコミュニケーションI」「数学的リテラシー」など)などが開講され、1年生は「多様な子どもや社会に対応できる「いい先生」を問い続ける先生」をめざして学修している。また、2年生では小学校教育実習の実習要件である「インターンシップ」や「スクールサポーターI」が開講されており、コロナ禍ではあるが、現行カリキュラムにおける教育実習体制の2年目となった。さらに、3年生では配属実習を基本とした新しい教育実習の初年度を迎えた。なお、新しい教育実習では、教育実習先の小学校へ週に1度、実習として学生が伺い、6月初旬には連続2週間の教育実習が行われるため、教育学部のみ6月の第2・3週を休講期間としている。

1.2 今後の課題

今年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、夏学期の授業はほぼ遠隔授業で行われた。教育学部での学修に欠かすことのできない模擬授業など、対面授業不可という授業形態では十分な取り組みを行うことができない授業もあった。ICT等を駆使した授業づくりは引き続き求められる。

また、教育実習の実習要件である3セメスター開講の「インターンシップ」は、今年度も自粛期間の影響を受け、実施期間が遅れることとなった。さらに、新しい教育実習体制ではじめての教育実習(小学校)が実施されたが、コロナ禍での受け入れ先の事情に鑑み、「週1回+連続2週間」という形での教育実習が、結果的には連続3週間となったり、実習期間短縮となったり、飛び石のような実習となったり、さまざまな対応を強いられた。「インターンシップ」や「スクールサポーターI」および教育実習のコーディネーター担当教職員の尽力により、こうした状況に対応しつつスムーズに実施することができたが、担当教職員と2年生の担任教員や、実習訪問担当教員を含む本コース所属教員とのいっそうの連携が、引き続き重要である。

さらに、学生によるプログラム選択が本格化していくなかで、各プログラム選択者が必修すべきプログラム科目を漏れなく履修しているか、プログラム別の卒業必修単位数を理解しているか、各プログラムで行われる各種教育実習の実習要件を満たしているかなど、学生指導の充実が必須である。また、2年生になりプログラム選択を変更する学生も見られるため、履修指導の充実が不可欠である。特に、教育実習がかかわるプログラムについては、実習内諾交渉時期を干渉しないタイミングでのプログラム変更を徹底しなければならない。

そして、プログラム非選択者のプログラム関連卒業必修単位取得の保障など、学修充実をどのように図るかが課題である。

2. 「大学基礎演習」について

大学基礎演習ⅠⅡは、カリキュラムにおける初年次教育の位置づけである。そのため本科目では、学士課程で必要とされるアカデミックスキルの習得と、「いい先生とは何かを問い続ける」という理念に基づく小学校教育コースでの学修を授業として設定している。大学ディプロマポリシーを受け、大学基礎演習ⅠⅡの学修内容をマネジメントした。

〔大学ディプロマポリシー〕

1) 教員としての自己分析・自己研鑽の力

学びや実践を通して多様なニーズのある社会、学校、子どもに応えることができる専門的知識及び実践力、指導力を身に付け、「いい先生」とは何かを常に問い続け、自己の実践を振り返り、自己を高めていくことができる。

2) 教員としてふさわしい豊かな人間性

多様な立場、考え方の存在を認め、「いい先生」になるという強い意志と情熱および教員としての使命感や責任感を持ち、子どもの多様なニーズを共感的に理解し、課題の解決に他者と協働して取り組むことができる。

3) 変化する社会、学校で活躍できる力

学びや実践を通して多様なニーズのある社会、学校、子どもを的確に理解し、専門的知識および実践力、指導力を基に協働して課題の解決や改革に取り組み、実現することができる。

2.1 「大学基礎演習Ⅰ」の内容

昨年度から引き続き、コロナ禍における遠隔授業でほとんどの科目が進められるため、大学入学直後で遠隔授業参加に慣れない1年生には、ネットガイダンスや、パソコン等の基本的な操作練習などに授業の前半を割いている。また、今年度の1年生からパソコン必携となったこともあり、持参したパソコンを使ってどのように授業参加するのか、また、各科目の課題等にどのように取り組むのかなどについて、大学基礎演習Ⅰではていねいに支援した。

	テーマ	内 容
1	ガイダンス1	履修登録 時間割作成
2	ガイダンス2	履修登録 PC基本操作の確認 各クラスでの自己紹介
3	ガイダンス3	オンライン授業の参加方法 プログラム選択に関する説明
4	ガイダンス4	4年間におけるカリキュラムについて クラス別相談
5	レポート作成に向けて	レポートを作成するとは
6	レポートのテーマ探究1	担任教員によるリレートーク①
7	レポートのテーマ探究2	担任教員によるリレートーク②
8	レポートのテーマ探究3	担任教員によるリレートーク③
9	レポート作成1	リレートークと受けたレポート作成に向けて
10	レポート作成2	段落①の自己評価と評価の共有（ブレイクアウトルーム）
11	レポート作成3	段落①のリライト（教育学部休講期間）
12	レポート作成4	段落②の加筆修正（教育学部休講期間）
13	レポート作成5	レポートの作成 クラス別相談（ブレイクアウトルーム）
14	ガイダンス5	教育実習に関する今後の予定 教職履修カルテとは
15	学習の総括	学修ポートフォリオの記入 授業評価アンケート

緊急事態宣言発令のタイミングにより、前半では、第1回および第2回のみ対面授業で行うことができた。そのなかで各クラスにおける自己紹介等を実施し、学生同士の関係性構築をめざした。しかし、その後は全面遠隔授業になり、後半についても、学籍番号末尾の奇数・偶数に分かれてハイブリッド授業となったために、新入生が大学での人間関係を構築しづらい面があり、本科目では、第4回と第13回にクラス別相談を行っている。また、各クラスにおける個人面談も実施し、学修面で困ったことや、大学生活や人間関係での悩み等を聴き取り、大学基礎演習Ⅰでの授業内容に反映させている。

いっぽう、初年次教育としても位置づけられる本科目では、アカデミックスキルの育成として、レポートの書き方について学ぶ柱を設定した。「多様な子ども理解」に基づく担任教員のリレートークを通して、履修者はレポートのテーマを設定し、パラグラフ・ライティングに取り組んだ。特に、リレートークを聴くことで、メモの取り方や、話の内容に対して自分の考えをもつということについて授業内で取り上げた。講話を聴くうえで、講話内容（事実）を正確にまとめることができること、さらには講話内容（事実）に対して、自分はどのような考えを発信したいかということ（意見）の2点を意識しながらレポート作成につなげられるように、オンライン授業やハイブリッド授業という制約はあったが、ていねいに授業展開した。特に、オンライン上では履修者がつねに受動的になりやすいため、zoomにおけるブレイクアウトルームを活用し、履修者同士が学び合い、意見交流できるような授業展開を心がけた。

2.2 「大学基礎演習Ⅱ」の内容

全15回の内容は下記のとおりである。基本的には、学籍番号末尾の奇数と偶数で分けたグループごとに、対面授業と遠隔授業を交互に行うハイブリッド授業で進められたため、履修者の半分は対面授業、半分はオンライン参加、あるいはオンデマンド課題という形態となった。大学基礎演習Ⅰと同様、履修者同士が少しでも学び合い、意見交流できるように授業展開を工夫している。

なお、大学基礎演習Ⅱは、ハロースクールの実施タイミングに制約されるため、クラス単位で授業計画し実施している。よって、以下は全15回の一例である(★は各クラスで実施)。

	テーマ	内 容
1	ガイダンス1	履修修正 時間割作成
2	ガイダンス2	教員採用試験について
3	ガイダンス3	ハロースクール事前説明 「本を紹介しよう」について
4	ハロースクール1★	ハロースクール事前指導
5	ハロースクール2★	ハロースクール事後指導
6	プレゼンのテーマ探究★	プレゼンテーマの設定 本の検索方法について
7	資料の検索方法★	本の検索と紹介する本の決定
8	文献講読入門★	本の読み方
9	プレゼン資料の作成★	プレゼン資料の作成方法
10	プレゼンの準備★	プレゼンの準備
11	プレゼント意見交流★	「本を紹介しよう」発表会
12	ガイダンス4	教育実習等についての事前説明 プログラム選択について
13	実習等への心構え構築	教育実習に関する先輩による講話
14	教職履修カルテについて	教職履修カルテの記入（オンデマンド課題）
15	学習の総括	学修ポートフォリオの記入 授業評価アンケート

「ハロースクール」は昨年度に引き続き、今年度も水曜日の午前中に実施することとなった。実施場所は、例年のとおり四天王寺小学校である。第3回目の授業で四天王寺小学校の木村先生よりハロースクールの説明と当日の注意事項、そして教員を目指す学生としての心構え、教師という職業の魅力とやりがいについて講話していただいた。コロナ禍が続いており、実施にあたっては、1か月前から検温等の健康チェックを行い、それを当日持参するとともに、消毒やマスクの励行を徹底することで、四天王寺小学校の協力を得ながら、予定どおり実施することができた。ハロースクール当日には、毎回1クラスが訪問し、1年生から6年生までの12学級に学生が1名または2名が入り、授業観察や個々の児童への支援、授業補助、プリントの添削業務、体育での球技活動や理科での実験に参加した。学生にとっては、初めて学校現場で小学校の子どもたちに接し、具体的な指導の様子を観察する機会である。今年度も参加した学生からは学びが大きかった旨や、有意義だったという感想が示されている。今後も継続していくことが望ましい。

クラス別の授業では、アカデミックスキルの向上をめざして、プレゼンテーションに挑戦する内容に取り組んだ。大学基礎演習Ⅰでのリレートーク内容や子どもの多様性、教育について知りたいことや、大学生活に関することなど、各自がテーマを設定し、テーマに沿っておすすめの本を紹介するというプレゼンテーションである。大学基礎演習Ⅰで取り組む予定だったものの、コロナ禍により登学できず実施できなかった本の検索方法や、図書館の使い方などを盛り込んで授業を展開した。また、後半にはインターシップから教育実習という流れのなかで、今後どのように取り組むべきか、3年生による講話を学年全体で聴き、心構えを構築する時間を設けている。

2.3 成果と課題

(1) 成果

- ・コロナ禍という難しい状況ではあったが、履修者同士が学び合い意見交流できるような工夫を行い、大学基礎演習ⅠⅡとして必要な学修を履修者に提供することができた。また、学生たちもこうした中で担任教員等とかかわりをもつことができ、大学での学修に対する姿勢を構築することができた。
- ・担任教員が各クラスに細やかに諸連絡を行い、支援してきたことから、担任教員等と履修者の信頼関係が構築された。「どうしても困ったときは、担任教員に連絡する」という姿勢を多くの履修者に構築することができた。
- ・ハロースクールという体験学習を継続して取り組むことができ、事前事後指導も充実させるなかで履修者の学びにつながった。履修者からの満足度も高い。
- ・メモの取り方、レポートの書き方、授業参観の仕方、報告書の書き方、プレゼンの仕方など、大学生活で求められるアカデミックスキルを示し、習得に向けて働きかけることができた。履修者によっては、習得したアカデミックスキルを着実に定着させている。

(2) 課題

- ・コロナ禍において、学生同士の横のつながりを十分に構築できなかった一面がある。人間関係を広げることのできた学生もいれば、コロナ禍により関係性をなかなか構築できなかった学生もいるため、今後引き続きの支援が必要である。
- ・オンライン授業への参加により、学生のPC操作などの基本的スキルは向上したように思われるが、そのぶん対面授業での参加態度構築や、意見交流への深まりが不十分だった印象がある。本コースの学生は教育実習に参加する者がほとんどであり、小学校など

の教育現場において、対面で人とかかわり自ら学んでいく姿勢は必要不可欠である。そういう、対面で他者とかわる姿勢の構築が今後の課題として求められる。

- ・担任間における授業の打ち合わせや準備等も、対面で行うことがなかなかできず、共通認識を十分に図って授業に臨むことができなかった回もある。感染症の状況によっては難しい面があるが、今後、担任教員間のいっそうの協働が求められる。

3. 相互授業参観について

3.1 公開授業一覧

今年度の相互授業参観を実施するにあたり、小学校教育コースで公開授業を申し出た科目と担当教員および授業日は以下のとおりである。

教育学科 小学校教育コース 相互授業参観 公開授業一覧 (敬称略)								
整理番号	所属	担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	合評会
1	教小	山本 博資	11月30日	月	3	教職教養研究Ⅰ(奇数)	4-207	授業後すぐ
2	教小	杉中 康平	いつでも	土	1	道德教育の理論と方法	4-316	後日
3	教小	佐藤 美子	12月14日	月	5	教職実践演習	理科室	授業後すぐ
4	教小	浅田 昇平	12月2日	水	2	教職論	4-414	授業後すぐ
5	教小	生駒 英晃	12月22日	火	4	教科内容演習(算数)	6-301	授業後すぐ
6	教小	今井 真理	11月17日	火	3	教科内容論(図画工作)	701	授業後すぐ
7	教小	奥野 暢通	11月30日	月	2	教育専門演習	4-314	授業後すぐ
8	教小	奥野 喜之	12月7日	月	5	教職実践演習Ⅱ	4-214	授業後すぐ
9	教小	木村 雅則	12月14日	月	5	教職実践演習「危機管理」	4-214	授業後すぐ
10	教小	小柴 和香	12月8日	火	4	初等英語科教育法	4-414	授業後すぐ
11	教小	坂井 啓祐	12月7日	月	3	教職教養研究Ⅱ	4-307	授業後すぐ
12	教小	坂本 暁美	12月9日	水	3	音楽科教育法	8-210	授業後すぐ
13	教小	鈴木 浩太	11月17日	火	5	障害特性とICTの活用	4-212	授業後すぐ
14	教小	檀上 慎二	11月30日	月	5	教職実践演習(教諭)	4-212	授業後すぐ
15	教小	千葉 一夫	11月30日	月	1	教職教養研究Ⅱ	4-316	授業後すぐ
16	教小	堂上 雅三	12月2日	月	3	教採対策 面接 班別対面 授業	4-406	授業後すぐ
17	教小	長澤 洋信	11月25日	水	5	特別支援教育	4-212	授業後すぐ

18	教小	永田 麻詠	12月7日	月	5	子ども支援ボランティア論	4-306	授業後すぐ
19	教小	西岡 智	12月7日	月	3	教職教養研究 I	4-406	授業後すぐ
20	教小	西口 卓磨	12月15日	火	2	教科内容論 (社会)	2-205	授業後すぐ
21	教小	早川 透	12月9日	水	1	知的障害教育論	4-309	授業後すぐ
22	教小	原田 三朗	12月3日	木	4	教科内容論 (数学)	2-205	授業後すぐ
23	教小	福本 義久	11月24日	火	4	生徒指導論	4-312	同日5限
24	教小	福若 真人	12月9日	水	2	教育原論	4-316	授業後すぐ
25	教小	船所 武志	11月28日	土	3	初等国語科教育法	2-205	授業後すぐ
26	教小	牧野 浩二	12/9を除く期間 いつでも	水	1	生徒指導論	4-408	授業後すぐ
27	教小	松岡 隆	12月9日	水	5	中等数学科教育法Ⅱ	4-208	授業後すぐ
28	教小	森田 英俊	12月7日	月	4	数学的リテラシー	4-306	授業後すぐ

3.2 相互授業参観報告書

相互授業参観について、今年度は3名の報告書を以下に示す。

なお、今年度の相互参観の期間は対面授業が実施されたが、参観の方法は昨年度同様、対面または Zoom 等の遠隔での方法を選択することができた。

(1) 報告者：福若 真人

参観した授業科目名	初等国語科教育法
授業担当教員名	永田 麻詠 先生
令和 3 年 12 月 7 日 (火)	教室：4-208
参観した授業に関して、お気付きの点などを(1)に、また、学生の授業態度や施設・設備などに関して、お気付きの点を(2)にご記入ください。	
(1) 授業に関して	
一昨年度にも同科目を参観させていただいたが、担当回が異なること、コロナ渦によるカリキュラムの変更により、参観した内容に違いがあった。ただし、そのような状況の変化にあっても、永田先生の授業では、学生さんが主体的・対話的な参加型の学習の機会が保障されており、かつ、今後のインターンシップや教育実習に向けた実践的な「深い学び」が展開されていたことが、非常に印象的であった。	
模擬授業に対する指導という点では、児童役の学生さんたちが盛り上がり、こちらで学生さんたちが話し合う場面が見られた。そういう状況が自分の授業で起きた	

とき、どうやって複数の声を拾うのか（あるいは聞き流すのか）という匙加減の難しさ	
を感じた。学生どうしの会話（対話）をいかに深く豊かなものにしながら、授業の狙い	
に向けて支援・指導していけばいいのかという点を、自分事として改めて考えさせられ	
た。参考にしながら、今後の授業に役立てたいと思う。	
（２）学生の授業態度や施設・設備などに関して	
模擬授業の発表のため、児童の立場性を想像しながら積極的に関わっている学生さん	
姿が印象的であった。施設・設備面で言うと、受講者数に対して、教室の広さがやや	
狭く感じられた。感染対策の観点として収容率をクリアしても、実際の距離感としては、	
やや密であるため、人数を制限するか教室を広くするかの対策が必要である。	
参観者所属	参観者氏名
小学校教育コース	福 若 眞 人

（２） 報告者：西口 卓磨

参観した授業科目名	初等国語科教育法
授業担当教員名	永田 麻詠 先生
令和3年12月7日（火）4限	教室：4-208
参観した授業に関して、お気付きの点などを（１）に、また、学生の授業態度や施設・設備などに関して、お気付きの点を（２）にご記入ください。	
（１）授業に関して	
私は初等社会科教育法を担当しており、指導法の担当者であるという立場からどのよ	
うに模擬授業を進め、学生の実践力を高めることができるのかに着目し、参観しました。	
模擬授業の講義の難しさは、取り組み方によってイベント化し、単なる「体験」で終	
わってしまう可能性があることです。特に教育学部1回生は、学校現場での学びがスタ	
ートしていない段階で、「自分が授業者になる」というイメージがつかめていない学生も	
少なくないように感じています。その中で、永田先生は一人ひとりの受講生に「授業者	
として考える」という意識を持って模擬授業に参加できるよう工夫されていました。1点	
目は、「これまで学んできた授業づくりの理論や学習指導要領に位置づける」ことを学生	
に促し、教科教育の観点から提案された模擬授業をもとに指導されていることです。そ	

<p>のことに、この授業ではどのようなことが学べるのかなど、一つひとつの授業の意</p> <p>味や意義を学生自身が検討できるようになっていました。2点目は、「子どもの側から授</p> <p>業を捉える」という意識を大切に、指導されていることです。1回生の模擬授業では、</p> <p>これまで受講生の多くが受けてきた「子どもが受け身の授業」の再生産になりやすく、</p> <p>言い換えると教師が伝えたいことを伝えるだけの授業になることも少なくありません。</p> <p>その際に、具体的な場面を取り上げて、「子どもの側から捉える」という視点を受講生に</p> <p>投げかけたり、改善策を提示したりすることにより、「主体的・対話的で深い学び」にど</p> <p>うつながっていくのかを考えられるような工夫がなされていました。</p> <p>今後の自身の課題としては、2回生開講の初等社会科教育法にどう接続することが学</p> <p>生にとってより効果的な学びとなるのかについて検討することです。また、教育学部の</p> <p>課題としては、模擬授業を含めた教科指導力を体系的に育成していくにはどのような改</p> <p>善が必要なのか、また免許法の改正により ICT を活用した指導法を教科教育法に導入し</p> <p>ていくのかについて、検討できればよいと考えております。ありがとうございました。</p>	
<p>(2) 学生の授業態度や施設・設備などに関して</p> <p>受講生による小学校国語科の模擬授業を通して学ぶ講義内容でしたが、模擬授業内で</p> <p>は授業者であった学生だけでなく、児童役の学生も対象学年を想定して参加するなど積</p> <p>極的に取り組んでいました。また、授業後の振り返りにおいても、自らの考えをなかま</p> <p>とともに共有したり、教員や他の学生の発言を記録したりするなど、学生自身が今後の</p> <p>授業づくりに向けて学びを深めようとする姿勢がみられました。</p>	
参観者所属	参観者氏名
小学校教育コース	西 口 卓 磨

(3) 報告者：森田 英俊

参観した授業科目名	初等音楽科教育法
授業担当教員名	坂本 暁美 先生
令和 3年 12月 15日 (水)	教室：8-201
<p>参観した授業に関して、お気付きの点などを(1)に、また、学生の授業態度や施設・設備</p> <p>などに関して、お気付きの点を(2)にご記入ください。</p>	
<p>(1) 授業に関して</p>	

<p>授業の指導案を書くのが初めての学生に、その書き方を教えるものであった。通常の科目での単元構成の枠組みは「導入－展開－評価」というものだが、特に音楽科でそれに対応させた「経験－分析－再経験－評価」という枠組みを解説した。その際に、例としてサン＝サーンス「象」を用いた3拍子の導入についての授業構成を、実際に学生相手に言いながら説明していて、分かりやすかった。その他にも、インターロッキング、ミ・ソ・ラ・シ・レのみからなる音楽等、例をいくつも挙げており、学生は一般化しやすかったのではないだろうか。私は今学期、担当科目「プログラミング教育II」で音楽に関連した課題として、リズムパターンや輪唱のプログラミングを行った。科目の特性上、「分析」とそれに関連した「構築」が多くなるので、それを「経験」および「再経験」と関連させるにはどうすればよいか、考えるきっかけとなった。</p>	
<p>(2) 学生の授業態度や施設・設備などに関して</p>	
<p>児童が行うことを学生に行わせるときに、坂本先生は「恥ずかしいかもしれないが」と配慮されていたが、学生は恥ずかしがることもなく行っており、特にグループワーク・ペアワークのときに生き生きとしていたのが印象的だった。グループワークに課題を感じている私としては参考にしたいところだ。</p>	
<p>参観者所属</p>	<p>参観者氏名</p>
<p>小学校教育コース</p>	<p>森田 英俊</p>

今回は、3名の報告書を挙げるにとどめるが、全体として、今年度も教員同士による相互授業参観と合評会が実施され、研鑽を積むことができた。課題としては、昨年度から実施されている遠隔授業（Zoom、Teamsなどを活用したオンライン授業、YouTubeなどを活用したオンデマンド授業）による相互参観の在り方についてである。遠隔授業では、映し出される映像に制限があるため、カメラワークによって授業全体の様子がわかりにくい（学生の様子、板書、教員の非言語表現など）ことがある。一方、遠隔での相互参観は、時間と場所に制約されずに相互参観を行うことができることから、相互参観の活性化を図ることが期待される。今後は、対面と遠隔授業の両面を生かした相互参観の在り方を検討する必要がある。

4. 学科独自の取り組み

小学校教育コース独自の取り組みとして、次の2点を挙げる。

(1) プログラム選択

小学校教育コースでは、小学校教諭免許の取得を基本としながら、多様な子どもや社会に

対応できる「いい先生」を問い続けるために、「特別支援教育プログラム」「幼稚園プログラム」「英語教育プログラム」「数学教育プログラム」の4プログラムが設定されている。各プログラムにおいていわゆる「おとし科目」が1年次に開講され、自分がどのプログラムを選択することで「いい先生」をめざし問い続けるのかについて学生が考え、年度末に今年度の1年生の各プログラム選択者が決定した。

プログラム選択の特徴としては、「プログラムで学ぶ＝各プログラムでの教員免許取得」ではないこと、プログラムを選択しないという選択も尊重することが挙げられる。

各プログラムでの学修により、各種教員免許取得をめざすことは基本であるが、かりに教員免許取得を希望しなくても、各プログラムで学びたいという学生の思いを尊重している。そのため、今年度も2年生の夏学期に、プログラムを選択しなおすという意志があれば自由に行うことができる機会を設け、4名の2年生がプログラムを選びなおしている。ただし、4年間で各種教員免許の取得をめざしている学生に対しては、プログラムの選びなおしについて慎重に行うよう注意喚起を行っている。

また初等教育を深く学びたい者や、進路変更によって教職以外の将来を考える者が「プログラムを何も選択しない」という選択も尊重している。プログラムを選択しないことにより、プログラム科目が開講されている時間に初等教育に関する科目や、教員採用試験対策科目を受講することができる。また、教職以外の進路を希望する学生に対しては、「子ども理解領域」として「子ども支援ボランティア論」「インクルーシブ教育の理論と方法」などといった選択科目を設定し、小学校教育コースでの学修が、学生一人ひとりにとって充実したものとなるよう、カリキュラム上の工夫を行っている。

(2) 教育基礎演習Ⅰ・Ⅱでの取り組み

「いい先生になる」という一貫した理念に基づき4年間のカリキュラムを設定し、1年生の「大学基礎演習」と2年生の「教育基礎演習」との滑らかな接続を図り、3年生以上への学びへとつないでいくことができるようにしている。具体的には、「教育基礎演習Ⅰ・Ⅱ」は、「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」を受講してきた学生たちが、そこで学んだことを基盤とし、それを生かしながらよりよい教育者になることを目指し、教育という営みに特化した内容の基礎を身に付ける場である。このような理念に基づき、大学ディプロマポリシーを受け、教育基礎演習の学修内容をマネジメントした。

<2022年度「教育基礎演習」のめざすもの>

- ① インターンシップなどの体験活動を含めた2年生1年間の学びの見通しをもち、それを大学在学中及び卒業後のキャリアデザインとつなげて考え、教職への意識を高めていくとともに、具体的な行動目標を設定する中で実践していくことができる。
- ② 体験や講話、文献講読、意見交流等を通して、教育に対する自分の「問い」をもち、探究するとともに、それを表現することができる。(レポートを書くスキル、プレゼンテーション技術の向上)
- ③ 教育実践現場において、周りの人たちや子どもたちと適切に接すること、責任をもった行動をとることなど、一社会人としての社会性を身に付け、自分が関わっている教育現場に参画する基礎を身に付けることができる。

<教育基礎演習の内容作成にあたって考えたこと>

- ・ディプロマポリシーと内容を関連付けること
- ・大学基礎演習で身に付けてきたレポートや小論文執筆の基礎となる力を生かすことが

できるようにすること

- ・他者の考えと比較したりそれを取り入れたりして自分の考えを磨いていくことができるようにするという観点から、様々な学修場面で相互評価を取り入れること。
- ・大学基礎演習に引き続き、司会等学修の運営にかかわることを学生に行わせ、主体的に学ぶ場としての教育基礎演習を構築していく意識をはぐくむこと。
- ・先輩の話聞く機会や自分自身で体験しているインターンシップ等について学んだことを交流する場を設定することで、体験を通した生きた学修を行うこと。

令和3年度も昨年度に引き続き、コロナ禍における変則的な授業が何度も行われた。全面で対面授業を行うことができたり、あるいは、半数の対面や全面オンラインだったりして、授業形態はコロナ蔓延の状況に応じて様々に変化したが、内容は極力変えないように授業を展開した。その度にシラバスを修正し、学生に示した。学生も対応するのが大変だったと思うが、全体的によく状況を理解しそれに依りて学修に取り組むことができた。従って、学修内容の質の低下や学生の学びに対する意欲への影響は、ほとんどなかったといえる。ただ、どうしても、フェイスツーフェイスの関りが不足し、学生たちも滑らかな人間関係を構築していくのに苦勞をしていたようだ。

2.1 「教育基礎演習Ⅰ」の内容

最初は、対面の授業が可能であったが、コロナ蔓延のため、4月下旬よりオンラインの授業となった。以下は、オンラインに対応した改定シラバスである。

	テーマ	内 容	日程
1 A 1組	夏セメガイダンス	【全体】1年間の予定・ICTの活用・目標づくり 学内施設について（キャンパスダイアリーを用意）	4/8
2 B 2組	アカデミック・ライティング1 ようこそ先輩1（3年生）	【全体】アカデミック・ライティングで身に付けた力 インターンシップのスクールサポーターの経験談	4/15
3 A 3組	アカデミック・ライティング2 ようこそ先輩2（3年生）	【全体】論文を読む際に気を付けるところ インターンシップのスクールサポーターの経験談	4/22
4 オン ライン 4組	キャリアガイダンス ようこそ先輩3（新卒教師・4年生）	【全体】4年生、新卒教師の話聞いて、今後の自分の進路について考える 4月のICT運用の振り返り・今後の充実のために	4/29
5 オン ライン	アカデミック・ライティング3 パラグラフ・ライティングについて	【クラス】パラグラフ・ライティングについて知って活用できるようにする グループで探究テーマを1つ決め、問いを立てる。	5/6
6 オン ライン	アカデミック・ライティング4 資料を探すことについて	【クラス】立てた問いについての交流	5/13
7 オン ライン	ICTを使った教育の実践 その1 アカデミック・ライティング5	【全体】①へき地校における「オンライン文化祭」の実践 ～愛知県豊根村立豊根中学校長のお話～ ② Cinii 検索について	5/20
8 オン ライン	ICTを使った教育の実践 その2	【全体】① ICT教育 「意義と課題」についての議論 小グループディスカッションと全体交流	5/27

9	オンライン	アカデミック・ライティング6	【全体】①ワークシート4の取り組み方法説明 6/18提出	6/3
10	課題	ワークシート④への取組	【自宅】 *体験を通じた私の「気づき」をテーマに報告	6/10
11			休講	6/17
12	奇数	プログラム変更についての説明 アカデミック・ライティング7 ワークシート④の発表 今後の教育基礎演習について	【クラス】 ・プログラム変更についての説明（動画・永田先生） ・ワークシート④の発表 ・夏セメの振り返りとPPの作成を行うことを予告	6/24
インターンシップ開始（6月25日金曜日 第1回）				
13	偶数	夏セメの振り返りの記入 （前半部分） PPの指導と作成	【クラス】 ・「振り返り用紙」を参考にPP作成のテーマを決める ・2分以内。スライドは3~5枚程度 ・パワーポイント、グーグルスライド、どちらもでも可 ・動画に撮影して、アップする。（場所は各クラスで指定）	7/1
14	奇数	PPの発表会（クラス全員）	【クラス】動画による発表と感想交流 クラス代表の選出	7/8
15	全員 出校 司会1組	全体（全員対面でできないか） PP各クラス代表者の発表	【全体】発表及び、各担任からのお話	7/15
16		「振り返り」とPPの提出<最終>	（授業はなし、課題提出期限をこの日に設定）	7/29

アカデミック・ライティング、ICTの活用、「ようこそ先輩」と題した先輩のお話を聞く会、パワーポイントを活用して夏セメで学んだことをまとめる学修などを行ってきた。前述したように、対面だったり半分登校だったり、全面オンラインだったりしたが、どの状況でも、遜色なく計画したことを進めていくことができた。ICTを活用した実践事例のお話では、リアルタイムでZoomに現場の先生が登場して話を下さし、Zoomを通しての直接交流ができた。PPの作成についても、作成したものを「ビデオ化して提出」ということにしたが、学生もしっかりと対応し、ICTスキルを高めることができた。

2.2 「教育基礎演習Ⅱ」の内容

全15回の内容は下記のとおりである。途中から対面で授業を行うことができるようになった。しかし、年が明けると第六波という流行があり、陽性者が学生の中で何人も出るという事態になった。

	テーマ	内容	日程	
1	オンライン	冬セメガイダンス	【全体】冬セメの予定 インターンシップ・	9/30
2	偶数 1組	ようこそ先輩1 （新任教師からのメッセージ）	【全体】赴任地での奮闘の様子	10/7
3	奇数 2組	オムニバス講義1 佐藤・長澤・小柴 （講義15分・質疑感想10	【全体】それぞれの担任が自分の研究領域や関心をもっていることについて15分間講義。それを受けて、10分間、全体で質疑	10/14

	分)	や感想交流を行う。	
4 偶数 3組	オムニバス講義 2 杉中・生駒・原田 (講義 15 分・質疑感想 10 分)	【全体】それぞれの担任が自分の研究領域や関心をもっていることについて 15 分間講義。それを受けて、10 分間、全体で質疑や感想交流を行う。	10/21
5 対面	インターンシップ交流会	【クラス】	10/28
6 対面 4組	児童文学作家 くすのきしげ のりさんのお話	【全体】*くすのき氏は、元徳島県の教員。40 代に児童文学作家に転身・『おこだでませんように』『ええことするのは、ええもんや!』等の作品があり、作品の幾つかは道徳の教科書にも掲載されている。	11/11
7 対面 5組	ようこそ先輩 2 (採用試験への取組)	【全体】採用試験合格者のお話。合格までの道のり	11/18
8 対面	ゼミ説明会	【全体】	11/25
9 対面	インターンシップ報告会 1	【クラス】	12/2
10 対面	インターンシップ報告会 2	【クラス】	12/9
11 対面 6組	これからの ICT 教育について (松原市教育長のお話)	【全体】	12/16 ←
12 対面	教育に関するレポートづくり (2・3・4・6・7・11 回の授業を受けて問いを立てる)	【クラス】これまでの講義等を聞いて、書くレポートのテーマを決め、レポートの構想を立てる。 その後、クラス内で交流をする	12/23
13 対面 1組	ようこそ先輩 3 (教育実習に向けて)	【全体】	1/6
14 対面	2 年生のまとめと今後の目標	【クラス】	1/13
15		オンデマンド <レポート提出〆切>	1/20

「ようこそ先輩」と題して、3回、先輩のお話を聞いた。最初の新任教师からのメッセージは、Zoom 録画の配信という形であったが、先輩の現場での活躍ぶりに学生たちは目を見張っていた。後の2回は直接先輩の話聞いたが、質問等も活発に出され、学生たちの興味関心も高かった。外部講師としては、児童文学作家のくすのきしげのりさん(オンライン)、松原市教育長の美濃氏(対面)のお話をお聞きした。いずれも学生の心に響き新しい学びを得ることのできたお話であり、教師をめざす学生たちにとって有意義なものになった。

11月になんとか対面でゼミ説明会を開催することができ、その後、研究室訪問の期間を設定し、1月には3年生所属するゼミを決定することができた。ただ、1月からコロナ蔓延のため、どのゼミもプレゼミの開催が難しく、新しいメンバーの顔合わせがなかなかできないままであった。

12月に、インターンシップの報告会を行った。各自 PP を使った報告としたが、どの報告も自身の経験を生かしたよい PP となった。なかなか情報交換の機会がないので、こうした活動は他の人たちの取組の様子を知るよい機会となった。

<成果と課題>

(1) 成果

- ・コロナ禍という大変難しい状況下ではあったが、様々な工夫を行い、教育基礎演習Ⅰ、Ⅱとしてふさわしい学修を学生たちに提供することができた。また、学生たちも、こうした中で担任たちとのコミュニケーションを深めつつ、学んでいくことができた。学生たちの ICT スキの向上もみられた。
- ・外部講師を招くことや先輩の話を聞く機会は、学生にとって様々な考え方や取り組みを知るよい機会である。今後も位置付けていきたい。
- ・ゼミ説明会は、今年度は、各ゼミのブースをつくりそこに所属学生がきて説明をするという方法をとった。活発なやりとりができた。
- ・アカデミック・ライティングの基礎を学ぶ機会を1年生より設定してきたが、学生たちがすこしずつ「書く」ことに慣れ、スキルが向上していく様子が見られた。

(2) 課題

- ・外部講師招聘について、キャリア形成という視点から、学校現場だけでなく子ども関連の企業や子ども食堂の取組等、もう少し多様な子どもとかかわる仕事について知る機会があってもよいのではないか。
- ・ゼミ説明会については、ゼミ担当の教師がきちんと話をした方がよいのではないかという声もある。一長一短があると思うので、様々な考え方の収集がまず必要であろう。
- ・担任と学生が1対1で話をする機会の設定が難しい。しかし、その必要性はある。オンラインの活用が今後は望まれる。
- ・担任団も他に様々な業務をもっており、学年会の設定が非常に難しかった。
- ・オンラインで済ますことができることが増えた半面、オンラインで済ましてしまっただけという問いも必要であり、対面で話や講義をすることの意義を今一度、問い直したい。特に、来年度3年生になる学生は、大学に足を運んだ時間がかなり少なくなっている。今後積極的に、経験や体験を通して学ぶことをとり入れていく必要があるのではないか。

(附記) 本報告書は、FD委員2名が作成したものである。

本報告書における「4. (2) 教育基礎演習について」部分は、原田三朗先生にデータや草稿をご提供いただいた。ここに附記し、御礼申し上げます。

(文責 坂本 暁美・永田 麻詠)

教育学部 教育学科 幼児教育保育コース

1. はじめに

本コースは、平成 31 年度学部改組に伴い新設されたコースであり、令和 3 年度末で開設後 3 年を経過した。幼稚園教諭一種免許状、保育士資格の取得を主とし、小学校教諭一種免許状の取得も可能であり、コースの基本方針として、この 3 種免の取得を推奨し、コース運営を行っている。改組前の小学校・幼児保育コースから、幼児教育保育コースに刷新されたことにより、これまで以上に保育者（幼稚園教諭、保育士、保育教諭）の養成に力点をおいたコースとなっている。

入学定員 60 名に対し、令和 3 年度末の在籍学生数は、1 年次生 64 名、2 年次生 64 名、3 年次生 66 名であり、8 名のコース教員で運営を行っている。コース教員の専門分野は、幼児教育学、保育学、児童福祉学、音楽学、発達心理学、教育方法学、健康・スポーツ科学と多岐にわたり、それぞれの専門性を活かしながら保育者養成に従事している。

本コースは、以下の 3 つのディプロマポリシーを設定し、学生指導にあたっている。

1) 保育者としての自己分析・自己研鑽の力

学びや実践を通して多様なニーズのある社会、保育施設等、子どもに応えることができる専門的知識および実践力、指導力を身につけ、「いい先生」とは何かを常に問い続け、自己の実践を振り返り、自己を高めていくことができる。

2) 保育者としてふさわしい豊かな人間性

多様な立場、考え方の存在を認め、「いい先生」になるという強い意志と情熱および保育者としての使命感や責任感を持ち、子どもの多様なニーズを共感的に理解し、課題の解決に他者と協働して取り組むことができる。

3) 変化する社会、保育施設等で活躍できる力

学びや実践を通して多様なニーズのある社会、保育施設等、子どもを的確に理解し、専門的知識および実践力、指導力を基に協働して課題の解決や改革に取り組み、実現することができる。

2. 大学基礎演習について

大学基礎演習は 4 年間の学びを豊かなものとし、大学全体やコースのディプロマポリシーを実質化する上で、極めて重要な科目である。本コースでは、60 数名の学生に対し、3 名の教員が担当者となり、1 クラス 20 数名による少人数授業を可能とし、授業内容によってクラス別／コース全体を使い分け、授業を展開した。

夏学期の大学基礎演習Ⅰ及び冬学期の大学基礎演習Ⅱの到達目標は以下のとおりである。

<大学基礎演習Ⅰ 到達目標>

- ①大学での 4 年間の学びを理解し、自分自身の目標と見通しをもって学習をするための心構えをもつ。
- ②大学で学ぶ上で必要なスキルと知識を習得する。
- ③幼児教育の現状と教員の仕事について理解する。

<大学基礎演習Ⅱ 到達目標>

- ①論理的に考えて発表したり、意見交流したりする中で柔軟に考える力を習得する。
- ②基本的な学びのルールを知る。
- ③将来の展望を持つ。

これらの到達目標を掲げた上で実施した、具体的な授業内容は以下のとおりである。

<大学基礎演習Ⅰ 授業内容>

- 第1回目：大学での学びと生活 (1) 履修登録の説明、PCの使い方
- 第2回目：大学での学びと生活 (2) クラス交流、履修登録の確認、IBUネットの使い方
- 第3回目：大学での学びと生活 (3) Zoomを使ってみよう
- 第4回目：大学での学びと生活 (4) 大学生活で困っていることの相談交流
- 第5回目：大学での学びと生活 (5) 講義の聞き方・ノートの取り方の交流
- 第6回目：大学での学びと生活 (6) 課題「高校と大学の違いを考えよう」の説明
- 第7回目：大学での学びと生活 (7) 幼児教育保育コースの4年間の学び
- 第8回目：読み方 (1) 「読む」ことへの理解
- 第9回目：読み方 (2) 実践と交流—「読み」を交流する
- 第10回目：読み方 (3) 実践と交流—レジュメを書く
- 第11回目：読み方 (4) 絵本の読みを体験 (2年生の発表会に参加 その1)
- 第12回目：読み方 (5) 絵本の読みを体験 (2年生の発表会に参加 その2)
- 第13回目：読み方 (6) 課題を踏まえた実践と交流
- 第14回目：「読み」から課題・レポートの表現へ
- 第15回目：どんな教員・保育士をめざすのかを考えよう

<大学基礎演習Ⅱ 授業内容>

- 第1回目：冬学期のプロジェクト①のテーマと計画の提案
- 第2回目：Zoomを使いこなそう
- 第3回目：プロジェクト①の実践 (1) —絵本を探そう
- 第4回目：プロジェクト①の実践 (2) —絵本の「読み」のグループ交流
- 第5回目：プロジェクト①の実践 (3) —絵本の「読み」の全体発表交流
- 第6回目：プロジェクト②のテーマ「専門文献を読み解き、自分の見解を明確にし、レポートを作成しよう」の説明
- 第7回目：2年生との交流—設定保育活動を体験しよう
- 第8回目：専門文献のレジュメを作成する
- 第9回目：「読み」の交流 (1) —専門文献の読みのレジュメ交流
- 第10回目：「読み」の交流 (2) —専門文献の「読み」を深める
- 第11回目：「読み」の交流 (3) —「対話型論証」を読み解き、自分の見解をつくる
- 第12回目：レポート交流—レポートの書き方 (レポートの構成、書式とマナー、表現の洗練、引用方法ほか)を確認しよう

第13回目：教育・保育という仕事について考えよう（1）—専門家の話に学ぶ

第14回目：教育・保育という仕事について考えよう（2）—専門家の話から学んだ事の交流

第15回目：どんな教員・保育士をめざすのかを考えよう

令和3年度は令和2年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の拡大により、授業運営も多大なる影響を受けた。大学基礎演習においても同様であり、1年生対象科目ということを見ると、令和2年度の経験値を生かしつつも、授業実施のための新たな工夫や個々の学生に応じた対応が求められた。そのようななか、担当教員の細やかで丁寧な対応により、当初掲げていた到達目標は概ね達成できたものとする。特に、コースのディプロマポリシーのポイントの1つとなっている「他者と協働する」ということについて、大学に登学できない（あるいは偶数・奇数半々の登学）という制限のあるなかで、オンラインツールを活用したりして、効果的に盛り込むことができた。1年生間のかかわりだけでなく、2年生とかかわる機会も設け、「縦のつながり」のなかで協働する経験をしかけ、事後の1年生の振り返りから、大変有意義な機会となったことが窺われた。

一方で、この1年間、いわゆる「対面」での経験を積み重ねることができなかったのは事実であり、そのことの影響が2年生以降の生活で表れてくる可能性も想定される。2年生以降も「教育基礎演習」の担当者が中心となり、細やかで丁寧な対応を心掛け、不足している経験を補えるよう、コース全体で協議していきたい。

3. 相互授業参観について

令和3年度冬学期に実施した相互授業参観について、コース教員が設定した公開授業一覧を以下に示す。新型コロナウイルス感染症の影響もあり従前のような実施は難しかったものの、授業の質の確保に一定の効果があったものと思われる。引き続きよりよい授業運営に向けて、コース教員間で情報共有を密に行っていきたい。

担当教員	月日	曜日	時 限	公開授業科目名	教室	遠隔あり	合評会
石田 陽子	11月22日	月	2	教育専門演習Ⅱ	6-251	○	授業終了後
小川 圭子	11月19日	金	4	保育内容総論	4-414	○	授業終了後
小磯 久美子	12月3日	金	3	保育内容理論と方法「環境」	4-207	なし	授業終了後
田辺 昌吾	12月7日	火	5	保育方法論	5-211	○	授業終了後
丹羽 智美	12月8日	水	1	子ども家庭支援の心理学	4-316	○	授業終了後
山田 綾	12月7日	火	2	子育て支援論	4-207	○	12月7日3限
吉田 康成	11月18日	木	3	運動基礎Ⅱ	サブアリーナ	なし	授業終了後
吉田 祐一郎	11月19日	金	4	社会的養護Ⅱ	4-412	○	授業終了後

4. コース独自の取り組みについて

(1) 「保育インターンシップ」の授業運営

「保育インターンシップ」は新カリにおいて新設されたコース専門科目であり、4セメスター配当である。コースの全教員が担当者となり、週1回、保育所等の保育現場でインターンシップを行うとともに、定期的にインターンシップの振り返りを行う授業である。しかし、令和3年度は令和2年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響により、当初予定されていた授業内容の実施が困難となったことから、コース教員間で何度となく協議し、「学生が主体的に学ぶ」ことができるよう、授業内容・方法を工夫し、実施した。主な内容は以下のとおりである。

- ・自分たちが「保育インターンシップ」の授業で、どのような内容を学びたいのか、主体的に考え、受講者間で議論する。
- ・保育現場と大学の教室とをZoomで結び、保育環境や子どもたちの姿を画面を通して観察し、園長先生との対話を通して、保育現場の理解を深める。
- ・現場保育者をゲストスピーカーで招聘し、保育現場についてさまざまな観点から聞き取りを行い、一歩踏み込んで保育について学ぶ。
- ・保育現場の半日現地体験を行い、事前に設定した観察したい内容を現場で確認するとともに、疑問点等を保育者に質問し、主体的、対話的で深い学びを実現する。
- ・現地体験の報告をするとともに、他者の報告に対して自分の経験を照らし合わせて、質問したり感想を述べたりする。

当初予定していた授業内容とは異なったものの、結果として学生のアクティブラーニングを促すことができ、またコースの全教員が担当者であったことから教員間の協働も促されることとなった。通常、ゲストスピーカーとの調整や招聘時の授業運営は教員側が主として行ってきたが、本授業では可能な限り学生が行うようにし、授業内容だけでなく授業の運営に関しても学生の主体性が発揮される場となった。次年度以降もコロナ対策も含めて、引き続き柔軟な対応が求められることから、この授業運営の経験を生かしていきたい。

(2) 教育実習、保育実習に係る情報共有

本コースでは、年間4回の実習が実施される(4セメ2月「保育実習Ⅰ(保育所)」、5セメ8月「保育実習Ⅰ(施設)」、6セメ9月「教育実習(幼稚園)」、6セメ2月「保育実習ⅡまたはⅢ」)。令和3年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、各種実習において、日程の変更や実習先の変更、PCR検査の要件化など、その場その場でさまざまな対応が求められた。通常であっても実習では個々の学生の状況に応じて細かな対応が求められるが、コロナ禍での実習ではより一層必要とされた。そのためコース教員間での情報共有を迅速にかつ密に行う必要性があり、2週間に1回のコース会議での共有はもちろんのこと、Teamsを活用した。実習指導担当教員が中心となり、きめ細かな情報共有を行うことで、日程変更等はあったものの、全般的に無事実習を終えることができおり、個々の学生理解も深まったように思われる。また、実習先の保育現場とも密な連携をとることとなり、現場と協働した実習が実現できている。

5. その他（今後について）

令和3年度末で、コース教員2名が退職し、1名が所属コースが変更となり、令和4年度には3名の新任教員を迎えることとなる。これまでの8名のコース教員で積み上げてきたコースのよさを生かしつつ、新たなコース教員の特性も生かしてコースの運営を刷新していく必要がある。先に述べた実習関連では、その指導体制を強化し、引き続きコースの全教員でよりよい実習の実現のために協働する必要がある。また、令和4年9月末に文部科学省に申請する幼稚園教諭免許課程の改定について、学部改組の検討と並行して急ピッチで進めていく必要がある。さらに、令和4年度末で幼児教育保育コースの完成年度を迎えることとなり、初めての卒業生を輩出する。進路指導体制をしっかりと構築し、全学生の出口保障を実現することが、その後の質の高い入学生の獲得につながることをコース内で再確認する必要がある。これらのいずれもの実現には、各教員のFD活動が必須となる。コース教員間での協働はもちろんのこと、関係各部署とも連携を密にし、よりよいコース運営を実現したい。

教育学部 教育学科 英語教育・小学校コース

1. はじめに

本コースは、中学校・高等学校の英語教員免許状（基本免許状）を主とし、小学校の教員免許状（併修免許状）も取得できることを特色として設置されている。しかしながら、本コースへ入学してくる学生は、卒業後、英語を得意とする小学校教員になることを目指すものも多い。

2020年より小学校5、6年生で英語が教科化され、これに伴って一部自治体が中学校・高等学校の英語科教員免許状所持者に採用試験時の加点を行っているため併修免許状として、本学小学校コースの学生で英語プログラムを選び中学校・高等学校の英語科教員免許状を取得しようとする学生が増加している。

また入学時には、ほとんどの学生が教員志望だが様々な座学や実習を通じて自身の適性などを深く知り「最終的に一般企業への就職を目指すようになる学生もいる。

このように中学校・高等学校の英語教員志望、小学校の教員志望、一般企業への就職志望の3つのグループの学生に対しての教育を担うという状況が続いているが、一方学生のレベルと意欲にばらつきが大きくなり、コロナ禍が続くなか、さらにきめ細かい指導が必要になっている。

2. 大学基礎演習について

概要：本学の建学の精神の理解を基本に、大学における学修と大学生生活の意義と目的全般にわたり初歩的な自己課題を自覚するとともに、それを支える基礎的知識・技能・態度を修得することで、IBU及び所属する学部学科への所属感を確かなものとし、以降の学生生活への見通しを持つ。

到達目標

- ①本学に所属し、学ぶことの意義を理解し、以降の学生生活に対する自己課題を自覚できる。
- ②「大学生」としての学修に必要な基本的知識・技能・態度を修得できる。
- ③「教える」とは何かを理解し、自らの目的意識として具体化できる。
- ④教員や友人との適切な人間関係を築くことができる。

コロナ下での大学生生活への適応のために、教員間でリモート環境のノウハウを共有しあいながらアイデアを出し合い、授業開始前からLINEオープンチャットを開設して、細かく学生とのコミュニケーションをとり、教員やクラスメイトのサポートが入りやすい環境を作った。

夏学期は学籍番号奇数偶数でクラスを分けて交互に登学する体制で、クラスを2つに分け、教員が毎週交互に担当した。登学したグループには大学での学修に必要な知識・技能の習得を目指す授業を行い、リモートのグループには英語教員として必要なレベルの英語習得を目指す授業を行い、例年同様ウェブ学習システムであるリアリーイングリッシュを課題として利用し学生が常に英語の学習をしなければならない環境を作った。同時にPROGテ

スト結果をもとに個人面談を行い各々が抱えている問題や将来への展望などを聞き取り教員間で情報を共有した。また学習ポートフォリオの入力作業なども行った。

冬学期からは全面登学体制になり教員二人体制でティームティーチングを行った。また夏学期は半数ずつの登学という制約上大学基礎演習の到達目標の④「教員や友人との適切な人間関係を築くことができる」に関する指導が難しかったため、冬学期はこれを補う形の出の指導を行った。具体的にはグループディスカッションとプレゼンテーションを多用する形の授業形態にして学生同士、学生教員間のコミュニケーションが密に行われる体制を作った。具体的には本学が創立100周年を迎えることを踏まえ、IBU及び所属する学部学科への所属感を確かなものとするために和の精神の四恩の現代的解釈についてグループで話し合い発表させた。加えて創立100周年記念のマスコットキャラクターのデザインを全員に課し応募させた。

以上のような実践は常に教員同士でディスカッションを行いながら計画立案され、FSDの観点からは教員二人が話し合いながら授業を行うことにより教員それぞれの強みを活かし、相互に学び合う環境となっている。

また昨年度からの本コース新しい取り組みとしてハロースクール(1年生全員が四天王寺東中学校の教育現場を見学し授業観察を行う)を実施しているが、コロナ禍であるにもかかわらず本年度も受け入れていただき、教職へ意識づけをすることができた。また本年度はハロースクールの主たる業務を行ってきた大学基礎演習担当の教員が来年度引退することから、最初から両方の大学基礎演習担当教員が関わり、そのノウハウを意義を共有することができた。

3. 相互授業参観について

コースとして互いの授業は常に開かれた状態でありできるだけ相互に参観することを合意している。しかし授業の重なりや人員不足による多忙のため、コース教員同士の定期的な総授業参観は実施が難しいことに加え、コロナ対応で対面授業が減っているということもあり多くを実施することができなかった。

一方コロナ対策のために、リモートの授業方法や使用するソフトウェアなどについての情報交換の頻度が大きく上がり、授業の質向上に資した。また昨年度計画した通り令和3年度はリモート授業の相互参観や授業の録画をコース全体で共有し話し合うことができた。

4. コース独自の取り組みについて

例年、中高英語教育コースの学生には中学校・高等学校の英語教員志望、小学校の教員志望、一般企業への就職志望の3つのグループの存在を前提として、(1)英語力の向上、(2)授業の質改善へ取り組み、(3)教員採用試験対策(授業外)、(4)海外および国内研修などを行っているが、コロナ禍のために大幅な変更を余儀なくされた。以下例年通りできたものを(A)、変更あるいは実施できなかったものを(B)、逆に取り組みの質や量が増加したものを(C)として報告する。

(1) 英語力の向上

- ① (A) 資格試験受験の奨励と指導：英検などの資格試験受験を折に触れて奨励し、英語面接対策指導を行った。面接指導を受けた学生のほとんどが合格した。
- ② (A) iTalk 訪問の奨励
- ③ (C) 本年度より英語論文提出を卒業研究として4年生に義務付けた。
- ④ (A) ゼミの15回目の授業を合同で実施し、各ゼミの代表が自身の卒業研究について英語で発表した。
- ⑤ (C) 英語教育・小学校コースの学生3組が、第15回森田杯・英文毎日杯「ペアで紹介する日本文化英語プレゼンコンテスト」の予選に応募を決め指導を行った結果2組(1年生1組と3年生1組)が決勝に進出した。3年生は4位に入賞した。

(2) 授業の質向上に向けた取り組み

- ① (A) 全学的に年2回行われる授業評価「学生アンケート」を参考に授業改善に努めた他、授業改善について意見交換を行った。
- ② (A) 教職関連授業あるいはゼミ等で、その一部あるいは全部を英語で行い、学生への英語のインプットの機会を増やすと共に、英語による授業の実践例を共有した。
- ③ (C) Google Forms や Microsoft Forms をほぼすべての授業で導入し、学生の反応をリアルタイムで把握する、期限を決めてレポートをテキスト形式で入力させるなどの取り組みを行った。
- ④ (C) ゼミの授業の質担保のために、ゼミクラスでの日本語英語両言語での論文形式のレポート提出とゼミ内英語プレゼンテーションを行った。
- ⑤ (C) 授業の質担保のために、ゼミクラスでの日本語英語両言語での論文形式のレポート提出とゼミ内英語プレゼンテーションを行った。
- ⑥ (C) コース教員間で Mini Lecture を実施した。教員2名が自身の授業についてそれぞれ90分ほどの英語レクチャーを行った。

(3) 教員採用試験対策(授業外)

- ① (A) 3回生対象各種セミナー面接対策：5～6月、週1回
- ② (A) 4回生対象和文英訳・英語エッセイ・英語面接およびディスカッション対策：4月～9月、週1～2回
- ③ (A) 3回生および4回生対象各種エントリーシート添削：随時

(4) 海外および国内研修

- ① (B) 例年参加していたグローバルユースカンファレンス(8月初旬)が中止され参加できなかった。
- ② (B) アメリカ英語研修参加者(令和元年2月初旬)がコロナ禍によって中止

された。

- ③ (B) グローバル教育研修参加者(アメリカユタ州 令和元年2月中旬)がコロナ禍によって中止された。
- ④ (C) コロナ禍の中本コース学生一名が iTalk を通じてカナダ短期留学を実現した。
- ⑤ (B) 一昨年行ったマレーシア国民大学との交流が昨年同様実施できなかった。
(C) 国際キャリア学科とともに学長奨励金を得てオンラインでのソルトレークコミュニティカレッジ学生との交流を行った。これには本コースの教員がほぼ全員オブザーバーとして参加しその実施の様子やノウハウの共有ができた。

5. まとめ

本年度はコロナ対策で得た様々な、特にICT関係のノウハウや気づきをコロナ禍で失われた教育機会を回復させるために活用することができた。来年度からも本コースの教育の質のさらなる向上のために積極的に活用していく。

教育学部 教育学科 保健教育コース

1. はじめに

教育学部教育学科保健教育コースは、児童生徒の健全な発育発達と心身の健康の保持増進に関する専門的な知識・技能および教育現場に求められる実践力・指導力を有し、高い人格と倫理観、豊かな教養を備え、時代の要請に応える優れた養護教諭の養成教育を目的としている。本コースでは、養護教諭養成を主軸とした教育プログラムを展開しており、併せて、小学校教諭1種免許状が取得できる。

学生にとっては4年間を通じて、多忙な学習スケジュールとなるが、大学での学びの質をより向上させるため、後述する保健教育コース独自の教育活動も実践しながら、充実した魅力ある「養護教諭・小学校教諭養成課程」の構築に努めている。また、定期的にコース会議を行い、講義の進行状況、情報通信技術（Information and Communication Technology：ICT）教材を用いた講義方法の有効性、学生による授業評価、教員の教育・研究活動状況等について討議を重ね、教員の資質の維持向上も図っている。

昨今、多様な健康課題と複雑な家庭・社会環境を背景に持つ児童生徒が増加し、児童生徒の健康管理に加え、心身のケアを担う養護教諭の職務及び保健室の果たす役割が、以前にも増して、重要視されている。コース教員は、定期的に国内外の学術集会に参加し、「チーム学校」の一翼を担う養護教諭養成に関する最新情報を収集するとともに、本コースにおける学修成果も発表する等、他大学との交流も深めながら、時代のニーズに応じた教育プログラムの導入と実践、省察と改善に努めている。

(1) 取得可能な免許・資格

主免許状：養護教諭第一種免許状、中学校・高等学校教諭第一種免許状（保健）*

併修免許状：小学校教諭第一種免許状

資格：第一種衛生管理者*、学校図書館司書教諭、ピアヘルパー受験資格*、
社会福祉主事任用資格、児童指導員任用資格

〔備考：* 平成31（令和1）年度入学生からは取得できない。〕

(2) カリキュラムの概要

1年次は、教育実践理解期にあたり、教育者として必要なコミュニケーション能力や表現力及び幅広い教養を身につけ、教職への関心を深め、意欲の向上を図る。主な専門科目として、「養護概説」、「学校保健」、「解剖生理学」、「看護学／学校看護学」、「栄養学」等を開講し、養護教諭の職務遂行に必要な知識と技術を習得する。

2年次は、基礎的教育実践力養成期にあたり、「救急処置／学校救急処置」、「公衆衛生学」などの専門科目を通じて医科学的知識の更なる充実を図り、「精神保健」、「小学校専門科目・教科教育法」を通じて、子どもの学習能力・心身の発育発達と小児期・学童期・思春期特有の心身症及び心のケアについて学びを深める。また「臨床看護学演習」及び「臨床実習」では、医療機関における機能と役割を理解し、医療・看護の最新の知識を習得するとともに、学校と医療機関との連携を理解し、生命と健康の尊さを学ぶ。さらに、「学校実地演習／イ

ンターシップ・スクールサポーター」とその後の「学校・保健室ボランティア活動」を通じて、教員の職務や学校の仕組み等について理解し、教職への適性も確かめ、次年度以降の「養護実習・教育実習（初等教育）」に備える。

3年次は、発展的教育実践力養成期にあたり、「健康相談活動（3年次）／健康相談（2年次）」、「微生物学」、「保健統計学」などを受講し、学校における保健指導や健康教育に必要な知識と技術を養う。また、「養護実習」では、教育現場での養護教諭の職務と役割、保健室経営および児童生徒の健康課題、保健組織のあり方等を理解するとともに、健康診断や健康相談、健康教育について学習し、養護教諭としての総合的な教育力・使命感・責任感を身につける。さらに、「保健科教育演習Ⅰ・Ⅱ／教育専門演習Ⅰ・Ⅱ」では、養護教諭が行う調査・研究方法の基礎を学び、自ら研究課題を見つけ、意義を見出し、積極的に研究心を高めることにより、次年度の卒業研究に繋げる。

4年次は、研究・研修期にあたり、「保健科教育演習Ⅲ・Ⅳ」で、大学生生活の集大成として、卒業研究に取り組み、自らが立てた仮説を検証するため、収集したデータを多角的に分析し、成果をまとめ、結論を見出し、卒業研究としてまとめる。また、小学校教諭の免許取得希望者は、小学校での4週間の「教育実習（初等教育）」に参加する〔新カリキュラムでは、教育実習（初等教育）は3年次に行う〕。「教職実践演習（養護教諭）」では、大学4年間で学んだ知識と理論および養護実習等で修得した教科指導力や保健指導力並びに健康相談や救急処置法の技能と方法を統合し、使命感や責任感に裏打ちされた学識と技能、実践的な指導力を有する養護教諭としての資質の構築とその確認を行う。

2. 大学基礎演習について

1年次に開講する大学基礎演習Ⅰ・Ⅱの目標と主な内容は下記の通りである。

(1) 目標

大学基礎演習Ⅰ

- ① 本学に所属し、学ぶことの意義を理解するとともに、今後の学生生活に対する自己課題を自覚する。
- ② 大学生として、また教育学科保健教育コースに所属する学生として、教職を目指すための学びに必要な基礎的知識・技能・態度を身につける。
- ③ 自分の将来を社会との関係で考え、教職への、社会人への問題意識を持つ。
- ④ 社会に生きる人間として、教員や友人との信頼関係を築く。

大学基礎演習Ⅱ

- ① 本学・本学科に所属して自ら学ぶ意義と課題を把握する。
- ② 社会人および教員の準備段階として位置づけ、大学生および教育学科保健教育コース所属の学生としての学びに必要な基礎的知識・技能・態度を身につける。
- ③ 自分の将来を社会との関係で考え、教職への、社会人への問題意識を持つ。
- ④ 自分の考えを発表し、お互いに討論する中で教員や友人との信頼関係をつくる。

(2) 演習の概要と指導上の工夫

令和3年度においても、COVID-19 感染拡大の影響がつづき、感染状況に応じて、対面授業、リアルタイムのオンライン授業、動画等を用いたオンデマンド授業、課題学習等を、効果的に組み合わせながら講義・演習・実習を展開した。

①コロナ禍のもとのオンライン授業：ICTの積極的活用

令和3年度入学生より、ノート型パソコン必携となった。初回の大学基礎演習にて、IBUnetの使用法全般の解説と、「課題管理」を使って、レポート提出および課題への取り組み等ができるように指導した。また、「授業資料」にアップロードされた電子媒体の演習資料のダウンロードの方法、提示されたURLへのアクセス、オンデマンド教材の利用方法等についても解説した。加えて、「クラスフォーラム」や「Q&A」から質問やディスカッションをする方法についても説明をし、積極的な利用を通して、オンライン授業に慣れることができるように導いた。

②図書館活用法

図書館の利用については、図書館課課員による図書館ツアーと図書・文献検索オリエンテーションを行った。本演習では、OPACを用いて、本学蔵書の中から興味関心のある本を検索し、実際に数冊借りて読むという実践を行った。また、各授業でのレポート・論文作成に必要な論文・資料収集を円滑に行うため、CiNii、Medical Online、EBSCO host、医学中央雑誌等、学術雑誌検索法についても習得してもらった。

一連の図書館活用法を学んだ後、コース内でビブリオバトルを行った。発表の内容や技法等、学生間で評価をさせ、最も評価の高かった上位4名が、図書館主催のビブリオバトルに出場した。優勝は叶わず、全国大会に出場できなかったが、次年度にチャレンジする良きステップとなった。本プロジェクトを通して幅広い領域の知識と教養を習得し、また、プレゼンテーション力、ディスカッションする能力を高めることができた。

③学外実習

12月8日(水)および15日(水)、大学基礎演習受講生40名が、四天王寺小学校にて教育現場での初めての实習となるハロースクールに参加した。受講生は、少人数のグループに分かれ、小学校1~6年生の各クラスにて、半日見学実習を行った。また、本コース卒業生が、同小学校に養護教諭として勤務しており、先輩から養護教諭の職務の実際と私立学校における保健室運営の特徴等についても学びを深めることができた。

④養護教諭が担う保健教育

養護実習では、保健室での実習だけでなく、保健教育を担当する機会が増えている。そこで、大学基礎演習Ⅱにおいて、1年生を対象に、養護実習・教育実習(小学校教諭)を終えた3・4年生が実習先で実践した研究授業を再現するという取り組みを行った。本取組は、学年間連携を図り、先輩から後輩へのピアエデュケーションの一環と位置付けるとともに、養護教諭が実践する保健教育の実際について学ぶ好機となったと考える。

また、演習担当教員が、学校現場で使用されている教科書と学習指導要領解説をもとに、小学3年生から中学3年生までの保健科教育について解説を加え、学習指導案の作成方法についても指導した。これらの演習を踏まえ、自身が授業を担当したい単元を選び、なぜその単元を選んだのか、児童生徒に何を伝えたいかを含めたショートスピーチコンテストを実施した。

⑤キャリア教育：教員採用試験合格体験記

今年度の本コース教員採用試験現役合格者数は、養護教諭2名（堺市1名、和歌山県1名）であり、「教員採用試験現役合格体験記」と題した講演会を実施した。教員採用試験に向けての対策だけでなく、本学で4年間をどのように過ごしたかについて詳細に語ってもらった。また、現役合格を果たした2名は、養護実習、小学校免許取得のための教育実習、加えて、学校ボランティア活動にも積極的に参加しており、保健室と養護教諭の役割、小中高等学校における養護教諭の職務の相違、児童生徒の健康事情や取り巻く社会・家庭環境等、多くを学んでいた。1年生は、先輩の体験談を聞くことで、養護教諭になるという目標が明確化され、学習意欲が更に高まったと思われた。

3. 相互授業参観について

令和3年度冬学期に実施した公開授業の実施日時、担当者と担当科目は下記の通りであった。授業参観終了後、合評会を実施した。

<岡本啓子>

日時：令和3年12月7日（火）3限 6号館253教室

科目：学校看護学Ⅳ

対象：教育学科保健教育コース2年 受講登録者数33人 出席25人 欠席6人
公欠2人（介護等体験実習）

参観教員：楠本久美子、松本珠希

内容：第11回「支援学校における学校看護実践の理解と支援・援助」

支援学校における養護実践時、児童生徒の心身の健康課題を幅広い視野で早期発見し、早期支援につなげる判断ができることを学修目標とした。幼・小・中・高校と発達段階別に養護実践を学んだあと、今回の支援学校課題は【疾病・障害がある児童生徒における事例を考え、養護教諭が進める身体審査・アセスメント・対処支援の展開を提示発表する】とした。支援学校における事例は「ダウン症候群」「脳性まひ」「自力排尿困難（自己導尿）」「自力排便困難（人工肛門）」とし、それぞれの担当学生が発表した内容を授業参加者でディスカッションして学びを深めた。その中で教員の解説を行いながら学生個々に考える時間をとった。授業終了後、IBUネット授業支援課題提出へ振り返りの提出を求めた。結果は「今までは通常の小中学校を中心とした学びが多く、支援学校での対応を想像することが難しかったが、障がい理由とせず様々な症状から疾患を疑う観察が大事」「普段の子どもとのコミュニケーションや鋭い観察眼を養うことが大切」「言葉だけでなく必要に応じて非言語コミ

コミュニケーションを用いる」「支援学校の子どもたちは、自ら保健室に来ることは少ないため、養護教諭の日頃からの観察が重要」「支援学校の子どもたちには、自らが納得・継続できる支援を考えることが大切」などと全員から学びが述べられ、目標達成度は高かった。

<楠本久美子>

日時：令和3年11月30日（火）1限

科目：養護概説

対象：教育学科保健教育コース1年生および再履修生

内容：「色覚検査と教育的配慮」

授業の目標は「①色覚検査の内容を知る②色覚異常児・生徒の教育的配慮について理解する。」であった。授業資料として資料はパワーポイントを用いた。

①現在、保護者向けに希望調査（平成26年～）を行い、色覚（個別）検査が行われていることや色覚検査の手順・方法について解説した。②色覚検査が定期健康診断から削除されて（平成14年）から10年間の色覚専門眼科医の調査研究及び眼科医会の全国調査結果を基に色覚異常と知らなかった当事者の困りごとについて解説した。③文科省の指導書を基に板書、掲示物、実験、観察、美術の授業での配慮について解説した。

学生の反応：授業後の小レポートから、多くの学生たちは色覚検査の必要性及び色覚異常の児童生徒の対応、配慮について理解していた。概ね目標としていた知識の習得がなされたと思われる。

<土居悟>

日時：2021年11月26日（金） 3限 6号館304教室

科目：労働基準法

対象：教育学科保健教育コース4年 受講登録者数38人 出席34人 欠席2人

公欠2人（教育実習）

内容：第8講「働くことをやめる」

労働契約の終わり方について教員から概説した。すなわち期間満了、辞職、解雇、定年制についてである。特に解雇については、具体的な判例を提示して、その根拠となる合理的理由と社会的相当性を判例ではどう判断したのかを学生に考えさせた。1例は、高知放送事件（最高裁S52.1.31）で、この事件では、アナウンサーが寝過ごしたため朝6時からのラジオニュースが放送できなかった事故が2回あり、そのため寝過ごしたアナウンサーが解雇された。このことは社会通念上是認できないとされ最高裁では、解雇無効とされたことを取り上げた。

学生の反応：授業終了時に確認の小テストを行った。小テストで理解度が良好であることを確認できた。学生の受講態度は熱心であり、卒業後に第1種衛生管理者の資格を得る者として、必要な知識についての学びを深めることができ、授業の目標が達成された。

<仲谷和記>

日時：2021年11月22日（月）3限 6号館 B353 教室

科目：学校看護学Ⅱ（疾病Ⅰ）

対象：教育学科保健教育コース1年 受講登録者数41人 出席40人（リモート受講者含む） 欠席1人

内容：「健康診断時に注意すべき疾病および異常：整形外科関連①（脊柱の疾患・障害）」

本授業では、「児童生徒等の健康診断マニュアル（平成27年度改訂版、日本学校保健会）」および「学校の運動器疾患・障害に対する取り組みの手引き（改訂版、運動器の健康・日本協会）」をテキストとして、「マニュアル」第2章「健康診断時に注意すべき疾病及び異常」第1項「整形外科関連」の「脊柱の疾患・障害」と、「手引き」第2章「子どもによくみられる運動器の症状・ケガ・故障」より「Q13 首が痛い」「Q17 腰が痛い」「Q22 側弯症ってなに？」の各項目とそれに関連する疾患について取り上げた。適宜、解剖生理学的事項について復習を行い、また、学生の理解が深まるよう、各種の医学書・文献に基づく図版を用いて視覚的で分かりやすい講義となるよう腐心した。学生の受講態度は良好で、熱心にノートを取り、学校・園で必要な医学知識についての学びを深めることができ、授業の目標が達成された。

<松本珠希>

日時：2021年11月24日（火）3限 6号館 A304 教室

科目：公衆衛生学

対象：教育学科保健教育コース2・3年生 受講登録者数34人 出席32人 欠席2人

内容：第9回「保健統計から心身の健康を探る：人口静態統計・動態統計」

公衆衛生学とは、胎児・新生児から高齢者まで、健康な人も病気を抱えている人も社会で生活するすべての人々の健康を増進し、疾病の負担の軽減と健康水準の格差を是正し、地域・国・地球レベルの健康への脅威に対処するための組織的な活動を実践・評価することを目的とした学問である。今回の授業では、国民衛生の動向2020/2021および厚生労働省、内閣府等、各省庁から発表された統計資料を用いて、各種健康指標の定義と算出方法、人口増減の経年的変化、その増減を左右する要因、本邦および諸外国の死因、主な疾病の疫学について解説した。受講生は、保健統計資料から、心身の健康の現状を学ぶとともに、各ライフステージにおける健康課題とその対策について考察した。加えて、児童生徒の健康の維持増進を図り、生涯に亘る健康管理能力を育成するにあたり、養護教諭としてどのような保健教育を展開すべきか、受講生間で意見を交わすこともできた。学生の受講態度は良好で、本授業で取り上げた領域に関する知識の理解と習得がなされた。

4. コース独自の取り組みについて

(1) ICTを活用した模擬授業実践演習

教育基礎演習Ⅰでは、コロナ禍の下での夏学期であったが、養護教諭の健康教育におけ

る指導力を高めるため、小学校5・6年生対象の保健科オンライン模擬授業を行い、相互評価を行った。短期間で、ウィズ・コロナの授業形態に慣れるとともに、ZOOMを巧みに操作する2年生は頼もしく、オンライン上で先生役・児童役を果たした学生達を、彼らの適応力と柔軟性を含め、高く評価している。

教育基礎演習Ⅱでは、中学生を対象としたハイブリッド型保健科教育の模擬授業実践（対面授業・オンライン授業の同時進行）を行うことで、養護教諭に必要な保健科指導力を高めた。

(2) コロナ禍の下での臨地実習

科目「臨床看護学演習」の一部に位置づく臨床実習は、コロナ禍で医療機関の実習受け入れが中止となったことから、学内実習に差し替えて授業を実施した。加えて、臨床実習経験をした上級生によるオンライン報告会を開催し、実体験からの学びをシュミレーションし、討議を重ねながら、各学生設定した課題に取り組み、地域保健と学校保健の連携、養護教諭に必要な学校看護学領域の知識と技術について探究することができた。

(3) 「保健科教育演習Ⅰ～Ⅳ」

① 目的

保健教育コースの「旧カリ：保健科教育演習Ⅰ～Ⅳ／新カリ：教育専門演習Ⅰ・Ⅱ&教育専門研究Ⅰ・Ⅱ」（専門ゼミ）では、3年次に下記5つの領域のいずれかを選択し、2年間に亘り、各領域の専門知識を習得するとともに、調査研究能力を養うことを目的としている。

- a) 学校保健看護研究（担当者：岡本啓子）子どもたちが、安全・安楽に学校生活を送るための支援について考える。「子どもの健康ニーズに対応できる専門性」、「学校と地域の連携やチーム学校による支援のあり方」等を中心に学習する。
- b) 学校保健研究（担当者：楠本久美子）：養護教諭の専門領域である「学校精神保健」「学校安全」「保健教育」「保健管理」等について学習する。現在「こころの研究班」「環境保健研究班」「食育保健指導研究班」「フラワーライフ研究班」があり、班独自の計画をたてているが、活動はゼミ生全員で分担している。「保健科教育演習Ⅰ～Ⅳ」以外に学外活動も行う。
- c) 小児保健研究（担当者：土居悟）：「小児喘息や食物アレルギーをもつ子どもの学校での健康管理」、「障がいをもつ子どもを対象とした音楽療法」、「児童文学『秘密の花園』における子どもと病気と教育について」など、学校と医療の協力関係や地域の人々と連携することを重視しながら、“子どもは未来である”ことを基調に、小児保健を多面的かつ学際的に学習する。
- d) 健康科学・社会医学研究（仲谷担当）：我が国の青少年を取り巻く社会環境、生活環境などの変化に伴い、家庭や学校、地域社会における健康課題は多様化、深刻化していると言われている。本演習では、そういった健康課題の中で、特にアルコール問題に対して様々な角度から学習する。
- e) 健康科学・女性心身医学研究（松本担当）：「心身相関（心と体のつながり）・心身症（心

のからくりが関与して起きる体の病) のメカニズム]、「女性特有の健康問題」、「女性のキャリアとライフプラン」「性差と健康」、「美容とアンチエイジング」、「生活習慣（運動・食事・休養）と健康」、「癒しと健康」、「人生 100 年時代の健康管理と生き甲斐」等、心と体の健康について様々な角度から学習する。

② 主な内容

- a) 各専門ゼミの卒業研究作成マニュアルを作成し、そのマニュアルを基に、卒業研究への心構え、卒業論文の作成方法、年間調査研究計画の立て方、教員採用試験及び就職活動との両立の仕方、過去の卒業研究の事例等の内容を含めたオリエンテーションを行う。
- b) 各研究領域の学術論文（原著論文・総説論文・症例研究報告）を読み、研究内容を理解するだけでなく、方法論、結果の解釈の仕方を学び、また、ゼミ内で討論を重ねることにより、各研究領域への理解を深める。
- c) 学術論文及び過去の卒業研究を事例として取り上げ、各種研究方法（質問紙調査、インタビュー調査、フィールド調査、行動観察、実験、実践研究、資料分析、文献研究、教材研究・教材制作）の実際について学ぶ。
- d) 文献検索ツールの使用、図書館利用のコツ、公的資料の使い方等、文献収集方法について学ぶ。
- e) 収集したデータの分析及び解釈の仕方、統計処理、図表の作成等の演習を行う。
- f) 学術論文及び過去の卒業研究を事例として取り上げ、卒業論文の構成（要約・諸言・方法・結果・考察・結論・謝辞・引用文献）を学ぶ。論文作成開始後は、文章の点検及び推敲の仕方についても、各専門ゼミで指導する。
- g) 定期的に研究発表（卒業研究構想発表と現況報告）を行い、4 年次の最後のゼミにて、卒業研究発表会を行う。
- h) 学術研究の実際を学ぶため、学会や研究会等に積極的に参加する。

③ 進捗状況

保健教育コースの専門ゼミでは、3・4 年次生合同で実施している。2 学年間の交流も深まり、また各専門ゼミでの研究テーマについて、毎回、興味深い発表と活発な討論が繰り広げられており、各自の卒業研究に意欲的に取り組んでいる。しかし、本コースの大半が教員を志望しており、教員採用試験対策講座や学外実習、学校ボランティア活動を含む過密な学習スケジュールと並行して卒業研究を進めなければならないのが現状である。週 1 回（月曜 2 限）の専門ゼミの時間だけでは各自の調査研究を行う十分な時間が確保できないため、指導教員と担当学生のスケジュールを調整しながら個別に対応をしている。

上述した卒業研究への取り組みに加え、学術研究の実際を学び、研究力を有する教員を養成するためにも、学生には、学会や研究会への積極的な参加を促している。保健教育コースの専門ゼミが開始してからは、学生は、日本養護教諭教育学会、日本学校保健学会、日本心身医学会、日本女性心身医学会、日本思春期学会等に教員とともに参加し、また地域保健研究の一環である HIV 予防啓発活動、禁煙教育指導者講習会、薬物乱用防止教育指導者講習会等に関する各種研究会や講習会に参加し、養護教諭としての更なる知識と技術の習得に努

めている。

(4) 養護教諭教員採用試験対策講座

3年生を対象に、希望受験地をもとに、都道府県別のグループを編成し、受験地の出題傾向を考慮しながら、教員採用試験対策講座を実施している。筆答試験対策の主な内容は、「学校保健の構造・学校保健計画」、「からだのしくみと働き」、「学校環境衛生」、「学校給食」「健康診断」、「健康観察・健康相談」、「こころの健康」「学校安全・応急手当（救急処置）」、「感染症・疾病予防対策」、「保健室の役割・養護教諭の職務」、「保健教育・学習指導要領」、「事例・対応」、「法規・法令」、「答申・時事問題」等である。本講座では、過去に出題された問題や実践問題を活用し、詳細な解説を加えることで、各領域の知識の定着を図っている。また、各ゼミ単位でも、空き時間を利用し、対策講座を実施している。二次試験対策では、希望する実技予想試験について解説と実技訓練指導を行い、併せて、模擬（集団）保健指導と授業、面接指導を行っている。加えて、最近の学校保健の動向、コロナ禍における養護教諭の職務と保健室の役割、児童生徒の心身のケア等について討論をする機会も設け、学生たちの意見交換を通して思考力と判断力の育成も図っている。

本年度の養護教諭教員採用試験現役合格者は2名（和歌山県1名、堺市1名）であった。伝統ある養護教諭養成機関として、有能な養護教諭を育て教育現場に確実に送ることこそ、本コースの使命ともいえる。今後は、養護教諭としての現場即戦力を養うためにも、救急処置に関する実例や判例についての学習を強化し、学校看護技術や保健指導などの実践力をさらに積む時間も確保するなど、より一層の教育プログラムの改善と発展を図りたいと考える。

(5) 4年次生対象卒業前対策講座

卒後、養護教諭として勤務する4年次生を対象に、集中講義形式で卒業前対策講座を行っている。主な授業内容は、保健管理（救急処置、健康診断、健康相談、保健指導、健康観察など）及び保健教育（保健学習、保健指導）、保健組織運営、学校安全に関する業務の確認と復習、新たに浮上する健康課題への対処法等である。

(6) 高大連携事業

① 高大連携校3校における定期健康診断の補助実習

本実習は、本学での演習（学校看護学演習・臨床看護学演習）、臨床実習、養護実習を経験した4年次生を対象に、エクステンションセンター事業と教職実践演習（養護教諭）の一環として行われるものであり、健康診断の内容及び手順、検査方法を実地で学ぶことにより、養護教諭に必要な知識・技能の習得に役立てることを目的としている。この高大連携事業は、大阪府立富田林高校、大阪府立懐風館高等学校、大阪府立長吉高等学校の計3校にて実施している。本コース4年生の「積極的且つ意欲的な健診補助への取り組み」、「養護教諭と現場の教員から多くを学ぼうとする真摯な態度」、「生徒への丁寧な対応」等が、常に高く評価され、有意義な学外実習となっている。

②高大連携校におけるピア活動プログラム

楠本ゼミが、懐風館高等学校にて、高校1年生を対象に、「性に関する指導」を担当し、望まない妊娠を防ぐとともに、月経周期や妊娠のしくみ、性感染症等、正しい知識を習得し、的確な判断力を養うための保健指導を行った。

③高大連携事業（大学授業体験出張講義）

平成25年度より、大阪府立河南高等学校のe（エスペランサ）コースで高大連携事業の一環として、教育学部を目指す生徒を対象に授業を行っている。本授業（担当者：松本珠希）では、我が国における養護教諭（保健室の先生）の歴史、諸外国の養護教諭、養護教諭の存在と役割、保健室の機能、子ども達を取り巻く現代的健康課題など、多岐に亘り、詳しく解説した。保健室は、けがをしたり気分が悪くなったりした時に処置をしてもらうところだが、心身の健康について学ぶ学習室でもあり、最新健康情報の発信基地でもある。朝食欠食や夜更かし、運動不足、喫煙や過剰な飲酒等、不健康な生活習慣が心身の健康にどのような悪影響を及ぼすのか解説するとともに、児童生徒の心に響く健康教育（保健の授業づくり）についても紹介した。

(7) 学外研修

① 日本養護教諭養成大学協議会への参加

2021年度日本養護教諭養成大学協議会総会は、COVID-19による国の緊急事態宣言を受けて、感染予防上の観点から、8月26日に、協議会HPで総会資料と活動報告書の配信がオンラインにて始まり、その後意見聴取、議決と進められた。

同協議会養成教育フォーラムおよびセミナーは、以下の通り、Zoomによるオンライン形式で開催され、岡本啓子が代表評議員として参加・議決に関わった。

日時：令和3年9月10日（金） 9時30分～17時30分

<プログラム>

1. 開会の辞、会長挨拶 9時30分～9時40分

2. フォーラム 9時40分～12時20分

講演1：朝倉隆司先生（東京学芸大学）

「養護教諭養成に関わる大学教員の資質向上—研究力の向上」

講演2：文部科学省 健康教育・食育課長 三木忠一氏

「養護教諭養成大学協議会ならびに養護教諭への期待」（オンデマンド配信）

3. 総会 13時10分～14時15分 総会資料は事前に配付済

4. セミナー 14時25分～16時30分

5. 閉会の辞 16時30分

6. 情報交換会 16時40分～17時30分

フォーラム内容「講演1」より、養護教諭養成に関わる教員としての資質の向上に関わる内容として、研究力の向上（研究的対話の大切さ、自分をどう育てるのか？）を考える機会

となった。「講演2」からは、学校保健を取り巻く課題と政策の動向について深く考えることができ、新型コロナ感染状況を含む学校防災を念頭に置いた養護教諭養成に努めることを確認した。その他セミナーや情報交換会では、養成に関わる教員間のディスカッションに参加して課題共有および検討を行った。

経営学部 経営学科

1. はじめに

経営学科では、大学 4 年間の学びを支え、就職活動には不可欠である基礎学力の向上からキャリア形成までを視野に入れ、卒業時点において有意な人材として社会からの評価が得られるレベルの能力・知識・スキルが獲得できることを目標としている。本学科の授業科目は、経営学・法学の基本を学科共通科目として開講し、学科共通教育科目から専攻ごとの専門教育科目へと、特色を活かして専門性を深めることにより、段階的に無理なくそれぞれの分野が修得できるように科目を配置している。

平成 28 (2016) 年度の専攻分離後、令和元 (2019) 年度に完成年度を迎え、公共経営専攻から公務員として、令和元年度は 14 名、令和 2 年度は 17 名、令和 3 年度は 20 名を輩出した。採用試験のエントリー手続きから始まり、最終面接に至るまで、多様に支援し、学生も長期にわたって受験を続けてきた成果である。また、企業経営専攻においても、コロナ禍での就職活動は簡単ではなかったが、不安を抱える学生たちをゼミ担当教員、キャリア担当教員が継続して励まし、支援した結果でもある。

企業経営専攻では、授業の特色に応じてアクティブラーニングを積極的に導入するなど、多様なアプローチで学生の学びを支援する体制を整えている。学生がめざすキャリアにおいて必要となる知識やスキルについては、資格試験なども活用して習得度を確認するとともに、成功経験を重ねながら、能力開発が促進できるように、「学科独自の取り組み」にあげる科目を効果的に配置している。

さらに、学科の模範学生のモチベーションを高め、多様に活躍できる人材として成長を促すために特待生制度 (奨学金制度) を設けている。ゼミ等において、学生の適性とめざすキャリアに応じた指導を行っている。特に公務員や組織のリーダーとして活躍できる人材、起業家などの輩出をめざしていることから、専門性を高めると同時に、他者を思いやり、社会のために活躍できる使命感、倫理観を有する人材に育成することにも留意している。

上記の目標を達成するために、多様なことに挑戦する機会を設け、段階的にできることを増やすことによって学生のやる気を引き出し、成功体験を積む機会を提供する環境づくりとして、経営学科が令和 2 年度に取り組んできた特色ある授業科目および取り組みは以下のとおりである。

2. 大学基礎演習について

大学基礎演習 I では、「大学生としての基本を学ぶ」、大学基礎演習 II は「大学生として学内外での学びを深める」をテーマに、学科専任教員の全身体制でクラス別授業、全体授業を効果的に行っている。授業の実施にあたって、学生に関する情報は学部会議やメール等を活用して教員間で共有しながら進めている。公共経営専攻、企業経営専攻の両専攻の学生が、進路に対する視野を広げ、積極的にコミュニケーションできる環境づくりに努めた。

大学基礎演習 I は、全体での履修指導を対面で実施し、今年度からのノート PC 必携化に対応した PC の操作説明等も取り入れて万全を期した。ただ、4 月中旬から全面遠隔授業と

なったため、大学生生活を円滑にスタートするための「キャンパスツアー」や「友だちづくり」の授業は後送りせざるを得なかった。その分、個別面談、オンラインでのクラスコミュニケーション、オンデマンド動画による PC 課題学習を効果的に組み合わせた授業を展開し、制約のある中でも最大限の工夫により、大学の学びや学生生活の意義等を紹介し、考えられるよう配慮した。さらに、「学びの基本」と銘打った大学での学びをオンラインでも取り組めるように再構築し、新聞の読み方、著作権、文書の書き方などについてのオンデマンド動画と課題学習を提供するとともに、最終レポートと連動させ、遠隔型の授業においても一定レベルの大学リテラシーの向上にも努めた。さらに、キャリア関連科目との連携もふまえた「キャリアの基本」という体験授業を設け、キャリア意識の向上を図っている。大学基礎演習Ⅱは、当初、ハイブリット型の授業となったため、早い段階での対面での個別面談も実施し、クラス別授業と全体授業を織り交ぜて大学での学びが深められるよう体系的な学習を行った。また、夏学期に実施できなかった「キャンパスツアー」も実施し、偶数・奇数グループに分かれた中ではあったがクラス内での交流も促進できた。もちろん、「学びの基本」「キャリアの基本」の体系的な取り組みも継続している。さらに、経営学科が毎年、恒例で実施しているビジネスプランコンテストの紹介と啓蒙のために対面授業として 3 回の授業（アイデア発想、ビジネスプランづくり、各クラスでのプレゼンと代表の決定）を実施した。

なお、大学基礎演習の振り返りアンケートでは、1 年間の大学での学びについても総括した。この結果、「ビジネスプランのプレゼンテーション」「先輩による就職活動体験談」「キャンパスツアー」が、学生間の相互理解、キャリア意識向上、今後の就職活動への興味・関心につながったとする感想が一定程度あった。この学びのふりかえり表には、学生目線での回答が記されており、アンケート結果同様、学科内で情報共有することで、ハイブリット型から全面对面型へと授業方法が変更された中であっても、今後の大学生生活の満足度を高める改善につながると期待される。

3. 相互授業参観について

令和 3（2021）年度は、コロナ禍のなか、以下のとおり、概要にあげた内容で授業参観を実施した。

学科選抜科目	概要	参観 日時・場所	合評会 日時・場所
①社会保険法（浅野）	介護保険 1：介護保険前史、小テスト	12 月 10 日（金）2 限 5-302 教室	授業終了後、同教室にて
②地域活性化演習（天野）	ご当地映画と地域活性化	12 月 8 日（水）5 限 4B-155 教室	授業実施後、実施教室にて
③経営学基礎Ⅱ（伊藤）	ブランド①ブランドの歴史、定義の解説	11 月 19 日（金） 3 限 2-205 室	授業終了後、同教室にて
④商取引法（霍）	企業の取引活動と商法について解説・検討	11 月 19 日（金） 1 限 4-206 教室	実施後、同教室にて行う

⑤構造主義入門 (加藤)	行動原理の理由等の 観点の掘り下げ	11月24日(火) 1限 4-414 教室	実施後、実施教室 にて
⑥地域連携インター ンシップⅡ・地域活 性化演習Ⅱ(木村)	「こよみ手帳」の制 作、地域情報の確認	11月20日(土) 3限・4限 4-106、4-154 教室	実施後、教室内に て行う
⑦民法Ⅳ(契約法) (後藤)	民法の契約法に關す る授業・復習問題演習 とその解説	11月19日(金) 1限 2-205 教室	実施後、教室内で
⑧地域連携インター ンシップⅡ・地域活 性化演習Ⅱ(隅田)	地域の商店街との協 働による「こよみ手 帳」の制作	11月20日(土) 3限・4限 4-106、4-154 教室	実施後、教室内に て
⑨実学マネジメント 論(富田)	起業家講話から、 ビジネスを知る (木楽屋本舗)	11月15日(月) 3限 5-210 教室	実施後、実施教室 にて
⑩法と倫理(春名)	マナーに関するディ スカッション	11月24日(水) 2限 4-309 教室	実施後、実施教室 にて
⑪キャリア演習 (東野)	ビジネスコミュニケ ーションを学ぶ	11月30日(火) 2限 2-205 教室	実施後、実施教室 にて
⑫マクロ経済学 (福田)	IS-LM モデルを使 った分析	11月22日(月) 1限 4-214 教室	実施後、実施教室 にて
⑬工業簿記Ⅰ (山崎)	個別原価計算の解説 と問題演習	12月10日(金) 2限 5-211 教室	実施後、実施教室 にて

4. 学科独自の取り組みについて

(1) 特待生制度(経営学部総合奨学金制度)について

公共経営専攻および企業経営専攻では、学生の学習意欲を高め、将来の目標が達成できる経験を増やすために各専攻、成績優秀者1学年12名(計24名)を特待生とする、経営学部総合奨学金制度を設けている。1年次の特待生は一般入試前期日程(チャレンジ試験を含む)の成績により決定するが、2年次以降、公共経営専攻は成績評価GPAに加えて公務員試験の模試の成績等を加算し、企業経営専攻はGPAに加えて各種資格検定の合格実績や、学部で取り組むインターンシップ、地域連携活動などの学内外で行っている経営学部の各種取り組みへの貢献等を評価している。学生は特待生に選ばれるために、学業はもちろんのこと、それ以外の活動にも積極的に参画しようとする姿勢が見られる。特待生に選ばれた学生は、経営学科学生の模範として学科を牽引する役割であることの自覚を育て、他者を巻き込む力を養成する必要がある。2021年度は前年と同じコロナ禍であったため、成績・模試・検定試験以外に評価できることが少なかった。

(2) キャリア演習Ⅰ・Ⅱ

就職力をはじめとする下記に掲げる4つを目的とし、外部教育機関と連携して、「キャリア演習Ⅰ」および「キャリア演習Ⅱ」を令和3(2021)年度も2年生の必修科目として実施した。

- i. 企業経営専攻では就職試験で多くの企業が利用するSPI試験、公共経営専攻では公務員試験の教養試験への早期対策および早い段階から就職に対する自覚・認識を学生に促すこと。
- ii. 大学の講義をより円滑に履修するための基礎学力の向上。
- iii. 2年次学生の講義欠席率の増加、講義中の態度の把握、専門演習ゼミ選択時に備えた学生状況全般についての把握。
- iv. 教員(担任)と学生の円滑な関係の構築、face to faceによる学生指導の機会の確保。

① 公共経営専攻

公共経営専攻では、東京アカデミーによる一般教養の講義を行っている。これは1年次の公務員講座の内容と、3年次の実践的な講座の内容を架橋するもので、公務員を目指すうえでは重要なものである。キャリア演習Ⅱでは、2019年度から担当教員を2名にすることにより2クラスに分け、疑問のある問題に関して担当教員に直接質問をする場を作り、学生の一般教養に関する学習をサポートする体制を強化している。

② 企業経営専攻

各セメスター(夏学期:言語分野、冬学期:非言語分野)の初回授業と最終授業において、確認テスト(プレテスト・ファイナルテスト)を実施している。2021年度の夏学期の言語分野のプレテストの平均点は40.2点、ファイナルテストの平均点は65.3点で、平均点が25.1点アップした。冬学期の非言語分野のプレテストの平均点は54.0点、ファイナルテストの平均点は74.6点で20.6点アップとそれぞれ成果が認められた。

2021年度の総合平均点は65.3点となり、2020年度の総合平均点は71.4点と比べると平均点が下がっている点については実施形式が異なることや問題の難易度を高めたことも関係していると考えられる。

2021年度においては新型コロナの影響によりハイブリッドで授業を行う時期が多かったが、効果的に学修を進めるために下記の通り具体的な講義実践上の配慮を行った。

- ・従来どおり、定着を図るための小テストを実施し「努力」を評価に反映させた。
- ・SPI特有の解答テクニック指導など、学生の学力を定着させるための工夫をした。
- ・多様な学生に合わせて理解を促すスライドの視覚情報を増やし、意欲的に事前、事後学修に取り組みやすいように工夫をした。

(3) キャリア演習Ⅲ

企業経営専攻3年生が体験する「インターンシップⅠ」に向けて、事前学習としてビジネスマナーの習得に加え、毎回の授業における約束事を守ることの大切さ、日々の生活の中の自己管理すること等を徹底指導している。また、3年生の6月には授業内容の習得状況を

確認するため、ビジネス実務マナー検定試験を全員が受験をするため、合格を目指し毎回の授業で受験対策も行っている。

本年度は、オンデマンド授業を活用して予習課題に取り組み、対面ではその解説とアクティビティ等で知識を定着する反転授業の運営を行った。毎回の授業では、授業内での目標を設定させ、簡単な振り返りをさせ、それについてフィードバックを行った。授業実施後の感想レポートでは、この授業を受けて、目標を立てることの重要性を理解できた、書くことを通して表現力向上に役立ったという前向きな意見や、知らなかったことや勘違いしていたマナーを正しく知ることができてよかったという意見が窺えた。

(4) オールインターンシップ

本授業は、「キャリア演習Ⅲ」「インターンシップⅠ」「インターンシップⅡ」と続く必修科目で、3年生全員が実際に就業体験を伴うキャリア科目の授業である。授業では、事前学習を行い、3年生夏季休暇中に就業体験を行うが、3科目を受講することで仕事理解と将来の就職活動に向けてのキャリア形成推進となる重要な位置づけとなっている。企業研究の指導を行ったうえで、授業内で各種提出書類を書くための実践的指導も行っている。

2021年度は、新型コロナウイルスの影響により、夏季休暇中から12月末日までの期間に5日間から10日間インターンシップに参加したが、企業によってはWEBでの実施もあり、また期間を短縮した企業もあり、実施時間を確保するために複数の企業、団体でインターンシップに参加した学生もいた。この経験をとおして、当初就職に意欲的でなかった学生も、就職をより身近に意識し、仕事について主体的に学ぶ機会となったという事後報告をする学生もおり、例年、多くの学生にとって就業体験の経験が将来の職業選択に向けて大きな役割を果たしていると考えられる。

(5) キャリア演習Ⅳ（模擬就）

本授業は、「キャリア演習Ⅰ」「キャリア演習Ⅱ」「キャリア演習Ⅲ」「オールインターンシップ」の集大成として、2021年度より導入したプログラムである。例年3月から本格的にスタートする就職活動に向けて、企業へのアプローチから選考までのプロセスを体験する。本プログラムに、SPI試験受験や合同企業説明会を組み込み、模擬面接では面接官に企業の人事担当者を起用した。学生はステップごとに、教員、企業面接官からフィードバックされることで、学生自身の課題を確認するとともに、気づいていない不安をクリアにしたことで、事前事後で意識変化の確認アンケート（5件法）では、すべての項目で授業開始前に比べて数値が上昇した。中でも「私はグループディスカッションに自信を持って臨める」、「私はグループ面接、個人面接に自信を持って臨める」、「私は、就職活動は具体的に何をすべきかを理解している」、「私は前向きに就職活動にのぞめている」などの5段階評価が1以上上昇し、満足度も4.76と高い評価点を示した。

就活のスタートを誘導し、学生の就職活動に向けての意識向上のために、平成27年度より毎年、経営学部全教員サポートの下、3年生全員、年度末に大阪労働協会が主催する就活準備のための業界研究イベントに参加していたが、2021年度より、キャリア演習Ⅳに移行した。

(6) 公務員関連科目

公共経営専攻3年生で専門講座を設けるため、2年終了までに基礎力を養成する必要があることから東京アカデミー連携授業を導入している。2021年度は昨年度から続くコロナ禍のため、対面授業に加え、Microsoft Teams を用いた同時中継型の遠隔授業あるいは対面と遠隔併用のハイブリッド型の授業を感染状況に応じて使い分けた。昨年度から引き続き遠隔受講は、厳格な確認テストなどが実施しづらいこと、学習モチベーションの維持が難しいことなどが大きな課題である。しかし、本年度は日常的に学科教員が授業見学をしたり、定期的に教員から学生に対して声掛けをしたりすること、および東京アカデミーの講師と本学教員の間で、授業の問題点などを共有することにより、昨年度より全体的に改善して実施することができた。

① 行政職特別演習

公共経営専攻の2年次では、行政職を志望する学生等を対象として、行政職特別演習（専門科目主要7科目）を開講している。専攻の専門教育科目としての位置づけであり、卒業単位として認定するとともに、学生が出席しやすい時間に配置している。国家公務員や地方上級の合格に必要な専門科目について、基礎を2年次の行政職特別演習として、実践を3年次に公務員講座として、段階的に学ぶ機会を設けている。本授業は本学教員が担当する専門科目とも連動させて、東京アカデミーの講師が担当しており、公務員試験につながるように、期末試験は本番を見据えて出題している。出欠管理や成績評価、その他授業運営は本学教員が担当している。

共通教育科目で開講されている法学や日本国憲法、経済学等の入門的な科目とも連携し、専門科目として開講されている憲法や民法等の科目を少しでも多くの学生に、低学年の早い段階から履修するように促し、3年次講座へつなげるなど、専門科目を伴う国家公務員や地方上級の志望者を手厚くバックアップする体制を探っていきたい。

② 公務員基礎演習

公安職・市役所等をめざす企業経営専攻の学生を対象として実施しており、配置する曜日や時限を工夫し、真剣に公務員をめざす学生の基礎力を養成している。公共経営専攻においては、多様な公務員志望の学生の基本的知識を習得する場としている。公務員に関する基礎的学習を担う授業としての役割を担うことから、2021年度から公務員基礎演習と名前を変えて開講した。

③ 公務員試験に直結する特色ある授業科目

公務員特別演習では公務員試験で必要となる知識・スキルを指導している。提出物は毎回添削して返却し、エントリーシート記入演習では個別のフィードバックも行った。また、夏学期はオンラインでのグループワークを実施し、冬学期には感染防止対策を行いながら、対面でのグループワークも実施した。

④ IBU 公務員プログラム

● 1 年生講座

本年度は 5 月から予定通りに公務員試験の入門講座を実施している。コロナ禍のための遠隔と対面の併用などに配慮して、新入生の公務員試験学習のスタートとして授業と相乗効果を促す体制を取っている。

● 3 年生講座

教養科目は全員受講を課しており、専門科目は国家公務員などをめざす学生が受講している。本年度は前年度と比べ、特に専門科目を受講している学生が多く、教養科目も含め出席率はよかった。専門科目を受講している学生が必ずしも専門科目を必要とする自治体を志望しているとは限らないが、志が広がることを想定し、積極的に支援している。

● 公務員受験のための模擬試験

本年度は昨年度の経験から前もって授業期間外に模試日を設けることにより、計画的に実施することができた。

● 令和 3 年度卒業生の公務員試験合格実績

公務員試験受験結果（公共経営専攻 20）は下記のとおりであった。

国家公務員(一般職)、奈良県庁、富田林市、大阪狭山市、宇陀市、御所市、海南市、湖南市(2)、甲賀市、山添村、大阪府学校事務(2)、大阪市消防、大阪府警(3)、兵庫県警、和歌山県警、警視庁

引き続き、公務員をめざす卒業生、企業での経験を経た後、公務員をめざす卒業生がいることから、卒業後の公務員受験にも対応した指導をしている。本年度は既卒生が 1 名松原市役所に合格した。

(7) 必修化している資格取得支援

① 簿記能力検定 3 級 1 年生全員受験（必須）のための支援

7 月実施の全経簿記能力検定試験 3 級について、入学年度に全員受験（受験料は大学負担）を実施している。これは、これまで資格試験等に挑戦したことがない学生たちに、成功体験をし、自信を持つ良い機会にするために設けている。新型コロナウイルスによる緊急事態宣言中の商業簿記 I は主に遠隔授業になったが、検定試験に向けた対策授業として、感染防止に努めた上で対面授業も実施した。コロナ禍ですべての授業が遠隔で実施された 2020 年度、経営学部全体の全経簿記能力検定試験 3 級合格者は 177 名受検中 63 名（合格率：36%）であったが、2021 年度の合格者は経営学部 1 年生 144 名受検中 59 名（合格率：41%）となった。この全経簿記能力検定試験 3 級に合格したことで自信を持ち、さらに上級の資格に挑戦しようとする学生は増加し、2021 年度 2 月実施の全経簿記能力検定 2 級商業簿記は 29 名受検中 20 名合格（合格率 69%）、2 級工業簿記は 24 名受検中 19 名合格（合格率 79%）となった。授業外でも個別指導としての対策講座も実施しており、可能な限り検定に挑戦する機会を増やしていきたい。

② ビジネス実務マナー検定全員受験のための支援

本検定試験を受験する目的は、就業体験前に少しでも社会人としての考え方や行動を理

解することができるようにするためである。3年生夏学期オールインターンシップの就業体験の実施に向けた「インターンシップⅠ」の授業の一環として、学生がビジネスマナーや社会人に必要な行動力、判断力、表現力を磨く為の知識習得を支援するために、平成30(2018)年度より、3年生全員(受験料は大学負担)に受験を課している。2021年度のビジネス実務マナー検定3級受験結果は、98人受験し、51名合格(合格率52%)であった。2020年度の受験では、3級39.4%の合格率であり、12.6ポイント上昇した。要因は昨年の全面遠隔授業から、ハイブリッド式授業となり、対面授業での直前対策や遠隔授業での対策模試を行った指導が功を奏したと考える。

③ 成功体験を積む「ライセンスセミナー」

本学科では、将来のキャリア形成に役立つ資格取得を支援する科目として、資格ごとに本学科の教員が指導するライセンスセミナー科目を設けている。単に知識の習得レベルを確認するだけでなく、合格することによって成功体験を積み、目標にチャレンジする楽しさを経験する機会としている。

(8) 企業との連携授業：「実学マネジメント論Ⅰ・Ⅱ」

実学マネジメント論は社会人のリアルを学ぶ本学部の特徴ある授業のひとつである。本科目は、第一線で活躍する社会人講師を招聘し、「働くとは」「仕事とは」「社会人になるために必要なことは」をテーマに、社会人講師の職業を通じた「職業理解」を促進するとともに、様々な業界について、第一線で活躍するビジネスパーソンや公務員から経験等に関する講義を受け、将来のキャリアを考え、職業適性を発見することを目的としている。

本年度は、対面授業とオンライン授業を組み合わせたハイブリッド方式で実施した。前半には、昨年同様、学科教員独自ルートによる食品、ホテル、産業電池、消防署、税務署、郵便局、家具小売の7社・団体による講義を実施した。後半には、近畿経済産業局・経済産業省の講師派遣プラットフォームを活用、本学のインターンシップで連携を行っている大阪労働協会の選定により、情報技術、機械、化粧品、スポーツ用品、製菓の中小企業5社による講義を実施した。この授業をきっかけにインターンシップも受け入れていただいた会社もある。学生からの授業感想は前向きな意見が多く、「仕事の厳しさと楽しさが理解できた」「学生時代の取り組みが重要であるとわかった」など、好評であった。

(9) 海外インターンシップ

2017年度より、過去3回春休みに実施しているオーストラリア・シドニーでの経営学科海外インターンシップは、昨年に引き続きコロナ禍のため、2022年2-3月の実施を見送った。2020年度対象学生(特待生、希望者)の海外インターンシップは中止となり、2021年度対象学生については、2022年度対象の2年生と同時に、2023年2-3月に再開実施の方向で検討することとしている。

(10) 学年インターンシップ、ボランティア、就活支援

平成27(2015)年度より、低学年からインターンシップやボランティアイベント等に参

加する機会を設けているが、コロナ禍のため、昨年度に引き続き中止とした。

(11) ビジネスプランコンテストと起業支援

平成 26 (2014) 年度から経営学科独自の取り組みとして、「IBU ビジネスプランコンテスト」を行っている。「出でよ！未来の起業家たち」をテーマに、新商品、新サービス、アプリケーション、公共サービスについての学生のビジネスプランを公募し、創造性を競うものである。授業で学んできたマーケティングや財務、公共経営などの知識を実際に活用し、商品開発、ベンチャー創業、公共サービスについて知恵を絞って事業計画にまとめることで、起業家精神を涵養し、学生起業家、経営者、公務員を育成、輩出することを狙いとしている。

8 回目となる今年度は、「コロナを超えて」をサブテーマとし、学科を越えて全学年を対象にプランを公募したところ、グループや個人から約 140 プランの応募があった。書類選考の第一次予選、教員による第二次選考を通過した 10 プランについて、ブラッシュアップして、学科教員全員と関連科目非常勤教員 4 名が審査員となり、アイデアの独創性、学生らしさや社会性、市場性、発表完成度、プレゼンテーションスキルの観点から審査を行った。

単なるコンテストに留まらず、創業を目指す学生、プロジェクトを行いたい学生やチームに関西ベンチャー学会所属の教員・非常勤講師・事業化コーディネーターが支援を行っており、すでに社会起業プロジェクトを立ち上げた学生もおり、昨年度入賞プランについても、アドバイスを受けながら、会社設立と創業に向け準備を進めた卒業生もいる。

(12) 学生プロジェクト活動

学生主体の下記の地域連携活動のサポートを継続的に行っている。

① 地域連携研究会 Glanz

経営学部 1 期生 (2008 年) の有志学生たちから始まった地域との協働による研究会 (Glanz) 活動を学部横断的に発展させて組織化した学生主体の地域貢献活動を経営学部の教員で支援している。毎週水曜の授業前の昼休み時間に定例打ち合わせを行い、地域貢献活動について検討し、地域からの依頼に対応しているが、コロナ禍となった 2020 年から、一部の授業が遠隔授業となり、学外活動が行えず活躍の場が限られた。しかし、2021 年度発行の第 10 号「こよみ手帳」制作に関して、授業で実施できない地域取材 (羽曳野市市長取材、柏原羽曳野藤井寺消防組合本部長取材など) は Glanz メンバーが担った。Glanz メンバーおよび地域連携授業 SA 指導は経営学部教員が担っている。

② 「こよみ手帳」の制作

地域情報誌として、商店街の紹介やお得情報カレンダー、世界文化遺産の古墳などの情報発信として、毎年発行している「こよみ手帳」が記念すべき第 10 号の発行を迎えることができた。本年度は、昨年に続きコロナ蔓延のため、従来のような情報収集が難しかったが、羽曳野市長および柏原羽曳野藤井寺消防組合消防本部長のご協力も賜り、例年よりひと月遅れの 1 月、地域 (羽曳野市・藤井寺市の市役所や商工会、商店街等) へ配布を行った。

③ 地域イベント支援

地域連携授業等を履修した有志学生が中心となって、羽曳野市・藤井寺市などを中心に、役所や商工会、寺社、まちづくり NPO 等の実施する様々なまちづくり・まちおこし活動に

ボランティアスタッフとして参画している。現地に赴き、まちづくりや地域ビジネスを体験的に学ぶことで、将来の地域リーダーの育成、輩出を狙いとする。令和3年度については、令和2年度と同様、「デラハロ」「道明寺歴史まつり」「辛國神社万燈籠」など、これまで学生が参加してきた多くのイベントがコロナ禍により延期・中止となったが、道明寺天満宮宮子屋（7/31、10/16）、学んでシュラホール（12/11）、古墳 DE るるる（3/20）、FRAP ハレマチフジイデラ（3/27）には、学生・教員が参加、支援することができた。

④ 地域への SNS を通じた情報発信

学生が地域との交流や関わりを深め、収集した情報を発信するため、本学卒業生の勤務するメディア企業とも連携しながら、地域ブログ「オオサカジン・街ブラ企画藤井寺」、Facebook ページ「IBU 地域連携ニュース」、Instagram 「#fujidelike」などでの学生の手による投稿、シェアを行なった。内容の充実に加え、フォロワー数が限定されており、拡大が課題である。

⑤ 企業等との産学連携

経営学部設置当初より、ご協力いただている松原市に本社を置く米穀製販大手・食品メーカーである幸南食糧株式会社と連携協定を締結し、地域の名物やお土産となる新商品「南河内粕かすおでん（仮称）」の共同開発を進めており、コンセプトの決定と試作品が完成、来年度の発売を目指している。

また、羽曳野市役所前の大蔵印刷株式会社と、同社の運営する「河内こんだの里・埴輪ショップ大蔵屋」と、世界遺産を身近に感じるため、埴輪作成体験会の実施を行い、来年度は本学 100 周年記念行事として位置付けられる「埴輪グランプリ」の参加・学内開催の準備も進めている。

その他、大阪商工会議所が運営する「大阪企業家ミュージアム」との連携で、課題研究、学生の訪問などを行い、企業家精神について学ぶ機会も設けている。

(13) 公務員自主勉強会

1 年生は、昨年度よりも対面で授業をする機会が増えたことから、直接コミュニケーションをとることで、将来の勉強会へのモチベーションを高める機会を持つことができた。

2 年生は、恒例としている、警察や自治体の方々を招待しての 1 年生向公務員説明会の開催を予定していたが、昨年度に続きコロナ禍により開催できなかった。従来のイベントは、準備段階で実際に公務員の方と触れ合い、学習のモチベーションを高めるとともに、先輩と後輩との人間関係作りという点からも有意義なイベントであるため、来年度以降は遠隔と対面を併用した形式で開催することを予定している。

3 年生は、随時一般知能に関する質問を受け付けたり、課題管理を行ったりした。後期は途中から火曜日のゼミの前の時間を使い全体での自主勉強会を開催した。また春休み期間は毎週火曜日に全体の勉強会を教員全員でサポートし、春から始まる公務員試験に関する対策および出願・エントリーシート等の指導を行っている。それに加え各教員による一般知能等に関する個別の勉強会も開催している。また、4 年生の合格体験談を直接聞く機会を設けることができ、公務員試験に向けてモチベーションを高めることができた。

4 年生は、コロナ禍での公務員試験への支援に教員学生共に慣れてきたことから、遠隔・

対面併用しての支援を昨年度以上に行った。本年度は夏休みにも毎週 1 回全体での勉強会を開き、また隙間時間を利用しての個別の勉強会、面接練習、集団討論の練習など多様な支援を教員全員で協力して行った。

以上

看護学部 看護学科

1. はじめに

看護学部では、2021（令和3）年度の重点施策としてシミュレーション教育に関する長期目標を「教養と専門性を高め、それらをもとに自ら課題を発見し、その解決に向けて探究できる学生を育成することを目的に、四天王寺大学看護学部におけるシミュレーション教育法の確立を行う。」ことを前年度の研修のアドバンスとして取り組んできた。そのため、課題発見と問題解決に向けて探究できる学生を育成することを目標に、(1) シナリオ作成方法・デブリーフィング技術に関して、スキルアップを目指し他大学との意見交換を踏まえ改善点について探求する。(2) シミュレーション教育を導入した授業の評価方法について学び、実際に評価を行う。(3) 課題発見・問題解決に向け、Peer-to-Peer Learning 技法を習得することをあげ、コロナ禍での感染拡大に努め、計画・実践した内容について報告する。

2. 相互授業参観について

2021（令和3）年度、冬学期は以下のとおり相互授業参観の実施科目の公開授業一覧表を作成した。

月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	中継あり（○）	合評会
11月19日	金	1・2	在宅療養生活支援技術演習	6号館介護 実習室	×	
12月6日	月	4	健康教育論	9-121		
11月25日	木	3	フィジカルアセスメント	実習室2		授業終了後

3. 学科独自の取り組みについて

1) 教員の教育力・研究力向上のサポート

教員の研究力向上および科研費獲得に向けて、「科研費申請に関する経験」を申請者の立場と評価者の立場から講演会を開催した。科研費は研究費の基礎として非常に重要であり、科研費の採択は研究計画やキャリアに大きな影響を与える。講演会は科研費獲得者の貴重な機会になったといえる。

2) シミュレーション教育法の確立

シミュレーション教育、ICTを活用した教育方法を取り入れている大学の講師を招聘し、コロナ禍における演習や実習に関するシミュレーション教育の実際に関するスキルアップを図ることができた。また、シミュレーション教育を導入した授業の評価方法について学び、今後の教育者の育成および領域別実習や演習等の授業展開に活かせるスキルであり、学生のコンピテンシーの育成を目指した効果的な学習方法といえる。

3) 看護実践開発研究センタープログラム実施

四天王寺大学看護学部看護実践開発研究センターは、大学院修了者の実践能力・研究能力を育成し、また現職で活躍する看護職の現任教育を行い、キャリア開発を支援する場である。さらに地域との連携を行いながら人々の健康や病気からの回復を促すための人材育成や研究能力育成を行う。看護実践開発研究センタープログラムが始まり今年で3年目になるが、

2021年度は死亡率のトップをしめる「五大疾患などの慢性疾患患者への最新セルフケアプログラムの展開」や「対応困難になっている患者様・ご家族・スタッフ・同僚へのPASセルフケアセラピーという専門介入技法のトレーニング」、さらには「自分の実践を研究へと発展させる事例研究のまとめ方」、「慢性疾患患者のフィジカルアセスメント能力の育成」、「看護職の現任教育指導能力の育成に関するプログラム」を実施した。参加率は108%と高く、看護職の関心の高さが伺われた。また熱心に参加され、自分の事例や状況の改善のために何ができるのかを中心に、事例検討、ロールプレイ、事例研究の発表などを行った。

コロナ感染症拡大防止のためオンラインで実施した。現在最終のアンケートをもとにさらなる教育・研究プログラムの開発のために、アンケート結果の依頼と分析を行っている。継続するコロナ感染症拡大と戦争などの脅威での不安定な日々であるが、今後もセンターでは確実に効果的・効率的な専門介入技法のトレーニングや研究を実施していければと考えている。

2021（令和3）年度の活動状況は以下のとおりである。

日時	活動及び研修内容	研修成果
4/16(金)	<p>【庶務課との連携】 庶務課の確認を得て、2919-2020-2021年度（3年間）別の科研費獲得教員リストを作成した。</p>	<p>FD委員会にてリストを共有し、科研費で研究を進める経験に関する講演会の話題提供者の選出と依頼の検討を行った。5月の教授会（第3回）にて「令和元年～3年度の科研費獲得状況について」資料を提示、講演会の企画案を提案し承認を得た。</p>
6/15(火)	<p>【研修開催】 文部科学省研究費の申請にあたり、申請書の記載において工夫した点や留意事項等（倫理的配慮を含む）の実際を教員相互で学び合い、採択される申請書の作成にむけて情報共有を図ることを意図とし、「科研費で研究を進める経験について」講演会を開催した。</p>	<p>24名の教員が参加（対面12名、オンライン12名）した。 今年度の科研申請へ向けて、①申請者の立場、②審査員の立場からの話題提供に対して、活発なディスカッションが行えた。 7月教授会（第6回）にて報告した。</p>
7/15(木)	<p>「シミュレーション教育導入の開講科目の学部内授業参観」について教員へアナウンスメール配信 日時：7月16日(金)4・5限 成人 7月19日(月)3・4限 小児 場所：シミュレーションルーム デブリーフィングルーム</p>	<p>7月教授会（第6回）にて、シミュレーション教育導入の開講科目授業参観実施について報告した。 7/16（金）成人看護学領域の科目：5名参加 7/19（月）小児看護学領域の科目：4名参加 参加教員から学生の学習の習得度やシミュレーションの授業への関心が高まったとの声が挙げられた。</p>

日時	活動及び研修内容	研修成果
9/7(火)～ 10/21(木) 11/25(木)	<p>メールにて基礎看護学領域の教員へ、授業参観の依頼・調整を数回にわたり行った。</p> <p>シミュレーション教育を導入した授業を参観し、自らの授業内容および方法の改善を行う目的で、</p> <p>①令和3年10月21日(木)3・4限目：実習室1 呼吸器(池内先生担当) 実習室2 循環器(坂口先生担当) ②令和3年11月25日(木)3・4限目：実習室1 消化器・脳神経(岩佐先生担当)の授業参観を実施した。</p>	<p>9月の教授会(第8回)にて冬学期の授業参観のアナウンスを行った。</p> <p>2回にわたり授業参観を行い、参加後のアンケートを実施し、参加者数6名 ①実習室1:1名、実習室2:2名 合計3名 ②実習室1:3名であった。</p> <p>参加者からは、循環器系の学習ポイントや自己学習で押さえる点など明瞭に伝えられていたため、分かりやすく効果的な内容であったなどの意見があった。アンケートの結果については、メールにて実施者および参加者へのフィードバックを行うとともに、1月の教授会(第14回)にて報告した。</p>
9/21(火)	<p>夏学期の学生による授業評価アンケート結果について、9月の教授会(第8回)にて報告した。</p> <p>オンライン授業のコンサルテーションについて、高等教育推進センターより教員向けに案内がなされる予定であることをアナウンスした。</p>	<p>夏学期の学生による授業評価アンケート結果について資料に基づき、以下の内容を報告した。回答率は60.63%で前回より15%増加した。看護学部では、オンライン下で予習・復習の時間がなく平均得点が低下した。9月下旬から結果は図書館で公開される。アンケート内容と結果の分析については、質問内容、コメントの工夫、回答率、回答期限などを今後の課題として再度検討予定である。</p>
10/19(火)	<p>全学FD委員会より相互授業参観および合評価会開催における実施科目の「相互授業参観・公開授業一覧」の作成に当たり、各教員にmail配信・回収した。</p>	<p>相互授業参観実施期間：11月19日(金)～12月16日(木)における「相互授業参観・公開授業一覧」を作成した。また、実施機関については、学科都合による変更が可能であることも周知した。</p>
10/19(火)	<p>全学FD委員会「令和3年度冬学期授業評価アンケート設問(案)」について、10月の教授会にてアナウンスした後に学部教員に向けてメール配信による意見を募った。</p>	<p>授業評価アンケート項目に関する内容、科目のアンケート結果の閲覧に関する内容への意見があり、全学FD委員会での会議にて、フィードバックを行い検討した。</p>
11/5(金)～30(火)	<p>シミュレーション教育における学習目標の評価に関するFD研修について、シミュレーション研修(学習目標評価)企画立案と現状把握のため、学部教員に向けて再三のメール配信にて意見を募った。</p>	<p>各領域から、本学の現状や先生方のニーズを集約し、それを基に学外講師と内容の検討を行う準備を進めた。</p>

日時	活動及び研修内容	研修成果
11/22(月)	11月の教授会(第11回)にて、令和3年度冬学期学生による授業評価アンケート実施(案)について、資料を基にアナウンスした。また、開催日:7月12日(月)のオンラインセミナー報告(関西大学FDフォーラム)について、資料を基に報告した。	授業評価アンケートに関するスケジュール予定を周知した。 アナウンス後、11/24(水)に教員へ視聴リンク先URLの情報提供を行い、数名の教員が視聴した。
11/26(金)	【研修開催】コーチングの概要を把握し、コーチングスキルを活用した具体的な教育手法を理解することを目的として、「コーチングの概要およびコーチングスキルの活用例に関する講義」に課題解決に向け、Peer-to-Peer Learning 技法を習得する内容を含め、本学の大橋純子教授により実施した。	オンライン形式ではあったが、看護学部教員20名が参加した。 参加者からは、実用的な内容であり、実習指導時の学生指導にも活用できる内容で分かりやすかったとの意見が挙げられた。アンケート結果は講演者へフィードバックするとともに、1月の教授会(第14回)にて報告した。
2/7(月) 13:00- 17:00	高等教育推進センター主催の大学授業に活かす「ファシリテーション基礎研修」NPO法人日本ファシリテーション協会会長キャリアヴィーボ代表 竹本記子講師による研修にFD委員と学部の教員が参加した。	看護学部教員3名(FD委員1名とその他教員2名)が参加した。 ファシリテーションの背景とスキルについて、今後の授業にどうファシリテーションの背景とスキルについて、今後の授業にどう活かしていくのかを考える機会となった。
3/18(金) ~24(木)	学位の質保証の観点から担当教員以外の第三者による組織的なチェック体制を構築する必要があるため、学科の専門教育科目における令和4年度シラバスチェックを委員会教員にて確認した。	授業概要・授業計画・授業方法・成績評価方法等について、学科CPに基づき作成されているかをシラバス構成に関するチェックリストに沿って確認した。その結果を高等教育推進センターから各教員へ修正の依頼をお願いし、修正期間内にシラバス登録を完了することができた。
3/15(火) 10:00- 12:00	【研修開催】京都橘大学/シミュレーション教育/野島敬祐准教授を招き、シミュレーション教育におけるデブリーフィング力向上を目的として、「シミュレーション教育におけるファシリテーションのコツ」に関する研修会を実施した。	オンラインと対面形式を取り入れ看護学部教員21名が参加した。 参加者からはファシリテーションの基本を学び、ファシリテーションの悩みを他の教員と共有することができ、有益であったとの意見が挙げられた。アンケート結果は教授会で報告するとともに、次年度のFD研修会の企画に役立てていく。
3/28(月) 14:00- 16:00	【研修開催】東京医科大学副学長/医学部看護学科看護学科長阿部幸恵教授を招き、シミュレーション教育における学習目標の	オンラインによる研修を開催し、看護学部教員19名が参加した。参加者からは、シミュレーション教育の目的・内容・評価の一貫した授

日時	活動及び研修内容	研修成果
	評価設定、評価方法の習得を目的として、「シミュレーション教育における評価のあり方」に関する研修会を実施した。	業デザインの重要性を再認識し、有益であった等の意見が挙げられた。アンケート結果は教授会で報告し、今後のFD研修会の企画に活用していく。

4. 評価と課題

1) 文部科学省研究費の申請書の記載において、工夫した点や留意事項等（倫理的配慮を含む）の実際を教員相互で学び合い、採択される申請書の作成にむけて情報共有を図ることを意図とした研修においては、参加者も多く内容への関心が高かった。今後も採択率の推移を収集しながら、若手教員の申請状況の向上を図っていく必要がある。

2) シミュレーション教育導入の開講科目の学部内授業参観においては、今年度は夏学期2回（成人1回、小児1回）、冬学期に2回（基礎2回）の計4回参観を設けたが、参加者が少数であった。今後は、授業参観の参加者の確保および参観時期や開催周知の検討が必要である。

また、シミュレーション教育推進プロジェクト委員会と協力しながらすすめていくことも検討する。

3) 学内研修においては、シミュレーションを中心とした教育技法を学習する機会を多く得られ満足度も高い。一方で、今後の研修テーマへの要望として、コーチングの継続、学生・若者の特徴や心理、アンガーマネジメントなどが挙げられているため、教育力向上にむけ多様なテーマで研修を計画していく。また、看護学部の学事スケジュール上、研修に適した時期を固定することは難しいため、今後もオンライン研修を併用し研修の機会を確保できるように配慮するなど、シミュレーション教育継続に向けての研修等の企画をしていく必要がある。

短期大学部 保育科

1. はじめに

2020年春に新型コロナウイルス感染症拡大の危機が叫ばれてより2年目となる今年度もコロナの脅威は収まるところを知らず、当保育科でもまずは遠隔授業の準備に予想以上の時間を割かれ、蔓延防止重点措置の合間を縫って実施された対面授業時においては感染防止対策に追われた。その結果、当学科でかねてより進めてきた「保育実践演習」の実施を中心に、科目間連携、教員間連携を進めながら、「質の高い保育者の育成」を目指す教育・研究活動はいくばくかでも進捗したとは言い難い状況である。しかし、限られた環境の中で学生にとっての学びを確保すべく、学科教員が経験知を寄せ合い、可能な限りの方策を用いて教育を行った結果を、以下、今年度の保育科の教育活動に関するFD活動の結果として報告する。

2. 「保育実践演習」について

(1) 概要とシラバス

「保育実践演習」は、短期大学部保育科の初年次教育の授業にあたる「保育実践演習Ⅰ」を含む、「保育実践演習Ⅱ」「保育実践演習Ⅲ」「保育実践演習Ⅳ」と2年間に渡って続く授業である。異学年集団での学びあいも含み、保育科の核となる授業でもある。この授業は毎年の授業アンケートや学生のワークシートを参考に教員間で毎年評価を行い、次年度の計画及びシラバスを作成している。今年度の「保育実践演習」の概要及びシラバスは以下のとおりである。

受講者数	1年生（保育実践演習ⅠおよびⅡ受講者）	79名
	2年生（保育実践演習ⅢおよびⅣ受講者）	102名
担当教員	保育科専任教員11名	
基礎グループ	A～Hの8グループ（1グループあたり1,2年生合わせて約27名）	
使用教室	講堂701教室（メイン教室）、講堂702教室及び703教室 音楽棟 多目的室2部屋及びリズム室、図工室、サブアリーナ、小体育館	

シラバス 表1及び表2参照

表1 令和3年度夏学期「保育実践演習Ⅰ・Ⅲ」シラバス

		1年:保育実践演習Ⅰ	2年:保育実践演習Ⅲ
オリ	4/6	基礎グループ発表・オンライン授業について(対)	
1	4/12	オリエンテーション・マナー講座(対)	オリエンテーション・模擬保育について(対)
2	4/19	基礎グループでの自己紹介(オン)	基礎グループでの名札をつけ自己紹介(オン)
3	4/26	基礎グループでの好きな絵本紹介(オン)	基礎グループでの大切にしている物紹介(オン)
4	5/10	違うグループでの好きな絵本紹介(オン)	違うグループでの大切にしている物紹介(オン)

5	5/17	模擬保育体験(対)	模擬保育実施(対)
6	5/24	模擬保育振り返り(オン)	連絡帳の基礎(オン)
7	5/31	名札の作り方・実習で子どもとかかわりを深める方法(オン)	名札の作り方・実習で子どもとかかわりを深める方法(オン)
8	6/7	出前保育について(対)	教育実習
9	6/14	出前保育ダンス練習(対)メインアリーナ	教育実習
10	6/21	講演「幼稚園の仕事」(対)	休講
11	6/28	卒業生の講演(対)	講演「保育所の仕事」(対)
12	7/5	実習の助言を先輩から聞く(対)	実習の助言を後輩に伝える(対)
13	7/12	教員自己紹介(対)	教員自己紹介(対)
14	7/19	運動会(東キャンパス体育館)対面	運動会(東キャンパス体育館)対面
15	7/26	確認テスト(まとめ)対面	確認テスト(まとめ)対面
	9/13・14	四天王寺悲田院保育園体験(中止)	
	9./14・15	白鳩羽曳野幼稚園体験(中止)	

表2 「保育実践演習Ⅱ・Ⅳ」(冬学期)及び 保育・教職実践演習(幼稚園) シラバス

		2年:保育・教職実践演習 (幼稚園)	2年:保育実践演習Ⅳ	1年:保育実践演習Ⅱ
1	9/21	(後半G)オリエンテーション+戸外(対) (前半G)就職について(オン)		(後半G)出前保育の準備(対) (前半G)オリエンテーション(オン)
2	9/28	(前半G)オリエンテーション+戸外(対) (後半G)就職について(オン)		(前半G)出前保育の準備(対) (後半G)オリエンテーション(オン)
3	10/5	「子育て支援の実際」(オン)		授戒会后、教育実習前のPCR検査説明(対)
4	10/12	子育て支援の体験の準備(対)		実習前の激励会(オン)
5	10/19	子育て支援体験①		教育実習
6	10/26	子育て支援体験②		教育実習
7	11/2	子育て支援体験③		1限(補)出前保育の準備②(対) 2限:出前保育の準備③(対)
8	11/9	子育て支援の反省会(対)	出前保育のリハーサルに参加(対)	1限(補)出前保育の準備④(対) 2限:出前保育のリハーサル(対)
9	11/16	講演「社会人の基礎」(対)	運動会準備①(対)	地域に出るⅠ:出前保育①

10	11/30	運動会準備②(対)	運動会準備③(対)	地域に出るⅡ:出前保育②
11	12/7	保育探究演習報告会の準備(オン)	出前保育反省会に参加(オン)	出前保育の反省会(対)
12	12/14	運動会のリハーサル(対)	冬の運動会(対)	
13	12/21	保育探究演習報告会(対)		保育探究演習報告会に参加(オン)
14	1/11	休講	施設実習アドバイスを考える+アドバイス(オン)	講演「施設実習について」+2年生から実習について聞く(対)
15	1/18	卒園式リハーサル(対)	卒園式(対)	卒園式参加(オン)
定期試験	1/25	まとめ:2年間で培った保育実践力について振り返る(オン)		まとめ「子ども・保育を知る」について(オン)

(注) 1)前半(基礎グループ

A,B,C,D)、

後半(基礎グループ

E,F,G,H)

2)対⇒対面授業、オン⇒オンライン授業

(2)地域の幼稚園・保育所などとの連携

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、夏学期の幼稚園見学活動は実施できなかったが、冬学期には、地域の幼稚園・保育所での出前保育活動及び、地域子育て支援センターでの子育て支援体験活動を行うことができた。

① 出前保育 (1年冬学期:11/16及び11/30)

- ・学校法人久宝文化学院 白鳩羽曳野幼稚園
- ・社会福祉法人四天王寺福祉事業団 四天王寺悲田院保育園
- ・学校法人志紀学園 志紀学園幼稚園
- ・社会福祉法人羽曳野市社会福祉協議会 ベビーハウス社協

しかしながらコロナの状況を鑑み、出前保育に出向くのは演技を行う1チームのみとした。園側の配慮もあり、参加する幼児も年長クラスを中心に少人数に絞っていただいたため、交流する機会を設けることができなかった。

② 子育て支援体験 (2年冬学期:10/19,10/26,11/2)

- ・羽衣子育て支援センター (高石市) 10/19
- ・羽曳野市子育て支援センターふるいち (羽曳野市) 10/19,11/2
- ・柏原市つどいの広場「ほっとステーション」(柏原市) 10/19,11/2

- ・富田林市第1 幼児教育センター（富田林市）10/19, 11/2
- ・富田林市第2 幼児教育センター（富田林市）10/19, 11/2
- ・南海愛児園子育て支援センター（高石市）10/19, 11/2
- ・ひかり保育園（藤井寺市）10/19, 11/2
- ・藤井寺カンガルー教室（藤井寺市）10/19, 11/2
- ・東羽衣子育て支援センター（高石市）10/19, 10/26, 11/2
- ・四天王寺悲田院子育て支援センター（羽曳野市）10/19, 10/26, 11/2

各施設の性格上、少人数でしか参加できないため、限られた教員数で複数園を巡回しながら実施した。

3回にわたる期間中に1回しか参加できない貴重さを感じて参加できるよう配慮し、事前にそれぞれの子育て支援先での参加する上での配慮すべき事項などを全員で共有した。

また、事後の反省会での発表は2年生のみでの開催とした。

(3) 外部講師による講演

今年度は以下の方々を外部講師としてご講演をいただいた。

① 卒業生の講演（1年夏学期）

- ・淡路 佑希先生 飛鳥学院保育所 保育士
- ・有馬 裕奈先生 えびーく幼稚園 教諭
- ・田中 有香先生 西宮市立今津南保育所 保育士

② 幼稚園園長の講演（1年夏学期）

- ・福辻 真紀子先生 香芝市立認定こども園鎌田幼稚園 園長

③ 保育所所長の講演（2年夏学期）

- ・井上 斉美先生 かきつばた保育園 園長

④ 社会人になるにあたっての講演（2年冬学期）

- ・小里 樹実氏 本学入試・広報課職員（本学保育科卒業生）

⑤ 児童養護施設に関する講演（1年冬学期）

- ・中條 薫先生 社会福祉法人 児童養護施設 羽曳野荘 理事長・施設長

⑥ 保育科卒園式への学外来賓者（1・2年冬学期）

- ・松本 千幸先生 社会福祉法人福文会 松の実保育園 園長 及び 本学非常勤講師
- ・荒木 環先生 社会福祉法人粉浜福社会理事長 及び 本学非常勤講師

(4) 科目間連携と実施時期

例年、「保育実践演習」の90分の授業時間だけでは、学外での体験学習の時間が十分確保できないことや、より学生の活動と学びが深まるようにとの考えから、「保育実践演習」と他の数科目間で科目間連携を行い、成果をあげていた。しかし、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため、夏学期の学外への体験学習は実施できず、また授業実施形態による制約のために、当初予定していた科目間連携を行うことはできなかった。冬学期に実施できたものを以下に記す。

① 「保育実践演習Ⅳ」と「保育・教職実践演習（幼稚園）」（2年冬学期）

文部科学省指定科目「保育・教職実践演習（幼稚園）」と当科独自の科目である「保育実践演習Ⅳ」を連携させている。教育効果を上げることをねらって、両科目を時間割上連続して開講している。そのため、「保育・教職実践演習（幼稚園）」の授業内容として必要な、個人の教職に関する知識や技術についての課題の克服（出前保育での1年生へのアドバイス、行事経験を通しての役割分担等）、保護者連携についての学び（お便りや連絡帳についての学び等）、地域の保育現場及び子育て支援現場での実践的な活動（子育て支援体験に関する講演の聴取）を含み、2年間の学びのまとめとなる授業内容で構成している。

② 「保育実践演習Ⅳ」と「保育内容・表現（総合）」（2年冬学期）

昨年度同様、「保育内容・表現（総合）」（2年生対象授業）と連携し、「保育実践演習Ⅱ・Ⅳ」の中で『保育科卒園式』を実施した。『保育科卒園式』は、保育施設における卒園式を「表現の場」と捉え自分たちの卒園式を自分たち自身で作りに上げることで、そこでの保育者、子どもたち双方の表現を学ぶことを目的に2014年から取り組んでいる活動である。

今年度も「保育実践演習」の授業内で行うことにより、1年生全員はオンラインでの参加であったが、次年度の学びへの意識を高めることができたことがワークシートから確認できた。この良い流れがうまく学びへ繋がるよう、我々教員も引き続き努力するとともに、次年度も卒園式を「保育実践演習」と「保育内容・表現（総合）」の科目間連携を以って、保育科全員参加のもと実施する予定である。

③ その他

従来から行っている科目間連携として、1年生の出前保育の練習の期間は、「保育実践演習Ⅱ」と「小児体育Ⅱ」及び「音楽Ⅳ」と連携し、学生の表現力がよりいっそう習得できるよう授業内容を配慮している。

(5) 2年生による「学びの発表会」と新科目「保育探究演習」の実施

「学びの発表会」は、3セメスター科目の「保育探究演習」授業の報告会である。今年度も、学生が自らの興味や関心に応じて選んで受講した6つの保育テーマ（「多文化保育」「野外活動」「音楽アンサンブル」「造形アート」「子どもの自然科学」「特別支援保育」）活動の学びの発表が行われた。

「保育探究演習」は、2年生（3セメスター）が、6つのテーマから1つを選択し、そのテーマに基づいて保育を自らの興味や関心に沿って深めることを目的とし、また、学生が主体的・協働的に学ぶことを通して質の高い保育の専門性を育むことを目標として2020年に設定した科目である。「保育探究演習」の授業方法の特徴をまとめると、①学外での学びを取り入れ、より実践的に保育を学ぶことができるようにすること ②15回の開講を時間割上設定しているが、その時間割にこだわらず柔軟に開講時間を設定することで、学外での学びの成果が高まるようにすること ③学生の自主的な学びが行われるよう、外部講師の講演を取り入れたたり、少人数グループでより実践的に深く学ぶ内容を予習したり、学外の学びの現場においても保育者などの具体的な話を聞きながら学ぶことができるようにすること

④夏学期の「保育探究演習」のテーマごとに学んだ内容を報告する発表会を開催し、2年生全員で学びを共有するとともに、1年生にその学びの成果と自主的に学ぶことの楽しさや保育・幼児教育のよさを伝えることができるようにすることである。

今年度も昨年度につづき、新型コロナウイルス感染症拡大予防のための活動の制限や、それに起因する保育現場との連携の難しさ等、大変な環境となったが、オンラインを活用しての講演や交流等を通して、できる範囲での精一杯の学びの経験をした学生たちは、それぞれの成果をまとめて「学びの発表会」を行った。このように、学生が自らの保育の学びを振り返り、その意義や重要性、さらなる課題を再確認することは、文部科学省が提示している教職実践演習の内容とも合致している。

本年度も、「学びの発表会」の発表は、それぞれの活動のねらいや目的・方法・結果考察及び今後の課題という内容構成を基本にして、各活動の写真や動画等の資料を使用する等、プレゼンテーション技術を学ぶこともできたと思われる。

3. 相互授業参観について

本年度の各教員の相互授業参観のための公開授業担当科目は以下のとおりである。

東	水1	プログラミング	伊達	火4	小児体育Ⅱ
明石	水3	保育内容 人間関係	原(祐)	火4	音楽Ⅳ(声楽・鑑賞)
内本	金4	図画工作Ⅱ	韓	月5	教育原理(教育制度的事項等を含む)
梅野	月4	子育て支援			
奥	金2	音楽理論	斎藤	金2	音楽理論
奥野(孝)	火4	小児体育Ⅱ	吉田(郁)	金2	児童文化

4. 学科独自の取組について

(1) 公立受験対策勉強会の実施と「社会福祉特別講義Ⅰ」への保育科学生の受講

今年度も新型コロナウイルス感染症拡大により、授業形態がオンデマンド中心となったことを受けて、公立受験希望者への指導は、当初はオンライン(ZOOM)やメールでの指導により始められた。対面授業が可能となった冬学期には、受講希望者に対面での面接や実技等の試験対策指導を行った。保育科教員全員が其々の専門性を生かし、受験内容に応じて個人指導を行った。

数学分野については、教育学部の原田三朗先生の「算数」の授業15回を実質的に公立受験対策の指導に充てていただいた。

その結果、今年度は、大阪市、葛城市、五條市、八尾市、柏原市、橿原市、生駒市、藤井寺市、太地町、香芝市の10の地域、実質8名の合格者を出すことができた。

さらに、今年度も1年生への公立受験対策として、人間福祉学科健康福祉専攻が東京アカデミーと協働して開講している夏学期の集中講義「社会福祉特別講義Ⅰ」(石田晋司先生担当)を引き続き保育科の1年次生も受講できる形にさせていただき、合同開講にさせていただくこととした。1年次から将来の保育者としての自分の姿を意識することで、卒業までの学びに向き合う姿勢が大きく変わったと思われる。

(2) 高大連携事業の実施

昨年度に引き続き今年度も3月に、高大連携協定校実践プログラムの一環として、4回にわたるピアノ講座を保育科音楽教員複数名で担当し開講することができた。今年度は大阪府立藤井寺高校、大阪府立登美丘高校、羽衣学園高校、大阪体育大学浪商高校、奈良県立高取国際高校、奈良県立桜井高校、奈良県立西ノ京高校より17名の受講生を迎え、コロナ対策を万全にしての実施となった。昨年度の受講生より3名が本学を受験し入学予定(うち2名は保育科、1名は教育学部)とのことで、今後とも本学の受験生確保に向け一助となるよう願っている。

一方、奈良県立桜井高校普通科保育コースとの高大連携授業は、今年度はコロナ禍以前に戻り、2回実施することができた。1回目は6月25日(金)に「探究演習『保育の自然科学』」の紹介として、スライムや自然の花を使ったゼリー作りを行った。それぞれの高校生は個性豊かに表現して楽しんでいた。この日は、保育科学生の実習前の自宅待機期間に当たり同行できなかったため、実際の学内での授業動画を紹介するに止まった。

2回目の実施日は、11月15日(月)に、「子どもの世界を覗いてみよう!」という授業題目で実施した。保育科1、2年生の桜井高校卒業生3名が参加し、高校生と共にジェスチャーゲームを楽しんだあと、教員からゲーム遊びとつなげて「子どもの内面を理解することの大切さと保育者の専門性」について話した。そして、授業後半に卒業生一人ひとりから実習で関わった子どもとのエピソードや自身の専門的な学びについて話し、保育の魅力を後輩たちに伝えた。桜井高校の卒業生が高大連携事業の連携授業に参加した意義は大きく、桜井高校からも高い評価を得ることができたと考える。

今後も保育科で学んだ学生が母校でその学びを活かし、またそれが高校生にとっても有意義でさらに保育科への志が高まるような高大連携授業を、対象高校を拡大し行っていく予定である。

(3) ルーブリック評価導入への具体的検討(造形)

夏セメ(図画工作I、保育内容・表現)前半は、コロナ禍で、偶数奇数に分かれ、対面と遠隔のハイブリッド。後半は実技演習科目のみ時間割を変更して、全員対面授業が行われた。冬セメ(図画工作II)は、ハイブリットで始まり、実習で遠隔、実習後は、対面で行われたが、終盤また遠隔となった。

遠隔授業では、IBU netで配信した課題を自宅で制作。作品を携帯で撮影し、学習成果可視化の造形ポートフォリオに日時、作者コメントと共に入力した。コメントから、学生の作品に対する思いを感じることができ、造形ポートフォリオは、昨年同様、遠隔授業の提出方法として役立った。また、対面授業でも本来のポートフォリオの機能を生かすために、写真とコメントの入力をするようにして、1・2年生ともにほぼ100%の活用率で、1年間で15点ほどの作品をアップした。

全授業が遠隔と対面授業を繰り返す中で、保育科の学生は実習もあり、作品を適宜管理してポートフォリオ化することが難しい状況であったが、学生個々の枠にコメントと写真で残ることで正しい評価ができたと考える。より正確な評価が学生の学修意欲を高めると考えるので、来年度は、このルーブリックについて精査し、学生にもっと理解してもらえるよ

う努力したい。

(4) 「保育実践演習」におけるシラバスについての再検討

今年度も『保育実践演習』報告会を開催せず、「保育実践演習」研究会によるシラバス検討会を開催し、今年度を含む今までのシラバスの再検討と教員の役割分担について課題を明らかにし、再検討した。その結果を次年度の「保育実践演習」のシラバスに反映させ、より学生にとって学びが充実したものになるよう科目間の相互連携を図りながら授業内容を再構成した。特に、再検討の中では、今年度は、「学びの発表会」の成果に基づいて新設した「保育探究演習」科目を設定し、学生の学びをより深めるように時間確保を行った。

(5) 「保育探究演習（多文化保育論）」を中心にした韓国・新丘大学との連携

・オンラインを通しての日韓学生交流活動

保育科の重点施策の事業計画の一つである「保育や子どもを取り巻く社会状況に対応できる保育者としての幅広い教養と専門性を深める」ことを目的として、「保育探究演習（多文化保育）」では、毎年韓国新丘大学児童保育学科と学生研修交流を行っている。

当科目の15回の授業内容は、1) 多文化共生社会の現状や多文化保育の基礎的理論の学習 2) 現在の保育現場における多文化保育実践に関する学習 3) 学生たちが直接異文化体験活動を体験できる日韓学生交流活動を行うといった理論・実践・体験の三つの柱から構成されている。

日韓学生交流活動については、2019年度までは、同科目の授業の中で受講生9～10名が2泊3日の日程で韓国新丘大学を訪問し、学生同士の交流、フィールドワークとしての文化体験、幼稚園見学等を行っていた。2020年度からは、新型コロナウイルス感染症の拡大により、オンラインでの交流活動を余儀なくされているが、その中でも参加学生ら自らが活動を計画し、準備・実施するといった学生中心の主体的・協働的学習方法を重視しながら行っている。

今年度の受講生（16名）は、オンライン交流活動を計画・準備し、新型コロナウイルス感染症防止対策を徹底して行った上で、10月24日（水）に交流活動を行った。

日韓の学生たちは、お互いの言語での挨拶や自己紹介、両国の保育文化の手遊びや歌、お互いの伝統文化の紹介、さらには保育における共通課題について質問し合いながら両国の保育情報を得る等、多くの学びと感動のある交流となった。言葉の違いを超えて、お互いが学び合い、笑顔があふれる楽しい活動であったが、特に、活動終了後の参加学生の感想には、「多文化保育を通して、他国を尊重する大切さ、他国の文化や保育観を知る面白さやむずかしさ、工夫すべきことなどたくさん学ぶことができた。コロナの影響で実際に対面での交流活動ができなくて残念であるが、オンラインだからこそできたことも多くあり、多文化保育の楽しさを実感した。」等の学びが書かれていた。学生たちはオンライン交流であるからこそできる活動を考えたり、工夫したり、一所懸命に伝え合おうとする心やお互いを配慮する姿が見られた。本交流活動後、参加学生らは本学習で得られた学習成果をまとめ、「学びの発表会」で報告し、保育科全学生と学びの共有を図った。

このような異文化交流体験は、多様化していく社会の中で、異なる文化を背景にもつ外国

にルーツをもつ子どもや保護者とのかかわりにおいて生かせる貴重な学びとなっていると考える。

短期大学部 生活ナビゲーション学科 ライフデザイン専攻

1. はじめに

2021 年度も前年に引き続き新型コロナウイルス感染症の感染拡大の対応に追われる一年間だった。入学式は各学科専攻に分れて行われた。オリエンテーションも学生全員が対面で出席することができた。しかし 4 月 5 日には大阪府にまん延防止等重点措置が適用され、学籍番号偶数・奇数に分かれて対面とオンライン授業を受けることになる。更に 4 月 19 日以降は大阪府からの要請を受けて全ての授業がオンラインとなり、4 月 25 日には緊急事態宣言が発出される。その緊急事態宣言は延長を重ね 6 月 20 日まで続くことになる。それでも、6 月 1 日からは短期大学部では実習系科目を中心に対面授業が再開された。そして緊急事態宣言終了後の 6 月 23 日からは、短期大学部での授業は全て対面授業となる。

ライフデザイン専攻に入学する学生は「将来やりたいことが見つからないので、入学後に様々なフィールドの勉強をして見つけたい」という気持ちの学生が多い。それに応えるためには、丁寧な指導が必要であるが、オンラインによる指導には限界がある。また短期大学部は 2 年間という枠の中で学生の要望に応えなければならないため、対面で指導ができないとかなりの制限を受けることになる。特に 2022 年 3 月の卒業生は最初の 1 年目はコロナ禍最初の年ということもあり、対面授業をあまり受けられず、2 年目も就職活動に支障をきたした。後述するように、新型コロナウイルスの変異種であるデルタ株による感染が拡大し、8 月 2 日から緊急事態宣言が発出され、就職活動に影響が及んだ。

8 月 2 日に発出された緊急事態宣言は、結局 9 月 30 日まで続いた。その後短期大学部では対面授業が一部再開されるが、大学全体として対面授業が再開されるのは 11 月 9 日になってからである。なお、10 月 5 日は全学生に対して対面で授戒会が行われている。その後、1 月に入ると新型コロナウイルスの変異種であるオミクロン株による感染が拡大し、1 月 27 日から 3 月 21 日までまん延防止等重点措置が適用されるが、3 月 14 日の卒業式は、大講堂に於いてつつがなく挙行された。

ライフデザイン専攻には実習系の授業科目が多く、実習で経験した後に理論を学習できることをメリットとしている。そのため、対面で実習科目を受けられないことのデメリットは非常に大きい。これも後述するが、ライフデザイン専攻では検定試験が授業と結び付いているのが特徴だが、今年の場合受験者数は去年に比べて多いが、合格率は減少している。また就職率についても、この報告書を書いている時点でまだ最終値は出ていないが、去年に比べてやや低めである。そして、単位が足りずにこの 3 月に卒業できなかった学生数は 3 名で、例年に比べて多い。新型コロナによる学生指導への影響は小さくないであろう。

2. 初年次教育科目（ライフデザイン・ゼミナールⅠ・Ⅱ）について

ライフデザイン専攻では、初年次教育科目として、ライフデザイン・ゼミナールⅠとⅡを開講している。キャリアセンタースタッフの協力を得、さらに外部講師を招聘し、2 年次にスタートする就職活動にうまく繋がるように連携を取っている。本年度は昨年度に続き、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を受け、以下に述べるように、様々な形で変更を余儀なくされた。

(1) ライフデザイン・ゼミナール I

ライフデザイン・ゼミナール I では、働くという事や自己分析、仕事分析等を中心に学習する。授業内容は表 1 のとおりである。今年度も新型コロナウイルス感染症対策として、様々な授業形態がとられた。表中 [全員対面] は、すべての学生が教室で対面で授業を受けた回である（諸事情でオンラインで受けた学生あり）。[奇数] は学籍番号が奇数の学生のみ対面で授業を受けた回であり、[偶数] も同様である。[オンライン] は全学生が Zoom で授業を受けた回である。なお、表の一番上の 0 回目は、新入生オリエンテーションを兼ねて実施された回で、ライフデザイン・ゼミナール I の一環として行われた。

全 15 回中 5 回の授業で外部講師に依頼し、また 1 回は卒業生、更にもう 1 回は企業から講師を招へいた。全体として学生が就職活動を具体的に感じることができるよう配慮している。

表 1. ライフデザイン・ゼミナール I 授業内容

0	オリエンテーション [全員対面]
1	ライフデザインの学びを理解する [奇数]
2	建学の精神を学ぶ・適正テスト [偶数]
3	レポートの書き方と情報活用のルールとマナー [オンライン]
4	ライフプランとキャリアプラン [オンライン]
5	PROG テストのフィードバック [オンライン]
6	働くとは [オンライン]
7	私が理想とするビジネスパーソン作り [オンライン]
8	自己分析①（適性テストの結果から自分を再認識する）[対面]
9	卒業生から学ぶ [対面]
10	自己分析②（過去の振り返りと私の強み・弱み）[対面]
11	仕事分析①（さまざまな仕事と職種・業界研究）[対面]
12	仕事分析②（企業人講演：事務職・販売職）[対面]
13	「私と仕事」について学んだこと [対面]
14	先輩（3 セメ在学）から学ぶ [対面]
15	SPI 対策試験 [対面]

2021 年度は新型コロナウイルス感染症感染予防のために 1 回目と 2 回目はそれぞれ学籍番号奇数、偶数の学生のみが対面で授業を受けた。それ以外の学生はオンラインで受講した。しかし 4 月 19 日になると大阪府から要請を受けて全学生がオンラインでの授業となり、4 月 25 日には緊急事態宣言が発出され、5 月末日までオンライン授業が続く。短期大学部においては、6 月 1 日から全学生が対面でゼミナール I を受けられるようになり、8 回目以降の 8 回分はほぼ全学生が対面で受講した。

最後に、授業アンケートを行った結果を表 2 に示す。全体的に見て、授業前に比べ授業後には 0.3～0.5 ポイント上がっている項目が多い。「大勢の人の前で発表（話す）ことができ

る」や「人の話を聞き、自分の意見を伝えられる」などは0.4～0.5ポイント上がっており、自分に自信が付いたことがうかがえる。その一方で、「現在、考えている卒業後の進路がある」などは、やや数値が下がっており、将来について考えあぐねている様子もうかがえる。

表2. ゼミナールⅠ授業前後でのアンケート結果（5段階評価の平均値を記している）

質 問	事前評価値	事後評価値
1. 自分から挨拶ができる	4.2	4.1
2. 敬語(言葉づかい)ができる	4.1	4.2
3. 社会に必要なビジネスマナーを理解している	3.5	4.0
4. 大勢の人の前で発表(話す)ことができる	2.6	3.1
5. 人の話を聞き、自分の意見を伝えられる	3.4	3.8
6. 自分の強みを理解している	3.0	3.4
7. 自分の弱みを理解している	4.1	4.2
8. 短大で力を入れて取り組んでいることがある	3.7	3.8
9. 目標を設定し、計画を立てることができる	3.5	3.7
10. 社会に興味を持ち、情報を得ている	3.0	3.4
11. 仕事について興味をもち、情報を得ている	3.2	3.5
12. 卒業後の自分の姿がイメージできる	2.6	2.7
13. 現在、考えている卒業後の進路がある	3.2	3.0

(2) ライフデザイン・ゼミナールⅡ

ライフデザイン・ゼミナールⅡでは、履歴書の書き方を学習し、一般常識テストを体験する。授業内容は表3のとおりである。

履歴書の書き方では外部講師1名を招き、更に専攻の専任教員が加わることにより丁寧な指導に努めた。その内容は、履歴書の目的・書き方、がんばってきたこと、自分の特徴、志望動機等である。自己アピールできる事柄は特殊な経験や体験と思っている学生が多いため、日常のちょっとしたことで自己アピールできることを気づかせる意義は大きい。

10回目と11回目は就職活動におけるグループ面接の練習と、就職サイト登録指導を行った。グループ面接は、面接員の人数の関係で、一度に全学生を対象にできないため、2グループに分けて実施した。10回目に面接練習を行えなかった学生は、順番を逆にして就職サイト登録を行い、11回目にグループ面接の練習を行った。昨年度は新型コロナウイルス感染症感染拡大によりオンライン授業に変更となり、グループ面接の練習ができなかったが、今年は1回とは言え練習ができ、学生に有意義な体験をさせることができた。

授業アンケートを行った結果を表4に示す。全体的な傾向は表2と同じで数値は若干上がっているが、次年度になって実際に就職活動をはじめると、行動を伴わない学生が多く、それが一番の問題であろう。

表3. ライフデザイン・ゼミナールⅡ 授業内容

1	オリエンテーション [学籍番号偶数対面]
2	履歴書を書く (目的や書き方、ルール) [全員対面]
3	履歴書を書く (学生時代ががんばってきたこと) [全員対面]
4	履歴書を書く (自分の特徴) [全員対面]
5	履歴書を書く (志望動機) [全員対面]
6	履歴書を完成させよう (履歴書添削 1 回目) [全員対面]
7	履歴書を完成させよう (履歴書添削 2 回目、提出) [全員対面]
8	適職診断テスト・進路登録 [全員対面]
9	面接対策 (グループ面接)、実践に向けて [全員対面]
10	実践グループ面接 [全員対面]
11	就職サイト登録会 [全員対面]
12	グループ面接を終えての振り返り [全員対面]
13	適職診断テスト (R-CAP) 解説 [全員対面]
14	ライフデザイン・ゼミナールⅡの振り返り [全員対面]
15	一般常識テスト [全員オンライン]

表4. ゼミナールⅡ授業前後でのアンケート結果 (5段階評価の平均値を記している)

質 問	事前評価値	事後評価値
1. 就職活動の流れが理解できている	3.2	3.6
2. 課題を自覚し、いつ何をやるべきかイメージできる	3.6	3.8
3. 自分の強みを答えることができる	3.0	3.4
4. 強みを発揮した出来事や事例を挙げることができる	2.9	3.4
5. 気になる企業や職業について調べることができる	3.5	3.9
6. エントリーシートの目的や位置づけを理解している	3.0	3.4
7. エントリーシートで自己PRや志望動機を表現できる	2.8	3.4
8. 就職活動に適した身なり、立ち居振る舞いができる	3.4	3.8
9. 正しい敬語を使うことができる	3.5	3.7
10. 話したい事をわかりやすく伝えることができる	2.9	3.2
11. 面接の評価ポイントを理解して行うことができる	3.0	3.7
12. グループディスカッションのポイントを理解して行うことができる	2.9	3.3
13. 思うように行かなくても行動し続ける覚悟がある	3.6	3.8

3. 相互授業参観について

今年度は、専攻必須の授業参観として、カラーコーディネーター実習Bで行い、2名が参観した。「学生がとても真面目で、私語も居眠りもなく、一生懸命に授業を受けていた」などの講評があった。

また、情報処理特別演習に教育学部の教員1名が参観した。「丁寧な授業がなされていた」

「学生が大変落ち着いていて、しっかりとパソコン画面を通して学んでいる様子が印象的だった」などの講評があった。

4. 学科独自の取り組みについて

(1) キャリアの基礎Ⅰ・Ⅱについて

ライフデザイン専攻では必修科目として、夏学期にSPI試験言語分野に対応した「キャリアの基礎Ⅰ」を開講し、冬学期にSPI試験非言語分野に対応した「キャリアの基礎Ⅱ」を開講している。どちらも就職試験に必要な基礎学力育成を目的としている。

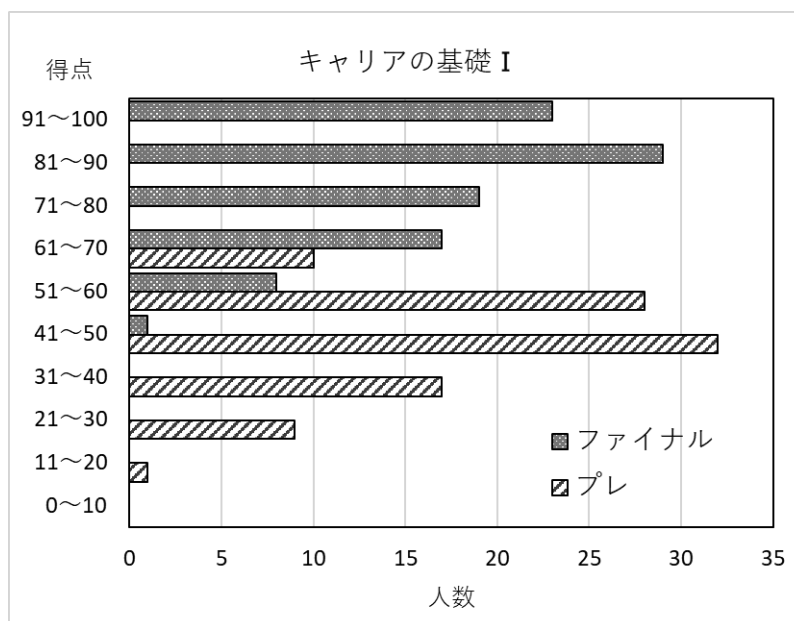


図5. キャリアの基礎Ⅰ試験結果

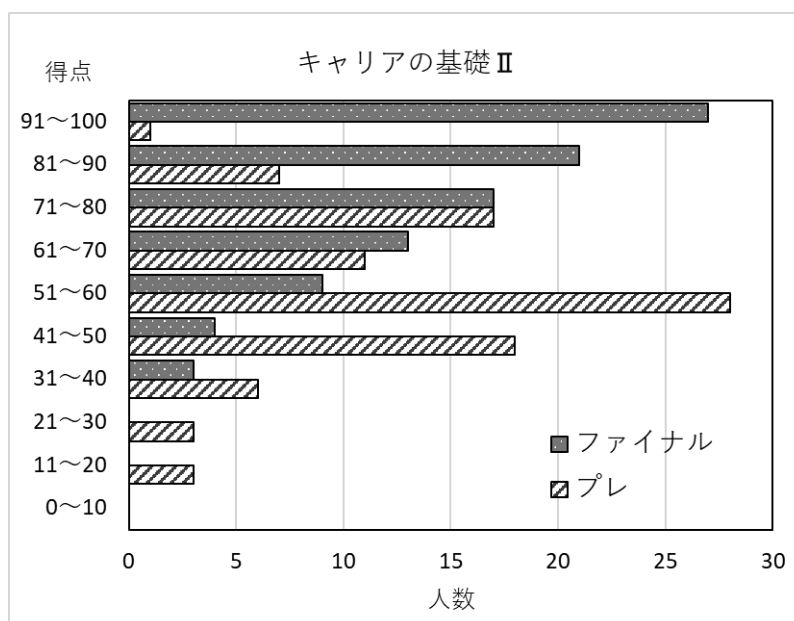


図6. キャリアの基礎Ⅱ試験結果

最初にキャリアの基礎Ⅰについて以下に記す。プレテストとファイナルテストの結果を比較してみると、プレテストの平均点は46.8点、最高は70点、最低は20点であったものが、ファイナルテストでは平均点は80.0点、最高は100点、最低は50点となった。平均点で約33点アップしており、一定の国語力の向上がうかがえる。この結果は例年とほぼ同様と言えるだろう。

キャリアの基礎Ⅱも同様で、プレテストの平均点は57.7点、最高は100点、最低は17点であった。一方でファイナルテストの平均点は78.3点、最高は100点、最低は32点で、平均点が約20点アップした。この結果も例年と同様と言える。

最後にキャリアの基礎ⅠとⅡに対する学生の感想だが、アンケート結果は概ね良好で、例外はあるものの、「わかりやすかった」「苦手な内容も理解できるようになった」などのコメントが多く寄せられた。

(2) 資格取得について

ライフデザイン専攻では授業と資格がリンクしており、様々な資格にチャレンジすることができる。

表7. 取得資格

検 定	級	合格者数	受験者数	欠席者数
秘書技能検定	2級	10	29	1
	3級	37	49	2
ビジネス文書技能検定	3級	27	38	3
日商簿記検定	3級	0	1	0
簿記能力検定（全経）	3級商業簿記	2	4	5
医療秘書技能検定	3級	11	31	2
ドクターズクラーク		3	6	0
MOS(WORD)		2	2	0
MOS(EXCEL)		5	6	0
MOS(PowerPoint)		11	11	0
色彩検定	2級	2	2	0
	3級	30	33	0
食生活アドバイザー検定		14	23	1
ファッションビジネス能力検定	3級	3	8	0
ファッション販売能力検定	3級	5	8	1
メイクアップ技術検定	2級	14	14	0
	3級	25	25	0
	ベーシック	15	15	0
アソシエイトブライダルコーディネーター		4	4	0
建築CAD	3級	2	2	0

表 8. 認定資格

認定資格	人数
秘書士	11
上級秘書士	10
食空間コーディネーター3級	11

表 7 と表 8 に 2021 年度の学生の資格取得状況を示す。新型コロナウイルス感染症が流行したため昨年実施されなかった食生活アドバイザー検定が、今年実施されて、23 人が受験し 14 人が合格している。また、今年日商簿記検定にチャレンジした学生もいた。

新型コロナウイルス感染症に対する警戒感が和らいだせいか、前年度と比較すると、受験者数は増加した。昨年は延べ 255 人だったのに対し、今年は 311 人であった。その一方で合格率は昨年の 82% に対し、今年度は 71% に減少している。受験者数を増やしつつ、合格率を上げていくことが、今後の課題であろう。

(3) 就職支援について

2022 年 3 月 14 日に卒業した学生数は 109 人。そのうち 92 人が就職を希望し、87 人が決定している（3 月 15 日現在）。就職率は 94.6% で、昨年の 96.8% より若干低い。なお文部科学省と厚生労働省が令和 4 年 3 月 18 日に発表した資料によると、2 月 1 日現在の短期大学生の就職内定率は 86.9% であり、ライフデザイン専攻の同時期の内定率は 85.9% なので、それより低い。

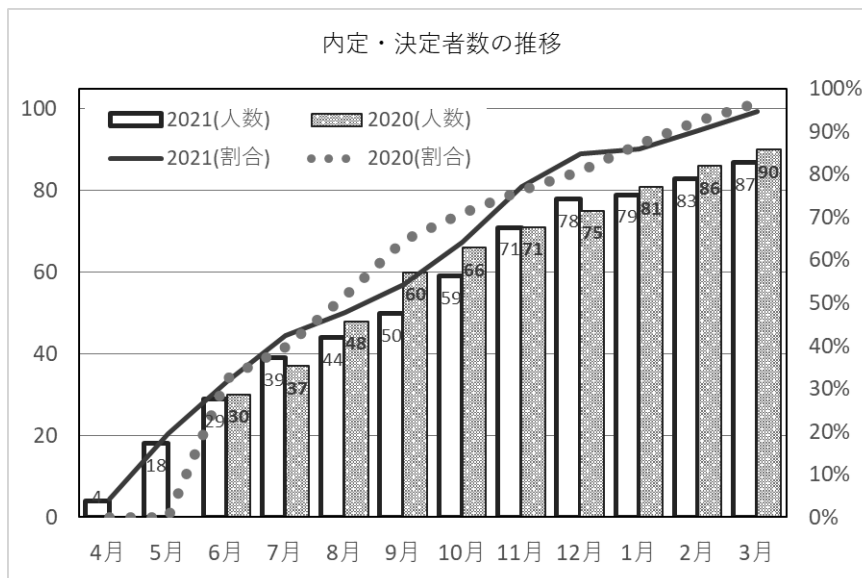


図 9. 就職内定（決定）者数の推移

今年は進学希望者が多いのが特徴で、6 人が編入学予定である（他大学 1 人を含む）。ま

た、それとは別に専門学校へ進学を希望している学生も 2 人いる。この春卒業した学生達は、入学したときにちょうど新型コロナ感染症が広まって大学で授業を受けられなくなった世代で、より充実した学生生活を求めているのであろう。

図 9 に内定者・決定者数の推移を示す。昨年に比べると、内定者数が若干低めである。特に 9 月前後が前年に比べて低い。これは、新型コロナウイルスの変異種であるデルタ株による感染が急拡大し、8 月 2 日から 9 月 30 日まで緊急事態宣言が発令されて、就職活動に支障を来したためである。その一方で、昨年は 4 月と 5 月は就職活動ができない状況だったが、今年は、4 月から内定を獲得した学生がいた。最終的な内定率は、この報告書を書いている時点では確定していないが、昨年に比べて若干低くなりそうである。以下でその理由を考察してみる。

一つの原因は、アパレル業界に就職を希望する学生が多いことが考えられる。昨年はコロナ禍で求人が取りやめになり応募が全くできない状況だったが、今年は若干の応募があり、アパレル業界を希望できる状況にあった。しかし採用予定人数がとても少なく、アパレル業界を諦めて他業種に切り替えることができない学生が就職先を決めあぐね、内定率が下がったことが考えられる。

もう一つの原因として、学生がキャリアセンタースタッフとの信頼関係を築くのが困難だったことが考えられる。今年卒業した学生は、入学からほぼ 1 年間オンラインやハイブリッドで授業が行われ、ライフデザイン・ゼミナールⅠやⅡで直接接する機会が例年に比べ少なかった。就職活動開始後のキャリアセンターとの面談も対面ではなくオンラインが多く、円滑なコミュニケーションが取れていなかった。その結果今年の卒業生はキャリアセンターを頼らずに自力で就職活動をし、結果を出せず、やる気を失ったことが内定率の低下につながった。実際に面談比率を前年と比較すると、今年度は面談回数が少なく、準備が不十分なまま就職活動が行われていたことがわかる。短期大学の学生の就職活動は、教員やキャリアセンターを頼ることが不可欠であり、我々スタッフ一同は学生と接点を持って、頼りたいと思われる存在になることが重要であろう。

5. その他

(1) 地域創生事業の推進について

① 第 3 回「食べて応援・作って応援」レシピコンテスト

本コンテストは、JA 大阪南と本学との産学連携の取り組みとして、地元農産物を活かした総菜やスイーツのレシピ開発を目的としたものである。昨年度はコロナ禍により中止されたが、今年度は二次審査の方法を一部変更することにはなったが無事に開催された。本専攻の学生から 20 品の応募があった。一次の書類審査を通過した 6 レシピをプロの料理評論家が忠実に再現し、完成した料理を JA 大阪南審査員が試食、投票により優秀賞、JA 大阪南賞、あすかてくるで賞が決定された。表彰された 6 レシピは、「あすかてくるで」河内長野店にて期間限定販売されるほか、JA 大阪南の HP や広報誌等で紹介される予定である。

学生にとっては、コロナ禍で食に関するイベントや行事が限られる中、短大で学んだ食についての知識や技術をもとに、地元の農産物についても学びを広げる良い機会となった。

② 公民館子ども料理教室

8月5日に羽曳野市立陵南の森公民館「夏休み子ども企画・料理教室」を開催した。学生は5月から「小学生が作る夏のお菓子」をテーマにメニューを検討し、試作を通して子どもへの指導方法も検討しながらレシピをまとめ、教室当日は学生1人が3人の小学生の指導を担当する形で運営した。短大で学んだ製菓の知識や技術を活用するだけでなく、予算や作業時間、公民館調理実習室の使用可能な調理器具、コロナ感染予防のための種々の制限など、多くの条件をクリアするための実践的な学びを通して、学生がジェネリックスキルを育成する有意義な機会となった。

③ 「大阪生まれのトレビスリゾット」ネーミングとパッケージデザイン

JA 大阪市が進めるイタリア野菜のブランド化・普及と、コロナ禍での飲食店休業により余剰となった野菜の消費拡大の取り組みとして、大阪市内で生産されている野菜「トレビス」を使った商品（リゾット）のネーミングとパッケージデザインを行った。6月に商品加工を担当する幸南食糧株式会社の工場見学を行い、地域農業を応援する6次産業の重要性を学び、ネーミングやパッケージデザインについての議論を深めた。8月に3000個限定で商品化され、JA 大阪市の「直売所おいで〜菜平野店」と東住吉区・平野区内11の郵便局窓口等で販売された。11月12日に本学において、JA 大阪市から学生に感謝状と記念品の贈呈式が執り行われた。さらに、12月18日にはイズミヤ古市店でイベント販売を行った。会場準備、販売促進POP作成、チラシ配布、店内放送などに工夫を凝らし、132個を完売した。

学生は商品の開発過程から消費者に届けるところまでを実践的に学ぶことにより、そこに関わる多くの人の思いを知り、自分達がそこに加わることの責任と喜びを実感することができた。

(2) 地域交流活動について

① 「ご祈祷クッキー」のデザイン

本学「食べられるグッズ」第6弾「ご祈祷クッキー」のデザインについて、短期大学内でコンテストを実施した。専攻内では応募者数101名、応募件数174案の中から1年生の2名4案のデザインが選ばれ、保育科からのデザインとともに和菓子工房「あん庵」様により製品化された。四天王寺でコロナ禍疫病退散・学業成就のご祈祷をいただいた後、「ご祈祷クッキー」としてオープンキャンパスなどで受験生に配布された。学生は、自分のアイデアが製品化され、それを通していろいろな関わりが広がることから、短期大学部での学びが社会につながる手応えを感じ、学びに対する意欲が高まった。

② 衣服のアップサイクル活動

SDGsの目標12[つくる責任・つかう責任]を視野に入れ、衣服のリサイクル意識の向上を目標にESD(持続可能な開発のための教育)につながる活動として、近隣の幼稚園と連携したアップサイクル活動を実施した。

本年度より、交流する幼稚園は2園(羽曳野市立埴生南幼稚園、羽曳野市立羽曳が丘幼稚園)に拡大し、園児との交流活動は各園で2回ずつ(全4回)行った。1回目の交流会は対

面で実施し、活動の目的を伝え、園児-学生間のコミュニケーションの機会とした。学生は、持ち帰った園児の制作物（切り絵）と古着からロゼットにアップサイクルし、2回目の交流会でプレゼントした。2回目の交流会では、コロナの状況を鑑み、遠隔で実施した。

本活動によって学生は、制作者の立場を経験することで、つくる責任・つかう責任について両者の視点を持って深く理解することができた。

② 「四天王寺 きたやま苑」活動報告

7月にきたやま苑から「敬老祝賀会お祝いカード」の依頼があった。高齢者施設の入居者に見分けやすい配色などを考え、お祝いカード制作を実施した。9月5日の敬老祝賀会は、コロナ禍のため訪問できなかつたので、写真データを送信した。11月にきたやま苑を訪問し、実物のカードをロビーに展示し、Zoomで入居者と話をした。

2件目は施設内にある入浴場の暖簾制作の依頼である。デザイン・素材・制作方法などを学生と話し合い、19のデザイン案をきたやま苑に提案し、四季のデザインが最終決定された。暖簾制作は年度内にできなかつたため、来年度の学生に引き継がれる予定である。

3件目は年賀はがきの作成で、きたやま苑スタッフの方から入居者にお渡しした。

(3) その他

① 『BOSAI FASHION IDEA COMPETITION 2021』への応募

本コンペティションは、防災に役立つアパレル・グッズ企画を対象とし、防災意識をファッションの力で高めることを目的としたものである。株式会社アーバンリサーチと大阪府主催の『万博×環境 未来を描こうプロジェクト』との協働により開催された。本専攻からは1年生（2名）が応募した。学生は、コロナ禍における学生生活で必須アイテムとなったモバイルバッテリーに着目し、ファッション性の高いモバイルバッテリーの提案を2種行った。その結果、入賞は果たせなかつたものの、ゼミコンテストにつながる活動となった。

② 第5回ゼミコンテストへの出場

四天王寺大学の全学的なイベントであるゼミコンテストに、「コロナは災害?!～アイデアの力でより良い生活を～」と題して出場した。出場学生は、2年生（2名）、1年生（2名）の異学年混合による4名の学生である。日常を一変させたコロナを“一種の災害”なのではないかと問いかけ、コロナ禍で感じた生活の変化をセイラの学びと結びつけ、日常から非日常でも役立つ考えや商品をフードとファッションの視点から提案した。フードの視点からは、大阪産のイタリア野菜の一つであるトレビスを使った加工食品「大阪生まれのトレビスリゾット」の開発に携わり、ローリングストック法の考え方を提案した。ファッションの視点からは、ファッションの一部として持ち運べる「多機能型モバイルバッテリー」を企画・提案した。その結果、優秀賞を受賞した。

③ 羽曳野市からの婚姻届・出生届デザイン募集

羽曳野市から市オリジナルの婚姻届・出生届のデザイン募集があり、ライフデザイン専攻の学生1人が婚姻届の優秀賞、1人が出生届の優秀賞を受賞した。

短期大学部 生活ナビゲーション学科 ライフケア専攻

1. はじめに

ライフケア専攻は、「質の高い介護福祉サービスを提供できる介護福祉士の養成を基本とし、理論と実践のバランスが取れた実社会で求められる社会人基礎力を育み、何事にも主体的に取り組むことのできる人材の養成」を目的としている。国家資格である介護福祉士とは、「専門的知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき心身の状況に応じた介護を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行う」と定義されており、本専攻のディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づいている。

対人援助職を目指す本専攻学生の課題は、コミュニケーション力や文章をまとめる力といった社会人基礎力を高めつつ、専門的知識と技術の融合を目指していくことである。また、介護福祉士養成施設の卒業生に、国家試験の受験が段階的に義務付けられたことを鑑み、過去に実施してきた卒業時共通試験対策から国家試験対策へ円滑に移行し、その内容を充実していくことが必須となっている。

入学して間もない学生が、新しい環境のなかで介護福祉士を目指す動機づけを行うための初年次教育「ライフケア演習Ⅰ」、冬学期には「ライフケア演習Ⅱ」が平成27年度よりスタートし、次年度は「ライフケア演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」が開講された。これまで国家試験対策の実施によって合格者を多数輩出するに至っている。

コロナ禍が続く本年度のFD・SD活動は、初年次教育科目「ライフケア演習Ⅰ」「ライフケア演習Ⅱ」に継続して「ライフケア演習Ⅲ」「ライフケア演習Ⅳ」、授業相互参観、そして学科独自の取り組みとして例年実施されてきたなかでは「介護福祉士国家試験受験対策」、また「羽曳野市認知症サポーター」、「身体障害者グループとの交流会」においては、事業者、当事者の協力を得て実施することができたので以下に報告する。

2. 初年次教育等について

(1) 「ライフケア演習Ⅰ」

【概要】

本学の建学精神の理解を基礎とし、短期大学における学習と学生生活が円滑に始められるようにする。また、介護福祉士となるうえでのモチベーションを高める。

授業形態は、講義、演習、学外実習、グループ発表等を取り入れ、社会人基礎力における「前に踏み出す力」（主体的に学ぶ力、はたらきかける力、実行する力）を身につける。

【到達目標】

- ① 本学で学ぶことの意義を理解することができる。
- ② 将来、介護等対人援助職に就く学生として必要な知識、技能、基本的態度を習得する。
- ③ 介護福祉士等、自己の将来について展望し、社会人になるための問題意識をもつこと

ができる。

- ④ 教員やクラスメイトとのコミュニケーションを円滑にし、より良い人間関係をつくる
ことができる。

【授業計画および受講生アンケート結果】

授業計画とアンケート結果は以下のとおりである。アンケート結果は、受講生 16 名の実数を表記した（うち 1 名は途中退学）。5 段階で理解度を含め、受講した成果が得られたかどうかを尋ねた。 5：かなり良い 4：良い 3：どちらとも言えない 2：あまり良くなかった 1：良くなかった

月 日	テーマ	授業内容と到達目標	アンケート結果				
			5	4	3	2	1
4月 6日	オリエンテーション	建学の精神・履修登録	12	3	0	0	0
4月 8日	将来についての展望	目指す介護福祉士になるため 2 年間どのように学業に取り組むのか学生同士で話し合う	12	2	0	0	0
4月 15日	実習報告会事前学習	実習報告会に臨むにあたり、どのように取り組むのかを話し合う	11	2	2	0	0
4月 22日	実習報告会	先輩からの実習報告を通し、介護現場や介護職の果たす役割について理解を深める	12	3	0	0	0
5月 6日	実習報告会の振り返り	先輩からの実習報告を聴き、実りある実習にするための行動目標を考える。	11	3	1	0	0
5月 13日	介護福祉士の現状	介護福祉士の役割と機能について学習し、ニーズが高まっていることを理解する	11	2	1	1	0
5月 20日	認知症サポーター講習(1・2年生合同)	認知症に対する基礎知識を身に付ける 「認知症サポーター」の活動の一環として、家族に認知症のことを伝える	13	2	0	0	0
5月 27日	認知症サポーター講習の振り返り	認知症サポーター講習を受け、認知症のある人に対する誤解や偏見を改め、今後どのように活動していくかについて発表する	11	3	1	0	0
6月 10日	卒業生のお話を聴く	高齢者施設で働く卒業生のお話を聴き、また質疑応答を通して、自身の進路選択について考える	14	1	0	0	0
6月 17日	卒業生のお話の振り返り	卒業生のお話を聴いて自身の今後の目標を定め、そのための行動目標を発表する	12	2	1	0	0
6月 24日	卒業生のお話を聴く	障害者施設で働く卒業生のお話を聴き、また質疑応答を通して、自身の進路選択について考える	14	1	0	0	0
7月 1日	卒業生のお話の振り返り	卒業生のお話を聴いて自身の今後の目標を定め、そのための行動目標を発表する	13	1	1	0	0
7月 8日	実習報告会事前学習	実習報告会に臨むにあたり、どのように取り組むのかを話し合う	11	2	3	0	0
7月 17日	実習報告会(2コマ)	コミュニケーション体験を振り返る 先輩からの実習報告を通し、介護現場や介護職の果たす役割について理解を深める	13	1	1	0	0
7月 22日	まとめ	介護福祉士等、自己の将来について展望し、そのためにどのような取り組みを行うかについて考える	12	2	1	0	0

受講生はライフケア専攻入学生 16 名。しかし、1 名は一度出席した後すぐに退学してしまつた。それ以外の学生の出席率は高かつた。

短大生活や介護に関する専門的な学習に早く慣れてもらうため、早期に上級生との交流の機会やバリアフリー2021 への参加を設定したが、コロナ禍のため昨年同様中止となつた。しかし、卒業生の話や認知症サポーター養成講座は計画通り行うことができ、おおむね意図した目標は達成できていたように感じた。

また、アンケート結果では「卒業生のお話を聞く」も好評であつた。専攻卒業生という親しみと自身の進路に合った話を聴くことができ、また、卒業生も職場内で事前に発表内容を確認してもらつたようで施設長から人材育成の効果があるので今後もお願いしたいとの報告があり、相互に学びのある機会となつた。

「認知症サポーター」では、外部講師による話のため適度な緊張感のもと、介護を学び始めた学生向けの内容であつたため、介護の対象者をイメージするのにふさわしい題材であつたと言える。

「書く力」「表現する力」を養うため、レポート並びに発表の機会を多く設けたが、学生にとっては負担が大きかつたように感じる。教員の教授法の工夫やもっと身近な題材を取り入れるなどの工夫が必要であつた。

(2) 「ライフケア演習Ⅱ」

【目的】

短期大学における学修と学生生活を円滑に進められるように、また、介護福祉士や援助職となるうえでのモチベーションを高めることを目的とする。地域で生活されている利用者とかかわり、介護福祉に関係する又は関心をもつ人々との交流を通して介護者としての役割を考える。

【到達目標】

- ①介護・対人援助職に必要とされる基本的態度・知識・技能を身につけることができる。
- ②人とかかわる「介護福祉士」等の自分の将来について考える契機とし、社会人となるにあたり問題意識をもつことができる。
- ③自己の介護者としての進路について考えることができる。

【授業計画】

授業計画と実施は以下のとおりである。

感染状況が少し落ち着いたこともあり、対面授業で実施ができた。

夏休みには例年ボランティア体験を課題として提示していたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、行事・イベントが中止となっており、この課題をとりやめた。代わりに夏休みに各自自由研究を課題として提示し、授業内での発表を課した（下表参照）。

1	10月5日	火	1	(授戒会開催のための学科別授業時程) オリエンテーション ・介護福祉士のカリキュラム ・発表会の方法について ・今後の学習に向けて(日記、読書の勧め)
2	10月7日	木	4	夏休みの学習(発表会) ・各自が夏休みの自由研究をパワーポイントと資料をもとに発表
3			5	
4	10月14日	木	4	コミュニケーション体験実習報告会 ・7月に四天王寺悲田院養護老人ホームでのコミュニケーション体験実習のプロセスレコードを発表
5			5	
6	10月21日	木	4	先輩からの施設実習オリエンテーション ・2回生から1回生に、自分たちの初めての介護実習の体験談を伝える
7	10月28日	木	4	介護実習前の心構え ・実習準備の進み具合の確認 ・カンファレンス、帰校日、巡回指導についての確認
8	12月2日	木	4	いのちについて ・2002年から2021年を振り返る ・同世代の人の活躍 ・自殺の統計 ・自己肯定感を上げる
9	12月9日	木	4	実習報告会について ・介護実習の目標 ・交流分析(エゴグラムによる性格判断)
10	12月16日	木	4	介護実習レベルI前半実習報告会
11	12月23日	木	4	
12			5	
13	1月6日	木	4	社会人基礎力について ・若い人に欠けているもの ・社会人として求められる能力 ・短大で学習すること ・今年目標設定
14	1月13日	木	4	発表準備 ・レジュメの作成 ・パワーポイントの作成
15	1月20日	木	4	一年間の学び(発表会)

履修者は2セメスター15名であった。授業は、介護福祉を学ぶ学生として求められる現代社会の課題、福祉の知識・技術の必要性の理解、介護実習報告会での実習の学びについてなどで実施した。

【アンケート結果】

アンケート(5段階評価)は、最終回にまとめて実施した。また、理解度と満足度とを分けて行った。

回数	理解度 平均	満足度 平均	主な感想
1	4.09	4.09	<ul style="list-style-type: none"> ・発表方法について学ぶことができた。 ・実習日誌を書くうえで習慣をつけるために毎日少しずつ日記を書いていこうと思った。 ・自分の苦手な日記・読書を頑張りたいと思った。 ・読書はできていたけれど、書く習慣ができていなかった。 ・夏休みはなかなか勉強できていなかったのので、冬学期は頑張ろうと思った。
2 3	4.08	3.77	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思っていたことをちゃんということができて良かった。 ・夏休みの学習を振り返ることができ、みんなの学習内容も聞けて良かった。 ・コロナの中でもしっかり自宅で勉強していることがみんなの発表で知れた。 ・資料作成がギリギリになってしまったので、次からは早めに取り掛かりたい。 ・発表は緊張して、言葉がつまったりした。 ・反省として、もっとパワーポイントに工夫するべきだった。皆の発表から知識も広がった。
4 5	4.00	3.75	<ul style="list-style-type: none"> ・実習に対してのアドバイスを沢山いただいて良い経験になった。 ・発表での司会進行を担当して、苦手だった人前に立つことが少しずつできたのかなと思った。 ・自分の実習について第三者に伝えられたと思う。 ・プロセスレコードを記録していくために、しっかりメモを取ることが必要だと改めて感じた。 ・実習ではうまく会話できなかったが、他の人の発表を参考に次回の実習に取り組みたい。
6	4.31	3.92	<ul style="list-style-type: none"> ・気になっていたことを全て知れてよかった。 ・先輩のアドバイスを利用した。 ・実習のことや日誌の書き方について聞いて良かった。 ・先輩の話で安心した面もあるが、自分にできるのだろうかど不安に思うこともあった。 ・先輩の話聞き、少し施設や実習についてイメージをすることができた。
7	4.56	3.56	<ul style="list-style-type: none"> ・いよいよ実習が始まると思い、コミュニケーションがうまく取れるのかど不安が大きくなった。 ・実習前の準備について、期限を確認して取り組んでいきたい。 ・一つひとつ整理することで不安な気持ちが少し減ったように思う。 ・実習が目の前に迫ってきて緊張してきたが、みんなもそうだと思うと、一人じゃないと勇気づけられた。
8	4.20	3.60	<ul style="list-style-type: none"> ・同世代の人の活躍を見ることができ、良い励みになりました。 ・いのちの重さなどについて考えることができた。 ・介護をするうえで他人の命を預かっているという重みを改めて感じた。 ・自分が生まれた年からのできごとを振り返り、懐かしく思った。 ・自殺のことを考えると、自分にできることをしっかりやろうと感じた。

			<ul style="list-style-type: none"> ・自己肯定感をもっと上げられるように努力したいと思った。
9	4.00	4.15	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の性格について客観的に知ることができ良かった。 ・報告会の資料を作るのがたいへんだった。 ・実習報告会への緊張が増した。 ・自分の欠点について改めて理解し、努力したいと感じた。 ・エゴグラムで自分の性格について知ることができ、当たっているなと思った。
10 11 12	4.39	4.00	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスみんながどんな風の実習をしているか気になっていたので楽しみにしていた。 ・先生からアドバイスをもらい、次回の実習に活かしたいと思った。 ・ほかの人の実習での頑張りに刺激を受けた。 ・他の学生のコミュニケーションを知り、それを次の実習に活かしたいと思った。 ・報告会で先生にほめられて嬉しかった。 ・どの学生も良い学びをしているけれど、先生はあまりそこにはふれないのだなと思った。
13	4.00	3.73	<ul style="list-style-type: none"> ・若い人に欠けているものが当てはまっていて、気を付けて直そうと思った。 ・社会人医なるのが近づいてくるとい実感もあり、このままではいけない、成長したいと思うことができた。 ・自分に必要な項目を意識することができたので、頑張りたい。 ・今まで自分の目標を立てたことがなかったけれど、それを決めるよい機会になった。
14	3.92	3.67	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の言いたいことをまとめる時間になった。それを整理できて良かった。 ・どのようなことをみんなに伝えようかと考えることができた。 ・資料作成が苦手だったが、周りの人に教えてもらえた。 ・パワーポイントを作るのは難しく、かんたんな文字を間違えてしまっていた。
15	4.85	4.62	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれが学んだことを発表していて、わかりやすかった。 ・自分が伝えなかったことをみんなに伝えることができたので良かった。 ・自分の目標をもっと高くしないといけないと気づいた。 ・みんなが目標にしていることを知ることができた。全員で実習、国試を乗り越えたいと思った。 ・今回決めた目標を必ず達成して国家試験に受かり介護福祉士に必ずなるという気持ちが高まった。 ・みんなの発表を聞いて、私も頑張ろう！と思えた。

(3) 「ライフケア演習Ⅲ」

本授業は、初年次教育の「ライフケア演習Ⅰ・Ⅱ」に引き続き、ライフケア専攻独自の演習科目として設定されており、介護福祉士資格を取得する学生の必修科目である。

本年度は4名の履修であった。

【到達目標】

- ①介護職に求められる基本的態度、知識、技能を身につけることができる。
- ②人とかかわる介護福祉士等の自分の将来について考える契機とし社会人となるに

あたり問題意識をもつことができる。

③介護の現状を把握し必要とされる介護実践力について理解することができる。

【授業計画】

目標を達成するために、具体的に取り組んだことは以下の2点である。

① 実習成果を報告し、学生間で情報共有することにより、介護実践について考察する。

4月：レベルⅠ後半介護実習報告会（1回生はリモートでの参加）

②「介護予防」について、地域の実践を理解する。

4月～5月：学生の居住地でのコロナ禍における「介護予防」のプログラムをまとめレポートする。

6月～7月：順次リモートで発表し意見交換を行い、各地域で取り組まれている「介護予防」実践について、情報共有することによって地域での取り組みの違いを知り、効果的な「介護予防」の方法を理解する。

地域連携については、新型コロナウイルス感染症対策のため活動できなかった。また、レベルⅡ介護実習は延期となったため報告会を開催するには至らなかった。しかし、昨年受講出来なかった、「認知症サポーター養成講座」の講習会は、1年生と合同で参加することができ、「認知症サポーター」としてオレンジリングを取得でき、介護福祉士としての活動の幅を広げる手段を得ることができた。

(4) 「ライフケア演習Ⅳ」

【目的】本授業は選択科目であり、介護福祉士資格取得を目指す学生のみでの授業であることから、専門職としての自覚および介護福祉士資格取得に必要な「国家試験合格」を目指すことと、介護実習報告会における後輩への支援ができることである。

在学生6名中4名が履修した（2名は介護福祉士受験資格の辞退者）。

【到達目標】

①介護・対人援助職に求められる知識・技術・態度を身につけることができる（具体例として、国家試験の合格を目指す）。

②後輩（1回生）の実習に対して、適切なアドバイスができるようになる。

【授業計画】

介護福祉士国家試験は、4つの領域（人間と社会、介護、こころとからだのしくみ、医療的ケア）からなり、それらを横断する総合問題が出題されることから、授業の前半9月～11月初旬にかけては、①人間の尊厳と自立、②人間関係とコミュニケーション、③社会の理解、④介護の基本、⑤コミュニケーション技術、⑥生活支援技術、⑦介護過程、⑧発達と老化の理解、⑨認知症の理解、⑩障害の理解、⑪こころとからだのしくみ、⑫医療的ケアの科目の基礎を固める対策を行った。形式は、学生が主体となって、既に履修している科目については復習、現在履修中の科目の中には予習という形でテキストを読み解いてまとめるという取り組みがなされた。11月中旬～1月の最終授業までは、主に総合

演習、国家試験過去問題、国家試験模擬問題等を解いていき、間違っているところや不安なところは再度テキストを確認して理解を深めていくことを繰り返し取り組んだ。

介護実習について、毎年介護実習レベルⅡを終えた2年生が、1年生のレベル1前半の実習報告会にて後輩への助言や励ましを行うことを恒例としていたが、今年度は2年生のレベルⅡ介護実習の延期や感染症対策、国家試験対策強化の観点から合同授業は見送られこととなった。

3. 相互授業参観について

令和3年度冬学期のライフケア専攻の相互授業参観の公開授業一覧は以下のとおりで、合評会は授業後の実施する予定であったが専攻教員以外の参加者が無かった。授業内容は、介護実習報告会及び介護実習指導であり、授業前に専任教員4人がそれぞれ指導した学生の情報共有と、授業後の専攻会議で学生の報告内容及び成果を確認する機会をもった。

	教員名	月日	曜日	時限	公開授業科目	教室
1	能田 茂代	12月16日	木	1	介護実習指導Ⅱ	6-159
2	濱田 佐知子	12月16日	木	4	ライフケア演習Ⅳ	6-159
3	大西 敏浩	12月16日	木	4	ライフケア演習Ⅱ	6-211
4	武田 盛夫	12月16日	木	1	介護実習指導Ⅱ	6-159

4. 学科独自の取り組みについて

(1) 「羽曳野市認知症サポーター」

5月20日(木)3限に「ライフケア演習Ⅰ」「ライフケア演習Ⅲ」の授業の1コマとして実施した。

授業での到達目標は「認知症に対する基礎知識を身につける」と「“認知症サポーター”となって活動する」とし、羽曳野市地域包括支援課に講師依頼をし、「認知症サポーター養成講座」として講義いただいた。

認知症サポーターキャラバンは、認知症の人と家族への応援者である「認知症サポーター」を全国で多数養成し、認知症になっても安心して暮らせるまちを目指している。

「認知症サポーター」としては、

1. 認知症に対して正しく理解し、偏見をもたない。
2. 認知症の人や家族に対して温かい目で見守る。
3. 近隣の認知症の人や家族に対して、自分なりにできる簡単なことから実践する。
4. 地域でできることを探し、相互扶助・協力・連携、ネットワークをつくる。
5. まちづくりを担う地域のリーダーとして活躍する。

となっている。

認知症の基礎理解について講義および演習等で学び「認知症サポーター」となった学生

には、その証としてのオレンジリングが手渡された。本専攻学生は、認知症への理解を呼びかけるため、大学祭などで広報活動を行ってきたが、昨年同様実施することはできなかった。

(2) 当事者との交流

「身体障害者グループとの交流会」

本年度も、社会福祉法人あいえる協会内の外部講演を事業としてされている「ピアエンジン」(大阪市住吉区)に講師派遣依頼をした。

今年も、オンライン授業となる中、ピアエンジンとともにオンラインでできないかと相談し、何度かオンラインの配信テストを行って実施した。

当日は「ケアの本質」という授業のなかで、重度障害のある当事者3名とスタッフ5名でZoomにて講演していただいた。学生たちは大学のパソコン教室にてそれぞれZoomに入室し、当事者と交流した。

当事者はいずれも社会福祉法人あいえる協会のグループホームや生活介護の利用者であり、かつ、当事者が組織的に講演活動を行う「ピアエンジン」のスタッフでもある。今年も主となって活動されてきた方が体調不良で、昨年参加の方2名と新規メンバーの1名であった。

当日の講演は、グループホームや公営住宅(バリアフリー設計)で、ヘルパーの手を借りながら一人暮らしの夢の実現をされている方の話を伺った。軽い知的障害により、青年期は入所施設での生活を余儀なくされ、自力で地域生活したいという心からの願いについて訴えられた。

学生からインタビューする形での交流が行われ「休みの日はどうしていますか?」と「いま、困っていることは何ですか?」などの質問が飛んでいた。

後日の「振り返り」では、関わる中で重度の障害者と自分とは同じ人間であるということが実感できたようである。また、かなり重度の障害者が一人暮らしをされている陰には多くのサービスや人が関わっていることなども知ることができた。それとともに「自分たちの生活を見つめなおす機会ともなった」「障害者のことが身近に感じられた」とのコメントが寄せられた。

(3) 「介護福祉士国家試験受験対策」

第34回介護福祉士国家試験は令和4年1月30日(日)が試験日であり、出題数は試験科目11科目から125問、問題の総得点の60%程度を基準としていることから、学生一人ひとりが合格に向けて目標を立てて受験対策に臨んだ。

主に木曜日3.4時限目「ライフケア演習Ⅳ」の授業と「国家試験対策」のなかで取り組んだ。7月28日(水)に中央法規出版主催の全国統一模擬試験1回目受験を皮切りに、その試験問題の「解説」を夏季休暇の課題として冬学期の「ライフケア演習Ⅳ」に臨んだ。

12月1日(水)には第2回目の中央法規模擬試験(2回目)を行った。自己採点し、間違った問題について自分たちで解説を加える形の自主学習と問題集、介護福祉士国家試験過去3年間の問題、その他の模擬問題にも取り組んだ。学生全員、中央法規出版の『国試ナビ』を利用し、さらに受験ワークブック等を参考図書にしてチェックを繰り返した。

介護福祉士過去問題、模擬問題を全9回に渡り実施した結果を、学生はIBUネットの自己評価記入欄に13科目別に点数と総合点を記入していき、データをもとに得意科目や点数が振るわなかった科目を把握したうえで対策を講じるようにした。ほぼ毎回記録して取り組むことが出来た学生もあれば、「後で記録しようと思っていたが忘れていた」「面倒くさい」という学生と声もあった。次年度は、対策の時間内に入力していき、全員が取り組むことが出来るように支援していく。

国家試験は、令和4年1月30日(日)に筆記試験が実施され本専攻より予定どおり4人が受験した。合格発表日は、令和4年3月25日(金)にあり、3名が合格を勝ち取った。また、昨年度の卒業生で1名不合格者があったが、卒業後も本専攻長によるサポートが継続してなされ、今年度に合格に導いている。

第5章 本学における仏教教育について

I 基礎教育科目「和の精神」について

1. カリキュラム上の位置づけとその課題

本学における「基礎教育科目」は、本学の建学の精神である聖徳太子の仏教精神を実践的に学ぶ「和の精神Ⅰ・Ⅱ」（1年次）、仏教的学識の基礎の修得と宗教的情操の体得をめざす「仏教概説」（1年次）を柱とし、これに人間存在のかけがえのなさを考える「現代社会と人権」を加えた、都合4科目6単位が必修科目となっている（ちなみに、平成30年度の入学生以前の旧カリキュラムでは、基礎教育科目は「仏教Ⅰ（瞑想）・Ⅱ（写経）」「仏教概説」「現代社会と人権」の4科目6単位が必修）。とりわけ「和の精神Ⅰ・Ⅱ」（計2単位）は、大学・短大の1年次の全学生1100名以上が礼服（オフィシャルスーツ）を着用し、学長を始めとして全教員とともに大講堂に会し、読経・瞑想・聞法（講話）・写経（後期のみ）・聖歌斉唱といった実践的な授業を行っている。これは規模的にも内容的にも、本学における特色ある科目の一つである。各学科専攻で行う専門的な学修を果実とすれば、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」のめざす人格の涵養はその根柢といえる。

平成24年度から仏教文化研究所が設立され、学長のもと、主任研究員を中心に、数名の研究員が本学の仏教教育の方針や内容を策定し、宗教委員会の議を経て、企画立案・実施・点検を行う体制が整い、令和2年度末で9年目を迎えた。下記に示す「和の精神授業規律」「講話内容」「アンケート」等はすべてその体制のもとで整えられたものである。

もともと、本科目は1100名を超える超大人数授業であるため、実施する上での課題（資料の提示方法、音響、空調、出席・成績管理、個別指導のあり方など）も少なくない。そのため運営・管理には教育職員・事務職員の全学的な協力が必要であり、とりわけ授業実践の「道場」である大講堂内では各学科専攻の教育職員の積極的な取り組みが不可欠となっている。

2. 大講堂内における指導体制

25年度の後期から、これまで明確とはいえなかった大講堂内における教員の指導の役割を検討し、下記のとおり明確化して、毎学期の宗教委員会・合同研修会などで周知徹底を図り、現在に至っている。

(1) 責任担当 学長

学長は、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の教育内容・運営の全体の監督、教育内容・方法および運営の総責任者である。教育内容・方法および運営については、学長が仏教文化研究所に指導方針案の策定を指示し、宗教委員会の検討を経て決定するものとする。

(2) 全体担当 仏教文化研究所研究員

仏教文化研究所研究員は、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の教育内容の進行・運営について、所定の指導方針に沿って主導的な立場で従事し、出席や授業態度にもとづいて最終的な成績評価を行う。

(3) 学科担当 (1) (2) 以外の全教員

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業は、全教員の指導によって行うものである。各学科担当の教員は、学科専攻学生に身近な教員として、主に堂内における私語・中座など授業態度の改善や静謐な環境の保持の面において、所定の方針および学科の取り決めに従い、注意喚起や個別指導に当たる。

(4) 宗教委員

宗教委員は宗教委員会に学科専攻の状況を伝えるとともに、委員会での決定事項を学科専攻に伝え、学科長とともに学科専攻での指導の在り方を取り決める。

令和3年度の授業実施についてであるが、先ず昨年の冬学期に実施できなかったの「和の精神Ⅱ」を新年度入学生の「和の精神Ⅰ」と共に実施した。1100人を超える学生を大講堂に一堂に集めることに懸念があったため、学生番号の奇数・偶数による対面と遠隔授業を交互に実施するハイブリッド授業を実施するとともに、対面実施の教室を大講堂に加え、講堂701や5号館の学生収容数の多い教室など5会場を準備し、分散による実施を行った。各会場においても、総じて静謐な環境で授業が行うことができおり、各会場に分かれての分散実施や遠隔授業の実施に関して学生の多くが満足しており、学生の満足度も相応に高い状況を維持できている。客観的な数値による詳細は後述のアンケート結果を参照されたい。冬学期の「和の精神Ⅱ」は遠隔オンデマンドで実施した。

3. 「和の精神Ⅰ・Ⅱ」授業中における授業規律について

仏教文化研究所において24年度に「『仏教』の授業規律」を策定し(24年度末・令和元年度末に一部改定)、25年度からは、毎年『履修要覧』『学生便覧』に掲載している(下記参照)。

以後、各学科専攻のオリエンテーションで学科ごとに指導の姿勢を示してもらおうよう要請し、かつ学期初めに「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業の冒頭に改めて教務部副部長(礼拝担当)より「和の精神授業規律」を示し、学生に規律の自主的な遵守を求めてきた。

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」は自他を尊重し、思慮深く、安定した人格を養うことが主眼であり、強制によって規律を守らせるのが本意ではなく、授業の主旨として、学生が主体的に自覚して上記の規律の遵守を心がけることの重要性を強調している。

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」授業規律(2020.2.26一部改訂実施)

礼儀を正して静穏な環境で自らを省み、自他を尊重し、思慮深い安定した人格を養うことが「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業の目的です。主旨を自覚し、下記の規律を遵守してください。

1. 単位の認定は、全授業回数のうち3分の2以上の出席を必要条件とする。
写経の場合、写経用紙の提出も必要条件とする。なお、以下の2・3・4の項目に違反する場合は出席を認めない。
2. 出席時の服装は、指定された服装を端正に着用する。

- ・ Aタイプ・オフィシャル・スーツ（ジャケット・ジャケット用スカート）、白色ブラウス、黒色の革の短靴。
 - ・ Bタイプ・オフィシャル・スーツ（ジャケット・ジャケット用スラックス）、白色ブラウス、黒色の革の短靴。
 - ・ Cタイプ・オフィシャル・スーツ（スーツ用ジャケット・スーツ用スラックス）、本学指定ネクタイ、白色カッターシャツ、黒色の革の短靴。
- ※Aタイプ・Bタイプで夏服時に襟なしシャツ着用の場合、オフィシャル・スーツのジャケットを着用すること。
- ※黒色の革の短靴：くるぶしにかからないもの、スニーカー不可、就職活動やインターンシップで着用するようなカジュアルでないもの。
3. 入堂時には『聖典聖歌集』を所持していることを示す。
 4. 授業は午前10時55分開始である。開始前には入堂し着座しておく。
(ただし、今年度の授業では遠隔授業への対応の為、11時10分開始とした。)
 - ・ 遅刻は駅で発行する電車の延着証明書があり、やむを得ない遅刻と判断される場合にのみ入堂を認める。
※原則として、電車以外の延着は認めていません。
 - ・ 延着証明書は1人1枚を必要とする。複数人で1枚しかない場合は、入堂を認めない。
 5. 授業中は姿勢を正し、静寂を守り、実践に集中する。
 6. 授業中の私語・通信機器等の使用は禁止する。
 - ・ 注意されたら、すぐに改める。
 - ・ 再三の注意にかかわらず改めない者については、授業妨害と見なし、改善が認められない場合は、欠席扱いとし、保護者にも教務部より状況を伝える。
 7. 授業中の中座は原則として禁止する。
 - ・ やむを得ず手洗い等を利用する者は、学生証を階段前の教員に提出する。
 8. 心身の疾患など、やむを得ない中座の理由の有る者は、診断書などの証明書をもって学生支援センターに授業配慮申請を行うか、教務部教務課（礼拝担当）に申し出る。座席変更などの配慮を行う。
 9. 私語・通信機器等の使用・中座等について、改善の意思がない場合は、「授業妨害」「建学の精神に反する行為」と見なし、その学期の「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の履修登録を抹消する。

4. 和の精神Ⅰ・Ⅱにおける改善

24年度から、これまで2年間にわたって履修した「仏教Ⅰ～Ⅳ」が1年次の「仏教Ⅰ・Ⅱ」のみとなり、時間的には短縮化された。しかし、そのことによって教育内容が希薄とならないよう、これまでと同様に、その点に留意した授業計画を組んで「和の精神Ⅰ・Ⅱ」に継承している。「和の精神Ⅰ・Ⅱ」各科目の留意点、講話一覧は以下の通りである。

① 和の精神 I

和の精神 I では、基本的にはこれまでの通り、「礼拝（瞑想）・講話・仏教聖歌の斉唱」を基本として、授業を行っている。ただし、今年度はコロナ禍への対応として対面・遠隔のハイブリッドで授業を実施しており、対面授業の際には読経・聖歌斉唱に関して学生は心の中で唱える形で実施しており、聖歌の斉唱指導は行わなかった。

講話については、第2回目の授業での学長による「本学の建学の精神及び全体的な仏教精神に関する講話」を受けて、研究員による一貫性のある講話を基調に据えながら、将来のキャリアと和の精神とのつながりを解く内容など講話の充実を図っている。また、例年は初回の授業から、本山四天王寺において開催される「授戒会」のオリエンテーションも行い、参加に向けての心構え等も指導している。（ただし、今年度の授戒会の実施は10月）

そして、例年どおり、今年度も学外講師として、弁護士の成田由岐子先生を招聘し、今年度は「学生生活とリスク社会について～犯罪に巻き込まれない、起こさないために～」と題する講話を動画でしていただいた。身近な犯罪の防止等に関する内容などを盛り込み、隣り合わせにある犯罪の危険に学生も認識を新たにしたはずである。

さらに、和の精神の学修上の意義について学生への周知・理解をはかるために、杉中康平教授からの講話を行っていただいた。また、関係教員にも協力をお願いし、笠原教授による「和の精神とキャリアについて」の講話では、和の精神を育むことが将来のキャリア形成のために大切なことをご説明いただいた。

和の精神 I で行われた講話は次の通りである。（敬称略。☆は仏教文化研究所構成メンバー。）

尚、今年度の授戒会は、学科ごとに割り当てられた大学内の各会場にて、大講堂で行われる様子をモニターで視聴しながら実施する遠隔分散実施となった。

No	日程	担当者	講話／聖歌
1	4/8	奥羽充規先生☆ 坂本光徳先生☆	受講ころえ-授業規律に関して/礼拝説明 聖歌＜聖徳太子讃仰歌、四恩の歌、精進＞
2	4/15	岩尾洋学長 藤谷厚生先生☆	建学の精神―「ころえ手帳」に寄せて 「ウパーヤ」について 聖歌＜聖徳太子讃仰歌＞
3	4/22	坂本光徳先生☆ 伊達由実先生	「読経概論・瞑想一心を整える楽しみ―」 (授戒オリエンテーション) 大学生活の心得 聖歌＜精進＞
4	4/29	杉中康平先生☆	「和の精神」を学ぶ意義 「学修ポートフォリオの記録について」 聖歌＜父母の歌＞
5	5/6	藤谷厚生先生☆	「四天王寺学園、建学の歴史」 聖歌＜父母の歌＞

6	5/13	成田由岐子先生	「学生生活とリスク社会について～犯罪に巻き込まれない、起こさないために～」 聖歌＜常不軽菩薩＞
7	5/20	石田陽子先生☆	「仏教聖歌—なぜ、聖歌を歌うのか—」 聖歌＜常不軽菩薩＞
8	5/27	仲谷和記先生	「コロナ禍 感染予防について」 聖歌＜学園歌＞
9	6/3	坂本暁美先生	「学園歌」-作詞家と作曲家からのメッセージ グローバル教育研修 聖歌＜学園歌＞
10	6/10	奥羽充規先生☆	「学園訓-誠実について-」 聖歌＜聖夜＞
11	6/17	南谷美保先生☆	「仏像を知ろう」 聖歌＜聖夜＞
12	6/24	矢羽野隆男先生☆	「学園訓-和について-」 聖歌＜みめぐみの＞
13	7/1	笠原幸子先生	「和の精神とキャリアについて」 聖歌＜みめぐみの＞
14	7/8	高橋麻紀子課員	「薬物乱用と薬物依存を防ぐために」 聖歌＜父母の歌＞
15	7/15	奥羽充規先生☆	夏学期を終えるに当たって 聖歌＜聖徳太子讃仰歌＞

②和の精神Ⅱ（夏学期実施、2回生対象）

「和の精神Ⅱ」は「和の精神Ⅰ」の「礼拝（瞑想）・講話・仏教聖歌の斉唱」に写経を加え、より実践的に仏教について学べるようにしている。これは、24年度から2年間の「仏教Ⅰ～Ⅳ」が1年間の「仏教Ⅰ・Ⅱ」に短縮されたのを受け、従来、「仏教Ⅲ・Ⅳ」ではもっぱら写経だけを行っていたものを、写経だけでなく、講話等も行うことにし、「和の精神Ⅱ」に継承されたものである。ただ講話の時間が写経の時間を圧迫しないように配慮する必要から、写経の時間を最低20分は確保すべく、講話は10分～15分ほどに短縮することとしている。しかし、実際には、講師によっては講話に熱がこもり、やや延長する場合があり、その時には写経の時間の確保が難しい場合もあり、例年のアンケートで「写経の時間は必ず確保してほしい」といった不満の声が一部に出ているのも事実である。

今年度の「和の精神Ⅱ」は、昨年度の「和の精神Ⅰ」が冬学期に実施されたため、実施を2回生には夏学期、1回生には冬学期とそれぞれの学年用に2回実施した。

<夏学期実施 和の精神Ⅱ>

No	日程	担当者	講 話／聖歌
1	4/8	学長：岩尾洋先生 藤谷厚生先生☆ 奥羽充規先生☆	写経の効果 ウパーヤについて オリエンテーション 聖歌『聖徳太子讃仰歌』
2	4/15	牧野浩二先生☆	写経の仕方・作法① 聖歌『父母の歌』
3	4/22	杉中康平先生☆ 牧野浩二先生	「学園訓の実践」目標入力について 写経の仕方・作法② 聖歌『父母の歌』
4	4/29	牧野浩二先生	写経の仕方・作法③ 聖歌『精進』
5	5/6	坂本光徳先生☆	写経について 聖歌『希有なるわれら』
6	5/13	南谷美保先生☆	写経と「経供養」 聖歌『常不軽菩薩』
7	5/20	李美子先生☆	不肯去観音について 聖歌『四天王寺大学学歌』
8	5/27	伊丹市小学校校長 村上順一氏（教育学科 卒業生）	これからの時代を生きる ～今 何を学ぶか～ 聖歌『父母の歌』
9	6/3	奥羽充規先生☆	「納経」の勧め 聖歌『四天王寺学園学園歌』
10	6/10	矢羽野隆男先生☆	「誠実」について 聖歌『芬陀利華』
11	6/17	上續宏道先生☆	「和顔愛語」について 聖歌『四恩の歌』
12	6/24	石田陽子先生☆	自分と出会うー静寂の意味とはー 聖歌『聖夜』
13	7/1	原祐子先生	「今日も生きる」 聖歌『みめぐみの』
14	7/8	中田貴眞先生☆	「礼儀について」 聖歌『聖徳太子讃仰歌』
15	7/15	奥羽充規先生☆	まとめ 聖歌『父母の歌』

<冬学期実施 和の精神Ⅱ>

No	日程	担当者	講 話／聖歌
1	9/30	学長：岩尾洋先生 藤谷厚生先生☆ 奥羽充規先生☆	オリエンテーション 授戒会の指導 ウパーヤについて 聖歌『聖徳太子讃仰歌』
2	10/7	学長：岩尾洋先生 福光由布先生	写経の効果 写経の仕方・作法 聖歌『父母の歌』
3	10/14	杉中康平先生☆	「学園訓の実践」エピソード入力について 聖歌『父母の歌』
4	10/21	坂本光徳先生	写経について 聖歌『精進』
5	10/28	南谷美保先生☆	写経と「経供養」 聖歌『希有なるわれら』
6	11/4	李美子先生☆	不肯去観音について 聖歌『常不軽菩薩』
7	11/11	石田陽子先生☆	自分と出会うー静寂の意味とはー 聖歌『四天王寺大学学歌』
8	11/18	奥羽充規先生☆	「納経」の勧めー巡礼の視点からー 聖歌『父母の歌』
9	11/25	藤谷厚生先生☆	菩薩と和の精神 聖歌『四天王寺学園学園歌』
10	12/2	原田三朗先生 学生有志	他者の人権を守るということ 東京 2020 オリンピックボランティア活動報告 聖歌『芬陀利華』
11	12/9	矢羽野隆男先生☆	学園訓「誠実」について 聖歌『四恩の歌』
12	12/16	上續先生☆ 杉中康平先生☆	「和顔愛語」について 学園訓のエピソードについて 聖歌『聖夜』
13	12/23	原祐子先生	「今日も生きる」 聖歌『みめぐみの』
14	1/6	中田貴眞先生☆	「礼儀について」 聖歌『聖徳太子讃仰歌』

15	1/13	奥羽充規先生☆	まとめ 聖歌『父母の歌』
----	------	---------	-----------------

5. アンケートの実施

①アンケート実施授業

令和3年度は「和の精神Ⅰ」のアンケートを1回、和の精神Ⅱのアンケートを2回実施した。令和2年度入学と令和3年度入学の学生を対象とする。

また、令和3年度冬学期よりアンケート項目が変更されていることにより、和の精神Ⅱのアンケート結果については比較ができないので、結果報告のみとする。

<和の精神Ⅰ>

質問項目	大学				短大			
	令和3年夏	令和2年	前年度比較		令和3年夏	令和2年	前年度比較	
a 総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思われましたか。	4.19	4.24	0.05	↓	4.08	4.18	0.10	↓
b この授業を意欲的に受けてきたと思いますか。	4.02	4.19	0.17	↑	3.99	4.12	0.13	↓
c 先生は学生に、丁寧に対応してくれていますか。	4.23	4.35	0.12	↓	4.24	4.46	0.22	↓
d 授業の方法が工夫されていますか。	4.28	4.18	0.10	↑	4.34	4.40	0.06	↓
e 授業内容の意義や必要性を十分に説明して	4.45	4.51	0.06	↓	4.40	4.47	0.07	↓

くれましたか。								
---------	--	--	--	--	--	--	--	--

<和の精神Ⅱ 夏学期実施>

質問項目	大学				短大			
	令和3年夏	令和1年	年度比較		令和3年夏	令和1年	年度比較	
a 総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思われましたか。	4.20	3.78	0.48	↑	4.34	3.87	0.47	↑
b この授業を意欲的に受けてきたと思いますか。	4.20	3.90	0.30	↑	4.32	4.10	0.22	↑
c 先生は学生に、丁寧に対応してくれていますか。	4.16	4.03	0.13	↑	4.38	4.14	0.24	↑
d 授業の方法が工夫されていますか。	4.23	3.83	0.40	↑	4.39	4.02	0.37	↑
e 授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれましたか。	4.41	4.01	0.40	↑	4.47	4.13	0.34	↑

<和の精神Ⅱ 冬学期実施>

質問項目	大学	短大
	令和3冬学期	令和3冬学期
a 総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思えましたか。	4.01	3.99
b 授業での先生の説明は分かりやすかったですか。	4.16	4.06
c 授業の資料やスライドは分かりやすかったですか。	4.24	4.14
d 授業の学習効果を高めるためにパソコン、スマホやインターネット等のICTが活用されていましたか。	4.24	4.29
e 授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか。	3.84	3.77

② アンケート結果の分析

アンケートの回答は、各質問項目について、5「そう思う」、4「少しそう思う」、3「どちらともいえない」、2「あまりそう思わない」、1「そう思わない」のうちから一つ選ぶ形で行った。数値はその平均値をとり、3が中間的な評価、5に近いほど高い評価を示すことになる。

「和の精神Ⅰ」の結果を主な項目について比較すると、次の通りであった。

大学・短大共に、全体的に各項目の評価とも、前年度に比べわずかに下降している。「和の精神Ⅰ」の授業の評価は平均4点前後の数値で高いまま安定しているが、やはり対面ではないことを残念に思う学生の気持ちの表れであろう。「和の精神Ⅱ」については、令和1年度と令和3年度の夏学期の比較では、全項目の数値が上昇しており、学生の満足度が高まる内容になっていることがわかる。授業内容や授業形態についても評価する学生が多く、教員・職員全体の取り組みが一定の成果を出したものと言える。

ただ、現状に満足は出来ないので、今後も更により授業になるよう緊張感をもって運営を進めたい。

③ アンケート自由記述欄

アンケートの「自由記述欄」は、学生が自由に、授業環境や内容への感想を記すことができるものであり、ここには上記のマーク方式の回答からはわからない学生の考え感想をうかがうことができる。今年度もアンケートの自由記述欄から〈所属学科〉〈記述内容〉を仏教文化研究所で通覧したのち、宗教委員会で各学科専攻の宗教委員に伝えた。

今年度は、和の精神Ⅰ・Ⅱで以下のような感想が多くあった。

(1) 〈内容〉に関するもの

ご講和は自分の為になることばかりだったので、受けてよかったですと思いました。

自分について振り返るきっかけになりました。

講話のパワーポイントの字が教室の端の席からは見えにくい。

「和」という大切な考え方を深く学べて良かった。
普段感じることのできない、精神の部分が養われた。
精神統一もでき、非常に有意義な時間だった。
写経が難しかったです。

(2) 〈指導・管理〉に関するもの

出席したのに、課題提出を忘れて欠席になるのは何とかしてほしい。
課題の提出期限が短いと思いました。

(2) 〈実施形態〉に関するもの

オンデマンド授業のため、一時停止機能を使い効率よく勉強できた。
コロナ禍の中、オンデマンドや分散登校をうまく利用し、学生の学びを担保してくれたと感じている。
対面でも密を避けるために教室を分けて行ったのは大変だったとは思いますが、とても有り難かったです。
提出期限を何度か勘違いすることがあった。

(4) 〈設備〉に関するもの

コロナ感染予防対策として教室がいくつかに分かれていましたが、それでも人数が多いように感じました。
動画の音声聞こえづらいことがあった。

これらのうち、改善できるものは改善を図っている。

Ⅱ 共通教育科目「仏教実践演習」について

1. 「仏教実践演習」の目的と授業展開

この科目は旧カリキュラムの基礎教育科目「仏教Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（卒業必修科目）が、24年度からの新カリキュラムでは「仏教Ⅰ・Ⅱ」（同上）に圧縮されるのに伴い、旧Ⅲ・Ⅳで行っていた内容を行いたいという学生や、さらに深い学びを希望する学生のために、共通教育科目における選択科目（3セメスター以上配当）として設けた科目である。仏教実践の背景にある仏教の思想についても考えながら、瞑想・写経の意義や実践の方法を説明し、Ⅰ・Ⅱで学んだ実践行をさらに深めてゆくものである。

例年は夏学期の水曜2限に1コマ、講堂において、聖徳太子像の掛け軸を掛け、読経・瞑想・講話・写経などを行い、聖歌斉唱を行わないほかは「仏教Ⅰ・Ⅱ（和の精神Ⅰ・Ⅱ）」と同様の形式で実践的な授業を展開しているが、今年度の授業も、遠隔実施という状況であったため、オンデマンドでの動画を作成し、各回の動画を期限内に視聴してレポートを作成し、学生のペースで写経を実施するように指示した。

2. 授業内容

講話内容は、仏の智慧をめざす修養方法である六波羅蜜に関するものを中心に、日常生活での実践に有用と考えられる仏教の教えに関する講話を行っている。また、今年度も「お遍路さん」といった具体的な仏教実践行についての講話も行った。

以下のその詳細を掲げる。

講話一覧

回数	講話担当者	講話題目
1	奥羽 充規 先生 藤谷 厚生 先生	授業オリエンテーション 仏教実践とは
2	藤谷 厚生 先生	六波羅蜜について
3	西岡 秀爾 先生	布施波羅蜜－慈悲を施すこと－
4	藤谷 厚生 先生	持戒波羅蜜－戒律を守ること－
5	西岡 秀爾 先生	忍辱波羅蜜－苦難を忍ぶこと－
6	奥羽 充規 先生	日本の巡礼①－「お遍路さん」と巡礼の目的
7	西岡 秀爾 先生	精進波羅蜜－努力を重ねること－
8	西岡 秀爾 先生	禪定波羅蜜－精神を調えること－
9	奥羽 充規 先生	日本の巡礼②－西国霊場・四国霊場について
10	藤谷 厚生 先生	般若波羅蜜－仏教実践と智慧
11	奥羽 充規 先生	西国巡礼実践－実際の巡礼を知る－
12	西岡 秀爾 先生	聖徳太子の教え
13	西岡 秀爾 先生	般若心経の教え
14	藤谷 厚生 先生	菩薩と和の精神
15	藤谷 厚生 先生	仏教実践演習（まとめ）

3. アンケートの実施

本年度も、本授業のアンケートを実施した。

質問項目	平均
1 先生は、授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれましたか。	4.57
2 先生の授業の方法は、工夫されていきましたか。	4.39
3 先生は、学生に対して丁寧に対応してくれていましたか。	4.36
4 毎回の授業（対面授業、課題提示型・オンデマンド型・リアルタイム型の遠隔授業）について、授業時間・予習復習・課題作成を合わせて、どれくらい学習しましたか。	2.40
5 あなたは、この授業を意欲的に受けてきたと思いますか。	4.24
6 あなたは、この授業の授業概要（シラバス）をよく読んだ上で受講しましたか。	4.28

7あなたは、履修要覧の授業科目編成表にある「身につけるべき能力」をよく読んだ上で、この授業を受講しましたか。	4.11
8あなたは、シラバスの到達目標達成のために努力してきたと思いますか。	4.15
9あなたは、総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思いますか。	4.20
10この授業の改善につながると思われる意見や感想を具体的に書いてください。	後述

アンケート結果の分析

回答率が、受講者の70%程であった。授業では、動画でアンケートに答えるように呼びかけはしているが、ウェブでの回答であり、手軽にスマホ等で回答できる反面、授業中に全学生一斉に回答用紙に記入させ、回収することができないため、なかなか、回答してもらえないという実態がある。しかしながら、昨年度よりは回答率は上昇している。

今回も昨年同様オンライン授業であったが総じて良好に授業が進められた。また特に毎回課題レポートを課したので、学生の学習時間が今回はかなり増加した。

アンケートの回答は、各質問項目について、5「そう思う」、4「少しそう思う」、3「どちらともいえない」、2「あまりそう思わない」、1「そう思わない」のうちから一つ選ぶ形で行った。数値はその平均値をとり、3が中間的な評価、5に近いほど高い評価を示すことになる。

どの項目においても、評価の平均が4前後であった。高い評価ではあるが、例年に比べると若干数値が下がり気味なのは、やはり実践行として対面授業を期待した学生が多かった為であろう。しかしながら、10の記述質問に対して、頑張っており取り組めたと回答した学生がおり、授業内容に関しては総じて満足しているようであった。

来年度以降に向け、更により授業になるよう一層の工夫をして努めたい。

Ⅲ 仏教教育に関するその他の取り組み

1. 仏教文化研究所の活動

平成24年度から、当時の西岡研究所所長（学長）の下、主任研究員（矢羽野）および研究員（上續・兼子・藤谷・源・桃尾・南谷恵敬）が任命された。研究所内には仏教教育センターが設けられ、研究所の主任研究員・研究員がセンターの構成員を兼務し、本学における仏教教育の内容・方法を検討し実施してゆく体制が作られている。28年度からは、新学長の岩尾洋研究所長のもと、坂本光徳、杉中康平、奥羽充規の三氏が研究員に加わり、あらたな一歩となった。さらに29年度は、中田貴眞、南谷美保の2名が加わった。また、30年度からは石田陽子、令和2年度には李美子、そして令和3年度には上野舞斗が加わり、現在は主任研究員（藤谷）の他9名の研究員（専任教員）により、さらなる研究の充実を目指し、積極的に活動している。

研究所の具体的な活動としては、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」授業計画の策定、堂内の全体指導および指導体制の検討、提出された写経の点検評価、仏教教育広報誌「ウパーヤ」の編集発行等である。広報誌「ウパーヤ」は、本学の建学の精神や仏教の教学を身近に感じ、理解を深めてもらうことを目的に年に二回発行し、大短在学生・学園教職員および

保護者へ配布するもので、令和3年度には18号・19号を発行することができた。1年次の学生には、「和の精神Ⅰ」における初回の授業に配布し、和の精神（仏教教育）の涵養に役立っている。また、令和4年(2022)は四天王寺学園創立100周年を迎える節目に当たり、建学の理念である「和の精神」や学園訓の理解と実践を薦めるため、なお一層の紙面の充実を目指して取り組んでいる。

特に「ウパーヤ」のトピックである「聖徳太子のゆかりの地めぐり」のコーナーでは、26年度から学生編員を募集して取材・執筆を依頼している。18号・19号でも引き続き学生編集員がウパーヤ誌上、研究所HPに学生ならではの観点で記事を執筆してくれた。今後も仏教に対する学生の興味関心を深める活動として継続していきたい。

2. 今後の取り組み

建学の精神を学部・学科・専攻の学修のなかに具体化し、理想とする学生を世に輩出していくことは、私学の最も重要な目的であり、また社会的な使命でもある。本学でも「アドミッションポリシー」「カリキュラムポリシー」「ディプロマポリシー」の三つのポリシーにおいて、聖徳太子の仏教精神を各専門教育の根幹に据えた教育を展開していることを明記し内外に公表している。

これまでも、各学期初めのオリエンテーションや大学1年次の「大学基礎演習」においては、建学の精神に関わる内容を組み込むことを各学科に要請してきた。また基礎教育科目「和の精神Ⅱ」においても、今年度は、和の精神の体現として学生に東京2020オリンピックボランティア活動報告を発表していただいた。今後も、和の精神を体現する様々な取り組みや活動を紹介し、大学全体での建学の精神の浸透に励みたいと考える。

一昨年度から、「学園訓」を体現し、実践できる人材を育成することを目指して、それまでの「仏教Ⅰ・Ⅱ」の授業科目名を「和の精神Ⅰ・Ⅱ」と改め、その内容の充実と建学の精神の涵養を図るよう引き続き取り組んでいる。

今後も「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業では、仏教文化研究所メンバーによる仏教関係の講話を主軸にし、その本質の部分を大切にしながら、聖徳太子が帰依された仏教に基づく「和の精神」を核として学べるよう、さらなる授業の充実と工夫に努めていきたい。

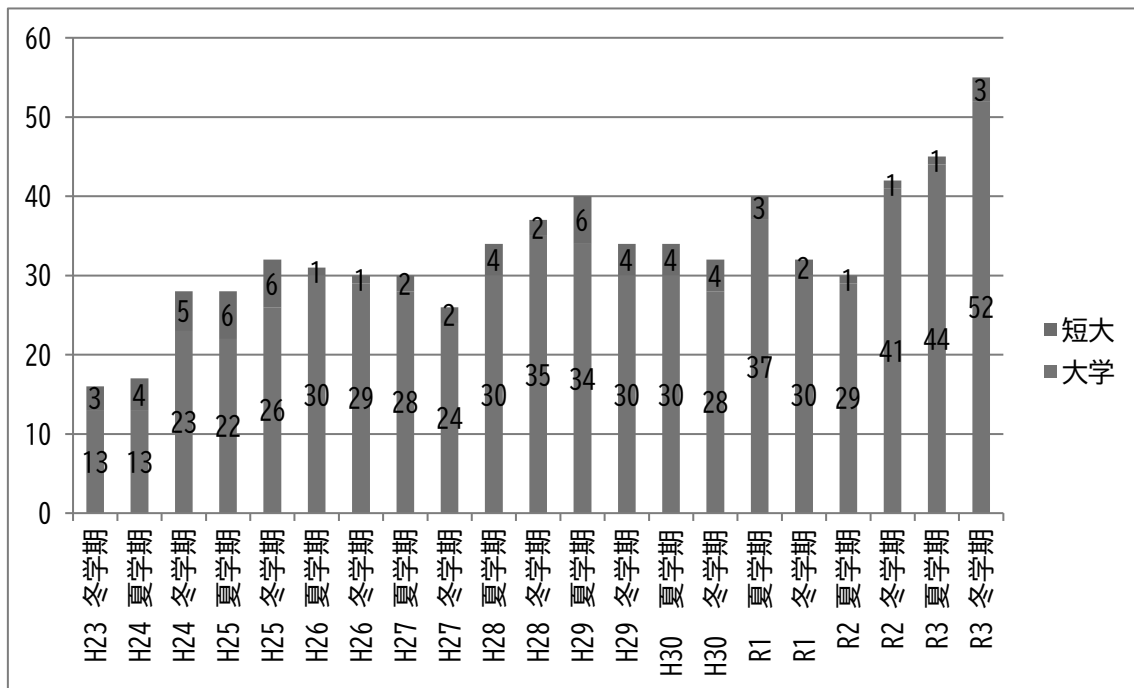
第6章 学生支援センターが取り組む学修支援について

1. 障害学生への「授業配慮申請システム」について

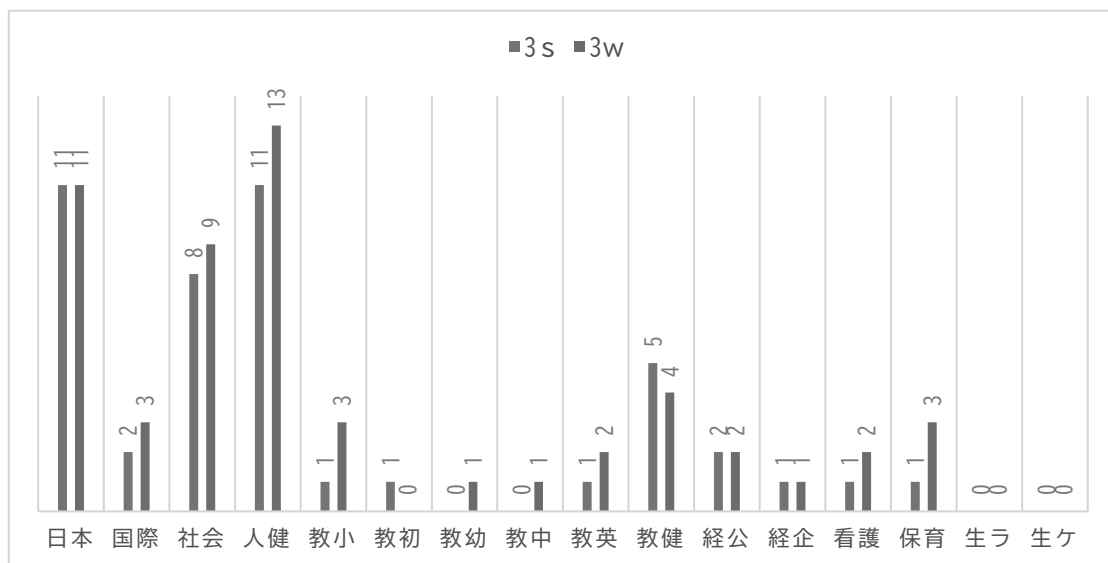
(1) 本年度の概要

教育への機会均等、環境保障を基本とした「授業配慮申請システム」による修学支援を行った。本年度の配慮者数、障がいの内容、配慮申請学科については以下の図、表の通りである。配慮申請する学生数は漸増傾向にあり、また、肢体不自由や視覚障害、聴覚障害のある学生も恒常的に在籍していることから、今後支援のさらなる充実が求められるものと考えられる。

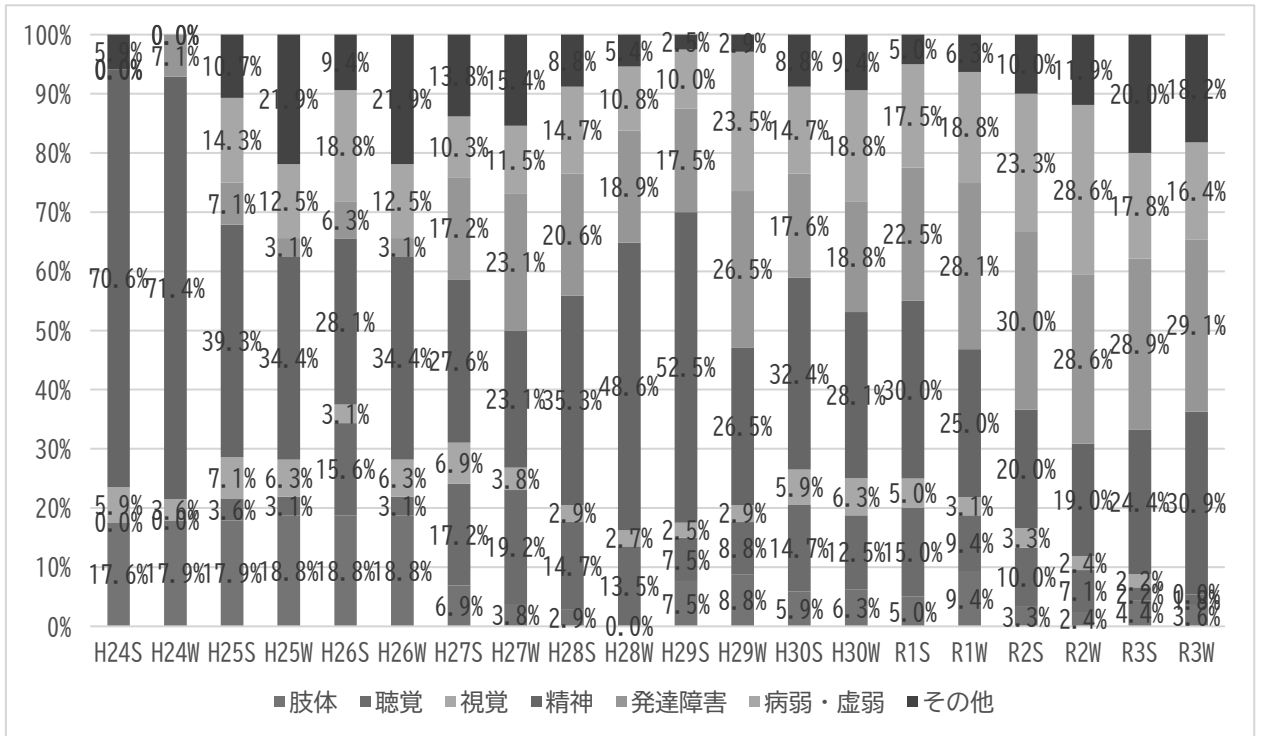
<図-1 授業配慮申請システム申請者数経年変化>



<図2 令和3年度配慮申請の学科別数>



<図3 授業配慮申請システム障害種別割合の経年変化>



(2) 課題

昨年に引き続き本年度も新型コロナウイルス感染症の影響で、配慮申請に際してオンラインを利用するなど変則な手続きをせざるを得ない状況であった。授業に関しては対面の時期もあったが、再び遠隔授業になったことで、配慮の必要な学生にとっては対応の難しさがあった一年であった。

本年度は活動の場をラーニングコモンズに移し、パソコン操作の指導や課題提出のスケジュール管理など、学生相談室のスタッフを中心にリメディアル教員の協力を得て図4のような支援を行った。

<図4 学修に困難を抱える学生への支援>

タイプ	問題点	行った主な支援
①	・パソコンやタブレットの操作方法がわからない ・遠隔授業への参加方法（TeamsやZoomの使い方）がわからない ・Word等ソフトの使い方、メールへのファイル添付の方法等がわからない	・PC、ソフト等操作方法の指導 ・情報メディアとの連携
②	・一人だと他のことに気を取られて、スケジュール管理をしながらの自宅学習ができない	・学習スペースの提供（ラーニング・コモンズ） ・定期的な声かけ
③	・教員からの指示がよくわからない（口頭だけでは伝わらない、文書化しても見落とす） ・難しい課題をこなすことが困難（文章力、論理的思考、作業スピード等の問題）	・リメディアル教員による学習補助
④	・科目ごとに授業形態が変わることに疲れ、授業参加を諦める ・課題の提出ができない（情報の取得、実行機能、スケジュール管理等の問題） ・分からないことをそのままにしておく ・放っておくと単位修得の見込みがない	・課題内容や提出期限を一緒に確認するなど、スケジュール管理等全般的なサポート ・教員や保護者との連携

支援の困難度合

学習環境に適応できないことから学習に困難を抱えた学生への支援には時間と手間がかかる。相談室のスタッフの努力だけでは十分な効果を上げえない事態も今後生じることが予想されるため、次年度からはラーニングコモンズ内に「学習サポートデスク」を設置し、リメディアル教員の配置時間増など、支援の強化を進める。

次年度は対面授業が再開されることから、新たな学習環境に適応できない学生が増える可能性がある。新しく設置する学習サポートデスクを活用し、支援の充実を図りたい。

2. ピアサポーター・リメディアル教員による学習・生活支援

昨年同様、新型コロナウイルス感染症の影響で学生生活に様々な制約のあった今年度であった。ピアサポーターの活動も制限を受ける中で、ピアサポーターは、夏学期 59 名(2 回生 : 14 人、3 回生 : 22 人、4 回生 : 23 人)、冬学期 41 名 (2 回生 : 12 人、3 回生 : 19 人、4 回生 : 10 人が登録、また、障害学生へのボランティアへは夏学期 : 5 名(2 回生 : 1 人、3 回生 : 4 人)、冬学期 : 4 名 (2 回生 : 2 人、3 回生 : 2 人) が登録し、一般学生の支援に資するべく、以下のような活動を行った。

(1) 年間活動

- 4 月 履修相談会(4/6)
「リメディアル相談」オンライン(4/22~)
「サポートデスク」オンライン&TEL(4/21~)
- 5 月 「リメディアル相談」オンライン
「サポートデスク」オンライン&TEL
- 6 月 SA 対面相談再開(6/21~)
- 7 月 試験前相談会(7/12~14)
- 8 月 全体ミーティング(8/19)→中止
Zoom 幹部、3 回生、教員ミーティング(8/31)
- 9 月 履修相談オンライン開催(9/16,17)
- 10 月 新規募集の動画作成 (PPT ナレーションあり)
- 11 月 新規ピアサポーター募集開始(11/11~)
全体ミーティング(11/17)
- 12 月 全体ミーティング(12/8) 入学前教育動画撮影
各 SA 学科教員へ新規募集申込書の希望者への配布を依頼
- 1 月 全体ミーティング(1/12)
*試験前待機は行わず、予約等で対応
Twitter 質問箱チラシ 作成
「入学前に知りたい!先輩学生が答える Q&A」作成
- 2 月 Twitter 質問箱 (2/14~)
- 3 月 Twitter 質問箱 (~3/18)
ピアサポーター研修会 (3/25)

(2) PIATA 相談件数：令和3年度相談件数 486件 (夏 292件、冬 194件*1月末まで)

①夏学期

サポーター対応	履修相談	147件	(4/6 10:30~15:30 開催)
	通常相談	14件	(4/19~6/20 対応なし)
	試験前待機	10件	(7/12~14 開催)
リメディアル教員対応	英語	23件	
	国語	46件	
サポートデスク対応	相談員	52件	

②冬学期

サポーター対応	履修相談	8件	(9/16、17、9/28 オンライン)
	通常相談	31件	
	試験前相談	10件	
リメディアル教員対応	英語	21件	
	国語	34件	
サポートデスク対応	相談員	88件	
協力教員対応		2件	

③その他 学科オリエンテーションサポート(日本学科、社会学科、教育教幼コース)

(3) 新入生対象 Twitter 質問箱 (令和4年2月14日~3月18日実施)

<令和3年度新入生対象 Twitter 質問箱 質問内容>

相談内容 (複数回答あり)	履修・授業に関して				課外活動			大学/ 学科 について	留学	実習/ 教職	資格	奨学金/給 付金/学費	編入/ 転学科
	履修/ 時間割	単位/ 成績/ 授業/ クラス	オンライ ン授業	対面授業	部活/サー クル	委員会	大学祭/イ ベント						
2月	2	10	1	0	2	0	0	7	0	0	0	0	0
	13				2								
3月	0	13	1	0	3	0	0	8	0	0	0	1	0
	14				3								
相談内容 (複数回答あり)	大学生活に関して						将来	入学に関して				合計	
	服装/ 持ち物	通学	寮/ 一人暮らし	バイト	生活全般	友人関係		PC	教科書	プレエン トランス	入学式/オ リエン テーショ ン/入学に 関する事 項		その他
2月	7	3	0	0	0	0	1	3	1	1	3	2	43
	10							8					
3月	15	4	2	0	1	0	0	2	2	0	15	1	68
	22							19					

*複数項目質問あり

- ① 期間 令和4年2月14日～3月18日
- ② 参加サポーター学生 21名(実数)
- ③ 相談・回答件数 2月：43件 3月：68件 ⑤相談内容
- ④ 相談内容

(4) 令和4年度ピアサポート活動に向けて

新規サポーター募集に応募した学生を対象にした研修会を3月25日に、既存のサポーターも参加して対面で実施した。丸一日かけての研修であったが、学生たちはグループワークやシミュレーション活動に熱心に取り組んだ。学生からの多様なサポート要請にこたえうる技術や知識を修得できるよう、新年度は研修を重ね、ピアサポーターによる学生支援を一層充実させたい。

第7章 SD活動の取り組みと今後の課題

1. 事務局全体研修会の実施について

[趣 旨]

SDGs (Sustainable Development Goals) は、2015年9月の国連サミットで採択された、持続可能な世界の実現に向けて2030年までに達成すべきゴールを定めた国際目標であり、貧困、教育、不平等、気候変動、エネルギーなど17の目標と、具体的な169のターゲットから構成されている。四天王寺大学としてSDGsに取り組むために「SDGs とはこうあるべきだ」という教職員の共通認識の形成を目的に実施した。

[日 時]

令和4年2月24日(木) 15:15~16:50

[場 所]

本学5号館5-303

[対 象]

事務職員及び希望する教育職員

出席 126名(事務職員109名、教育職員17名) *録画視聴を含む

[講 師]

牧 文彦氏

関西SDGsプラットフォーム教育分科会 SDGsナレッジラボ 事務局長

[テーマ]

『SDGs と四天王寺大学のこれから』

[事前課題]

「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の通読

[内 容]

1. PROFILE
2. SDGsの資料について
3. 包摂について(インクルージョン)
4. INTRODUCTION
5. 日本の足跡
6. 日本の企業の社会活動その1
7. 日本の企業の社会活動その2
8. 日本の企業の社会活動その3
9. 欧米企業の社会活動
10. 企業の取り組みと事例

11. 企業における社会の役割
12. 現代企業が抱える問題
13. 日本のビジネスの考え方 1
14. 日本のビジネスの考え方 2
15. ソーシャルビジネスの始まり
16. ソーシャルビジネス 7 原則
17. ソーシャルビジネスとは
18. 世界の消費動向
19. 日本の消費動向
20. 企業のあり方 1
21. 企業のあり方 2
22. 日本のビジネスの考え方 3
23. SDGs について 1
24. SDGs について 2
25. SDGs17 の目標
26. SDGs ネクサスアプローチ
27. SDGs News (連環) 1
28. SDGs News (連環) 2
29. SDGs 取り組むときの注意
30. 社会の変革
31. これからの企業のあり方
32. SDGs に取り組むことで期待される効果
33. 四天王寺大学 COCOROE PROJECT
34. SDGs に取り組むためのヒント

[アンケート]

研修会終了後、アンケートを実施、8割近くの職員が有意義と感じ、7割以上の職員が今後の職務に活かせると感じ、期待通りのものであったと回答した。何れの項目も非好意的回答は、殆どなかった。

[総括]

研修目的であった、『四天王寺大学として SDGs に取り組むために「SDGs とはこうあるべきだ」という教職員の共通認識の形成』については、概ね達成できた。今後の職務に活かしていくことを期待する。

四天王寺大学・四天王寺大学大学院・四天王寺大学短期大学部 ファカルティ・ディベロップメント委員会規程

- 第 1 条 この規程は、四天王寺大学、四天王寺大学大学院および四天王寺大学短期大学部（以下「本学」という。）ファカルティ・ディベロップメントの企画立案事項の審議・推進を図ることを目的として、ファカルティ・ディベロップメント（以下「FD」という。）委員会（以下「委員会」という。）を設ける。
- 第 2 条 委員会は、第 1 条の目的を達成するために、次の事項について企画立案し、FD 活動の推進にあたる。
- (1) 授業内容、方法および、評価に関する事項
 - (2) 授業の改善に関する事項
 - (3) その他、FDの目的達成のために必要な事項
- 第 3 条 委員会の委員長を高等教育推進センター長とし、他の委員を次のように構成する。
- (1) 高等教育推進センター副センター長（委員長を補佐し、委員長に事故ある場合は、その業務を代行する）
 - (2) 学科長が学科・専攻所属の専任教職員就業規則に規定された教育職員、特別任用教員および有期・無期職員就業規則に規定された特別任用教員と協議の上、選任した委員
 - (3) 高等教育推進課長
 - (4) その他必要に応じて委員長が任命する委員
- 第 4 条 委員は、学部学科等の代表として委員会に参画し、全学的見地ならびに学部学科等の特性に応じて、委員会で審議された結果を学部教授会で報告する。また、必要に応じて学部の意見を集約したものを委員会で報告・審議する。
- 第 5 条 委員の任期は 1 年とする。ただし再任を妨げない。
- 第 6 条 委員会は委員長がこれを招集して、その議長となる。
- 第 7 条 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の本学教職員に委員会への出席を求め、その意見を聴くことができる。
- 第 8 条 この規程の事務は、高等教育推進センターが所管する。

附 則

- 1 「学生アンケート委員会規程」は平成 18 年 4 月 1 日から施行する。
- 2 「学生アンケート委員会規程」は平成 19 年 3 月 31 日をもって廃止し、「ファカルティ・ディベロップメント委員会規程」を平成 19 年 4 月 1 日より施行する。
- 3 この規程は、平成 20 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 4 この規程は、平成 22 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 5 この規程は、平成 25 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 6 この規程は、平成 27 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 7 この規程は、平成 30 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 8 この規程は、平成 31 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 9 この規程は、令和 3 年 8 月 1 日から一部改正し施行する。

スタッフ・ディベロップメント委員会規程

(目 的)

第 1 条 この規程は、四天王寺大学大学院、四天王寺大学および四天王寺大学短期大学部職員としての資質の向上を図り、もって大学経営および大学改革を推進することを目的として設置されるスタッフ・ディベロップメント（以下「SD」という。）委員会（以下「委員会」という。）の運営等に関し必要な事項を定めるものとする。

(組 織)

第 2 条 委員会は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) 事務局長
- (2) 総務課長
- (3) 人事課長
- (4) 教務課長
- (5) 就職課長
- (6) 学生支援課長
- (7) その他事務局長が必要と認める者

2 副学長は、必要に応じてSD委員会に出席する。

(委員の委嘱)

第 3 条 前条に定める委員は事務局長が任命する。

(委員長)

第 4 条 委員長は、事務局長がこれにあたる。

2 委員長は、委員会の会議を召集し、その議長となる。

3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名する委員がその職務を代理する。

(委員の任期)

第 5 条 委員の任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

(審議事項)

第 6 条 委員会は、次に掲げる事項について審議する。

- (1) SDの企画立案に関する事項
- (2) SDの推進計画に関すること
- (3) SDの実施に関すること
- (4) その他SD推進に必要な事項

(委員以外の出席)

第 7 条 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の者の委員会出席を求め、その意見を聞くことができる。

(所掌事務)

第 8 条 この規程に関する事務は、人事課が所管する。

附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

令和3年度
四天王寺大学 四天王寺大学短期大学部
FD・SD報告書

編集・発行 四天王寺大学
ファカルティ・ディベロップメント(FD)委員会
スタッフ・ディベロップメント(SD)委員会

住 所 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1

TEL 072-956-9910

FAX 072-956-3891

E-mail koto@shitennoji.ac.jp